屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群
長廻古墳群・海部城跡
杓子観音Ⅰ古墳群・杓子観音Ⅰ遺跡

主要地方道宍道インター線道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２年３月

島 根 県 教 育 委 員 会

屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群
長廻古墳群・海部城跡
杓子観音Ⅰ古墳群・杓子観音Ⅰ遺跡

主要地方道宍道インター線道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２年３月

島根県教育委員会

鋤崎古墳群南東上空から出雲平野を望む

カラー図版２

屋敷古墳群Ⅰ区全景

屋敷古墳群Ⅱ区全景

足頭古墳群全景

カラー図版４

長廻古墳群全景

杓子観音Ⅰ遺跡　ＳＩ－０１

序

この報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部の委託を受けて、平成10年度と平成12・13年度に実施した主要地方道宍道インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

調査は、八束郡宍道町佐々布に所在する屋敷古墳群をはじめとする７つの遺跡について実施しました。これらの遺跡からは、弥生時代から中世にかけての集落跡や墓など多様な性格をもつ遺構が見つかりました。中でも屋敷古墳群、長廻古墳群などで横穴墓が多数確認され、古墳時代後期の社会像を解明するうえで貴重な資料となりました。

本報告書が宍道湖南岸地域の歴史を解明する一助となり、広く一般の方々が文化財について理解と関心を高めるうえで役立てば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、調査に御協力いただきました地元の皆様をはじめ、宍道町教育委員会、島根県土木部ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成14年３月

島根県教育委員会
教育長　山　﨑　悠　雄

例　　言

1．本書は、島根県教育委員会が、島根県土木部から委託を受けて平成10・12・13年度に実施した主要地方道宍道インター線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。(職名・所属は当時)

屋敷（やしき）古墳群　　八束郡宍道町佐々布3475－15外（平成10年度）
鋤崎（すきさき）古墳群　　八束郡宍道町佐々布2331外（平成10年度）
足頭（あしがしら）古墳群　　八束郡宍道町佐々布3245－3外（平成10年度）
長廻（ながさこ）古墳群　　八束郡宍道町佐々布3286－2外（平成10年度）
海部（おんべ）城跡　　八束郡宍道町佐々布2525－18外（平成10年度）
杓子観音（しゃくしかんのん）Ⅰ古墳群　　八束郡宍道町佐々布3262－1外（平成12年度）
杓子観音（しゃくしかんのん）Ⅰ遺跡　　八束郡宍道町佐々布3262－13外（平成13年度）

3．調査組織は次のとおりである。

〔平成10年度〕

事務局　勝部　昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、秋山　実（同課長補佐）、松本岩雄（同課長補佐）

調査員　宮本正保（調査第１係主事）、池淵　茂（同調査補助員）、角田　衡（同）、中岡宏樹（同）、原　和美（同）、木下　誠（宍道町教育委員会主事）

〔平成12年度〕

事務局　宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（同総務課長）、松本岩雄（同調査課長）、今岡　宏（同総務係長）

調査員　宮本正保（調査第１係主事）、岡本育子（同調査補助員）

調査指導者　井上晃孝（鳥取大学医学部助教授）

〔平成13年度〕

事務局　宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（同総務課長）、松本岩雄（同調査第１課長）、今岡　宏（同総務係長）

調査員　広江耕史（調査第１係長）、宮本正保（同文化財保護主事）、伊藤幸子（同調査補助員）、是田和美（同）

4．発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々から有益な御指導、御協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

穴澤義功（たたら研究会委員）、稲田　信（宍道町教育委員会）

5．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海抜高を示す。

6．本書に掲載した遺跡位置図は、国土交通省国土地理院発行の地形図を使用した。また、第３・77・93・105・130図は宍道町道路台帳図（平成10年度当時のもの）、第４・45・94・106・131図は、㈱ジェクトが作成したものを基にしている。

7．本書で使用した遺構記号は次のとおりである。ＳＩ…竪穴住居　ＳＤ…溝状遺構　ＳＫ…土坑　ＳＸ…性格不明遺構　Ｐ…ピット

8．本報告書に使用した実測図は、各調査員のほか杉原みゆき、錦織美千恵、渡部恵子が作成し、杉原、錦織、渡部、吉田典子、瀬川恭子、馬庭志津子が浄書した。

9．本書の執筆は第10章を除き、各調査員が分担して執筆し、文責を目次に記した。このほか第９章２節五輪塔の項は、間野大丞（島根県埋蔵文化財調査センター企画調整係文化財保護主事）が執筆した。

また、第10章については、井上晃孝氏（元鳥取大学医学部助教授）に御執筆いただいた。

10. 本報告書に使用した写真は各調査員のほか、林健亮（島根県埋蔵文化財調査センター調査第１係文化財保護主事）が撮影した。なお、図版89に使用した写真は、井上晃孝氏に御提供いただいた。

11. 本書の編集は、広江・宮本が行った。

12. 本書に掲載した遺跡出土の遺物・実測図及び写真は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯……（宮本）……1
第２章　調査地の位置と環境……（宮本）……2
第３章　屋敷古墳群……5
　第１節　調査の経過と概要……5
　第２節　Ⅰ区の調査……（木下）……9
　第３節　Ⅱ区の調査……（宮本）……36
　第４節　小　　結……（木下・宮本）……60
第４章　鋤崎古墳群……（宮本）……64
　第１節　調査の経過と概要……64
　第２節　調査の結果……64
　第３節　小　　結……77
第５章　足頭古墳群……（宮本）……79
　第１節　調査の経過と概要……79
　第２節　調査の結果……79
　第３節　小　　結……90
第６章　長廻古墳群……（木下）……91
　第１節　調査の経過と概要……91
　第２節　調査の結果……91
　第３節　小　　結……110
第７章　海部城跡……（木下）……113
　第１節　調査の経過と概要……113
　第２節　調査の結果……113
　第３節　小　　結……116
第８章　杓子観音Ⅰ古墳群……（宮本）……117
　第１節　調査の経過と概要……117
　第２節　調査の結果……117
　第３節　小　　結……122
第９章　杓子観音Ⅰ遺跡……（広江）……123
　第１節　調査の経過と概要……123
　第２節　調査の結果……127
　第３節　小　　結……134
第10章　自然科学的分析……（井上）……135
　第１節　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴出土人骨……135
　第２節　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土人骨……137
　第３節　長廻古墳群２号穴出土人骨……141

挿　図　目　次

第１図　調査地の位置　2
第２図　調査地の位置と周辺の遺跡　3
第３図　屋敷古墳群調査区位置図　6
第４図　屋敷古墳群Ⅰ区調査後地形測量図・遺構配置図　7
第５図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１実測図(1)　8
第６図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１実測図(2)　9
第７図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１遺物出土状況実測図　10
第８図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１出土遺物実測図(1)　11
第９図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１出土遺物実測図(2)　11
第10図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１外周溝出土遺物実測図　12
第11図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０２実測図　13
第12図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０２出土遺物実測図　14
第13図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０３実測図　14
第14図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０３出土遺物実測図　14
第15図　屋敷古墳群Ⅰ区建物跡１実測図　15
第16図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＫ－０１実測図　15
第17図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＫ－０１出土遺物実測図　16
第18図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１実測図　16
第19図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１遺物出土状況実測図　17
第20図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１出土遺物実測図(1)　17
第21図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１出土遺物実測図(2)　18
第22図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１出土遺物実測図(3)　18
第23図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段２・３実測図　19
第24図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段３出土遺物実測図　19
第25図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段４実測図　19
第26図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段４出土遺物実測図　20
第27図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段５実測図　20
第28図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段５出土遺物実測図　20
第29図　屋敷古墳群Ⅰ区１・２・５号墳調査前地形測量図　21
第30図　屋敷古墳群Ⅰ区１・２・５号墳調査後地形測量図　22
第31図　屋敷古墳群Ⅰ区１号墳墳丘土層断面図　23
第32図　屋敷古墳群Ⅰ区１号墳主体部実測図　24
第33図　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳実測図　25
第34図　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳石棺実測図　26
第35図　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳石棺掘方実測図　27
第36図　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳周溝出土遺物実測図　27

第37図　屋敷古墳群Ⅰ区４号墳実測図　28
第38図　屋敷古墳群Ⅰ区４号墳出土遺物実測図(1)　28
第39図　屋敷古墳群Ⅰ区４号墳出土遺物実測図(2)　29
第40図　屋敷古墳群Ⅰ区５号墳墳丘土層断面図　30
第41図　屋敷古墳群Ⅰ区畠畝間実測図　31
第42図　屋敷古墳群Ⅰ区出土鉄器・管玉実測図　32
第43図　屋敷古墳群Ⅰ区遺構外出土遺物実測図(1)　32
第44図　屋敷古墳群Ⅰ区遺構外出土遺物実測図(2)　33
第45図　屋敷古墳群Ⅱ区調査後地形測量図　37
第46図　屋敷古墳群Ⅱ区１号墳・後背墳丘調査前地形測量図　38
第47図　屋敷古墳群Ⅱ区１号墳墳丘測量図・土層断面図　39
第48図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴実測図　40
第49図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴羨道部遺物出土状況　41
第50図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴玄室内遺物出土状況　42
第51図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴出土遺物実測図(1)　43
第52図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴出土遺物実測図(2)　43
第53図　屋敷古墳群Ⅱ区２・３・６号穴位置図　44
第54図　屋敷古墳群Ⅱ区２号穴実測図　45
第55図　屋敷古墳群Ⅱ区後背墳丘測量図　45
第56図　屋敷古墳群Ⅱ区２・３・６号穴周辺土器片分布状況　46
第57図　屋敷古墳群Ⅱ区２号穴前庭部出土遺物実測図　47
第58図　屋敷古墳群Ⅱ区３号穴実測図　48
第59図　屋敷古墳群Ⅱ区３号穴出土遺物実測図　48
第60図　屋敷古墳群Ⅱ区６号穴実測図　49
第61図　屋敷古墳群Ⅱ区６号穴玄室内遺物出土状況　50
第62図　屋敷古墳群Ⅱ区６号穴出土遺物実測図　50
第63図　屋敷古墳群Ⅱ区４号穴実測図　51
第64図　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴実測図　52
第65図　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴閉塞石・屍床・遺物検出状況　53
第66図　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴出土遺物実測図(1)　54
第67図　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴出土遺物実測図(2)　54
第68図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴実測図　55
第69図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴前庭部立面図・断面図　56
第70図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴遺物出土状況　57
第71図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土遺物実測図(1)　57
第72図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土遺物実測図(2)　57
第73図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土遺物実測図(3)　57
第74図　屋敷古墳群Ⅱ区ＳＫ－０１実測図　58

第75図　屋敷古墳群Ⅱ区ＳＸ－０１実測図　59
第76図　屋敷古墳群Ⅱ区後背墳丘・遺構外出土遺物実測図　60
第77図　鋤崎古墳群調査区位置図　65
第78図　鋤崎古墳群調査後地形測量図　66
第79図　鋤崎古墳群後背墳丘調査前測量図　67
第80図　鋤崎古墳群後背墳丘調査後地形測量図・出土遺物位置図　68
第81図　鋤崎古墳群後背墳丘出土遺物実測図　69
第82図　鋤崎古墳群１号穴実測図　69
第83図　鋤崎古墳群１号穴玄室内遺物出土状況　70
第84図　鋤崎古墳群１号穴前庭部遺物出土状況　71
第85図　鋤崎古墳群１号穴出土遺物実測図(1)　72
第86図　鋤崎古墳群１号穴出土遺物実測図(2)　73
第87図　鋤崎古墳群２号穴実測図　73
第88図　鋤崎古墳群２号穴遺物出土状況　74
第89図　鋤崎古墳群２号穴出土遺物実測図　74
第90図　鋤崎古墳群３号穴実測図　75
第91図　鋤崎古墳群３号穴出土遺物実測図　75
第92図　鋤崎古墳群４号穴実測図　76
第93図　足頭古墳群調査区位置図　80
第94図　足頭古墳群調査後地形測量図　81
第95図　足頭３号墳調査前地形測量図　82
第96図　足頭古墳群土層図　83
第97図　足頭３号墳調査後地形測量図　84
第98図　足頭３号墳第１主体部実測図　85
第99図　足頭３号墳第１主体部出土遺物実測図　86
第100図　足頭３号墳第２主体部（石棺）実測図　86
第101図　足頭３号墳第２主体部（掘り方）実測図　87
第102図　足頭３号墳第３主体部実測図　88
第103図　足頭３号墳南溝内墓壙実測図　89
第104図　足頭３号墳南溝内出土遺物実測図　90
第105図　長廻古墳群調査前周辺地形図　92
第106図　長廻古墳群調査後地形測量図・遺構配置図　93
第107図　長廻古墳群１号墳調査前地形測量図　94
第108図　長廻古墳群１号墳調査後墳丘測量図　94
第109図　長廻古墳群１号墳墳丘土層断面図　95
第110図　長廻古墳群１号墳主体部実測図(1)　96
第111図　長廻古墳群１号墳主体部実測図(2)　97
第112図　長廻古墳群１号墳石棺内遺物・礫出土状況実測図　98

第113図　長廻古墳群１号墳出土遺物実測図　98
第114図　長廻古墳群１号墳主体部掘方実測図（石棺除去後）　98
第115図　長廻古墳群１号穴実測図　99
第116図　長廻古墳群１号穴遺物・閉塞石出土状況実測図　100
第117図　長廻古墳群１号穴玄室内出土遺物実測図　101
第118図　長廻古墳群１号穴出土遺物実測図　102
第119図　長廻古墳群１号穴（前庭部）出土遺物実測図（床面付近）　103
第120図　長廻古墳群２号穴実測図　104
第121図　長廻古墳群２号穴遺物・人骨・閉塞石出土状況実測図　105
第122図　長廻古墳群２号穴玄室内出土遺物実測図　106
第123図　長廻古墳群２号穴出土遺物実測図　106
第124図　長廻古墳群第１郭調査前地形測量図　106
第125図　長廻古墳群第１郭土層断面図　107
第126図　長廻古墳群第１郭調査後地形測量図　108
第127図　長廻古墳群坑道状遺構実測図　109
第128図　長廻古墳群坑道状遺構土層断面図　110
第129図　長廻古墳群遺構に伴わない遺物実測図　111
第130図　海部城跡位置図　114
第131図　海部城跡調査後地形測量図・遺構配置図　115
第132図　海部城跡縦断土層断面図　115
第133図　海部城跡ＳＫ－０１（pit№４）実測図　116
第134図　海部城跡ＳＫ－０２（pit№２）実測図　116
第135図　海部城跡ＳＫ－０３（pit№１）実測図　116
第136図　海部城跡出土遺物　116
第137図　杓子観音Ⅰ古墳群・杓子観音Ⅰ遺跡調査区位置図　118
第138図　杓子観音Ⅰ古墳群１号墳地形測量図　119
第139図　杓子観音Ⅰ古墳群１号墳調査後地形測量図　120
第140図　杓子観音Ⅰ古墳群１号墳土層断面図　120
第141図　杓子観音Ⅰ古墳群１号墳主体部実測図　121
第142図　杓子観音Ⅰ遺跡遺構配置図　123
第143図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１・ＳＤ－０２遺物出土状況　124
第144図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１・ＳＤ－０２実測図　125～126
第145図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１出土土器実測図　127
第146図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１出土石器実測図　127
第147図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１東側Ｐit群実測図　128
第148図　杓子観音Ⅰ遺跡Ｐit群周辺出土遺物実測図　128
第149図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＸ－０３実測図　129
第150図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＸ－０３五輪塔実測図　130

第151図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＸ－０２実測図　131
第152図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＸ－０１実測図　131
第153図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＫ－０１実測図　132
第154図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＫ－０２実測図　132
第155図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＫ－０３実測図　132
第156図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＤ－０１実測図　133
第157図　杓子観音Ⅰ遺跡遺構外出土土器実測図　134
第158図　杓子観音Ⅰ遺跡遺構外出土石器実測図　135

表　目　次

表１　周辺の遺跡一覧表　4
表２　屋敷古墳群Ⅰ区出土遺物観察表　34～35
表３　屋敷古墳群Ⅱ区出土遺物観察表　62～63
表４　鋤崎古墳群出土遺物観察表　78
表５　足頭古墳群出土遺物観察表　90
表６　長廻古墳群出土遺物観察表　112

図　版　目　次

屋敷古墳群

図版１　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１完掘状況
屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１甑形土器出土状況
図版２　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１鉄器出土状況
屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０２完掘状況
図版３　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０３完掘状況
屋敷古墳群Ⅰ区加工段１・２・３完掘状況
図版４　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１土層
屋敷古墳群Ⅰ区加工段１遺物出土状況
図版５　屋敷古墳群Ⅰ区加工段２・３完掘状況
屋敷古墳群Ⅰ区加工段２・３土層
図版６　屋敷古墳群Ⅰ区加工段４完掘状況
屋敷古墳群Ⅰ区加工段４土層
図版７　屋敷古墳群Ⅰ区加工段４遺物出土状況
屋敷古墳群Ⅰ区加工段５土層
図版８　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＫ－０１遺物出土状況
屋敷古墳群Ⅰ区１号墳調査前
図版９　屋敷古墳群Ⅰ区１号墳

屋敷古墳群Ⅰ区１号墳主体部
図版10　屋敷古墳群Ⅰ区１号墳土層（墳丘北側を西から）
屋敷古墳群Ⅰ区１号墳土層（墳丘南側を東から）
図版11　屋敷古墳群Ⅰ区１号墳土層（墳丘東側を南から）
屋敷古墳群Ⅰ区１号墳土層（墳丘西側を北から）
図版12　屋敷古墳群Ⅰ区２号墳
屋敷古墳群Ⅰ区３号墳石棺及び周溝完掘状況
図版13　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳石棺掘方掘削状況
屋敷古墳群Ⅰ区３号墳石棺取り上げ後状況
図版14　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＤ－０３土器溜まり
屋敷古墳群Ⅰ区ＳＤ－０３土層
図版15　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＤ－０３完掘状況
屋敷古墳群Ⅰ区畠畝間
図版16　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０１出土遺物・ＳＩ－０２出土土器・ＳＩ－０３出土土器
図版17　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＩ－０３出土土器・ＳＫ－０２出土土器
図版18　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１出土土器
図版19　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１・３出土遺物
図版20　屋敷古墳群Ⅰ区加工段４・５出土土器・ＳＩ－０１外周溝出土遺物
図版21　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳周溝出土土器・４号墳周溝出土土器
図版22　屋敷古墳群Ⅰ区遺構外出土遺物
図版23　屋敷古墳群Ⅰ区遺構外出土遺物・Ⅰ区出土鉄製品・管玉
図版24　屋敷古墳群Ⅱ区調査前全景（南から）
屋敷古墳群Ⅱ区調査前全景（北から）
図版25　屋敷古墳群Ⅱ区１号墳全景
屋敷古墳群Ⅱ区１号穴羨道部遺物出土状況
図版26　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴閉塞石検出状況
屋敷古墳群Ⅱ区１号穴玄室内遺物出土状況
図版27　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴玄室内遺物出土状況（近景）
屋敷古墳群Ⅱ区１号穴玄室内完掘状況
図版28　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴完掘状況
屋敷古墳群Ⅱ区２号穴検出状況
図版29　屋敷古墳群Ⅱ区３号穴検出状況
屋敷古墳群Ⅱ区６号穴遺物出土状況
図版30　屋敷古墳群Ⅱ区６号穴完掘状況
屋敷古墳群Ⅱ区２・３・６号穴完掘状況
図版31　屋敷古墳群Ⅱ区４号穴完掘状況
屋敷古墳群Ⅱ区５号穴石床検出状況
図版32　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴閉塞石検出状況

屋敷古墳群Ⅱ区５号穴完掘状況
図版33　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴完掘状況（玄室内）
屋敷古墳群Ⅱ区７号穴遠景
図版34　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴玄室内遺物出土状況
屋敷古墳群Ⅱ区７号穴前庭部遺物出土状況
図版35　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴玄門検出状況
屋敷古墳群Ⅱ区７号穴玄室内完掘状況
図版36　屋敷古墳群Ⅱ区ＳＫ－０１完掘状況
屋敷古墳群Ⅱ区ＳＸ－０１焚き口検出状況
図版37　屋敷古墳群Ⅱ区ＳＸ－０１全景
屋敷古墳群Ⅱ区横穴墓・ＳＸ－０１検出状況（南から）
図版38　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴出土須恵器
図版39　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴出土鉄製品・Ⅱ区２・３・６号穴周辺出土須恵器
図版40　屋敷古墳群Ⅱ区３号穴出土鉄製品・Ⅱ区６号穴出土須恵器
図版41　屋敷古墳群Ⅱ区５・７号穴出土土器
図版42　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土鉄製品・Ⅱ区遺構外出土須恵器
鋤崎古墳群
図版43　鋤崎古墳群調査前全景
鋤崎古墳群１号穴前庭部遺物出土状況
図版44　鋤崎古墳群１号穴玄室内遺物出土状況
鋤崎古墳群１号穴全景
図版45　鋤崎古墳群１号穴玄室内全景
鋤崎古墳群２号穴玄室内遺物出土状況
図版46　鋤崎古墳群２号穴玄室内全景
鋤崎古墳群２号穴玄門検出状況
図版47　鋤崎古墳群２号穴全景
鋤崎古墳群３号穴完掘状況
図版48　鋤崎古墳群３号穴玄室内遺物出土状況
鋤崎古墳群３号穴完掘状況（玄室内）
図版49　鋤崎古墳群４号穴完掘状況
鋤崎古墳群４号穴完掘状況（玄室内）
図版50　鋤崎古墳群１号穴後背墳丘出土土器
図版51　鋤崎古墳群１号穴出土土器
図版52　鋤崎古墳群１号穴～３号穴出土遺物
足頭古墳群
図版53　足頭古墳群調査前全景（南から）
足頭古墳群３号墳第１主体部検出状況（内側土坑）
図版54　足頭古墳群３号墳第１主体部礫出土状況

足頭古墳群３号墳第１主体部鉄器出土状況
図版55　足頭古墳群３号墳第１主体部完掘状況
足頭古墳群３号墳第２主体部検出状況
図版56　足頭古墳群３号墳第２主体部検出状況
足頭古墳群３号墳第２主体部石棺内完掘状況
図版57　足頭古墳群３号墳第２主体部掘方
足頭古墳群３号墳第３主体部検出状況
図版58　足頭古墳群３号墳第３主体部完掘状況
足頭古墳群３号墳南溝内墓壙検出状況
図版59　足頭古墳群３号墳南溝内墓壙完掘状況
足頭古墳群出土遺物
長廻古墳群
図版60　長廻古墳群１号墳
長廻古墳群１号墳周溝土層
図版61　長廻古墳群１号墳石棺内流入土除去後
長廻古墳群１号墳石棺内礫・刀子出土状況
図版62　長廻古墳群１号墳石棺取上げ後掘方
長廻古墳群１号穴前庭部縦断土層
図版63　長廻古墳群１号穴前庭部遺物出土状況
長廻古墳群１号穴閉塞状況
図版64　長廻古墳群１号穴玄室内遺物出土状況
長廻古墳群１号穴玄室内大刀出土状況
図版65　長廻古墳群１号穴玄室内完掘状況
長廻古墳群１号穴全景（完掘状況）
図版66　長廻古墳群２号穴閉塞石出土状況
長廻古墳群２号穴玄室内遺物出土状況
図版67　長廻古墳群２号穴前庭部完掘状況
長廻古墳群２号穴玄室内完掘状況
図版68　長廻古墳群坑道状遺構１号穴
長廻古墳群坑道状遺構２号穴（南より）
図版69　長廻古墳群坑道状遺構２号穴（南西より）
長廻古墳群坑道状遺構３号穴
図版70　長廻古墳群１号墳出土鉄器・１号穴出土須恵器
図版71　長廻古墳群１号穴出土須恵器
図版72　長廻古墳群１号穴出土須恵器
図版73　長廻古墳群１号穴出土鉄器・２号穴出土須恵器・鉄鏃
図版74　長廻古墳群遺構に伴わない遺物

海部城跡
図版75　海部城跡調査前（曲輪）
海部城跡曲輪縦断土層
図版76　海部城跡切岸縦断土層
海部城跡ＳＫ－０３（ピット１）土層
図版77　海部城跡ＳＫ－０３（ピット１）完掘状況
海部城跡ＳＫ－０２（ピット２）土層
図版78　海部城跡ＳＫ－０２（ピット２）石検出状況
海部城跡ＳＫ－０１（ピット４）土層
図版79　海部城跡ＳＫ－０１（ピット４）石検出状況
海部城跡出土遺物
杓子観音Ⅰ古墳群
図版80　杓子観音Ⅰ古墳群遠景
杓子観音Ⅰ古墳群１号墳主体部完掘状況（南から）
図版81　杓子観音Ⅰ古墳群１号墳主体部完掘状況（東から）
杓子観音Ⅰ古墳群１号墳墳頂部完掘状況（南東から）
図版82　杓子観音Ⅰ古墳群１号墳主体部検出状況
杓子観音Ⅰ古墳群１号墳主体部土層堆積状況（Ｂ－Ｂ’西側）
杓子観音Ⅰ古墳群１号墳主体部土層堆積状況（Ｂ－Ｂ’東側）
図版83　杓子観音Ⅰ古墳群１号墳主体部自然石出土状況（南東から）
杓子観音Ⅰ古墳群１号墳自然石検出状況（東から）
杓子観音Ⅰ古墳群１号墳主体部完掘状況（東から）
杓子観音Ⅰ遺跡
図版84　杓子観音Ⅰ遺跡全景（北から）
杓子観音Ⅰ遺跡調査区西側ピット群（北から）
図版85　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１遺物出土状況（北から）
杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１完掘状況（北から）
図版86　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１土層堆積状況（西から）
杓子観音Ⅰ遺跡ＳＸ－０３石・人骨出土状況（東から）
図版87　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＸ－０２検出状況（北から）
杓子観音Ⅰ遺跡ＳＸ－０１検出状況（東から）
図版88　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１出土遺物
杓子観音Ⅰ遺跡遺構外出土遺物
横穴墓出土人骨
図版89　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴１号人骨
屋敷古墳群Ⅱ区７号穴１号人骨骨折痕
長廻古墳群２号穴２号人骨

第１章　調査に至る経緯

主要地方道宍道インター線は、国道９号線及び54号線から中国横断道自動車道尾道松江線への接続道路である。

平成６年３月に松江土木建築事務所より宍道町教育委員会へ埋蔵文化財の有無についての照会があり、宍道教育委員会は分布調査を実施した。分布調査前からインター線のルート上に、屋敷古墳群、足頭（あしがしら）古墳群、及び鋤崎（すきさき）遺跡があることはわかっていたが、その他に海部（おんべ）城跡など、遺跡の可能性がある箇所が確認された。

平成９年７月から12月にかけてそれらの箇所で範囲確認調査を実施した。トレンチ調査を中心に行い、遺構・遺物の有無について確認を行った。その結果、屋敷古墳群の向かい側にある丘陵先端頂部のトレンチ内から石棺の蓋と思われる石材を検出して古墳の可能性が高まったため、小字名から遺跡を長廻（ながさこ）古墳群とした。またインター線のルートから外れていた鋤崎古墳群と同一丘陵上では、古墳と見られる高まりが確認されたため鋤崎古墳群の一部として調査を実施することとした。なお、トレンチ調査の結果、全面調査が必要な面積は6000㎡を越えることが判明し、宍道町教育委員会では宍道インター線の開通予定時期までに発掘調査を終了することが困難であると見られた。このため、宍道町教育委員会と島根県教育委員会の協議により宍道町教育委員会からは発掘調査員１名を派遣し、発掘調査は島根県教育委員会が主体となって実施することとなった。

発掘調査は平成10年度に実施し、平成12年度には報告書を刊行する予定であったが、平成12年８月、平成13年９月の二度にわたって宍道インター線隣接地で地滑りによる亀裂が確認され、丘陵を削り取る工事が必要となった。このため、島根県教育委員会により平成12年９月に杓子観音Ⅰ－１号墳、平成13年10月に杓子観音Ⅰ遺跡の発掘調査を実施した。

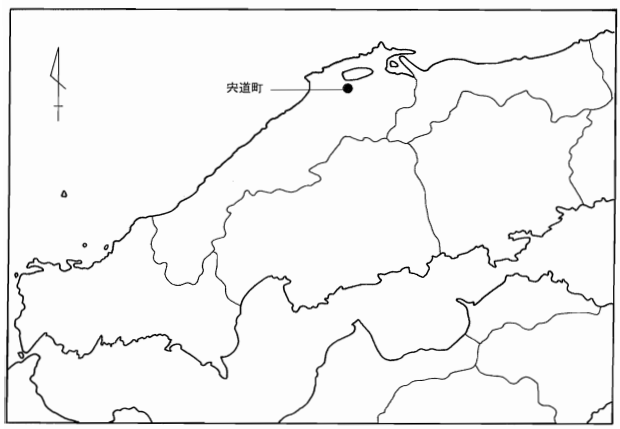
第２章　遺跡の位置と歴史的環境

この報告書に記載する屋敷古墳群ほか７つの遺跡は、島根県八束郡宍道町佐々布に所在する。宍道町は国内７位の面積をもつ汽水湖である宍道湖の南西岸に位置し、東は八束郡玉湯町、南は大原郡加茂町と大東町、西は簸川郡斐川町と境を接する。佐々布地区は宍道町西部に位置し、奈良時代の地誌である『出雲国風土記』に見える意宇郡宍道郷に該当するとされる。宍道駅が置かれ古代山陰道の存在が推定されるなど、古代より交通の要衝であった。現在でもＪＲ山陰線と木次線、国道９号線と54号線の分岐点として出雲平野と山間部・山陽地方をつなぐ要の位置にある。

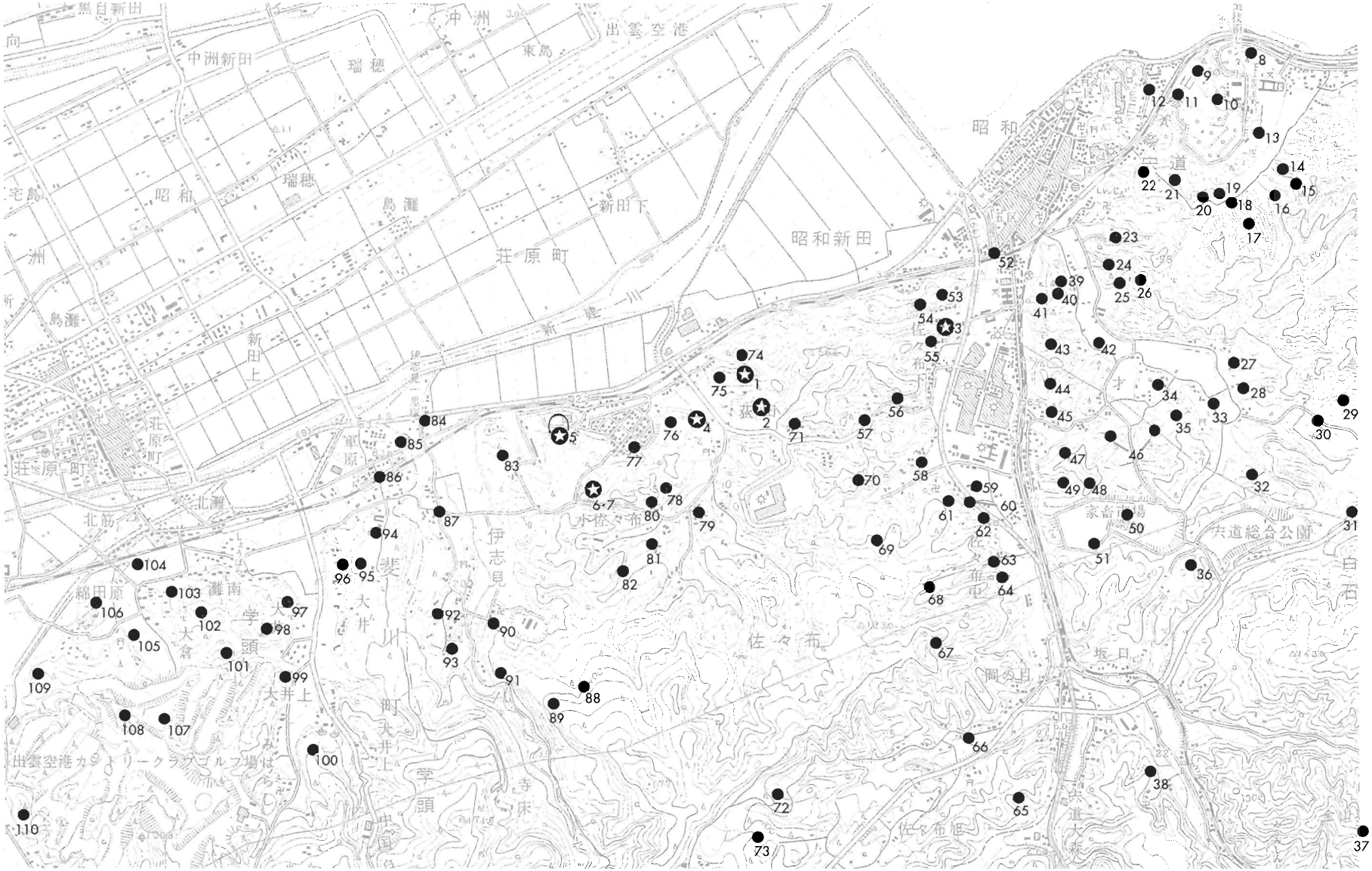
今回報告する遺跡は、宍道湖・出雲平野に向かって伸びる低丘陵及び斜面上に立地する。出雲平野までの距離は数百メートルで、ほとんどの遺跡から宍道湖と出雲平野を望むことができる。

宍道町では、旧石器時代のナイフ形石器が出土した堤平遺跡[1)]、縄文草創期の落とし穴を検出した野津原Ⅱ遺跡[2)]など、少数であるが縄文時代以前の遺跡が確認されており、当時から人々が暮らしを営んでいたことがわかる。弥生時代に遺跡数は大きく増加し、北ヶ市遺跡[3)]、山守免遺跡[4)]では集落が発見されたほか、清水谷遺跡[5)]などでは墳丘墓も確認されている。また宍道町には出雲地方出土とされる福田型銅鐸が伝えられ、墳丘墓の存在とともに当時の集団関係を示すものとして注目される。このほか上野Ⅱ遺跡[6)]では鉄素材が出土し、弥生時代の対外交流と鉄生産を考える上で興味深い。古墳時代に入ると佐々布地区に佐々布下１号墳[7)]、上野１号墳と前期古墳が築造される。このうち上野１号墳は、長大な粘土郭を主体部にもつ長径約40ｍの大形円墳で、斜縁神獣鏡、勾玉、鉄剣などを出土している[8)]。古墳時代中期には、水溜古墳群[9)]、足頭古墳群[10)]など墳丘規模の小さい古墳群が造られ、古墳の石材として来待石が用いられるようになる。後期には横穴式石室を主体部にもつ古墳と横穴墓が造られるが、遺跡の所在する宍道町西部では横穴式石室は少なく、横穴墓が多く確認されている。同一の横穴墓群内でも玄室形態が混在している点が周辺地域と比較して特徴的である。このほか、古墳時代から中世の遺跡では、荻田遺跡で鍛冶炉、鞴の羽口などを伴う集落跡が見つかっている[11)]。中世には金山要害山城をはじめ、丘陵上を利用した山城が多く築かれるようになる[12)]。特に現在の国道９号線と国道54号線の分岐点から南側に集中して立地し、東西と南北の交通の要衝を重要視したことがわかる。

以上のように、この一帯は出雲地方東部と西部、山間部とを結ぶ要の地として発展してきたといえよう。



第１図　調査地の位置



第２図　調査地の位置と周辺の遺跡（Ｓ＝１：25000）

表１　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	屋敷古墳群	古墳	38	金山五輪塔群	古墓	75	北ヶ市遺跡	住居跡
2	鋤崎古墳群	古墳	39	宍道要害山城跡	城跡	76	小界古墳	古墳
3	海部城跡	城跡	40	宍道要害山古墳	古墳	77	萩田遺跡	住居跡
4	長廻古墳群	古墳	41	榎廻遺跡	散布地	78	小佐々布古墳群	古墳
5	足頭古墳群	古墳	42	六反田遺跡	散布地	79	北ノ廻遺跡	散布地
6	杓子観音Ⅰ古墳群	古墳	43	西代遺跡	散布地	80	鹿田遺跡	散布地
7	杓子観音Ⅰ遺跡	集落・墓	44	長廻古墳	古墳	81	ソラ田遺跡	散布地
8	香の木遺跡	散布地	45	篠原遺跡	散布地	82	小佐々布横穴群	横穴
9	小宮田遺跡	散布地	46	才横穴墓群	横穴	83	佐雑埼	郡境
10	深坪遺跡	散布地	47	ＯＭ公園横穴墓	横穴	84	伊志見一里塚	一里塚
11	向野原遺跡	散布地	48	女夫岩遺跡	祭祀跡	85	軍原千人塚古墳	古墳
12	下野原遺跡	散布地	49	女夫岩西遺跡	古墳	86	軍原古墳	古墳
13	伝塩冶高貞首塚	古墳	50	清水谷遺跡	古墳	87	原添遺跡	散布地
14	カシャク古墳	古墳	51	矢頭遺跡	横穴・散布地	88	荒畑遺跡	散布地
15	小昭廻遺跡	古墳	52	加茂分遺跡	散布地	89	ラント遺跡	散布地
16	後谷横穴墓	横穴	53	掛屋山城跡	城跡	90	寺ノ前遺跡	散布地
17	元薬師遺跡	散布地	54	佐々布下古墳群	古墳	91	上遺跡	散布地
18	山の神谷横穴墓	横穴	55	観音寺横穴墓	横穴	92	廻田遺跡	散布地
19	岩穴口古墳	横穴	56	中屋敷遺跡	散布地	93	上ソリ遺跡	散布地
20	打越遺跡	散布地	57	大畑ヶ遺跡	散布地	94	軍原丘上古墳群	古墳
21	能登堀遺跡	散布地	58	西屋敷遺跡	散布地	95	大井古墳	古墳
22	上野原遺跡	散布地	59	石地蔵遺跡	石造仏	96	軍原Ⅰ遺跡	散布地
23	随音寺横穴墓群	横穴	60	竹ノ崎横穴墓群	横穴	97	欠ノ元１号墳	古墳
24	八斗久保遺跡	散布地	61	上野遺跡	古墳・住居跡	98	欠ノ元城跡	城跡
25	横町横穴墓群	横穴	62	竹ノ崎遺跡	散布地	99	大井城跡	城跡
26	横町遺跡	散布地	63	矢谷下遺跡	散布地	100	湯谷城跡	城跡
27	外垣内遺跡	散布地	64	敷手遺跡	散布地	101	大倉城跡	城跡
28	原田遺跡	散布地	65	大森経塚	経塚	102	大倉横穴群	横穴
29	野津原Ⅱ遺跡	住居跡	66	平田遺跡	散布地	103	大倉Ⅱ遺跡	散布地
30	山守免遺跡	住居跡	67	佐々布要害山城跡	城跡	104	大倉Ⅲ遺跡	散布地
31	女ケ峠横穴	横穴	68	矢田上遺跡	散布地	105	大倉Ⅰ遺跡	散布地
32	堤平遺跡	寺跡・住居跡	69	上野Ⅱ遺跡	住居跡	106	錦田原Ⅰ遺跡	散布地
33	佐賀利遺跡	散布地	70	城山城跡	城跡	107	大倉Ⅳ遺跡	散布地
34	向原遺跡	散布地	71	岩穴畑遺跡	散布地	108	錦田原城跡	城跡
35	才古墳	古墳	72	普門院跡	寺跡	109	錦田原古墳群	古墳
36	水溜古墳群	古墳	73	佐々布Ⅰ遺跡	散布地	110	宇屋谷遺跡	散布地
37	金山要害山城	城跡	74	椎ノ木廻古墳群	古墳			

註

１）丹羽野　裕「島根県における旧石器時代研究の現状と課題」『島根考古学会誌』第８集　1991

２）「野津原Ⅱ遺跡」『島根県教育庁文化財課　埋蔵文化財調査センター年報』Ⅴ　1997

３）「北ヶ市遺跡」『宍道町史』史料編　1999

４）「山守免遺跡」『島根県教育庁文化財課　埋蔵文化財調査センター年報』Ⅵ　1998

５）「清水谷遺跡、矢頭遺跡発掘調査報告書」『宍道町埋蔵文化財発掘調査報告』４　1985

６）『上野Ⅱ遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10　2001

７）西尾克己『宍道町の古墳時代』宍道町ふるさと文庫６　1992

８）『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７　2000

９）「水溜古墳群」『宍道町埋蔵文化財調査報告』６　1988

10）「足頭古墳群」『宍道町史』史料編　1999

11）村上勇「宍道・荻田住宅団地遺跡(Ⅰ・Ⅱ)」『島根県埋蔵文化財発掘調査報告書』ⅩⅡ・ⅩⅢ　1986・1988

12）島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』　1998

第３章　屋敷古墳群

第１節　調査の経過と概要

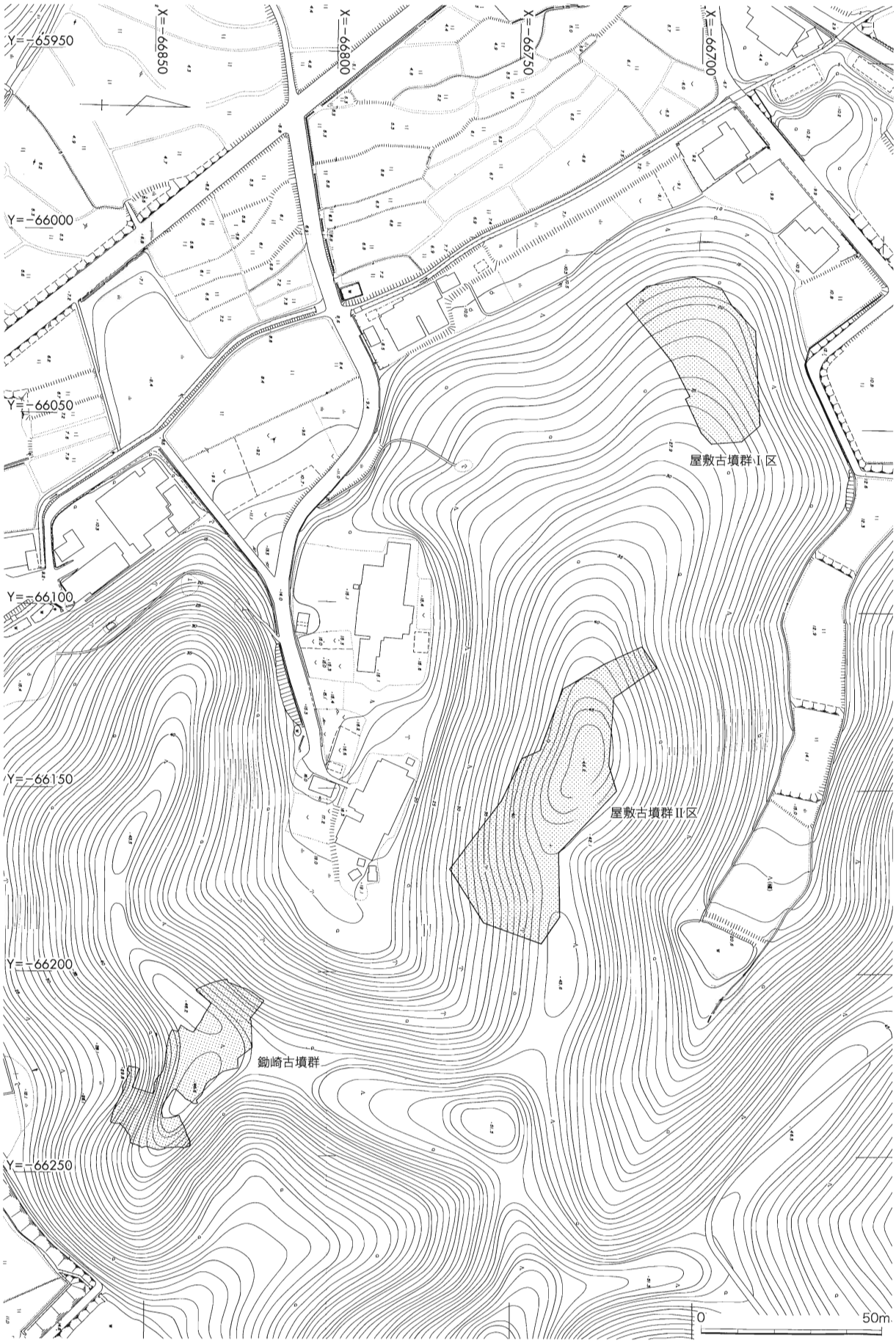
屋敷古墳群は、八束郡宍道町大字佐々布3475－15外に所在する。宍道町西部を流れる江尻川東岸に位置し、北西へのびる丘陵先端付近の頂部から斜面にかけて立地する。北東に宍道湖、北西に出雲平野を望み、宍道湖との距離は現在では約１㎞であるが、当時は遺跡のすぐ近くまで宍道湖が迫っていたと考えられる。丘陵の標高は、Ⅱ区の尾根上で44ｍとそれほど高くはないが、宍道湖や出雲平野に近いため北～西への眺望は開けている。調査区は２カ所設定し、西にのびる丘陵先端付近の緩斜面をⅠ区、Ⅰ区の東側約100ｍに位置する尾根および斜面をⅡ区とした。

周辺の遺跡は第２章に記したとおりであるが、Ⅰ区南側に隣接して弥生時代の竪穴住居跡を検出した北ヶ市遺跡[1)]が存在した。開発に伴い既に消滅したが、本来は屋敷古墳群Ⅰ区と一連のものであったと見られる。また第４章に掲載した鋤崎古墳群は南東約100ｍの尾根上に位置する。

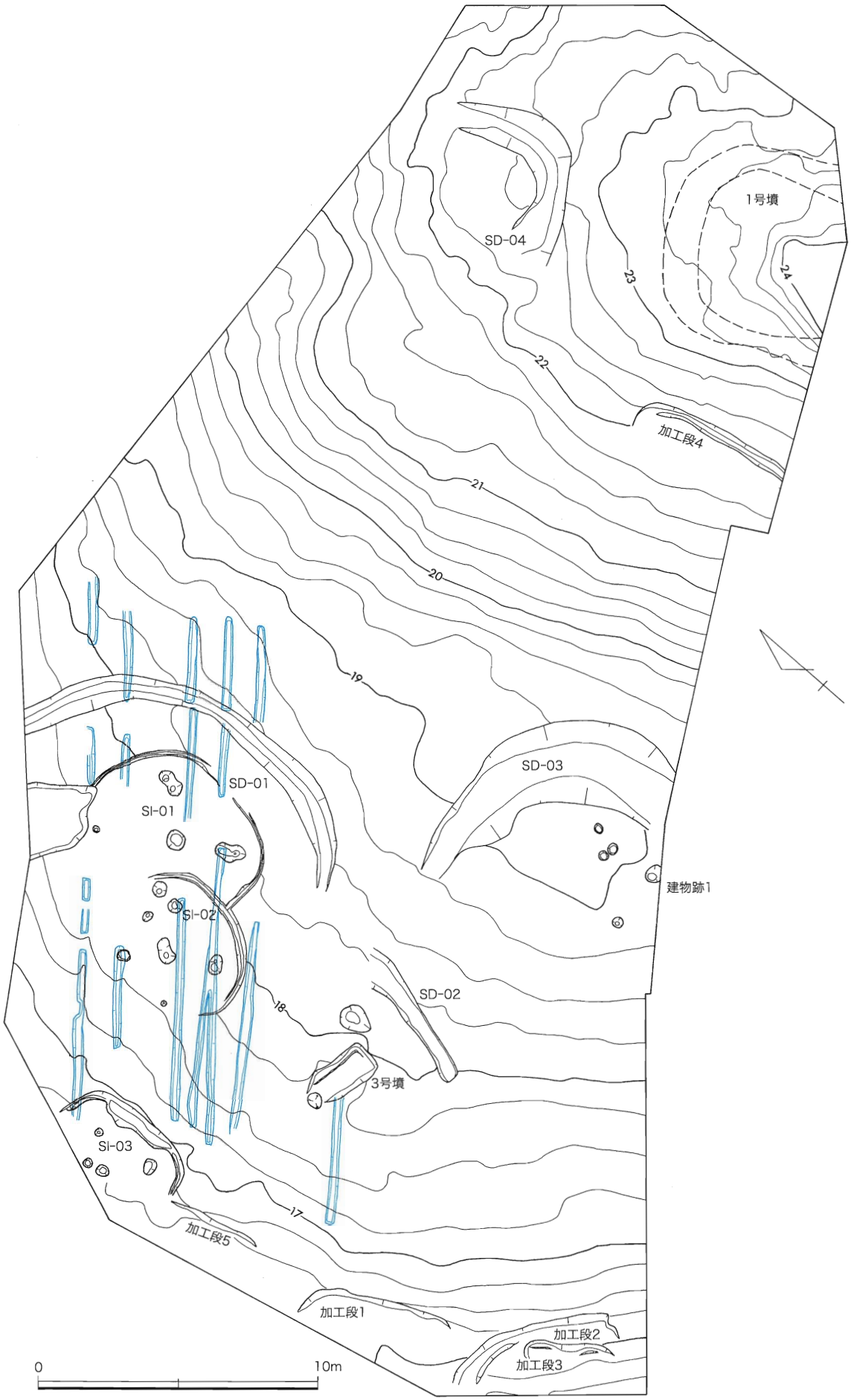
この遺跡は以前から古墳の存在が想定されており、平成９年に宍道町教育委員会により行われた範囲確認調査では、丘陵先端の平坦面で石棺の一部を検出している。

全面調査は平成10年４月～８月に実施した。４月13日にⅠ区、４月21日にⅡ区に着手した。Ⅰ区では、トレンチ調査の状況から、後世の地形改変により遺構の遺存状態は良くないことが想定されたが、古墳４基、竪穴住居跡３棟、畠の畝間とみられる溝も確認し、８月６日に終了した。Ⅱ区では、古墳１基、横穴墓６穴、掘削途中の炭窯と見られる遺構１などを検出し、８月７日に調査を終了したが、８月末に横穴墓１穴が工事中に発見され、これについて８月31日から９月７日まで調査を行った。

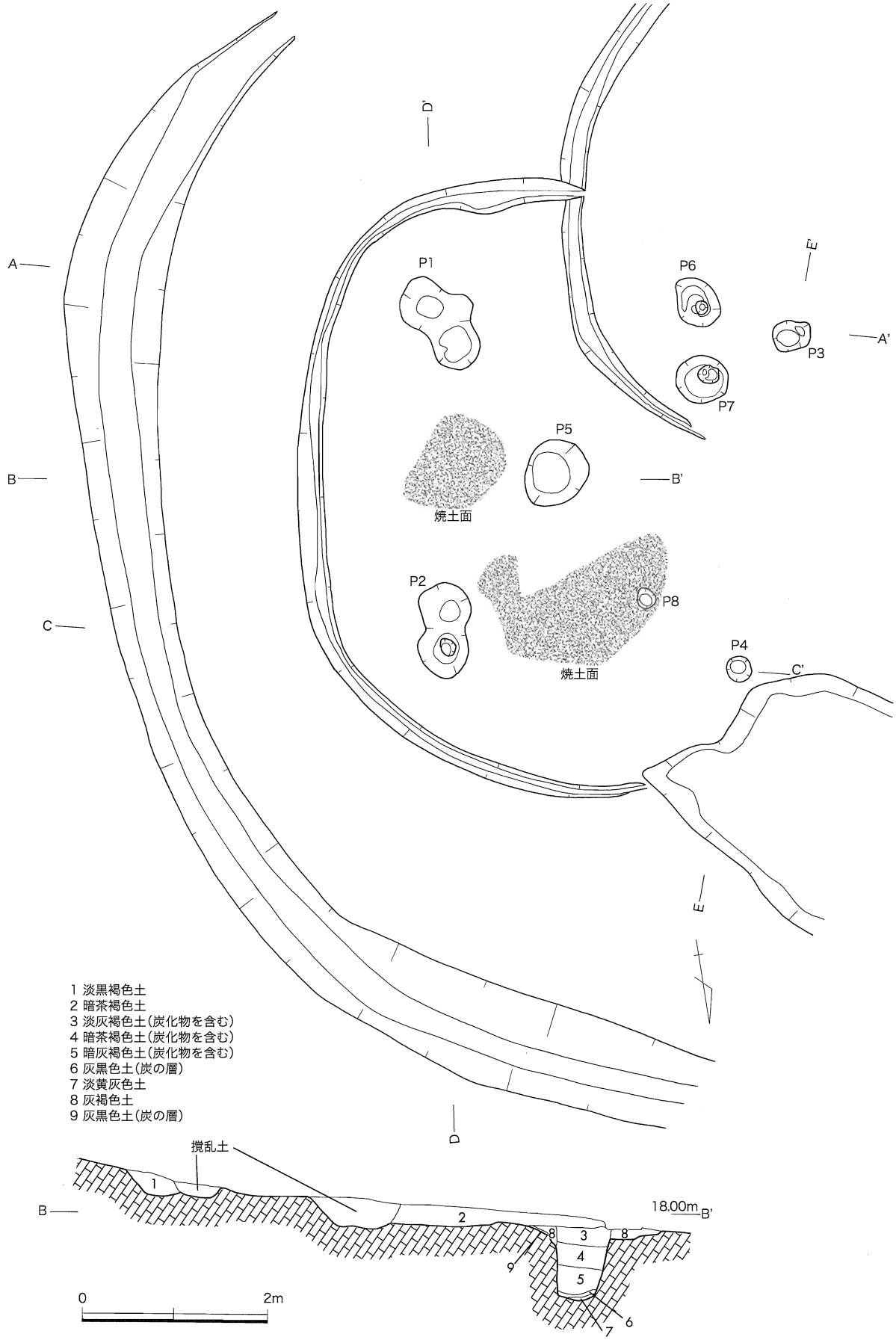
全面調査の方法は、重機及び人力による表土掘削の後、人力による掘り下げ・清掃を行って遺構を検出した。遺物の取り上げ、実測には主として遺跡調査システム「ＳＩＴＥ」を使用し、調査員による補正を行った。



第3図　屋敷古墳群調査区位置図



第４図　屋敷古墳群Ｉ区調査調査後地形測量図・遺構配置図（Ｓ＝１：200）



第５図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０１実測図(1)（Ｓ＝１：60)

第２節　Ｉ区の調査

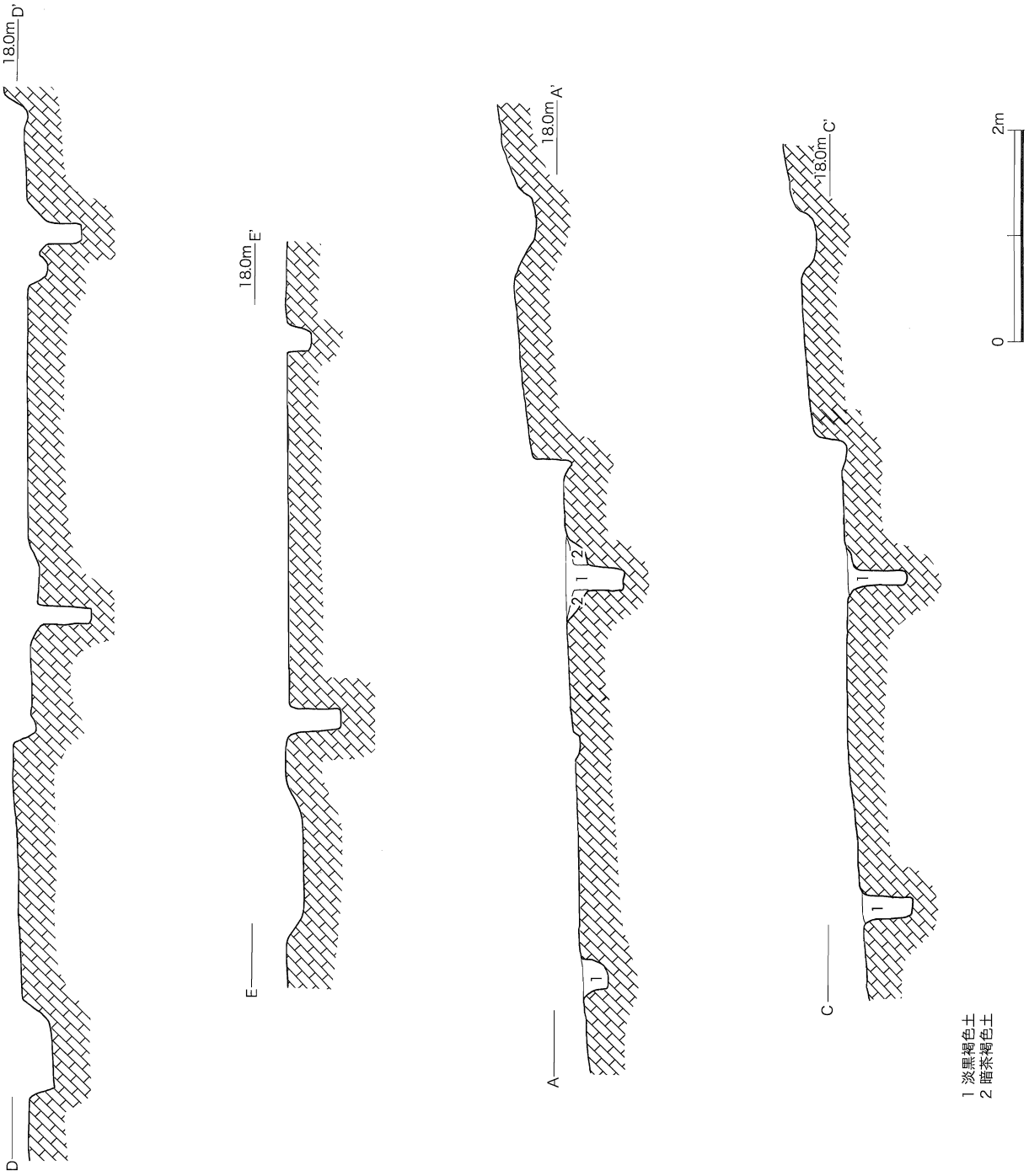
調査区の立地

Ｉ区は東西にのびる標高約20ｍの舌状丘陵の先端に位置している。当調査区域は約1,400㎡である。当調査区東側は比較的緩やかな傾斜となっているが、西側は平坦な面が続いている。

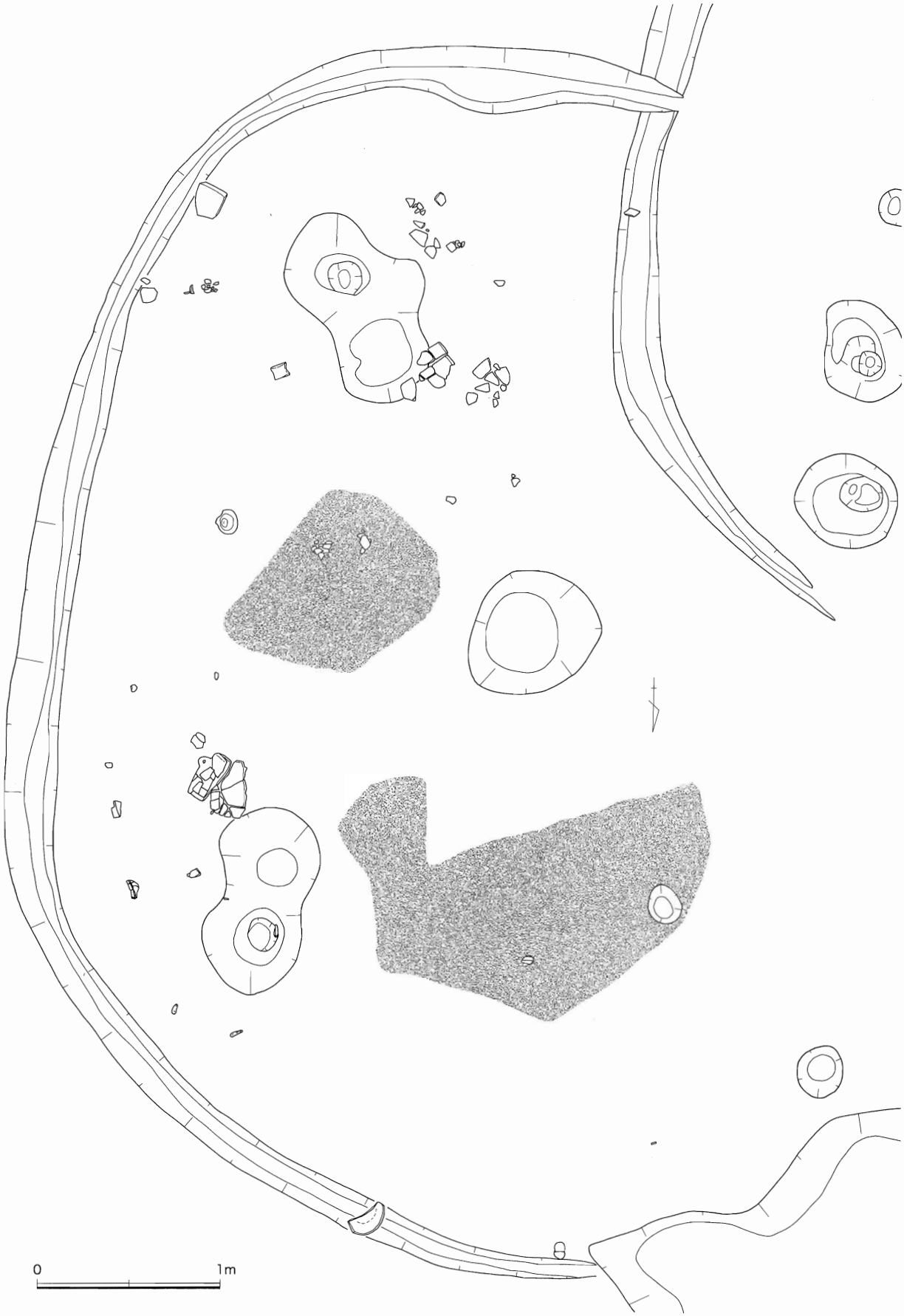
当調査区では古墳群と弥生時代後期の集落を中心に検出した。先に弥生時代集落跡について記述し、後で古墳群について記述したい。

弥生時代集落の立地

Ｉ区では竪穴住居跡（ＳＩ）を３棟検出した。すべて後世の削平によると思われる平坦面から検



第６図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０１実測図(2)（Ｓ＝１：60)



第７図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０１遺物出土状況実測図（Ｓ＝１：30）

出している。この竪穴住居跡は調査区外に続いており、この遺跡のすぐ西側には当遺跡とほぼ同時期と考えられる弥生時代後期の竪穴住居跡を２棟検出した北ヶ市遺跡がある。本来の集落の範囲は当遺跡と北ヶ市遺跡を含めた広範囲なものであったと予想される。

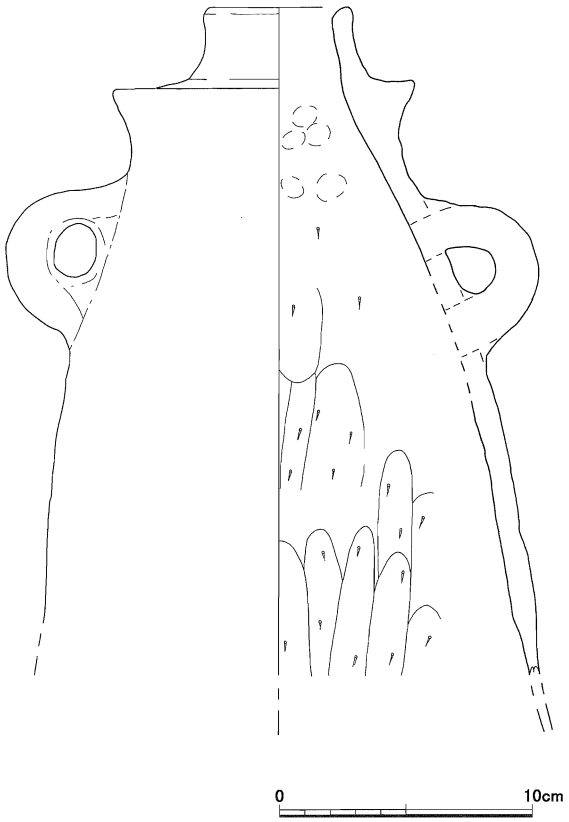
古墳群の立地

当調査区内の古墳群は北西に向かって舌状にのびる標高16m～24mの丘陵端部付近に位置している。

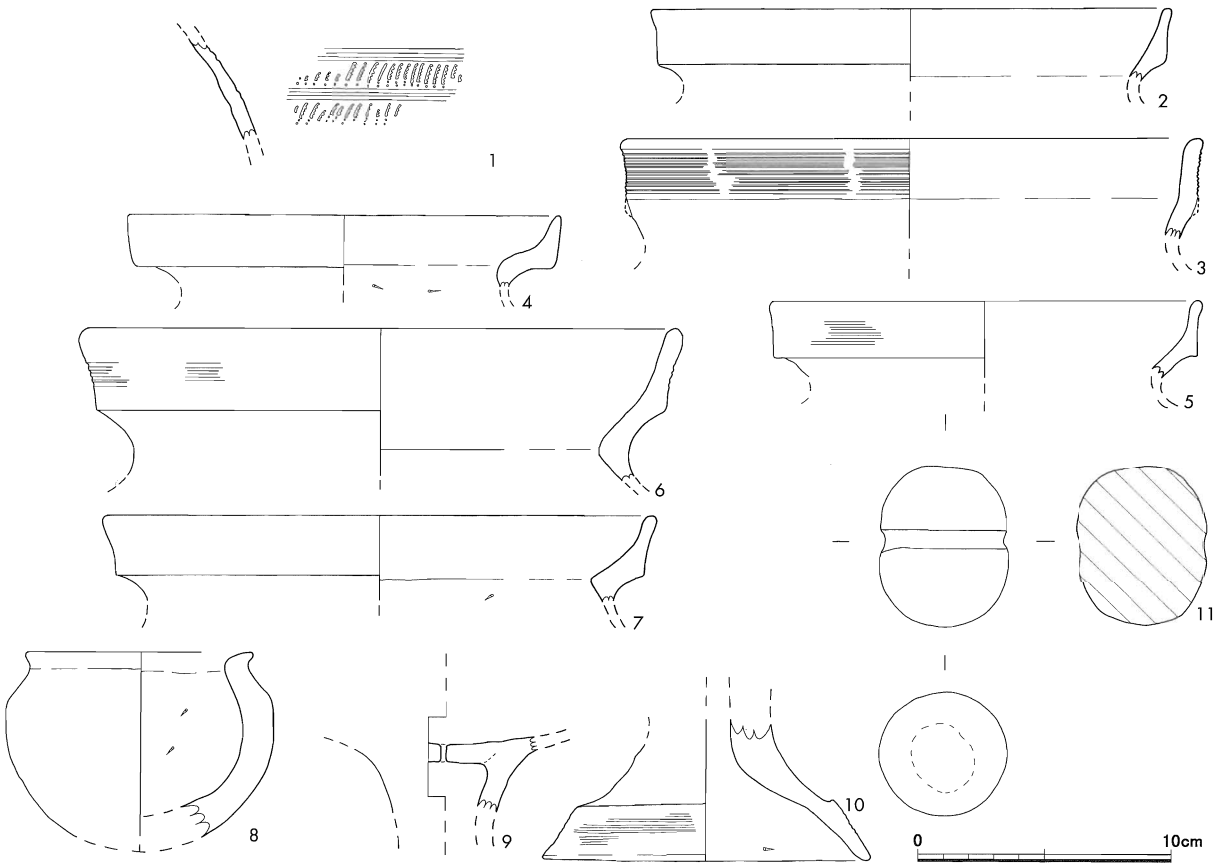
１号墳は、当調査区南東端、標高約24mの尾根中央先端部に位置している。

２号墳は、１号墳南東側に隣接しており、当調査区外に位置している。

３・４・５号墳は、後世の削平の被害を受けており、当時の立地条件が不明であるが、５号墳については、１号墳の北西にのびる丘陵の尾根先端部、１号墳北西側に隣接していたと推定される。



第８図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０１出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１：３）



第９図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０１出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１：３）

畠遺構の立地

後世の削平により全容は不明であるが、当調査区の西側、標高17m～19mの丘陵先端部付近に複数の溝が均一間隔で斜面に直行している。遺物は出土していないため時期については不明だが、遺構の形態より畠の畝間跡であると推定した。

以下、建物跡、土坑、加工段、古墳群、畠遺構の順で各遺構の概要について述べる。

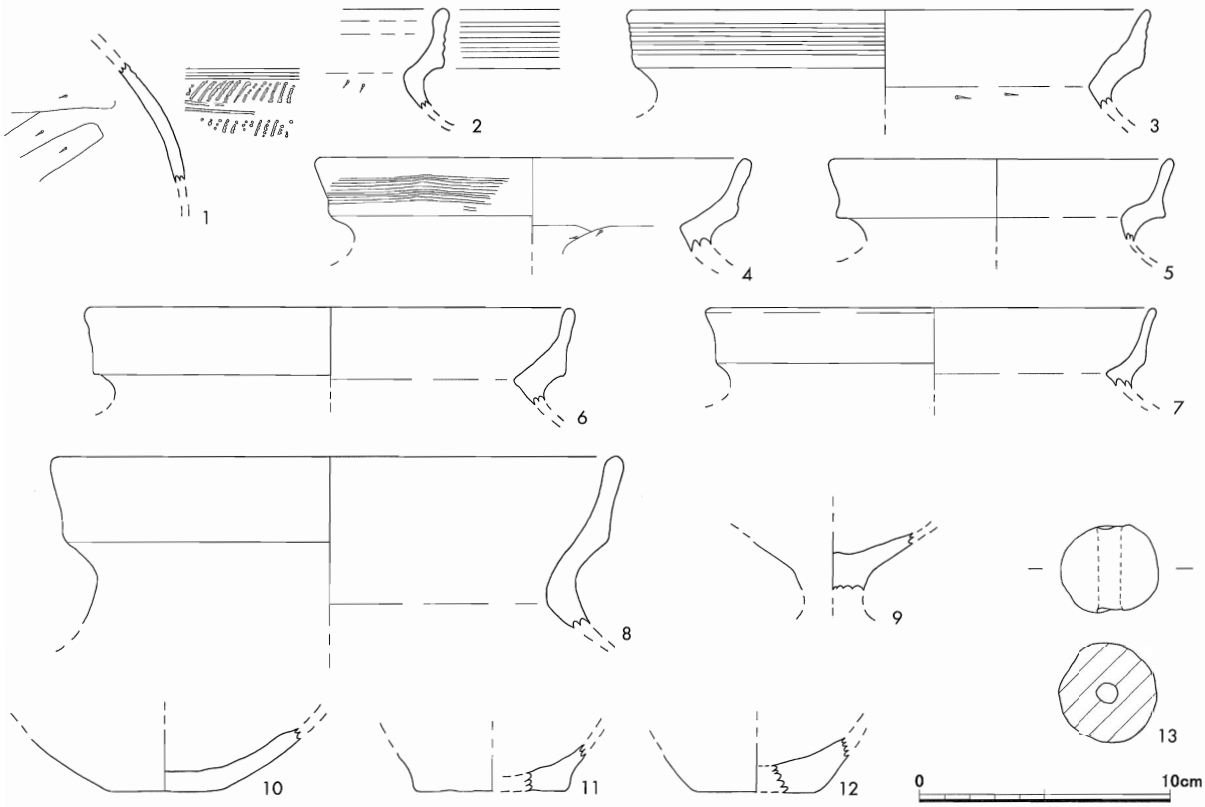
１．建物跡の調査

ＳＩ－０１（第５図～第10図）

調査区の北西側、標高18m前後の平坦面上に位置する。後世の削平の影響で平坦面となっているが、当時は斜面に位置していたのか、竪穴住居跡の尾根側に、竪穴住居跡の３方向を取り囲むような溝（外周溝と呼ぶ）が廻っているのが特徴である。なお、当遺跡に隣接し当遺跡とほぼ同時期であると考えられる北ヶ市遺跡の竪穴住居跡にも同じように外周溝が廻っている。

規模・形態　前述のとおり、かなり削平されているため、全容は明らかでないが、当住居址は当遺跡の中で最も規模が大きな住居址であると推定される。現状での残存部分の形態は、平面隅丸方形を呈し、１辺約6.5mである。また、当住居址から約2.1m離れた周辺に当住居址に伴うと推定される外周溝を検出した。外周溝の北西側部分が調査区外へ続いており、外周溝の全容はつかめないが、現状では、当住居址の北東部分周辺に位置している。外周溝の規模は、長さ約12.6m、幅32cm～108cm、深さは30cm前後である。

土層　後世の削平を受けているため全容は不明だが、現状では、覆土は１層である。この層は削平の影響が少なかったのか、遺物の出土状況が比較的良好であった。貼床は検出されなかった。

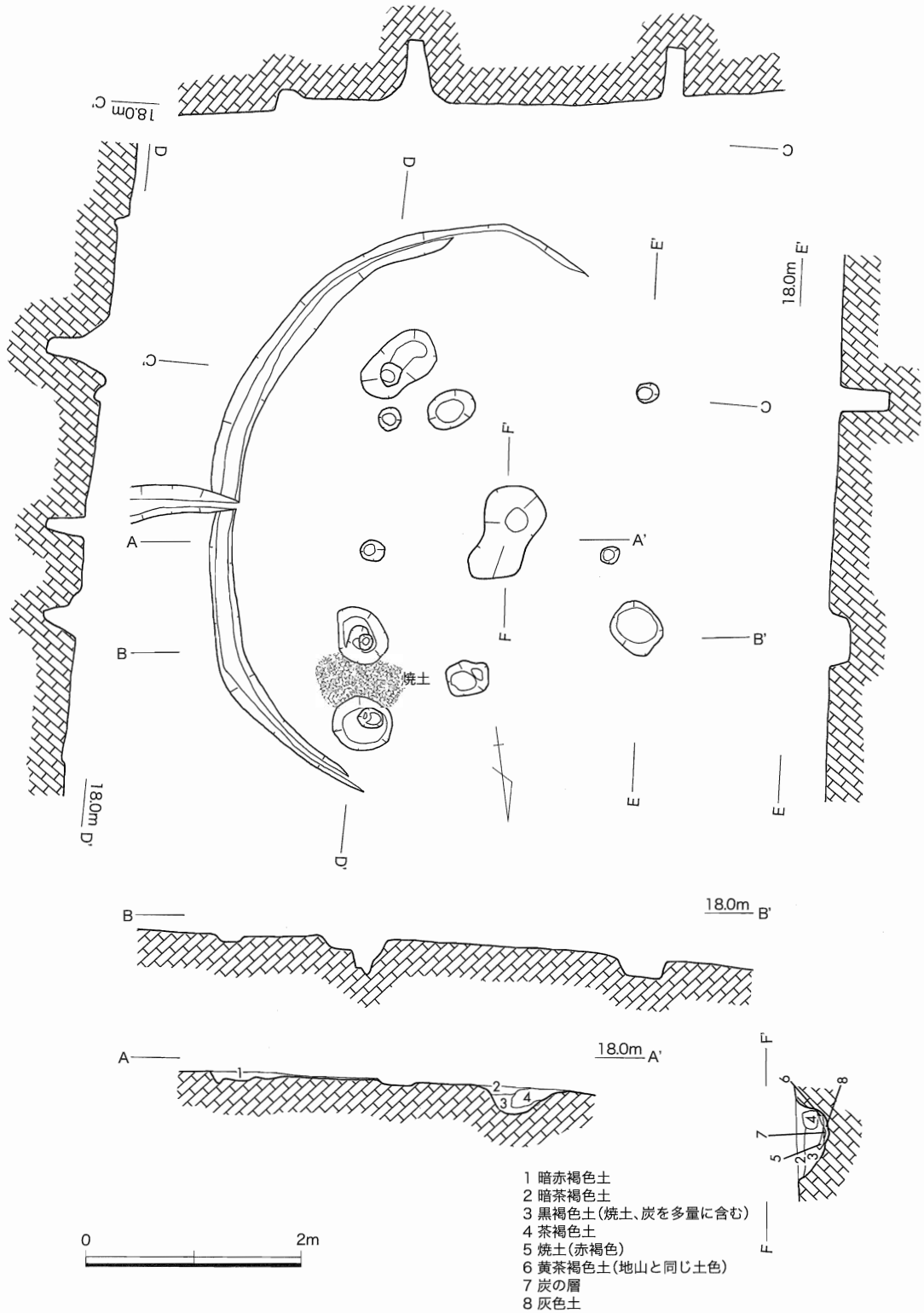


第10図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０１外周溝出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

柱穴・壁体溝　当住居址内からはピットを10基検出している。柱穴は比較的深くしっかりしている。柱間距離は約3.1m～3.8mである。壁沿いには壁体溝が廻る。

炉・焼土面　炉と推定される中央ピットを１基検出している。中央ピットは主柱穴との関係からみて、当住居址中央部よりやや東寄りに位置するものと考えられる。炉は２回に分けて掘られている。

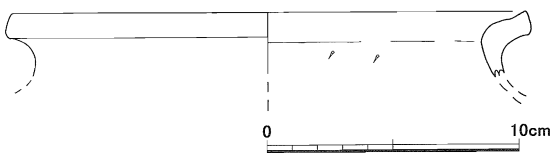
遺物の出土状況（第７図）　遺物は住居址覆土中、中央ピット内、外周溝内から出土している。住



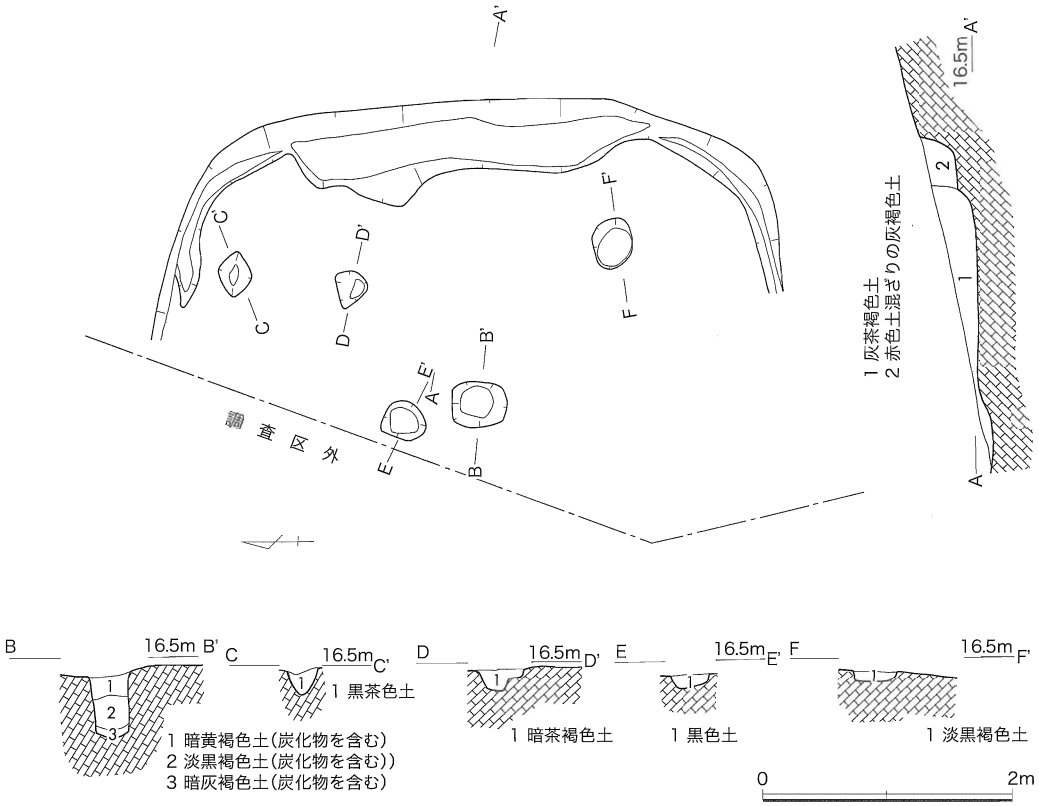
第11図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０２実測図（Ｓ＝１：60）

居址床面出土遺物は第８図の甕形土器、第９図11の石錘、２、３、８の弥生土器である。甕形土器は柱穴付近から出土している。中央ピット内出土遺物は第９図５の弥生土器である。外周溝内出土遺物は第10図である。

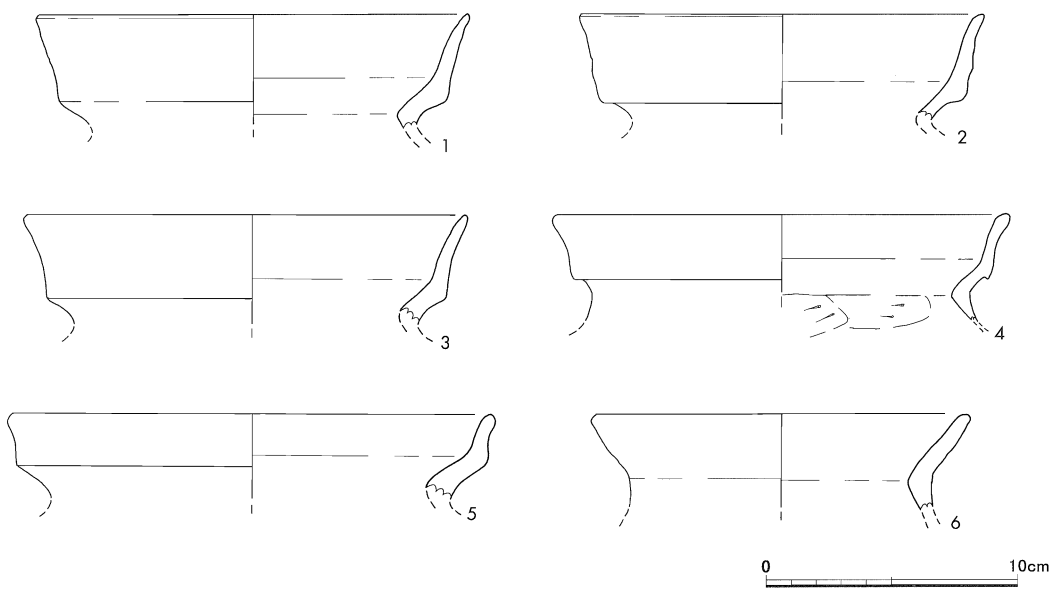
ＳＩ－０１出土遺物（第８図～第10図）



第12図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０２出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）



第13図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０３実測図（Ｓ＝１：60）



第14図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＩ－０３出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

詳細については遺物観察表に譲る。

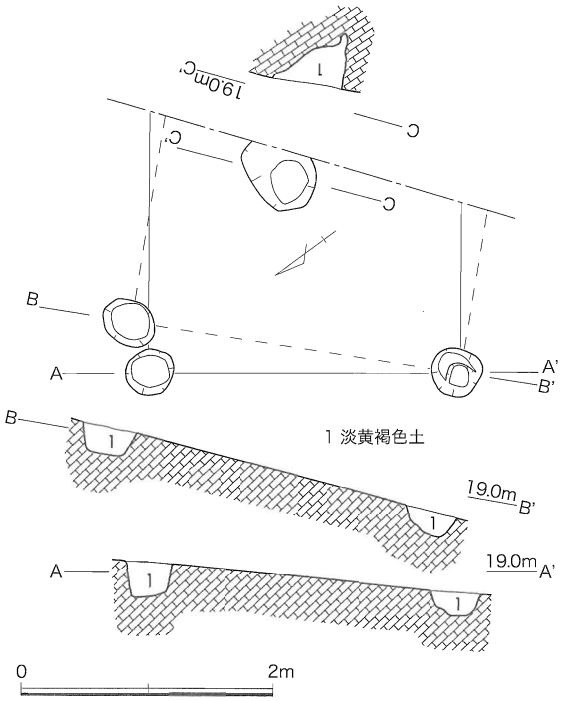
年代　床面付近からの出土遺物からみると、草田２期もしくは草田３期[2)]であると思われる。

ＳＩ－０２（第11図）

ＳＩ－０１のすぐ西側に位置し、ＳＩ－０１によって切られており、ＳＩ－０２→ＳＩ－０１の前後関係にあると考えられる。

規模・形態　ＳＩ－０１よりも削平の被害を受けており、斜面下方側の約１／２の概要が不明である。削平の被害が大きく断定はできないが、平面プランは隅丸方形であると思われる。現存する規模で、径5.2mである。

土層　削平の被害を受けているため全容は明らかでないが、現存する状態では１層が確認できる。貼床は検出していない。



第15図　屋敷古墳群Ｉ区建物跡１実測図
（Ｓ＝１：60）

柱穴・壁体溝　当住居址からはピットを10基検出している。主柱穴は４本である。柱穴は比較的深くしっかりしている。柱間距離は約2.2m～2.5mである。壁沿いには壁体溝が廻る。当住居址西側が削平の被害を受け全容が不明となっているため、壁体溝が全周するかどうかは不明である。

炉・焼土面　炉と推定される中央ピットを１基検出している。中央ピットは主柱穴との関係から、当住居址中央部付近に位置するものと考えられる。

遺物の出土状況　後世の削平の被害を大きく受けているためか、出土遺物は少なく図化できたのは第12図のみである。

ＳＩ－０２出土遺物

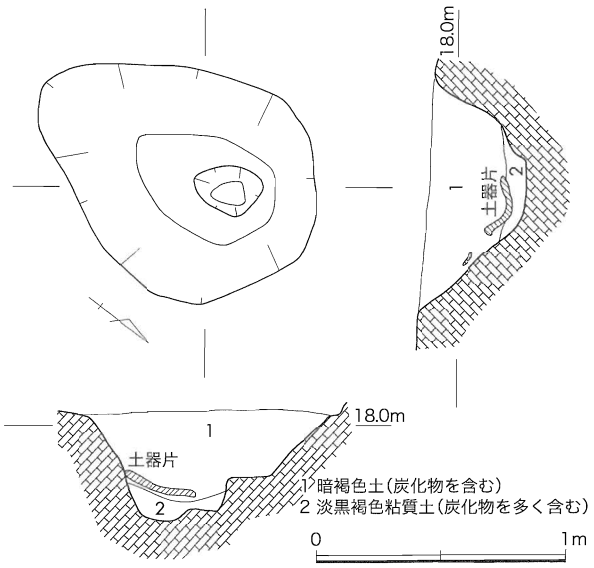
詳細は観察表に譲る。

年代　出土遺物が乏しく現状で判断することは困難であるが、第12図の土器を重視すれば草田１期に比定される住居址と思われる。

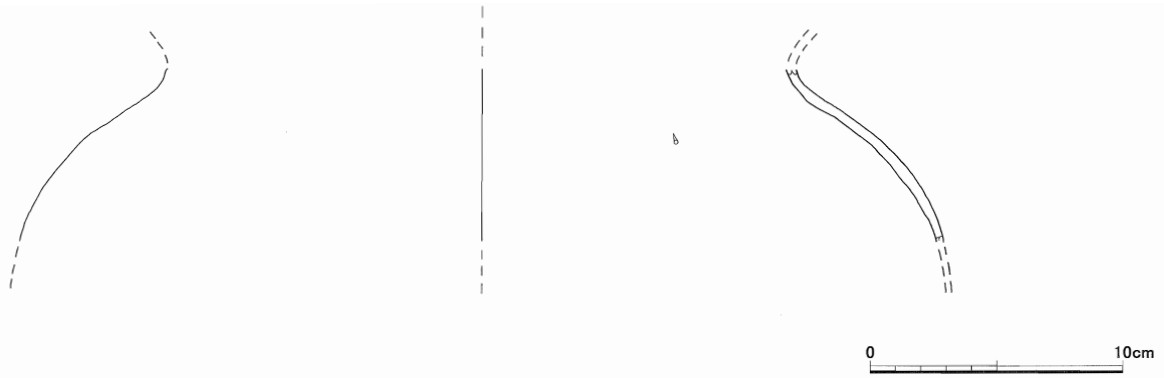
ＳＩ－０３（第13図）

ＳＩ－０３は、ＳＩ－０１、ＳＩ－０２とは少し離れており、ＳＩ－０２より西へ約４m、当調査区西端で、西向きの斜面、標高約16.5mに位置している。

ＳＩ－０３も後世の削平の影響を受けており、また、当住居址の西側はかなりの部分が



第16図　屋敷古墳群Ｉ区ＳＫ－０１実測図
（Ｓ＝１：30）



第17図　屋敷古墳群Ⅰ区ＳＫ－０１出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

流出していて全容は明らかでない。

規模・形態　斜面下方側の約半分が流出しているが、当住居址は平面隅丸方形と考えられる。現存する規模で、南北5.0mである。

土層　後世の削平の影響を受けているため全容は明らかでないが、現状で確認できるところでは１層である。貼床は検出していない。

柱穴・壁体溝　当住居址からはピットを５基検出している。削平の度合いが大きいため主柱穴が確認できない。

炉・焼土面　炉と推定される中央ピットを１基検出している。炉の平面形は円状を呈する。

遺物の出土状況　後世の削平の被害を受けているためか、出土遺物は乏しく第14図のみである。

ＳＩ－０３出土遺物（第14図）

詳細は観察表に譲る。

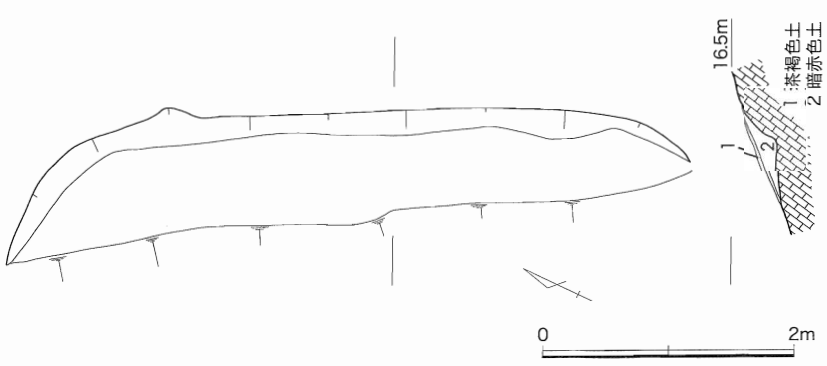
年代　出土遺物が乏しく現状で判断することは困難であるが、床面付近出土遺物の１を重視すれば草田４期に比定されると思われる。

建物跡１（第15図）

建物跡１は後に４号墳となる場所にあったと推定される建物跡で、標高約19m付近に位置している。削平の被害が大きく、ピットのみ検出した。また、調査区東端に位置し、ピットは調査区外に続いているものと推定される。

柱穴　ピットを４基検出している。ピットの配置から建て替えを行ったものと推定される。柱間距離は約2.5m、2.7mである。

炉　炉と推定される中央ピットを１基検出している。平面形は不整形な楕円形状を呈する。削平の被害を大きく受けているため全容は明らかでないが、現状では炉内の埋土は１層である。



第18図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段１実測図（Ｓ＝１：60）

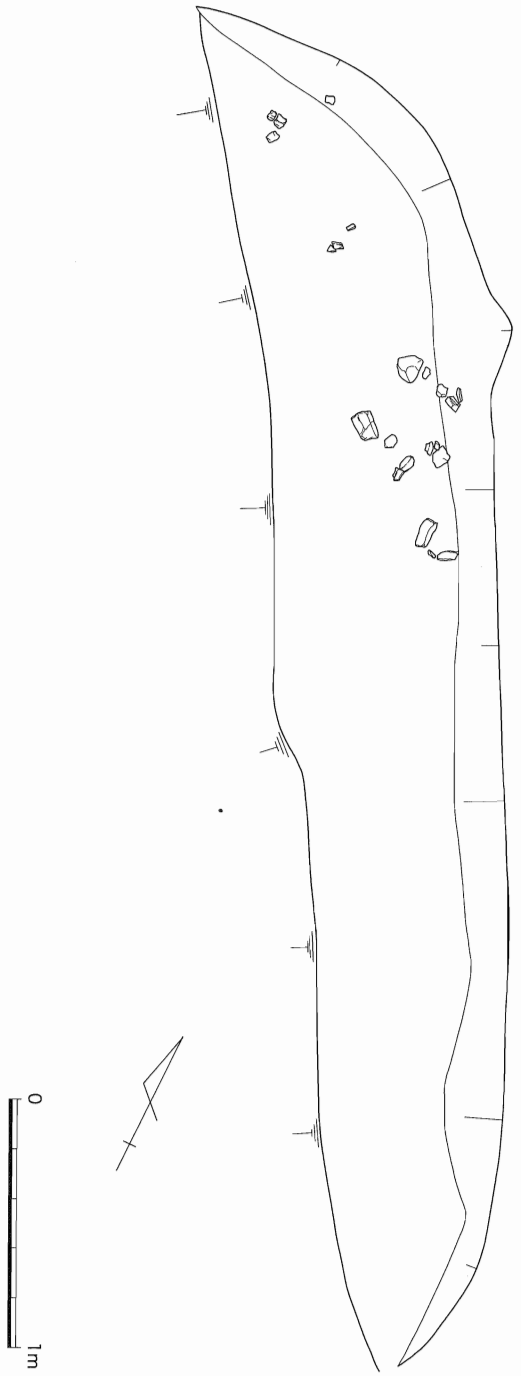
２．土坑の調査

ＳＫ－０１（第16図）

ＳＩ－０２の南東約４ｍのところで検出した。削平の被害を受けているため全容は明らかでない。

規模・形態　ＳＫ－０１の平面形は不整形な楕円形状の形態をなしている。土坑の規模は、上面で0.9m×1.2m、深さ45㎝である。土坑の断面形態は、Ｖ字形状を呈する。

土層　削平の被害を受けているため全容は明らかでないが、現状では土層の埋土は２層に分かれている。遺物は暗褐色土層内より１点出土している。



第19図　屋敷古墳群Ｉ区加工段１遺物出土状況実測図（Ｓ＝１：30）

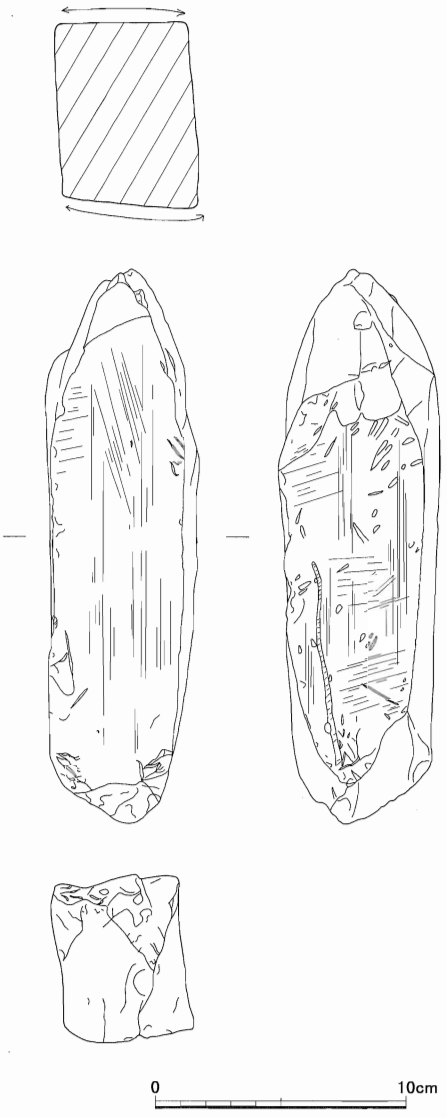
ＳＫ－０１出土遺物（第17図）

詳細は遺物観察表に譲る。

年代　出土遺物は第17図のみであり、年代については特定できない。

３．加工段状遺構

当調査区では加工段状遺構をいくつか



第20図　屋敷古墳群Ｉ区加工段１遺物実測図(1)（Ｓ＝１：３）

検出している。これらは出土遺物から弥生時代集落に伴うものと考えられる。

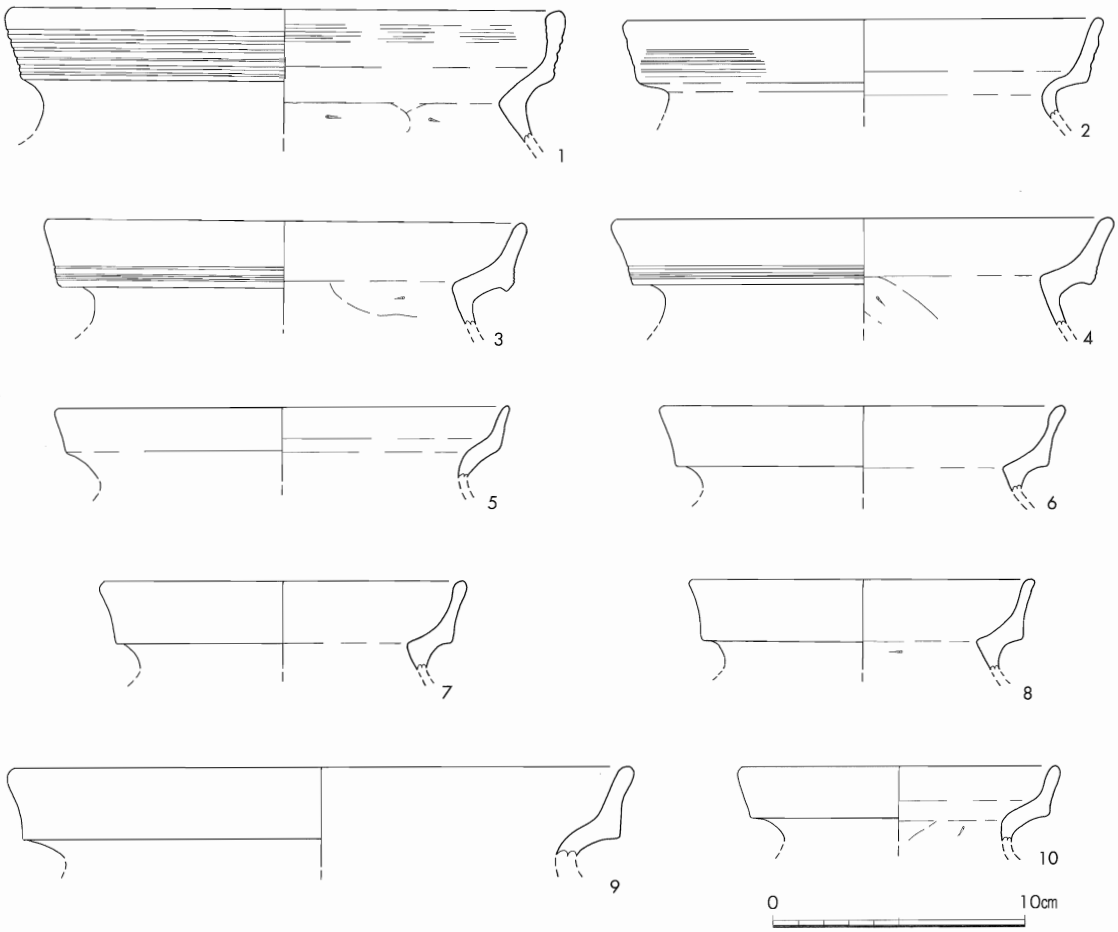
加工段１（第18図）

当調査区西端、ＳＩ－０３の南側６ｍ、標高約16.5mに位置し、同一レベルには加工段状遺構がいくつも隣接している。また、後世の削平により全容は明らかでない。

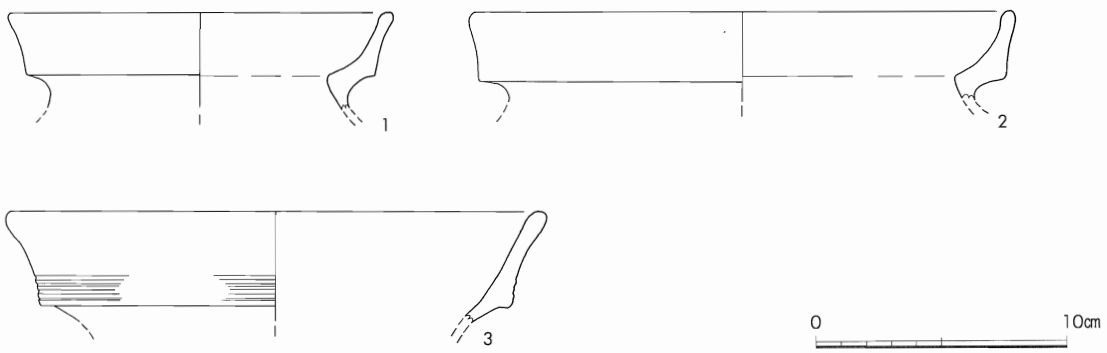
規模・形態　平面形態はコ字形を呈する。ほとんどが後世の削平により流出しており、遺構の性格は不明である。

土層　加工段中の覆土は上から茶褐色土、暗赤色土の順で堆積していて、弥生土器を含んでいる。

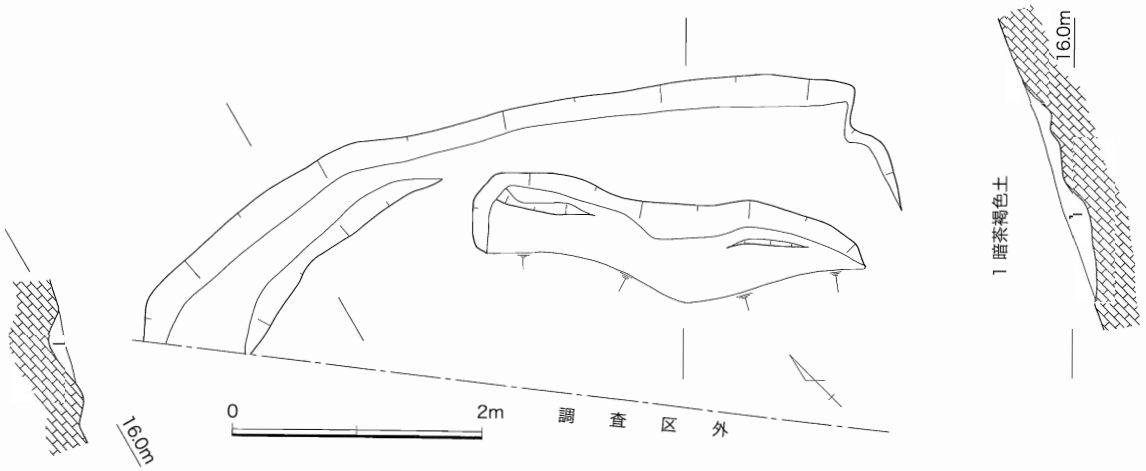
遺物の出土状況（第19図）　当遺跡の加工段の中では最も多くの遺物が出土している。第20図は床



第21図　屋敷古墳群Ｉ区加工段１出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１：３）



第22図　屋敷古墳群Ｉ区加工段１出土遺物実測図(3)（Ｓ＝１：３）



第23図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段２・３実測図（S＝１：60）

面付近出土遺物であり、第21図と第22図は覆土中の出土遺物である。

加工段１出土遺物（第20図～第22図）

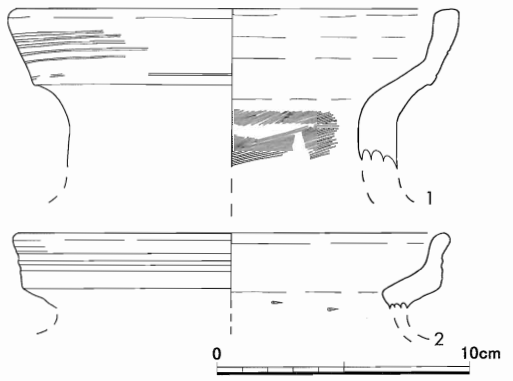
詳細は遺物観察表に譲る。

年代　草田３期に比定されると思われる。

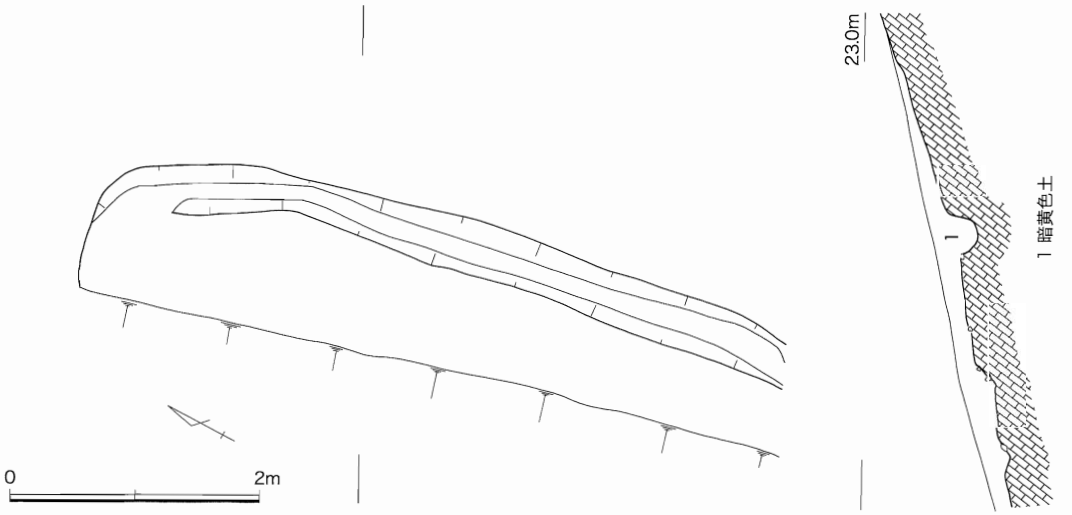
加工段２・３（第23図）

当調査区南西部、加工段１の南側1.2m、標高約16mに位置する加工段状遺構である。後世の削平により全容は明らかでない。

規模・形態　加工段状遺構の壁はやや緩い傾斜をもって掘り込まれ、後世の削平の影響を受けていて全容は明らかでないが、現状では加工段２の壁高は約30㎝、加工段３の壁高は約20㎝である。



第24図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段３出土遺物実測図（S＝１：３）



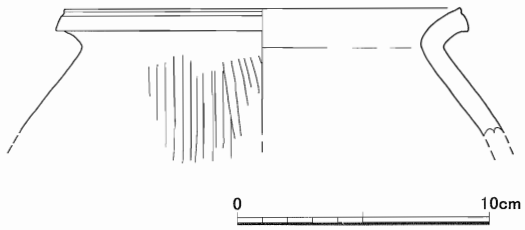
第25図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段４実測図（S＝１：60）

土層　後世の削平を受けているため全容は明らかでないが、現状で加工段２・３の覆土は１層である。

加工段３出土遺物（第24図）

詳細は遺物観察表に譲る。

年代　出土遺物が乏しく、年代については明言できないが、草田２期に比定されると思われる。



第26図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段４出土遺物実測図（S＝１：３）

加工段４（第25図～第26図）

当調査区南端、標高約22mの比較的傾斜が急な斜面上に位置する加工段状遺構である。

規模・形態　加工段４は後世に削平を受けたのか、全容が明らかでない。また、遺構の南側が調査区外にのびており、調査区外に遺構群がのびている可能性がある。現存での規模は、長さ5.7m、幅1.3m、床面と推定される部分は幅約１mである。

土層　前述のとおり全容が明らかでないが、覆土は１層であり遺物を出土した。

柱穴・壁体溝　保存状況が悪く、柱穴らしきピットは全く検出していない。壁体溝は加工段状遺構東側で検出している。

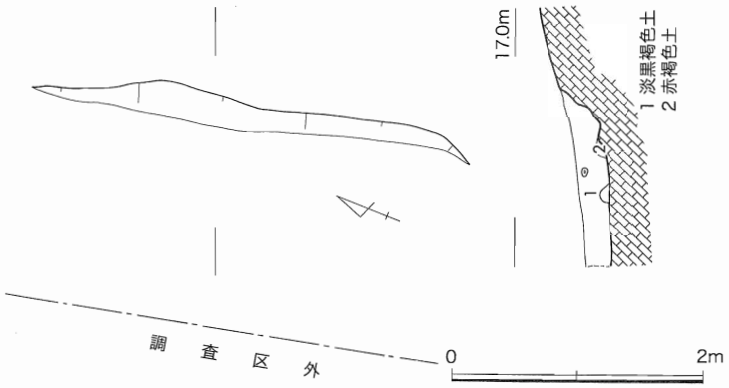
加工段４出土遺物（第26図）

詳細は遺物観察表に譲る。

年代　出土遺物が乏しく、年代については明言できないが、草田１期に比定されると思われる。

加工段５（第27図、第28図）

当調査区西端、ＳＩ－０３のすぐ南側、標高約16.5mに位置する加工段状遺構である。後世の削平により全容は明らかでない。



第27図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段５実測図（S＝１：60）

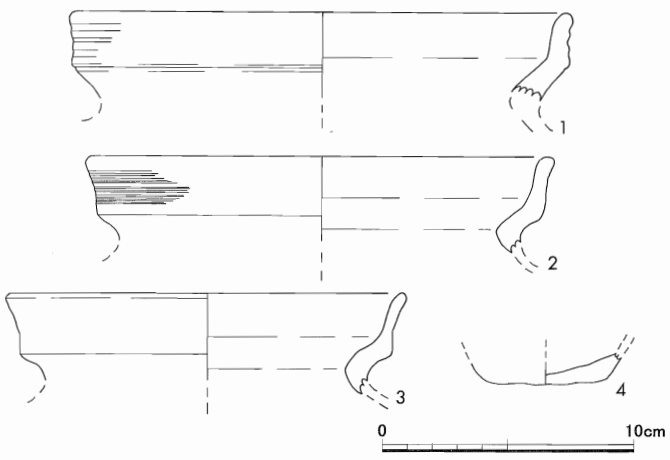
規模・形態　前述のとおり全容は明らかでないが、現状では形態は直線状を呈し、規模は長さ3.6mである。

土層　加工段５の覆土は２層である。覆土中より弥生土器が出土している。

加工段５出土遺物（第28図）

詳細は遺物観察表に譲る。

年代　出土遺物が乏しく現状で判断することは困難であるが、草田２期に比定されると思われる。



第28図　屋敷古墳群Ⅰ区加工段５出土遺物実測図（S＝１：３）

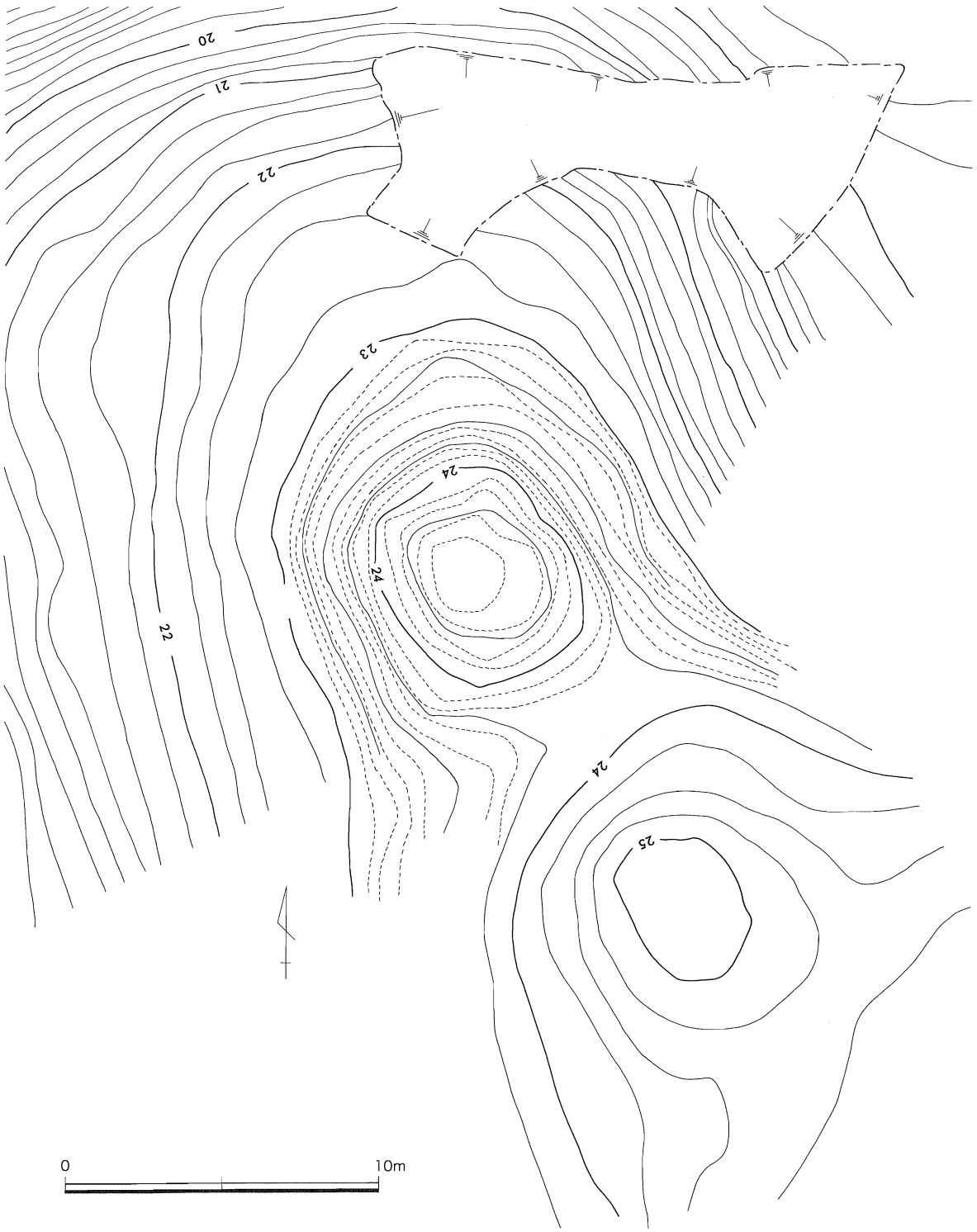
3．古墳群の調査

1号墳

調査区の設定　測量調査を実施したところ、方墳となる可能性が強かったため、各辺の中心と考えられる点を結んだ十字のラインを設定し、４つの区に分けて調査を実施した。

１号墳の南東側は、調査区外に位置するため、発掘調査が実施できず、測量調査のみを実施した。

①　墳丘の概要



第29図　屋敷古墳群Ⅰ区１・２・５号墳調査前地形測量図（S＝１：200）

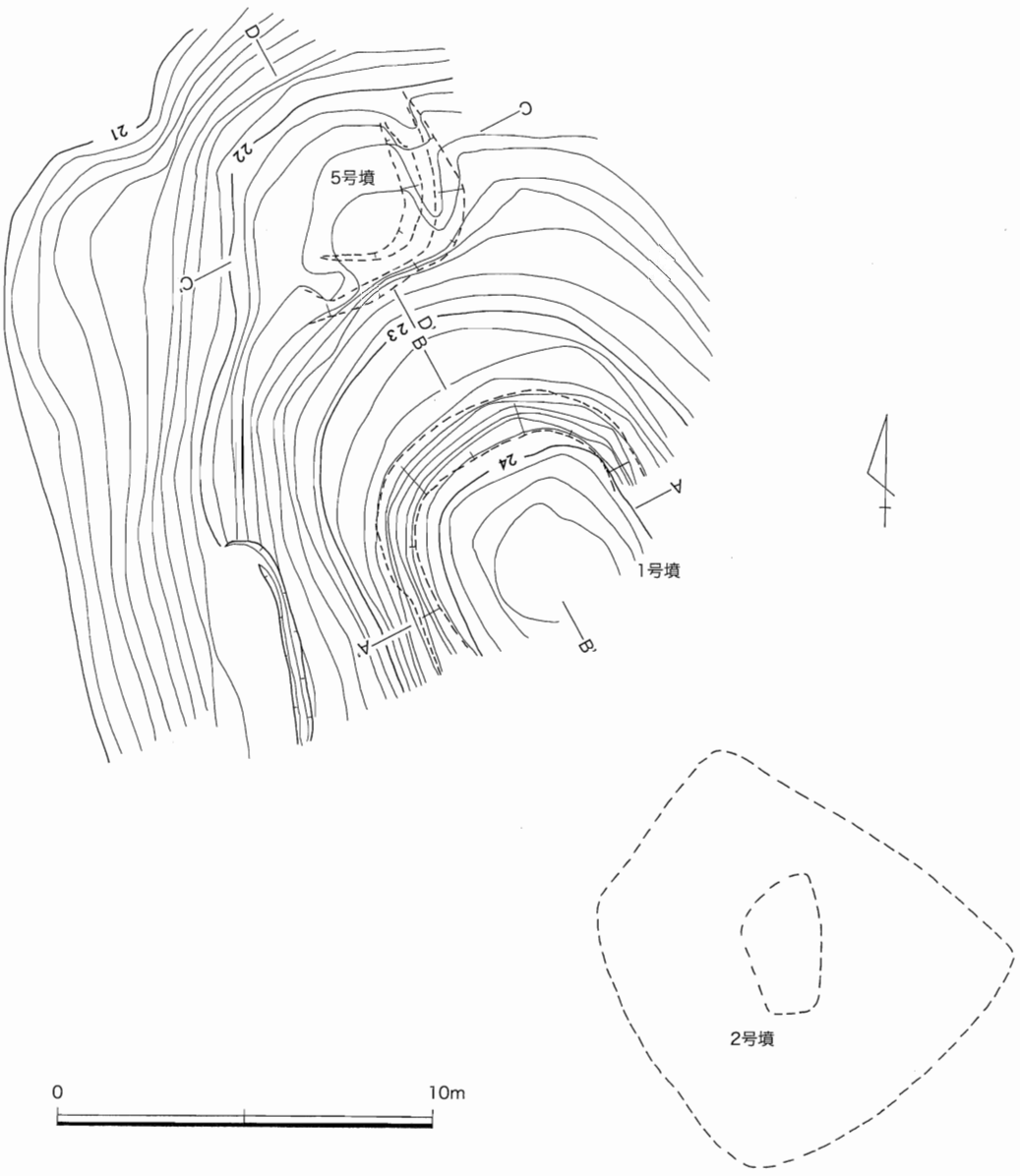
規模・形態（第30図）　小形の方墳である。前述のとおり１号墳の南東側は発掘調査を実施していないため不明だが、調査を実施した範囲では墳丘規模は１辺約８ｍである。

墳丘の高さは１ｍである。１号墳は丘陵尾根先端部に位置し、尾根先端部側（北西側・宍道湖側）は自然の丘陵傾斜を墳丘の一部として取り入れ墳丘を大きく見せようとしたためか墳裾が明瞭でない。宍道湖から見ると実際より大きく見えたことと推定される。調査区内において周溝は検出しなかったが、調査区外に周溝らしき溝が見てとれた。また、墳丘に段築は認められなかった。

②　墳丘の築成（第31図）

墳丘築成の概要　墳丘の築成は基本的に地山を削り出し、その上に削り出し時の残土を盛り上げていく一般的な手法によるものである。盛土の高さは、高いところで約１ｍに達し、墳丘のほぼ全部が盛土によって構成されているといえる。

盛土の種類　墳丘盛土は基本的に周辺の地山を削り出したものを利用したものである。盛土は３層に分かれると考えられる。



第30図　屋敷古墳群Ⅰ区１・２・５号墳調査後地形測量図（Ｓ＝１：200）

③　埴輪

１号墳からはコンテナ約１箱分の埴輪片が出土している。前述のとおり１号墳南東側の周溝と推定される部分は調査していないため、実際にはもっと多くの埴輪が当古墳で使用されていたものと想定される。

④　埋葬施設（第32図）

主体部の配置　前述のとおり１号墳南東側の調査を実施していないため全容は明らかでないが、調査をした範囲内では埋葬施設１基を検出した。墳頂中央部付近に位置し、墓壙の主軸方向はＮ－13°－Ｗである。調査を実施していない部分がありはっきりとしないが、今回検出した埋葬施設は、当古墳の中心主体部であると考えられる。

規模・形態　当主体部は、墳丘盛土面において検出したもので、墓壙は基本的に２段掘りの不整形な台形プランである。現状での規模は、１段目が、長さ1.86m、幅は短辺0.51m、長辺1.14m、深さ９㎝、２段目が、長さ1.47m、幅は短辺0.33m、長辺0.63m、深さ12㎝である。北側の幅が広くなっている。

棺の構造　墓壙の床面はほぼ平坦である。床面には小口板の掘り込み等の痕跡は確認できなかった。北側が若干高くなっている。

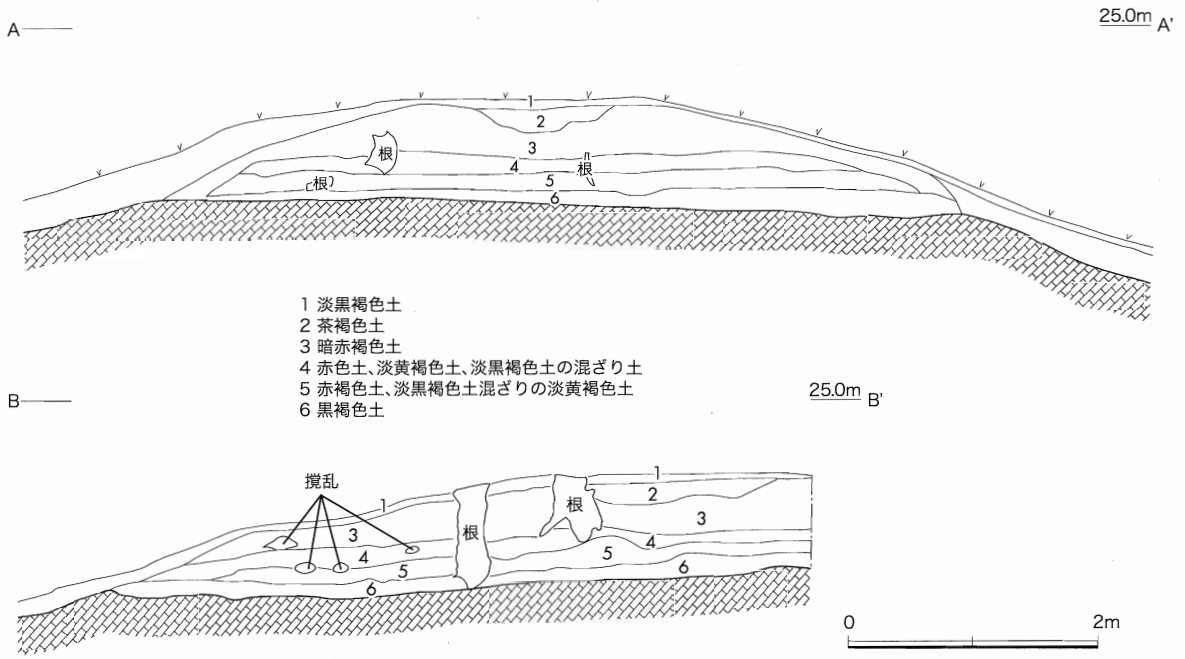
墓壙内で木棺状の痕跡は確認できなかった。このように棺の構造を知りうる手がかりに乏しいが、墓壙の形態からみて箱形状の木棺であったと想定される。北側の墓壙幅が広く、北側の床面が若干高いことから、北頭位の可能性が強い。

遺物の出土状況　墓壙内から土師器と思われる遺物が出土したが、破片が細かく図化できなかった。

年代　年代を判断する遺物等の資料が乏しいため不明である。

２号墳（第29図、第30図）

前述のとおり、２号墳は調査区外に位置していたため、発掘調査は実施していないが、測量調査を実施した。



第31図　屋敷古墳群Ⅰ区１号墳墳丘土層断面図（Ｓ＝１：60）

規模・形態　２号墳は１号墳の南東の尾根上に位置し、小形の方墳である可能性が高いと推定される。

墳丘規模は、発掘調査を実施していないため正確な数値は不明であるが、一辺約10m程度である。墳丘の高さは、約１m前後であると推定される。

年代　発掘調査を実施しておらず年代等を判断する遺物等の資料が乏しいため不明である。

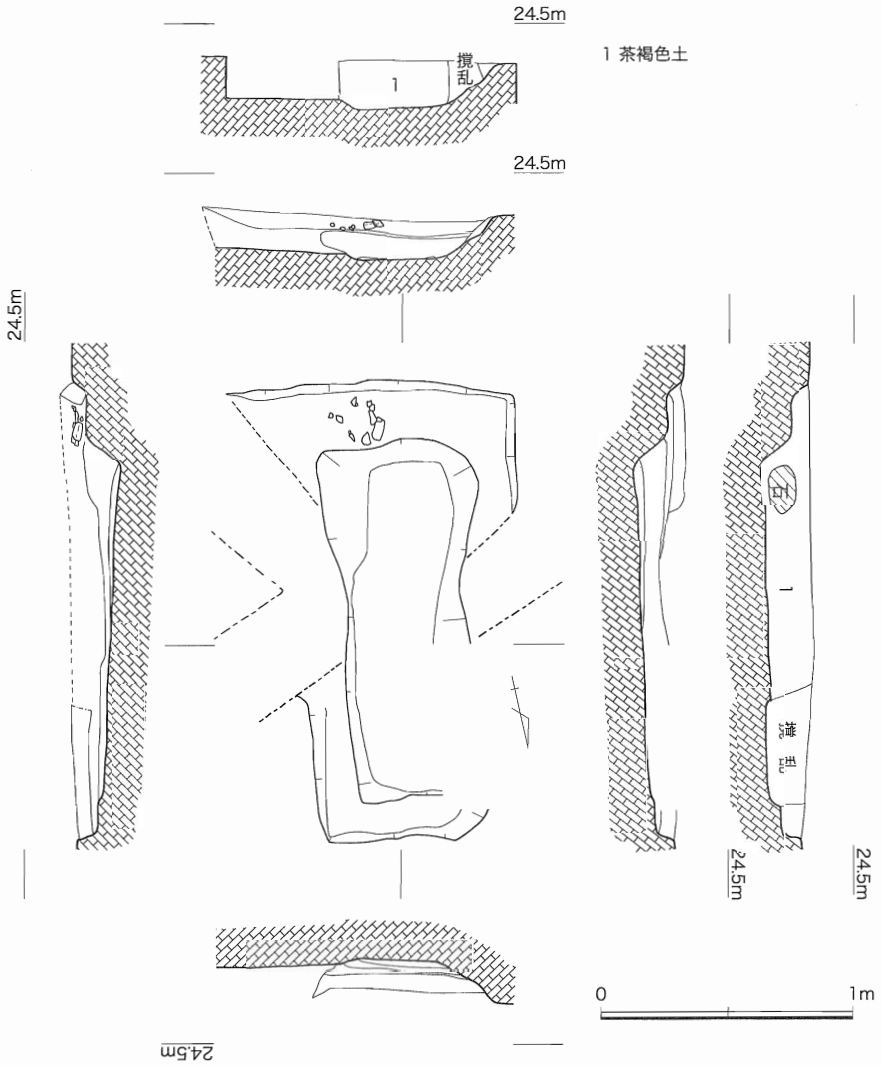
３号墳

①　墳丘の規模（第33図）

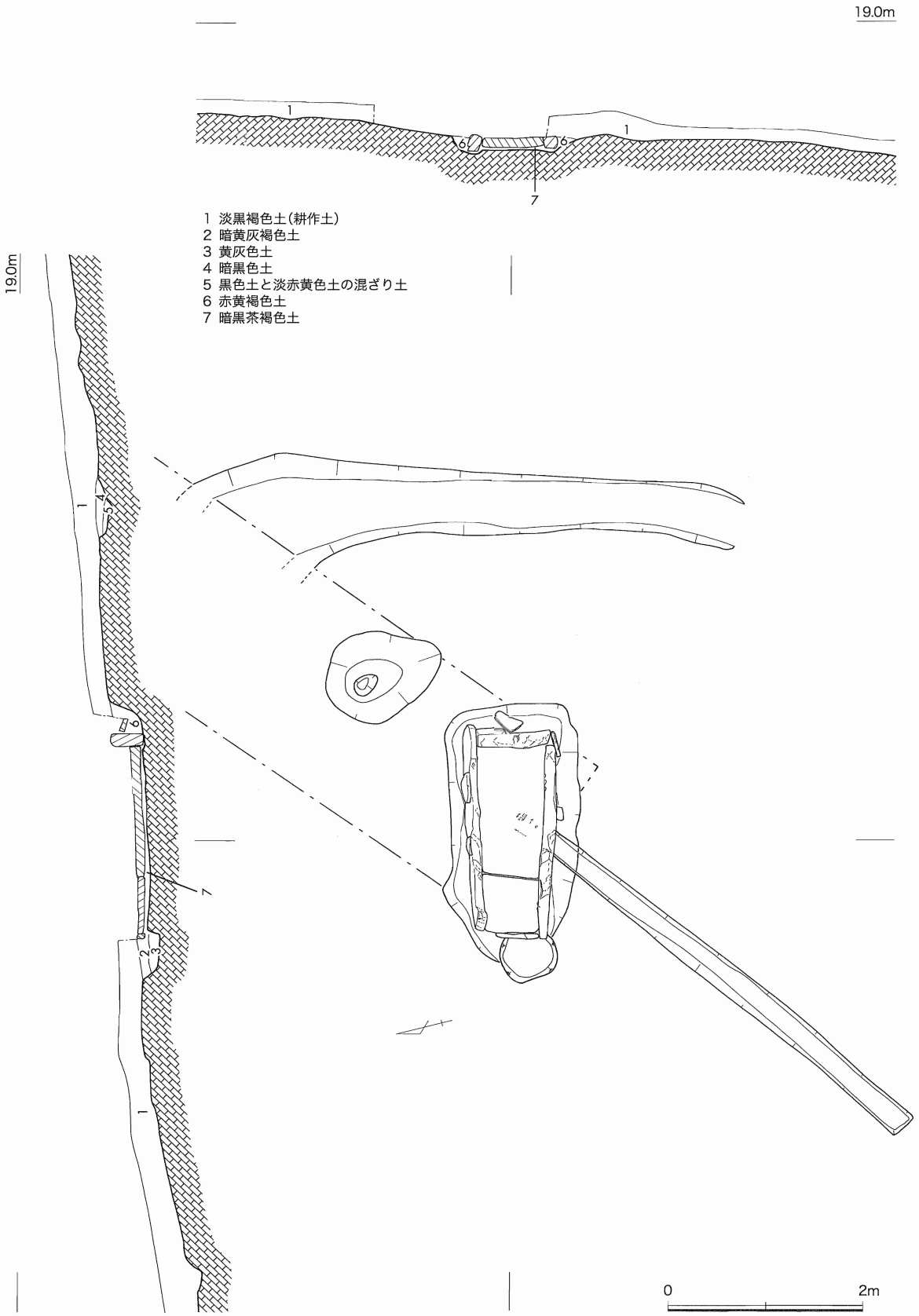
規模・形態　３号墳は４号墳の西側に位置する。後世の削平によりマウンドは検出されなかったものの、埋葬施設（石棺）の残存部と想定される石組状遺構と周溝の残存部と想定される溝を検出したため、３号墳と命名した。

前述のとおり石棺東側に小規模な周溝の残存部を検出したのみで正確な規模は不明である。周溝の残存部はわずかであるが、形態より方墳であると想定される。

周溝　周溝は石棺東側で長さ５m程度を検出したのみである。周溝は幅80㎝で、断面形は浅いU字形を呈する。遺存状況が悪く、土層は１層だった。



第32図　屋敷古墳群Ⅰ区１号墳主体部実測図（S＝１：30）



第33図　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳実測図（S＝１：60)

② 埋葬施設

規模・形態　前述のとおり後世の削平により全容は不明であるが、石棺の基底部と想定される部分を検出した。石棺は後世の耕作土直下の浅い箇所から検出し、石棺の上部は後世の削平により滅失している。

墓壙（第35図）　墓壙は基本的に素掘りで長軸を東西方向にやや斜行する形で位置している。平面プランは不整形な長方形をなし、規模は検出面で長さ2.64m、幅1.29mを計測する。深さについては、削平の被害を受けているため正確な数値は不明だが、現状で0.36mで、地山に掘り込まれている。底面には両小口石や側石を据える際に掘り込んだ掘り方が数箇所確認できた。

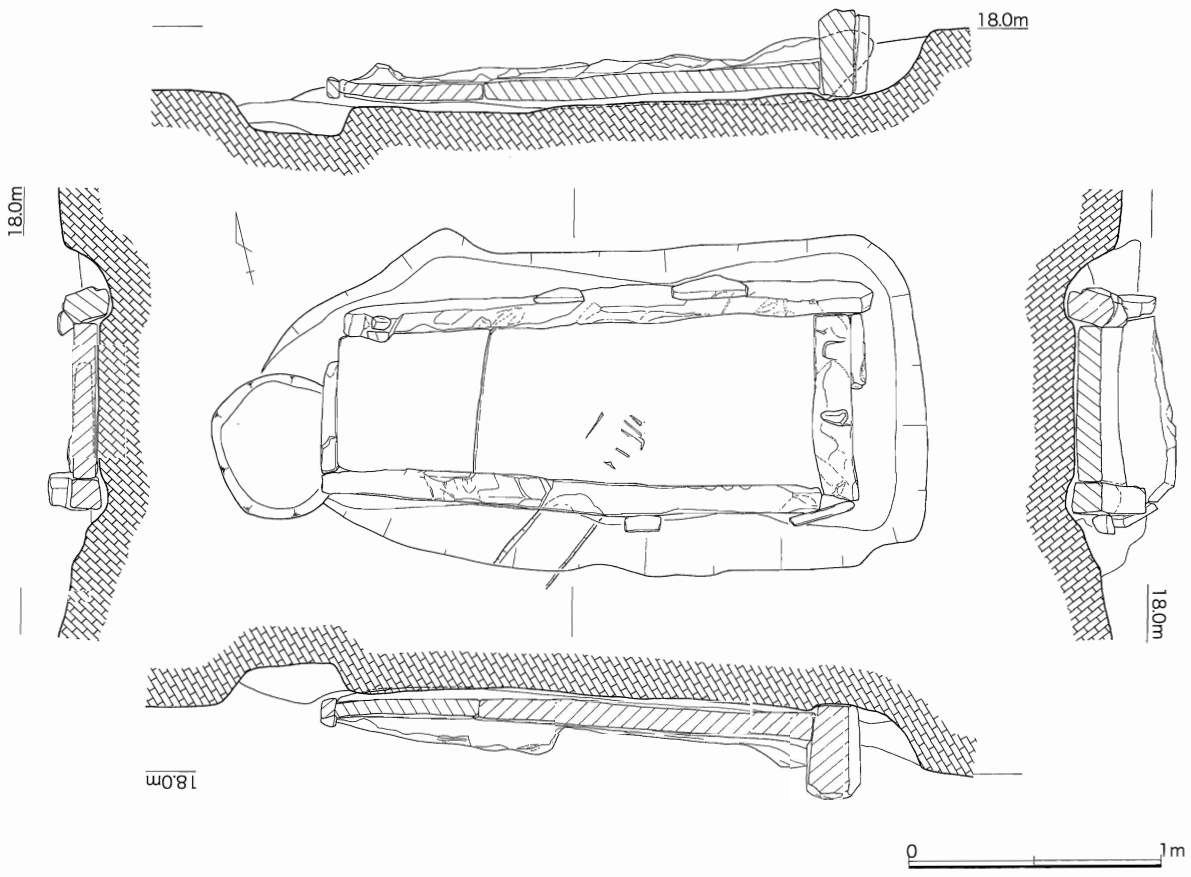
石棺（第34図）

石材　棺材に用いた石材はいわゆる来待石である。

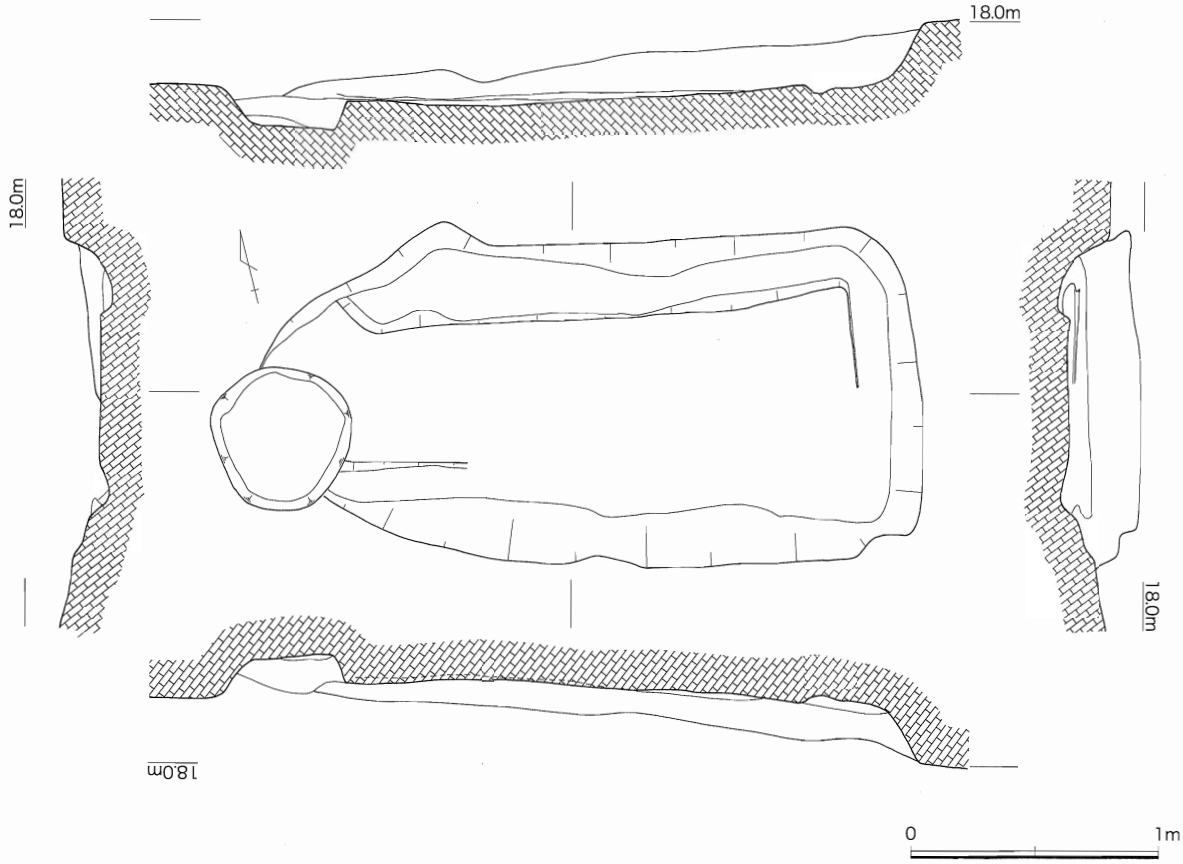
規模　石棺は墓壙のほぼ中央に位置しており、石棺の規模は内法で長さ1.92m、幅54㎝～69㎝で、東側がやや幅広くつくられている。石棺上部は削平されているため高さは不明であるが、現状では底石からの高さは18㎝を計測する。棺の主軸はＮ－76°－Ｗである。

棺身　棺の構造は側石で小口板を挟み込むタイプのものである。両側石に比較的厚みのある石材を用いており、北側、南側、それぞれ２枚ずつ使用している。小口板の東側は厚手の板状の石材を用い、西側は薄手の板状の石材を用いている。両小口に掘り方を設けた後、石材を配置している。

底石　比較的厚みのある大形の板状の石材を２枚敷いている。東から西へ向けて緩やかに傾斜している。このように、床面は東側が高く、また、東側の幅が広いことから、東頭位であったと考えら



第34図　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳石棺実測図（Ｓ＝１：30）



第35図　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳石棺掘方実測図（S＝１：30）

れる。後世の耕作によるのか、底石に鍬痕が残っている。

棺外　東側小口外側および両側石外側に数個の裏込め石材を確認した。

③　遺物（第36図）

周溝内より須恵器片が２点出土した。詳細は遺物観察表に譲る。

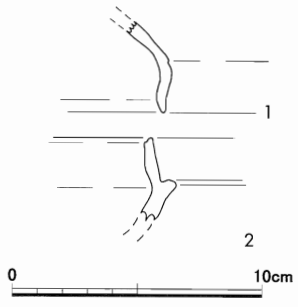
年代　須恵器坏身の口縁部には段をもつため、大谷編年の出雲２期A[3]に比定されると思われる。

４号墳（第37図～第39図）

①　墳丘の概要

規模・形態　３号墳の東側に位置している古墳で、後世の削平の被害を多大に受けており、マウンドは検出されなかったものの、周溝の残存部と想定される溝を検出したため、４号墳と命名した。

残存している周溝が少ないため、墳形や墳丘の正確な規模は不明である。



第36図　屋敷古墳群Ⅰ区３号墳周溝出土遺物実測図（S＝１：３）

周溝　前述のとおり周溝は斜面上方部分のみでプランを検出した。周溝は弧状を呈し、周溝の南側は調査区外に位置する。後世の削平の被害を受けているため全容は不明だが、断面形は緩やかなU字形を呈し、周溝内の覆土は主に２層である。

周溝内の遺物出土状況　須恵器甕片がまとまって（スクリーントーン

の範囲内で）出土している。

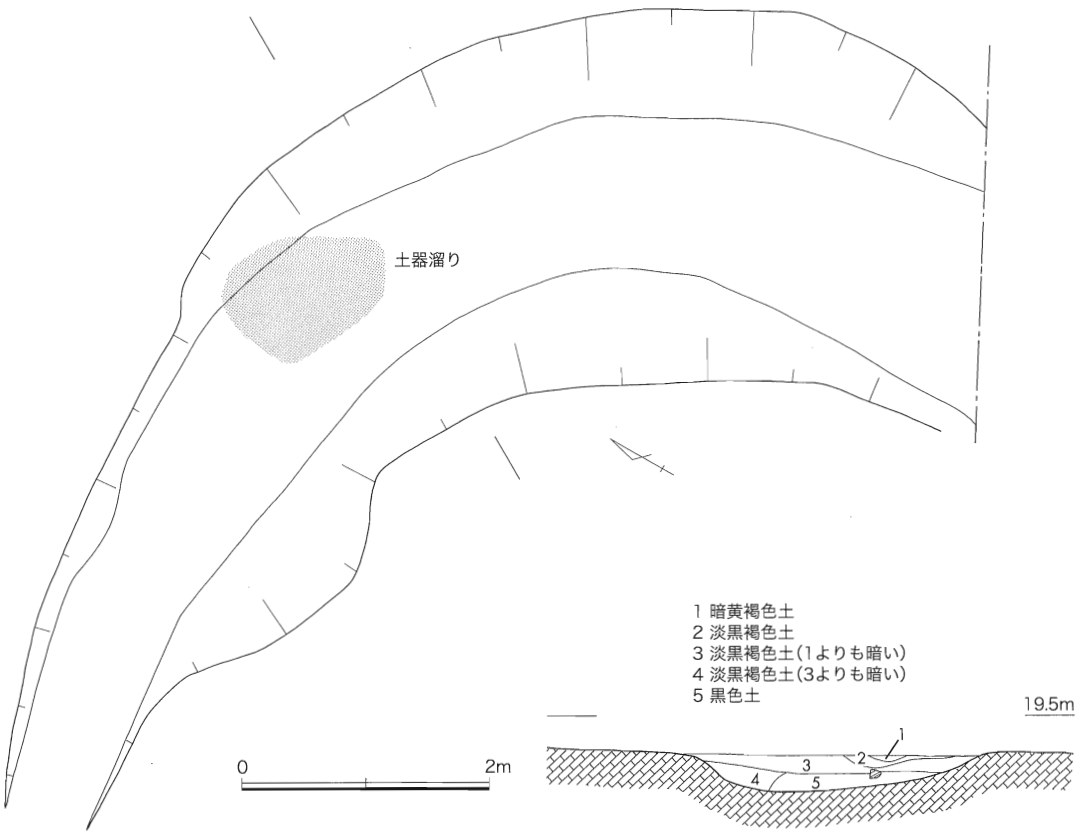
②　埋葬施設

当古墳からは埋葬施設らしきプランは検出していない。

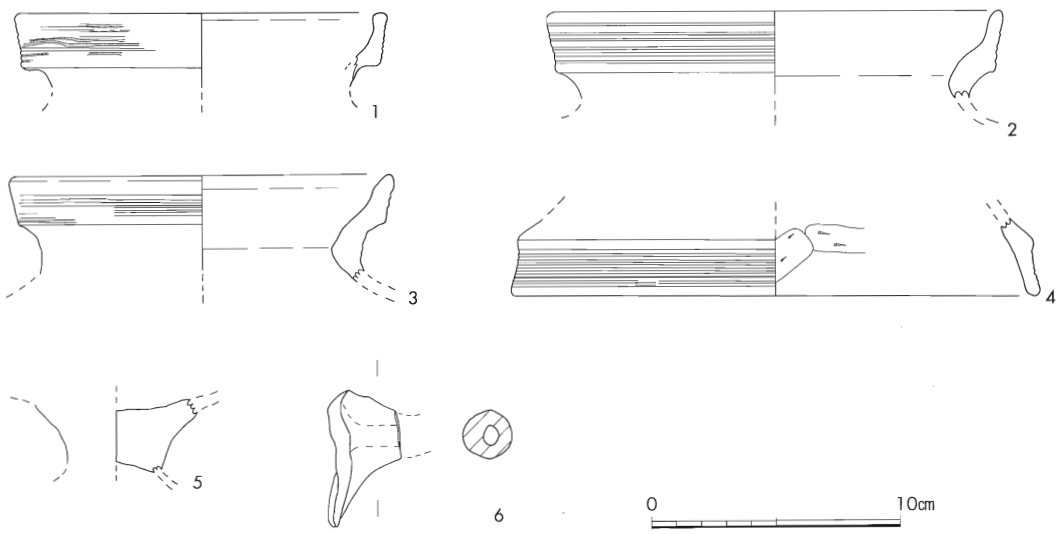
③　出土遺物（第38図、第39図）

詳細は遺物観察表に譲る。

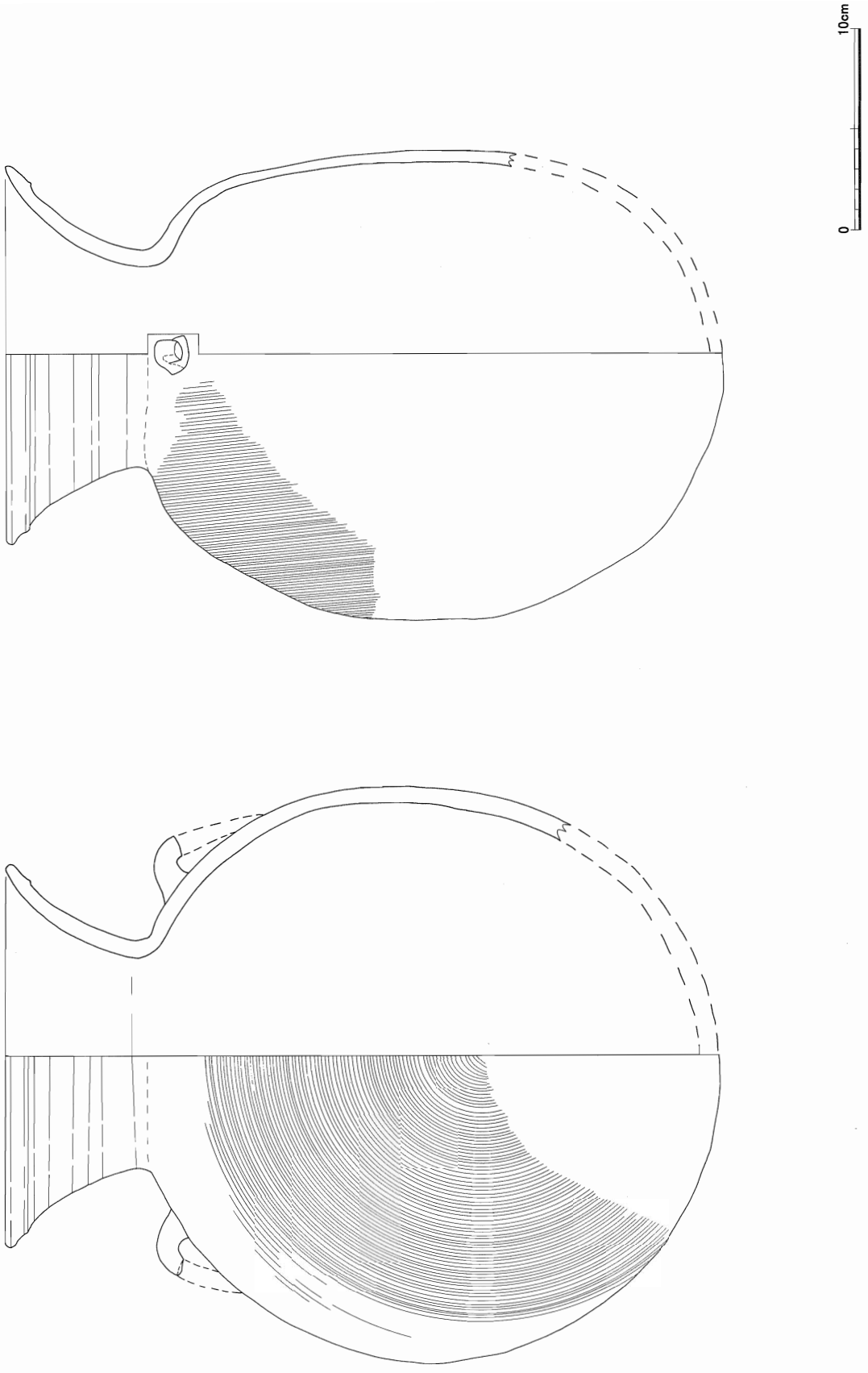
年代　年代を判断する遺物等の資料が乏しいため不明である。



第37図　屋敷古墳群Ⅰ区４号墳実測図（S＝１：60）



第38図　屋敷古墳群Ⅰ区４号墳出土遺物実測図(1)（S＝１：３）



第39図　屋敷古墳群Ⅰ区４号墳出土遺物実測図(2)（S＝1：3）

５号墳（第40図）

①　墳丘の概要

規模・形態　後世の削平の被害を多大に受けており墳丘は確認できなかったが、周溝の残存部と想定される溝を検出したため、５号墳と命名した。１号墳の北西に位置している。残存している周溝の位置・形態より１号墳と同様に小形の方墳であると考えられる。正確な規模については不明である。

周溝　墳丘東側の周溝と想定される部分のプランを検出した。「く」の字形を呈している。後世の削平の被害を受けているため全容は不明だが、断面形はＵ字形を呈する。

周溝内の遺物出土状況　当周溝内からは遺物が検出されなかった。

②　埋葬施設

当古墳からは埋葬施設らしきプランは検出されなかった。

年代　遺物が検出されなかったことから年代等は不明である。

４．畠遺構の調査（第４・41図）

前述のとおり、後世の削平により被害を受けて、畝の部分が削平されている。このため、畝間とみられる溝も当初の規模については不明である。

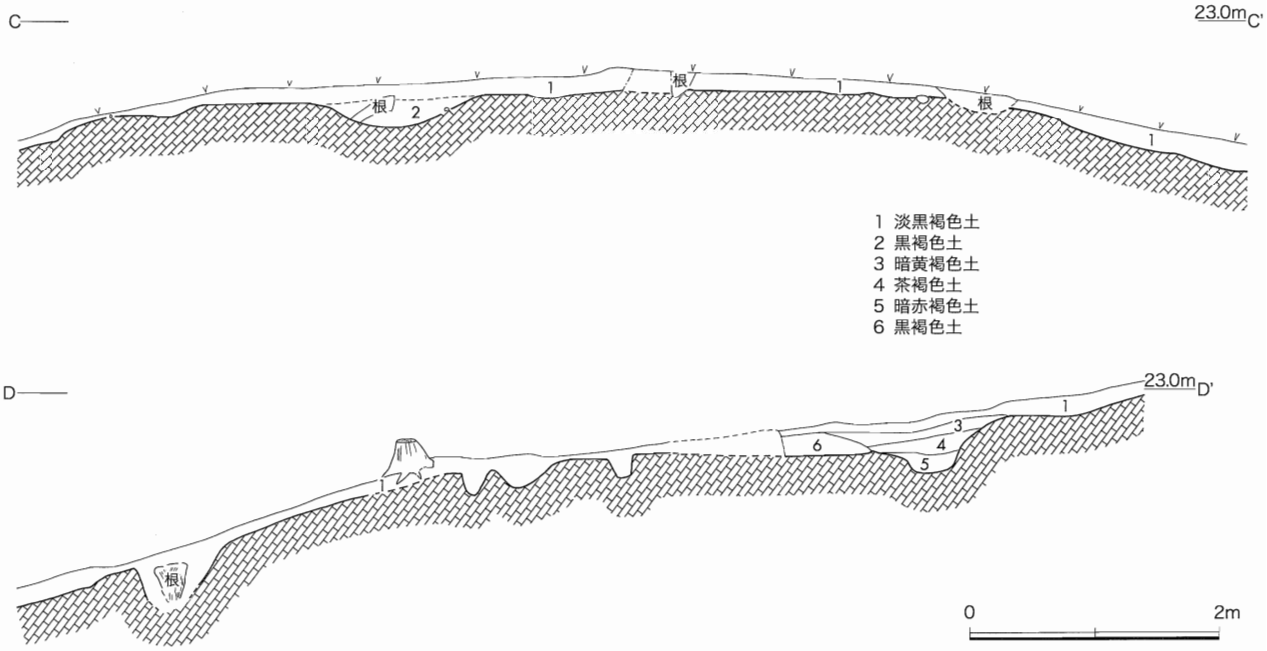
規模・形態　前述のとおり、後世の削平の被害を多大に受けているため全容は不明であるが、現状では畝間と考えられる溝を６本検出している。畝の幅は２箇所で広くなっているが、基本的に約100㎝で、畝間（溝）の幅は約30㎝、長さは約２ｍである。

遺物の出土状況　畝間付近から第44図の須恵器片が出土したが、遺構に伴うとは断定できなかった。

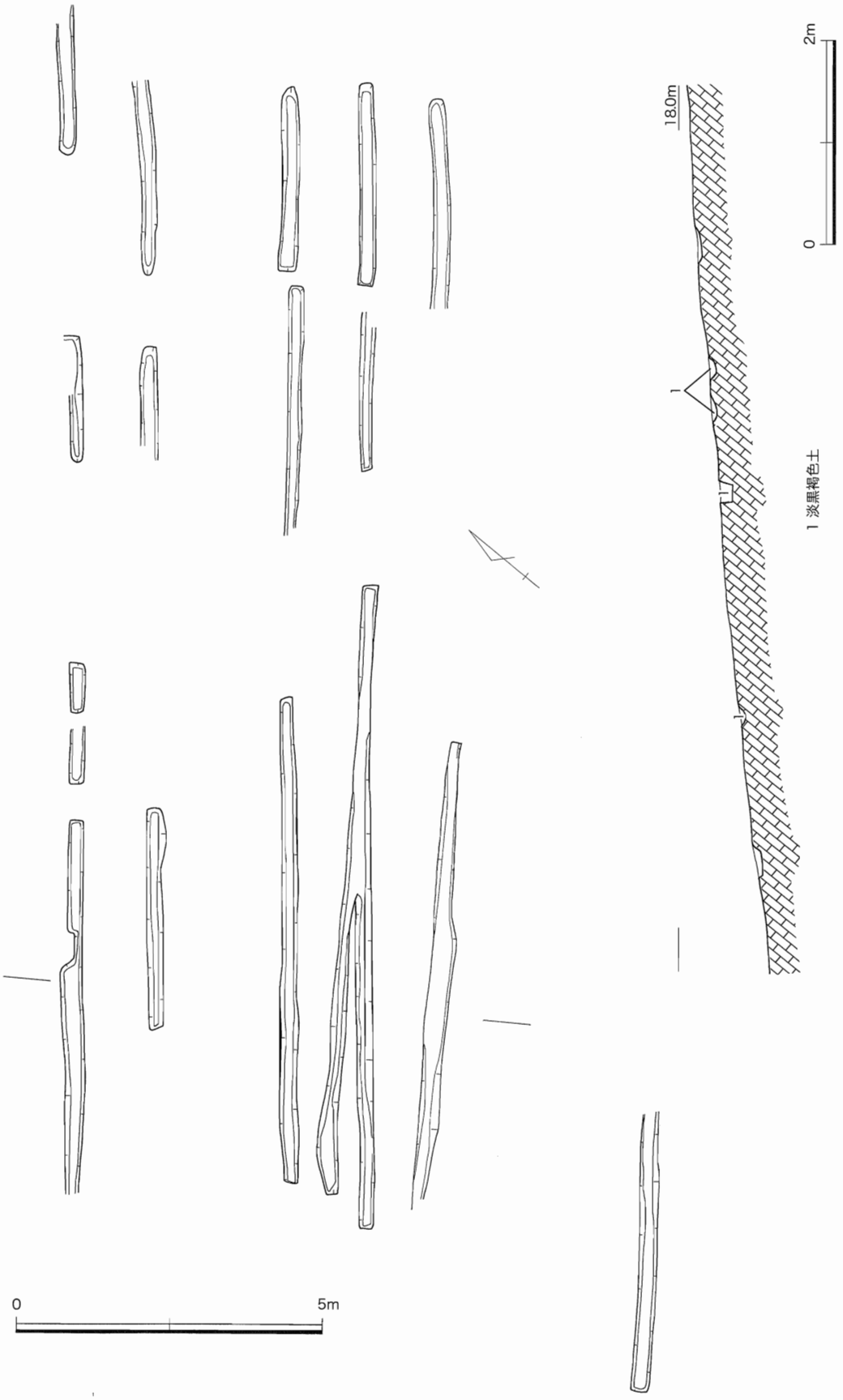
年代　年代を判断する遺物等の資料がないため不明である。

Ｉ区出土鉄器（第42図）

１は３号墳付近から出土した。２から５についてはＳＩ－０１の床面付近から出土した。詳細に



第40図　屋敷古墳群Ｉ区５号墳墳丘土層断面図（Ｓ＝１：60）



第41図　屋敷古墳群Ⅰ区畠畝間実測図（S＝1：100　土層　S＝1：60）

ついては遺物観察表に譲る。

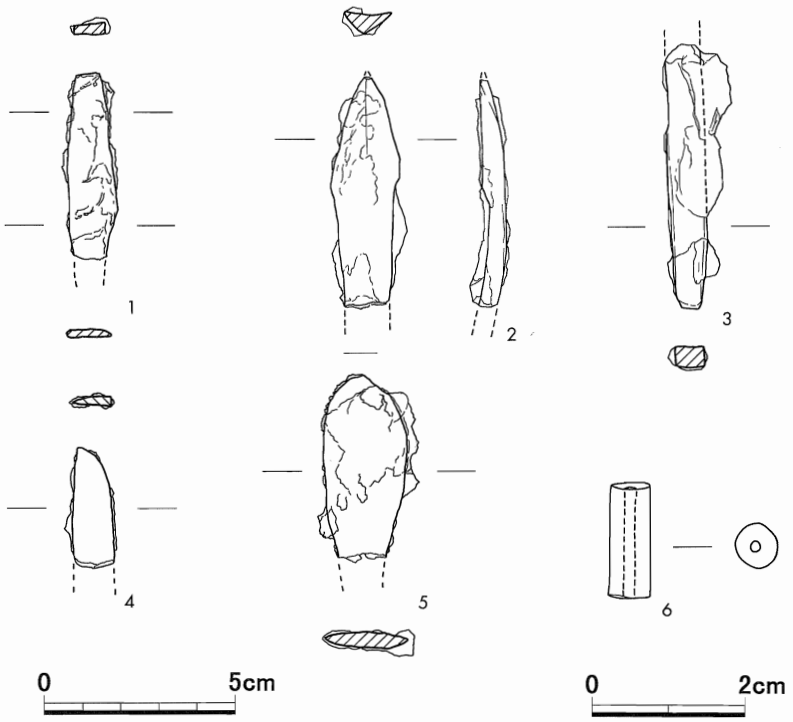
Ⅰ区遺構外出土遺物（第43図～第44図）

詳細については遺物観察表に譲る。

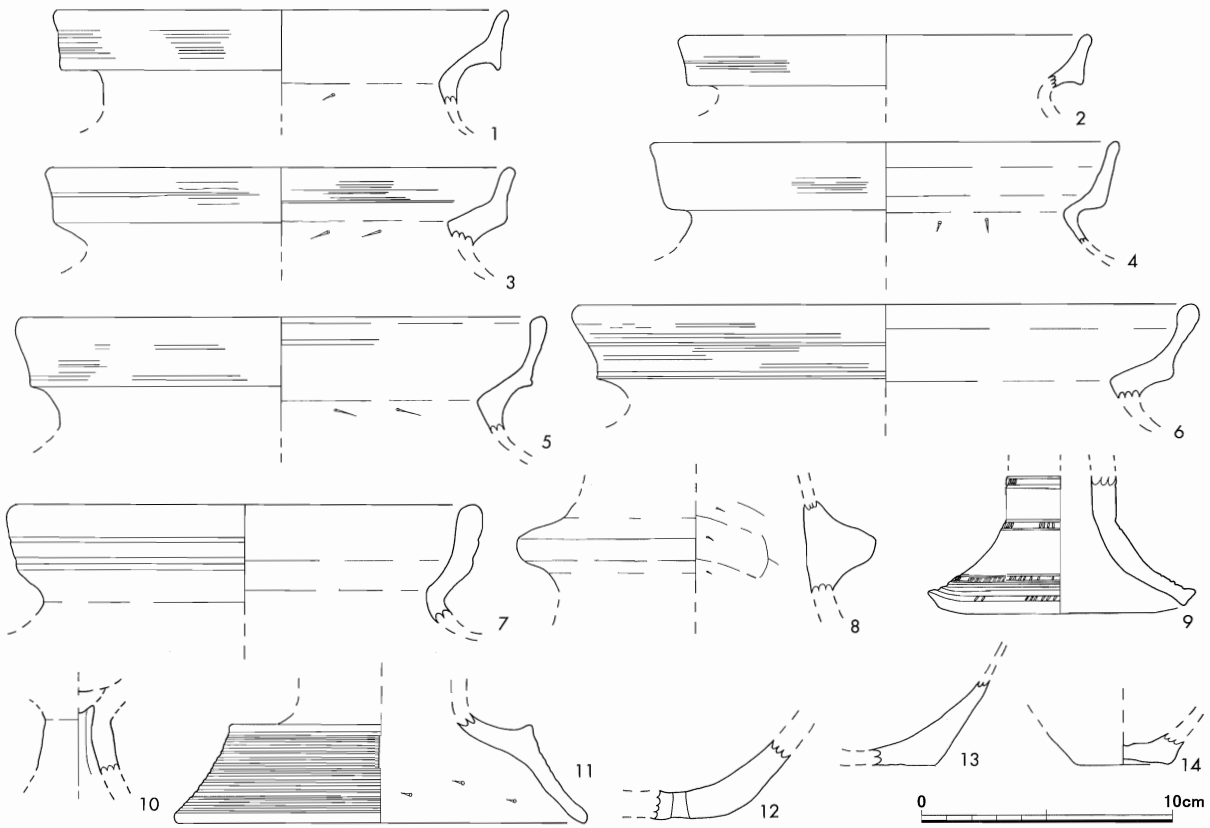
5．Ⅰ区のまとめ

検出された遺構・遺物を時期ごとに概観してまとめとしたい。

弥生時代の遺構としては、竪穴住居跡３棟、加工段４基が検出された。隣接する北ヶ市遺跡とあわせて弥生時代後期に集落が形成されていたものと考えられる。後世の削平により断定はできないが、低丘陵裾付近で斜面の傾斜も緩いにもかかわらず外周溝をもつ竪穴住居跡が北ヶ市遺跡も合わせると３棟にもなる（５棟のうち）。平面プランは隅丸方形である。また、鉄製品が住居址床面付近から４点出土し、甑形土器、石錘も



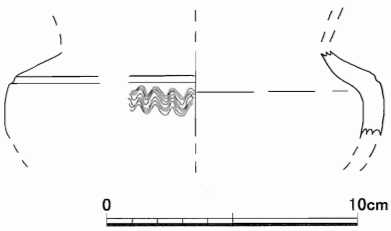
第42図　屋敷古墳群Ⅰ区出土鉄器・管玉実測図
（1～5　S＝1：2　　6　S＝1：1）



第43図　屋敷古墳群Ⅰ区遺構外出土遺物実測図(1)（S＝1：3）

出土し、バラエティに富んだ遺物を検出できた。遺物の年代としては、草田１期から草田４期（後期前半から後半）までの遺物を確認できたが、中心は草田２期と３期のものである。

古墳時代の遺構としては、古墳を４基検出した。後世の削平の被害もあり遺存状態が悪く遺物も少なかったため、詳細な年代や性格を把握することができなかった。しかし、３号墳の石棺は、ほとんど底部部分しか残っていなかったが、内法の長さが1.92mと比較的大きかった。



第44図　屋敷古墳群Ｉ区
遺構外出土遺物実測図(2)
（Ｓ＝１：３）

表２　屋敷古墳群Ⅰ区遺物観察表

挿図番号	種類 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・焼成	備考
8	土師器 甑	5.6			外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ナデ	取り上げNo.４ 980703	1～2mmの砂粒を含む　淡黄灰色 良好	内面把手上方部に指頭圧痕
9-1	弥生 甕				外面：ナデ　内面：ナデ	取上No.６ 980703	1mm程度の砂粒を含む　外面：淡黄褐色 内面：淡灰褐色　良好	他に同一個体と見られる土器片１点
2	弥生 甕	20.4			外面：ヨコナデ　内面：ナデ？　（磨滅により不明確）	取上No.25 980706	1～3mm程度の砂粒を含む　淡黄橙色 良好	口縁部残存率1/11
3	〃	22.7			外面：ヨコナデ 内面：ナデ	床面直上　取上No.２６　980707	1～3mm程度の砂粒を含む　外面：淡茶灰色　内面：淡黄橙色　良好	口縁部残存率1/19
4	〃	17.1			外面：磨滅 内面：頸部以下ヘラケズリ	２区１層　PNo.253ｏｒ258 980625	1mm前後の砂粒を含む　淡黄白色 良好	口縁部残存率1/５
5	〃	17.0			外面：磨滅　内面：ナデ	中央ピット１層 980714	1mm程度の砂粒を含む　外面：褐色　内面：淡褐色　良好	擬凹線文５本確認
6	〃	23.3			外面：ヨコナデ(一部縦方向ナデ) 内面：ナデ、頸部以下磨滅	取上No.９　980703 取上No.2　0980706	1～2mm前後の砂粒を含む　淡黄褐色(外面若干赤味)良好	口縁部残存率1/９ 擬凹線文４本
7	〃	21.6			外面：磨滅のため不明 内面：ナデ？、頸部以下ヘラケズリ	１区１層　PNo.249　980625	1mm以下の砂粒を含む　黄褐色 良好	口縁部残存率1/10
8	土師器 坩or壺	21.6			外面：磨滅のため不明 内面：磨滅、頸部以下ヘラケズリ？	PitNo.４底直上 980713	1mm前後の砂粒を含む　外面：褐色　内面：淡黒色　良好	口縁部残存率1/３
9	土師器 高坏				外面：磨滅 内面：ナデ？(磨滅)	取上No.23、24 980713	1mm程度の砂粒を含む　淡橙茶色 良好	坏部中心に小孔
10	土師器 器台	12.7			外面：ヨコナデ、 内面：ヘラケズリ	取上No.５ 980703	1～3mm程度の砂粒を含む　淡黄橙色 (磨滅部分淡黄褐色)　良好	擬凹線文６本確認
10-1	弥生？ 甕				外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	１層　PNo.2?5 980625	1mm程度の白砂粒を含む　外面：淡黄灰色　内面：黒褐色　良好	外面に貝殻腹縁による刺突文
2	弥生 甕				外面：ヨコナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	２区１層 980624	1～2mm程度の砂粒を含む　外面：淡黄茶色　内面：淡橙褐色　良好	
3	〃	20.6			〃	底　PNo.234 980625	1～2mm程度の砂粒を含む　淡褐色(磨滅箇所淡灰色)　良好	口縁部残存率1/11
4	〃	16.9			外面：ヨコナデ　内面：ヨコナデ、ナデ、ヘラケズリ	第２ベルト１層PNo.355　980826	1～2mm程度の砂粒を含む 淡褐色(内面一部淡黄褐色)　良好	口縁部残存率1/６
5	〃	13.5			外面：ナデ、ヨコナデ 内面：ナデ	２区１層　PNo.248　980624	1mm前後の砂粒を若干含む　淡黄褐色(外面一部橙色)　良好	口縁部残存率1/６
6	〃	19.0			外面：ヨコナデ 内面：ナデ	１層　PNo.221 980625	1～2mm弱の砂粒を若干含む　暗褐色(内面一部淡黄褐色)　良好	口縁部残存率1/６
7	〃	17.6			磨滅のため調整不明	１層　PNo.180 980625	1～2mm程度の砂粒を含む　淡褐色(磨滅部分淡黄褐色)　良好	口縁部残存率1/７
8	〃	22.4			外面：ナデ、凹線をナデ消？ヨコナデ　内面：ナデ	１層　PNo.237 980625	1mm前後の砂粒を若干含む　淡黄褐色 良好	口縁部残存率1/10
9	弥生 高坏				外面：ナデ　内面：ナデ	４区１層　PNo.2??　980625	1mm弱の砂粒を若干含む　明茶褐色　良好	
10	弥生 底部			2.3	外面：ナデ　内面：磨滅	４区１層　PNo.230・239 980625	1～3mm程度の砂粒を含む　外面：淡黄褐色　内面：淡灰色　良好	
11	〃			2.8	磨滅のため不明	１層　PNo.183 980611	1～2mm程度の砂粒を含む　外面：橙褐色 内面：淡赤褐色　良好	底部残存率1/3
12	〃				外面：ナデ　内面：ナデ	埋土中	1～2mm程度の砂粒を含む　外面：赤褐色 内面：橙褐色　良好	底部残存率1/4
13	土錘	長3.4	幅3.9	高4.0		３区１層　PNo.252　980625	1～2mm程度の砂粒を含む　明黄褐色　良好	
12	弥生 甕	20.5			外面：ヨコナデ 内面：磨滅、ヘラケズリ	取り上げNo.１	1mm前後の砂粒を含む　淡橙灰色　良好	口縁部残存率1/9
14-1	〃	17.0			外面：ナデ？(相当磨滅) 内面：磨滅により不明	床面直上　PNo.286　980801	1～3mm程度の砂粒を含む　外面：淡黒褐色　内面：淡橙褐色　良好	口縁部残存率1/14
2	〃	16.1			外面：一部ナデ(磨滅部多い) 内面：ナデ	１層　PNo.2?8 980724	1～2mm程度の白砂粒を含む　外面：暗褐色　内面：淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/11
3	〃	17.3			内・外面：磨滅、ナデ	１層　PNo.280 980724	1～2mm弱の砂粒を含む　外面：淡黄褐色 内面：淡黄白色　良好	口縁部残存率1/6～1/7
4	〃	17.8			外面：ヨコナデ、磨滅 内面：ナデ、ヘラケズリ	１層　PNo.257・2??　980724	2mm前後の砂粒を含む　淡黄褐色　良好	口縁部残存率2/5 同一個体片２点
5	〃	18.9			内・外面：ナデ？	１層　PNo.283 980723	1～2mm程度の白砂粒を含む　外面：淡黄褐色　内面：淡橙褐色　良好	口縁部残存率1/12
6	土師器 〃	14.8			内・外面：ナデ	１層　PNo.282 980723	1～3mm程度の砂粒を含む　外面：淡橙褐色　内面：淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/3～1/4
17	土師器 甕？				外面：磨滅　内面：ヘラケズリ？(磨滅のため不明)	１層　980729	1～2mm程度の砂粒を含む　外面：淡黄茶色　内面：淡黄褐色　良好	肩部の残存率1/2
21-1	弥生 甕	21.7			外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	取り上げNo.８ 980622	1mm程度の白砂粒を含む　淡黄茶色　良好	口縁部残存率1/6
2	〃	18.7			内・外面：ナデ	取り上げNo.14 980622	1～3mm程度の砂粒を含む　淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/7
3	〃	18.8			外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	取り上げNo.３ 980622	1～2mm程度の白砂粒を含む　外面：淡橙褐色　内面：淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/4
4	〃	19.6			〃	取り上げNo.12 980622	胎土不明　淡橙褐色　良好	口縁部残存率1/9
5	〃	17.8			内・外面：ナデ	取り上げNo.11 980622	1～2mm程度の砂粒を含む　淡橙黄色　良好	口縁部残存率1/18
6	〃	15.8			〃	取り上げNo.1 980622	1～3mmの白砂粒を含む　外面：淡橙茶色 内面：淡褐色　良好	口縁部残存率1/9
7	〃	14.2			〃	取り上げNo.5 980622	1～3mmの白砂粒を含む　外面：淡橙茶色 内面：淡黄白色　良好	口縁部残存率1/7
8	〃	13.4			外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	取り上げNo.6 980622	1～4mmの砂粒を含む　淡褐色　良好	口縁部残存率1/11
9	〃	24.4			内・外面：ナデ	取上No.2　PNo.168・169 980622	1～2mm程度の砂粒を含む　外面：淡黄白色　内面：淡橙茶色　良好	口縁部残存率1/10

挿図番号	種類 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・焼成	備考
21-10	弥生 甕	12.4			外面：ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	取り上げNo.13 980622	1mm程度の砂粒を含む(2mm大砂粒１ヶ) 淡黄白色　良好	口縁部残存率1/12
22-1	〃	15.0			内・外面：ナデ	２区１層PNo.169 980528	1～2mm程度の砂粒を含む　淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/9 外面に「焦げ」付着
2	〃	21.3			〃	２区１層PNo.170 980528	1～2mm程度の砂粒を含む　淡橙褐色　良好	口縁部残存率1/8
3	弥生 器台	21.1			外面：ナデ(磨滅あり) 内面：ナデ	２区１層980528 980618	1～2mm程度の砂粒を含む　淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/10 擬凹線文４本
24-1	弥生 壺	17.4			外面：ナデ 内面：ヨコナデ、ハケメ	１層PNo.210　980623	1mm前後の砂粒を含む　外面：橙茶色 内面：淡黄褐色・茶褐色　良好	口縁部残存率1/4 擬凹線文６本
2	弥生 甕	17.1			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	１層PNo.290　980803	1～5mm程度の砂粒を含む　暗茶褐色　良好	口縁部残存率1/4 擬凹線文３本
26	〃	15.7			外面：ヨコナデ、粗いハケメ 内面：ナデ	980622	1～3mm程度の砂粒を含む　外面：淡黄茶色　内面：淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/13
28-1	〃	19.6			内・外面：ヨコナデ	PNo.284　980729	1～2mm程度の砂粒を含む　外面：暗褐色 内面：暗橙褐色　良好	口縁部残存率1/9 同一個体１点あり
2	〃	18.1			内・外面：ナデか	１層　980728	1～2mm程度の砂粒を含む　淡褐色　良好	口縁部残存率1/7
3	〃	15.5			〃	１層　980723	1～2mm前後の砂粒を含む　淡茶褐色　良好	口縁部残存率1/5
4	弥生 底部				〃	１層　980722	1～2mm程度の砂粒を含む　外面：淡橙褐色　内面：淡黄褐色　良好	底部残存率2/3
36-1	須恵器 坏蓋				内・外面：ナデ	SE区　１層　980528	1mm弱の砂粒を含む　淡黄灰色　良好	
2	須恵器 坏身				〃		1mm位の砂粒を含む　青灰色　良好	残存率３/10
38-1	弥生 甕	14.6			内・外面：ヨコナデ	３層　PNo.193 980615	1～3mm前後の砂粒を含む　外面：淡橙茶色　内面：淡橙褐色　良好	口縁部残存率1/8 擬凹線文８本
2	〃	17.9			外面：ヨコナデ　内面：ナデ	１層　980612	1～2mm程度の砂粒を含む　淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/8 擬凹線文６本
3	〃	15.1			外面：ヨコナデ　内面：主にヨコナデ、ヘラケズリ？	３層　PNo.190 980612	1～2mm前後の砂粒を含む　外面：淡茶褐色　内面：淡橙褐色　良好	口縁部残存率1/7
4	弥生 器台？		20.9		外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	３層　PNo.195 980615	1～2mm程度の砂粒を含む　外面：淡黄褐色　内面：淡黄茶色　良好	脚部残存率1/14
5	弥生 高坏？				内・外面：ナデ？(磨滅のため不明確)	１層　PNo.85 980729	1～2mm前後の砂粒を含む　淡褐色　良好	
6	弥生 注口						1～2mm前後の砂粒を含む　淡黄褐色　良好	
39	須恵器 提瓶	18.7		35.3	外面：回転ナデ、ナデ、カキメ 内面：ナデ	NE　PNo.154　980515 ほか	1mm程度の砂粒を含む　外面：淡灰色 内面：淡青灰色　良好	環状の把手(破損)
43-1	弥生 甕	17.9			外面：ヨコナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	３号墳SW２層　PNo.33or38　980424	1～２mm程度の砂粒を含む　淡橙褐色～淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/5 擬凹線文４本
2	〃	16.0			内・外面：ヨコナデ	３号墳SW２層　PNo.40　980424	１mm弱の砂粒を含む　黄褐色　良好	口縁部残存率1/10 擬凹線文３本
3	〃	18.3			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	３号墳NE区１層　PNo.164　980527	1mm前後の砂粒を含む　淡赤褐色　良好	口縁部残存率1/14
4	〃	18.3			外面：磨滅のため不明確 内面：ナデ？、ヘラケズリ	３号墳SW２層　PNo.69　980424	1～２mm程度の砂粒を多く含む　暗黄褐色　良好	口縁部残存率1/6 擬凹線文３本
5	〃	20.7			外面：ヨコナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	３号墳SW耕作土　PNo.26　980421	1mm前後の砂粒を含む　淡橙褐色　良好	口縁部残存率1/6 擬凹線文４本
6	〃	24.4			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、頸部以下磨滅	３号墳SW端　表土１層　980421	1mm程度の砂粒を含む　褐色　良好	口縁部残存率1/8 擬凹線文７本
7	〃	18.3			外面：ヨコナデ 内面：ナデ、頸部以下磨滅	１号墳主体部取上No.1　980724	1mm前後の砂粒を含む　淡黄褐色　良好	口縁部残存率1/7 擬凹線文２
8	埴輪				外面：ナデ　内面：ヘラケズリ	３号墳SW区表土　PNo.19　980421	1～２mm程度の砂粒を含む　外面：暗黄褐色　内面：淡灰色　良好	
9	弥生 高坏		9.8		内・外面：ナデ	１号墳SW区２層 980430ほか	1mm大の砂粒を含む　淡黄色　良好	遺物残存率2/3　刻目文あり
10	〃				外面：ナデ　内面：ヨコナデ	１号墳NW２層	1mm程度の砂粒を含む　赤褐色　良好	赤色顔料付着　内面に工具痕
11	弥生 器台		16.2		外面：ヨコナデ 内面：ヘラケズリ	NW１層　PNo.292 980803	1mm程度の砂粒を含む　黄橙色　良好	擬凹線文１５本
12	弥生 底部					３号墳NW１層　PNo.147　980505	1～２mm程度の砂粒を含む　外面：淡赤褐色　内面：淡茶褐色　良好	焼成前穿孔
13	〃				外面：ナデ？　内面：磨滅	３号墳SW２層 980424	1mm程度の砂粒を含む　外面：褐色　内面：淡灰色　良好	
14	〃		3.7		内・外面：ナデ	３号墳SW区２層	1～２mm程度の砂粒を含む　褐色　良好	
44	須恵器 直口壺				内・外面：回転ナデ		畠３－３　１層　980702	クシ描波状文

（単位：cm）

挿図番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	刃部厚	出土場所・年月日	備考
42－1	鉇	4.9		1.2	0.4	３号墳ＮＥ区１層溝付近	
-2	鉇	6.2		1.3	0.75	ＳＩ－０３床面直上　取上No.１	
-3	鉇	7		1	0.6	ＳＩ－０３床面直上　取上No.２	
-4	不明	3.2	3.2	1.15	0.3	ＳＩ－０３床面　取上No.３	
-5	柳葉式鉄鏃	5	5	2.25	0.5	ＳＩ－０３　Ｐｉｔ２内	

第３節　Ⅱ区の調査（第45図）

Ⅱ区は、西へのびる丘陵の頂部から斜面にかけて設定した調査区で、標高は31m～44mである。分布調査の結果などから丘陵頂部には古墳の存在が推定されたほか、南側斜面でも性格不明の横穴が検出され、横口式炭窯が存在する可能性も考えられた。

検出した遺構は、調査区西側の尾根頂部で古墳１基、南斜面から横穴墓６穴、炭窯と見られる遺構１、北側斜面から横穴墓1穴を検出した。調査区内の最高所（標高約44m）についても、地形測量の段階では古墳である可能性があったが、調査の結果横穴墓の後背墳丘と判断した。遺構の時期は古墳時代後期から奈良～平安時代と考えられ、遺物は須恵器が中心であるが、横穴墓の中には鉄鏃、耳環のほか人骨を検出したものも存在する。

尾根上及び南側斜面には山道が造成され、特に１号穴前庭部先端から炭窯と見られるSX-０１前方にかけて斜面が削られ、地形が大きく改変されている。また、１号穴については、天井崩落のおそれがあったため、玄室部の調査に入る前に天井部を重機で取り除いている。このため、１号穴周辺では、調査後の地形が本来のものと異なっている部分がある。

後背墳丘（第47図）

丘陵頂部東端に位置する高まりで、調査区内の最高所に立地しており標高は44mである。調査前は古墳と見られており、北東部と南西部が後世の地形改変で削られていた。トレンチ調査では主体部、周溝ともに検出されず、盛土も確認できなかったため、一旦は自然地形と判断したが、その後南側斜面から２・３・６号穴が検出され、これらの横穴墓の後背墳丘である可能性が高くなった。高まりの平面形は西側に前方部をもつ前方後円形にも見え、横穴墓もくびれ部付近に玄室が来るように意識して掘削された可能性も考えられる。この高まりを人為的に加工した痕跡は明確には認められないが、横穴墓玄室のほぼ真上に当たる付近から須恵器の完形品などが出土していることも考慮し、後背墳丘と判断した。

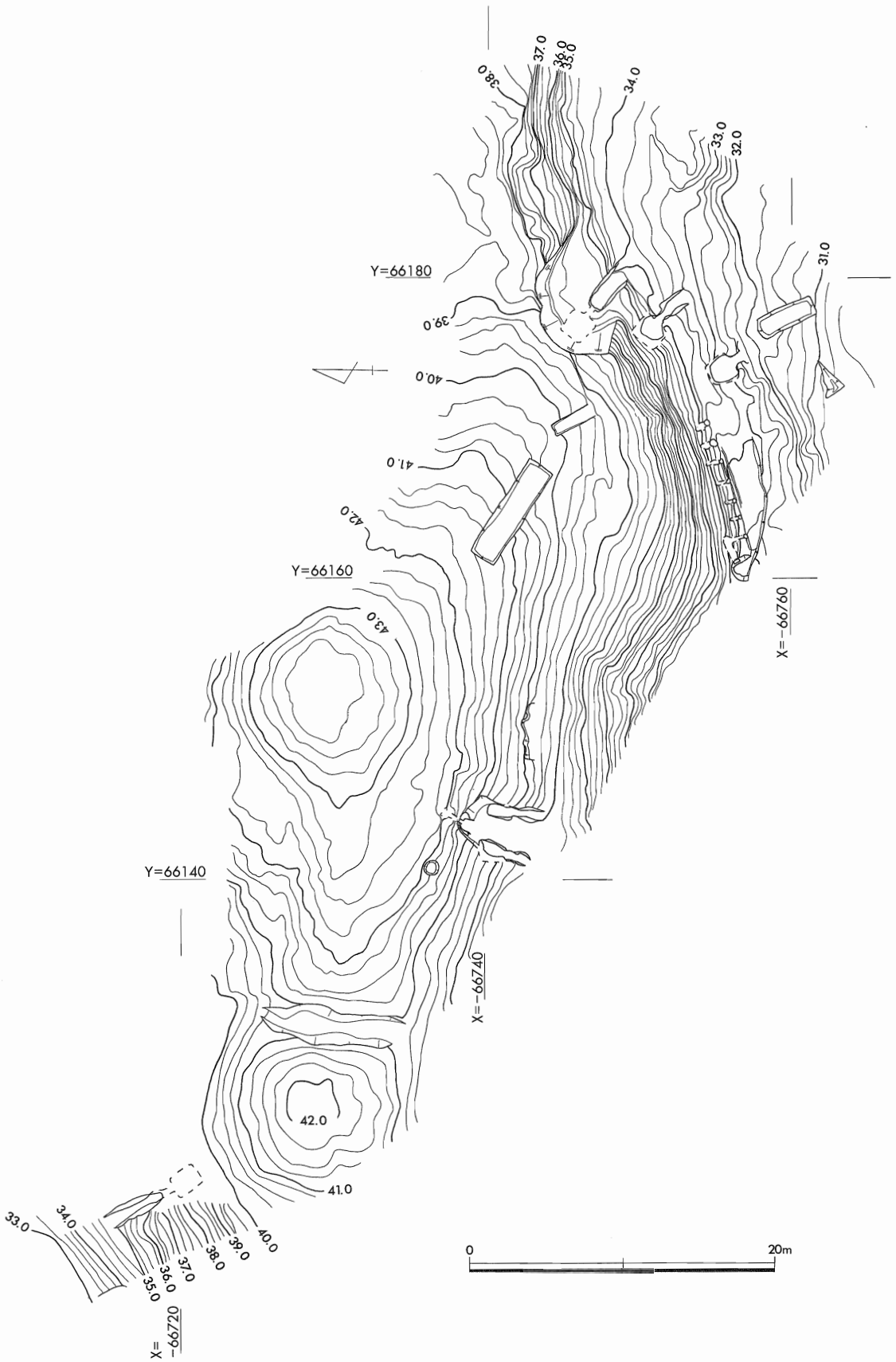
１号墳（第48図）

１号墳は、Ⅱ区西端の丘陵頂部に位置する。墳頂での標高は42.5m、調査前の地形測量では、一辺約10m、高さ約１ｍの方墳で、主軸をほぼ南北にとるものと見られた。発掘調査の結果、墳丘規模は南北13m、東西９ｍの方墳で、高さは約１ｍであった。

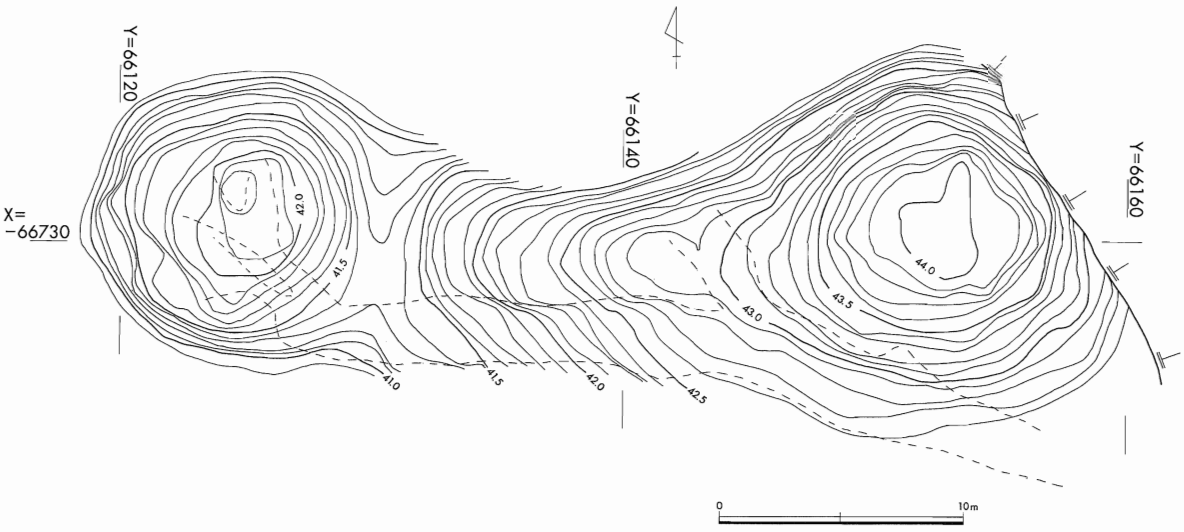
墳丘　墳丘は墳頂部から南側にかけて、後世に造られた山道により地形が改変され等高線が乱れている。西側の墳端は調査区外のため確認できなかったが、東側では尾根に直交する上端幅0.7～2.5m、深さ約0.2mの浅い溝が検出された。北・南側の墳端も明瞭ではないが、わずかなテラス状部分があり、この付近を墳端と推定した。埋土の厚さは約30㎝と薄く、多くは流出しているとみられた。主体部は検出できなかったが、土層観察では墳頂部から墳丘西側にかけて旧表土と見られる黒色土層を検出している。（第48図　土層断面図のスクリーントーン部分）

出土遺物は、墳丘盛土から鉄製品を検出しているが、覆土が薄く撹乱を受けているため、確実にこの古墳に伴うものか明らかではない。土器・埴輪などは全く出土しなかった。

なおⅡ区の北側斜面でも横穴墓１基を検出し、これを７号穴としたが、７号穴の主軸は１号墳の墳丘に向けられている。１号墳は古墳と判断したが、主体部が検出できなかったことから本来は７号穴の後背墳丘として構築された可能性も否定できない。



第45図　屋敷古墳群Ⅱ区調査後地形測量図（S＝1：400）



第46図　屋敷古墳群Ⅱ区１号墳・後背墳丘調査前地形測量図（Ｓ＝１：300）

１号穴（第48図～第50図）

Ⅱ区南側斜面の中腹に存在し、南東に開口する。ほぼ同じ標高で西側に４号穴、５号穴が隣接する。標高は前庭部で34mである。羨道部の調査中に玄室天井付近に亀裂が見つかり、危険防止のため羨道部から玄室にかけて天井部の土砂を重機で取り除いた後、玄室の調査を行った。これにより、羨道天井部については一部状況を明らかにしえなかったところがある。

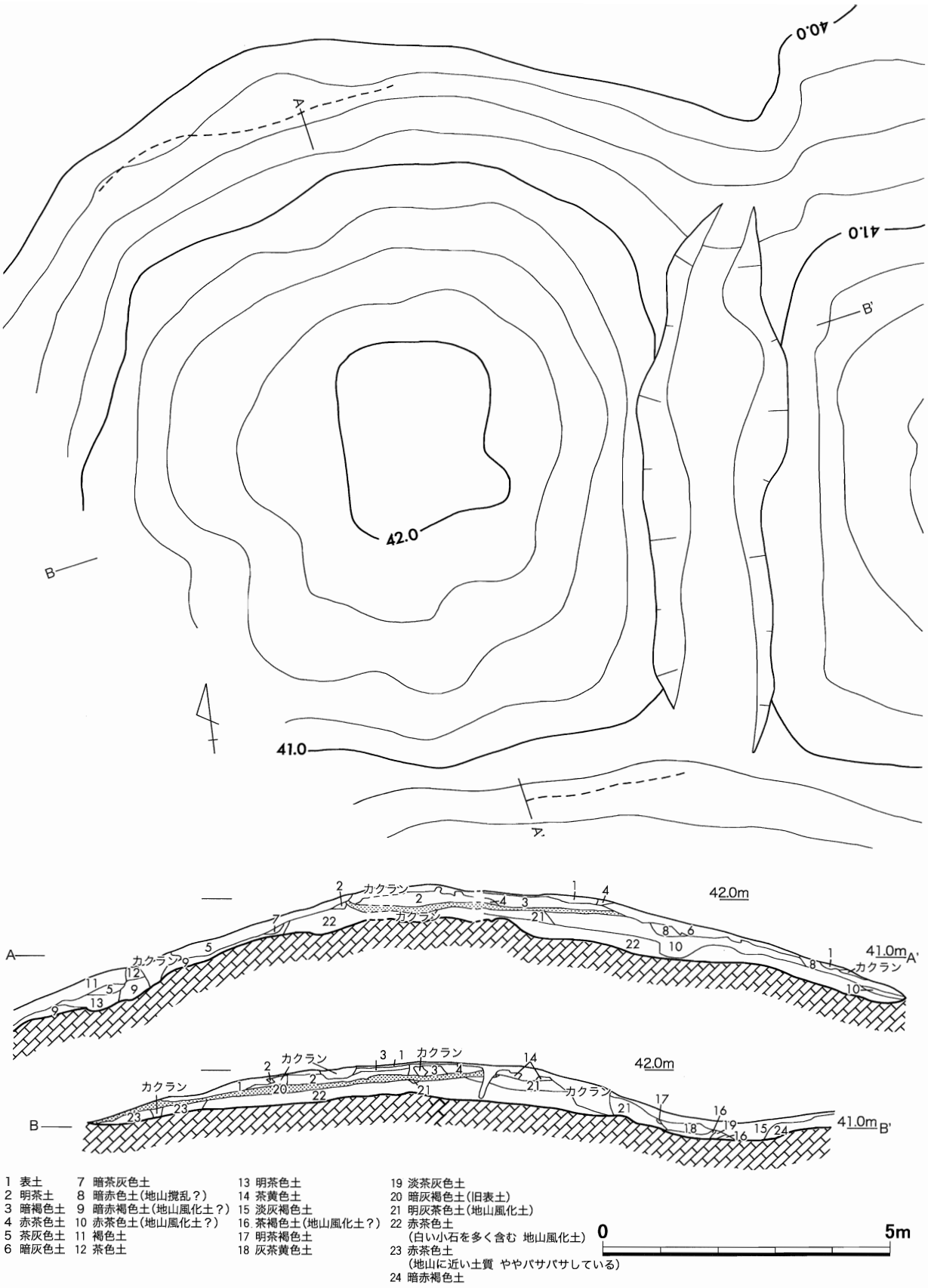
前庭部・羨道部　先端付近を山道が通り、地形改変を受けているため前庭部と羨道部の境界は明らかでないが、閉塞石が確認された付近から奥にかけては天井が部分的に残存しており、玄門の前方３m付近まではトンネル状の構造をとっていたと見られることから、この部分は羨道部であったことが考えられる。この場合、羨道部の規模は長さ3.4m、床面の幅0.9～1.1mで、ほぼ長方形の平面形である。さらに地形改変を考慮するならば、羨道部の長さは４mを超える可能性もある。羨道部の天井形態については崩落が激しく不明である。床面は、奥に行くにつれて徐々に高くなる。

また先端付近には、前方に伸びる幅40cmの溝をもつテラスが存在し、１号穴に伴うものであると考えられるが、前庭部となるのか墓道となるのかは不明である。このほか、墓道東側斜面には幅20～30cmの溝、西側には一辺50cmの土坑が検出されたが、これらについては、地山が風化を受けやすい土質のため、人為的に掘り込まれたものかどうか確認できない。

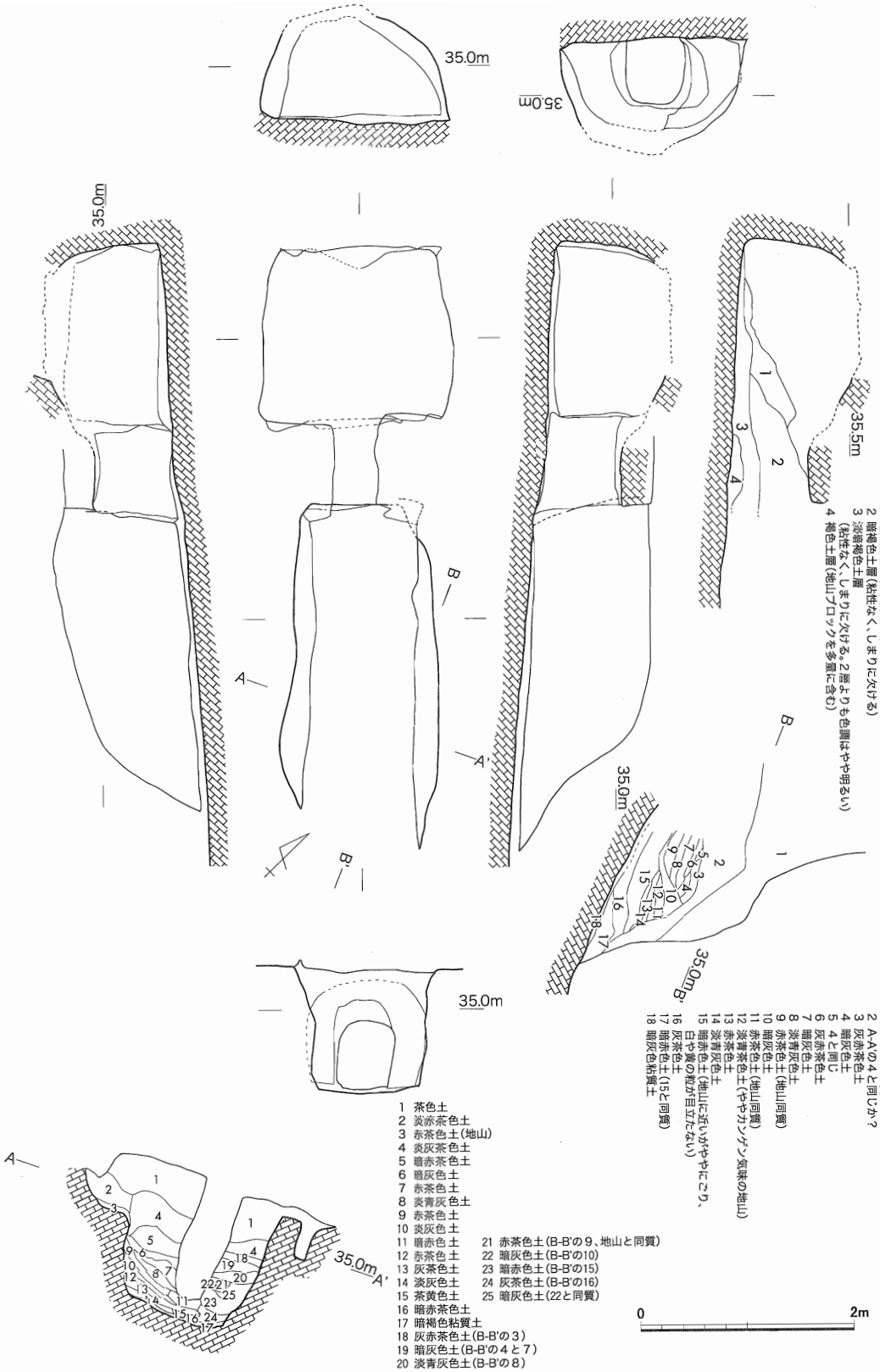
玄門部　長さ0.8m、幅0.4m、高さ0.7m～0.8mである。平面形は長方形で、床面は玄室側で高くなっている。天井部はやや丸みを帯びているが、棟線などは認められなかった。

玄室　玄室は奥行き1.6m、幅1.7m～1.5mで奥壁側がやや狭くなるが、正方形に近い平面形をとる。天井中央付近が崩落しているため正確な高さは不明だが、約1.2mと推定される。玄室形態は、前壁と奥壁は比較的垂直に近いのに対し、両側壁は内傾していることから妻入りのテント形である可能性があるが、詳細は不明である。

堆積状況　墓道、玄門は閉塞時の覆土や流入土でほぼ埋まり、玄室床面も流入土や崩落土でほとんど覆われていた。撹乱と見られる流入土を除去すると、土層はかなり細かく分層することができた。墓道から玄門までを通した土層観察ができなかったため、検討は不充分であるが、初葬後再掘削が



第47図　屋敷古墳群Ⅱ区１号墳墳丘測量図・土層断面図（S＝１：100）



第48図　屋敷古墳群Ⅱ区1号穴実測図（S＝1：60）

複数回行われたことは明らかで、閉塞石の状態も考えると盗掘が行われた可能性もある。

閉塞状況（第49図）

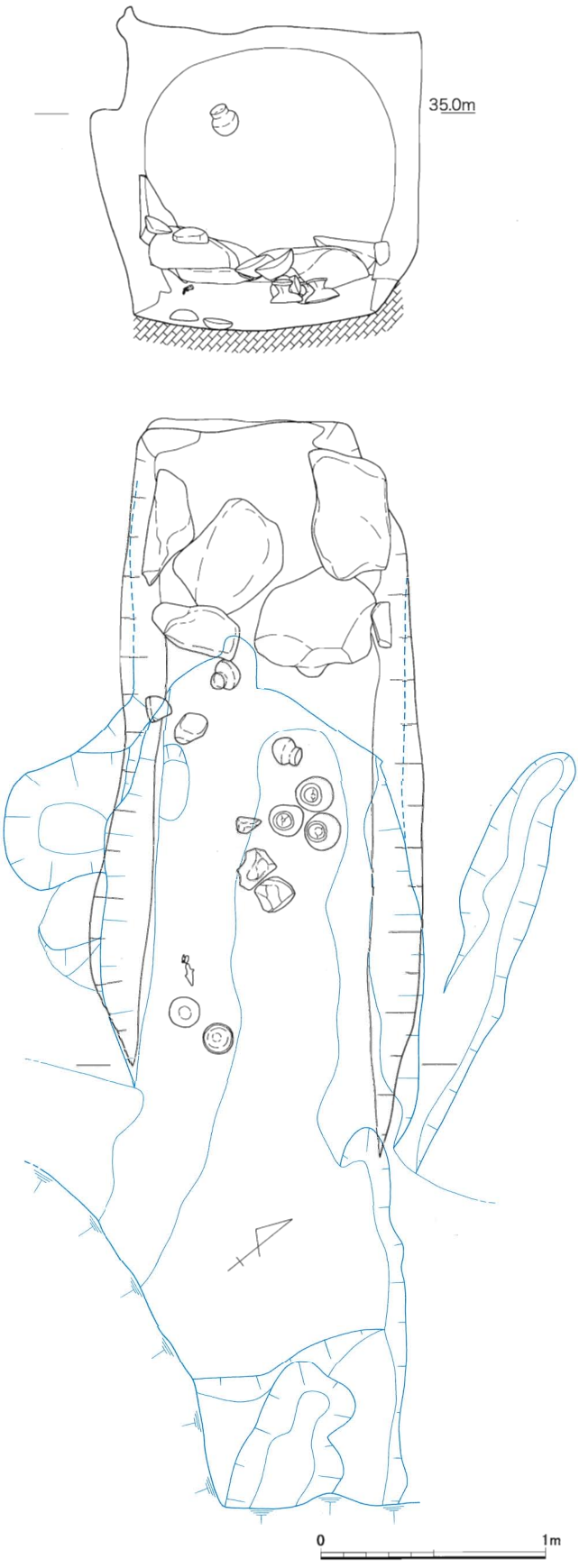
玄門部前方で、数点の石材が倒れた状態で検出された。いずれも自然石で加工した痕跡は認められなかった。閉塞はこれらの石材を積み重ねて行ったものと見られる。玄門には閉塞に伴う刳り込みなどの加工は認められない。

羨道部遺物出土状況（第49図）

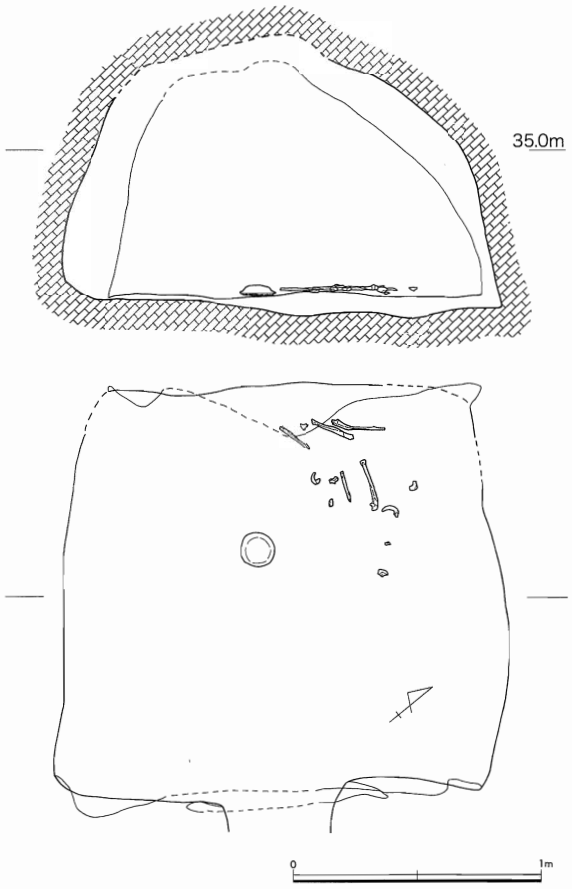
羨道部では、須恵器と鉄鏃、玄室内で須恵器と人骨が出土した。羨道部先端付近では床面近くから坏蓋と坏身、鉄鏃と茎がそれぞれ１点出土し、閉塞石の前方付近では高坏３点と直口壷がまとまって検出された。高坏は３点とも倒立した状態で出土しており、意図的に置かれていたことは明らかである。また、出土位置が床面であることから初葬に伴うものと考えられる。このほか、閉塞石前方の埋土中から直口壷１点が確認されている。

玄室内遺物出土状況（第50図）

玄室内では、中央やや奥壁寄りの床面で坏身１点を確認したほか、土砂に覆われていなかった右奥部で人骨が出土した。人骨の残存状態は悪く、天井からの崩落土や流入土の影響を受けなかった骨だけが残存したものと見られる。分析の結果、被葬者は１体で、若年の女性であることが明らかになった。分析についての詳細は、第10章を参照されたい。



第49図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴羨道部遺物出土状況
（S＝１：30）



第50図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴玄室内遺物出土状況
（S＝１：30）

１号穴出土遺物（第51図・第52図）

第51図は須恵器である。３が玄室床面から、そのほかは羨道部からの出土である。１は坏蓋で、口径は12.3cmである。器壁が厚く、天井部と体部の境界付近の突帯が全く表現されないものである。２は坏身で、口径11.5cmである。かえりが短く内傾するものである。３も坏身でかえりが短いが、端部はやや上方に向く。1～３とも調整は回転ナデで、ヘラケズリの痕跡は認められない。４・５は、直口壷である。４は口径8.9cm、器高13.6cm、５は口径10.3cm、器高13.7cmである。いずれも体部の下位１／３程度をヘラケズリ調整するが、４はヘラケズリ後回転ナデを加えているようである。６～８は低脚の無蓋高坏である。６は、口径14.7cm、底径8.7cmで、７・８と比較するとわずかに小形である。また器壁が厚く、底面から口縁部へ緩やかに立ち上がる坏部の形態も、７・８とは異なる。透かしはいずれも２方向１段であるが、孔の形状は６が方形、７・８は切り込み状である。

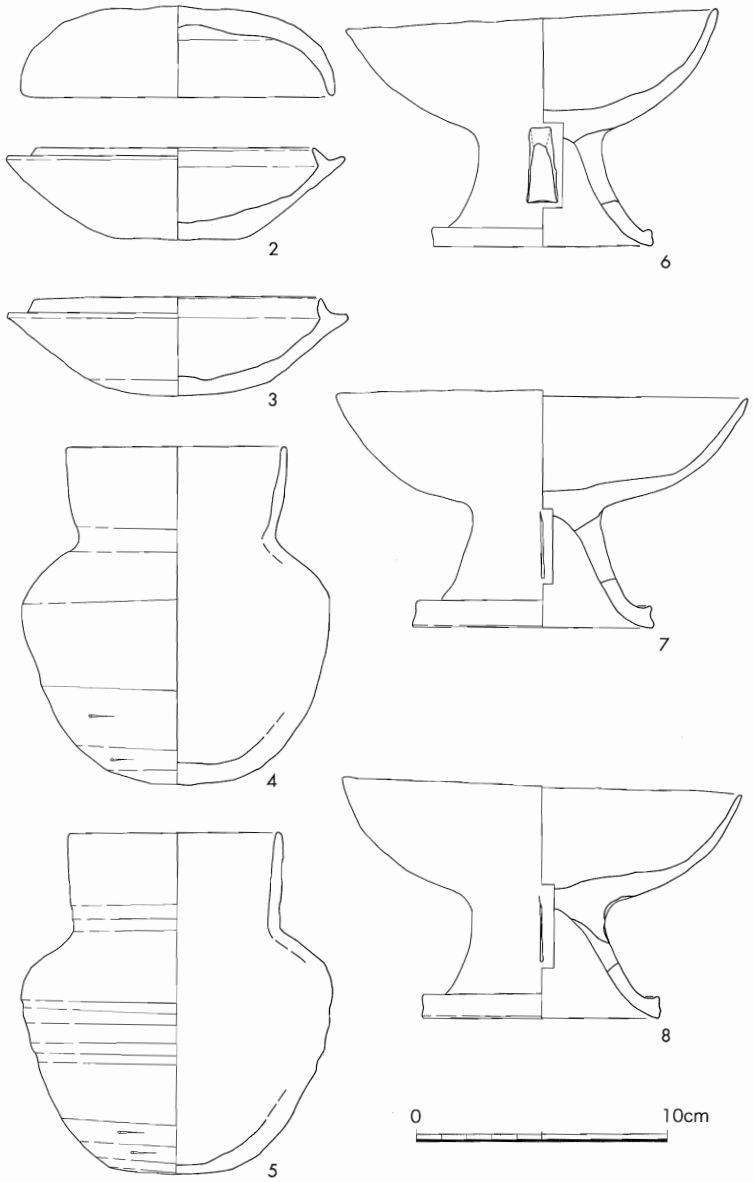
第52図は鉄鏃である。１は鏃身部の長さ７cm、幅が3.2cmと広身のものである。関の一部と茎の大部分が欠けており、木質は確認できない。三角形鏃群のＢ－Ⅲ形式に分類される[4)]。２は茎の先端付近である。断面は長方形で、１と同一個体の可能性があるが、直接は接合しないため、確認できない。出土遺物の時期は、玄室内出土と墓道出土のものに時期差はなく、出雲５期～６期のものである。

２号穴（第53図・第54図）

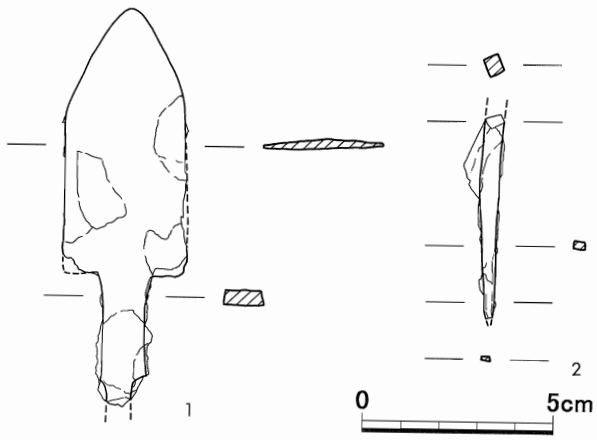
調査区内の最高所となる丘陵頂部の高まりを南西斜面に下った位置にあり、南西に開口する。標高は前庭部床面で39.5mで、今回調査した横穴墓の中では最も高い位置に掘り込まれている。検出中には、広大な前庭部をもつものと考えていたが、前庭部の側壁に接して３号穴と６号穴が検出され、この２基の横穴墓が壊されて前庭部がつくられていたことが明らかになった。

前庭部　２号穴前方の平坦な部分を前庭部と考えると、その規模は長さ3.1m、幅2.8m～3.6mとなる。前庭部の両側壁は２号穴、６号穴の側壁とほぼ重なるようにつくりだされている。また、横断面の土層堆積状況から、３号穴、６号穴が２号穴の前庭部掘削以前に存在していたことが確認された。

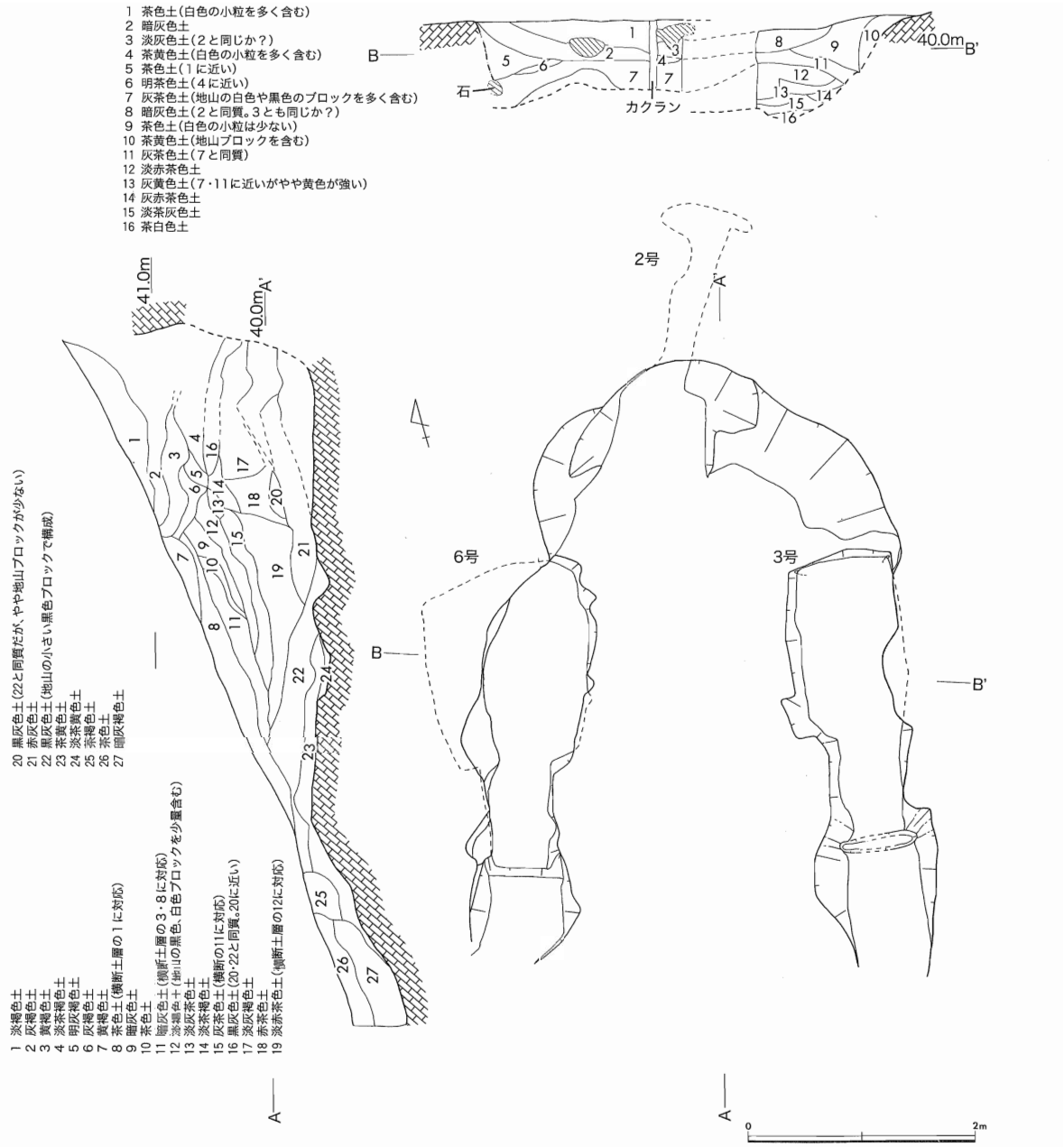
縦断面では22層上面などで再掘削が行われた可能性を示す面があるが、詳細は不明である。



第51図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴出土遺物実測図(1)（S＝１：３）



第52図　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴出土遺物実測図(2)（S＝１：２）



第53図　屋敷古墳群Ⅱ区２・３・６号穴位置図（S＝１：60)

羨道部　長さ0.8m、幅0.7m～0.9mで、玄室側がやや狭くなる不整形な四角形の平面形を呈する。前庭部の中央よりかなり左側に寄った位置に掘削されている。

玄門・玄室　羨道部の左側に寄った位置から掘削される。主軸は東側に振られ、前庭部の軸とずれている。平面形は奥側が広くなるＴ字のような形をとり、長さは1.7m、幅は羨道部側で0.3m、奥側の広い部分で0.8mである。高さは羨道部側で1.2m、奥壁沿いでは0.2mとなる。閉塞のための溝や掘りこみ、閉塞石などは検出されなかった。また、内部には流入土と見られる土砂が天井まで堆積していた。

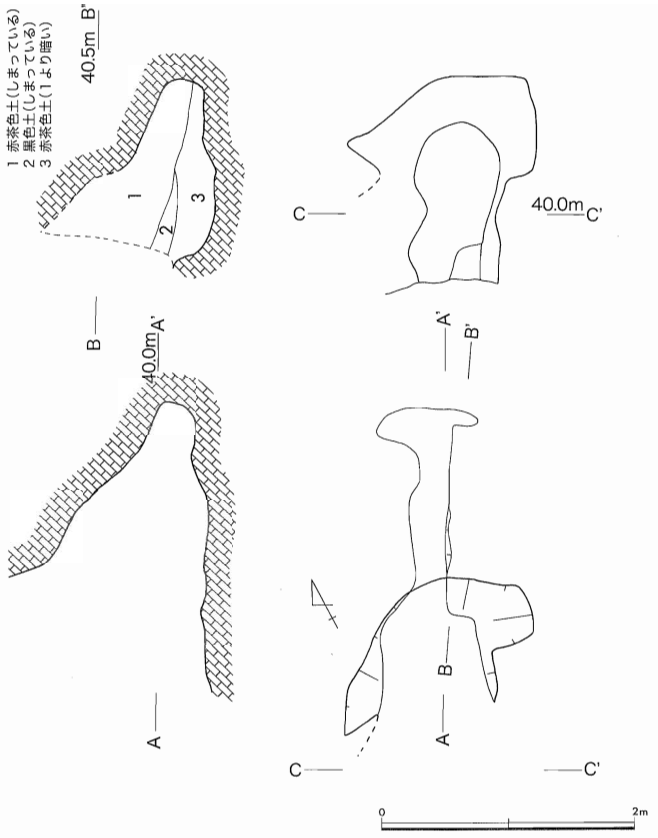
後背墳丘（第55図）

調査終了後の２・３・６号穴と後背墳丘との位置関係を示した。高まりの頂部は標高約44mで、２号穴前庭床面との標高差は４mである。２号穴の主軸が東へ振られているのは、高まりの頂部を

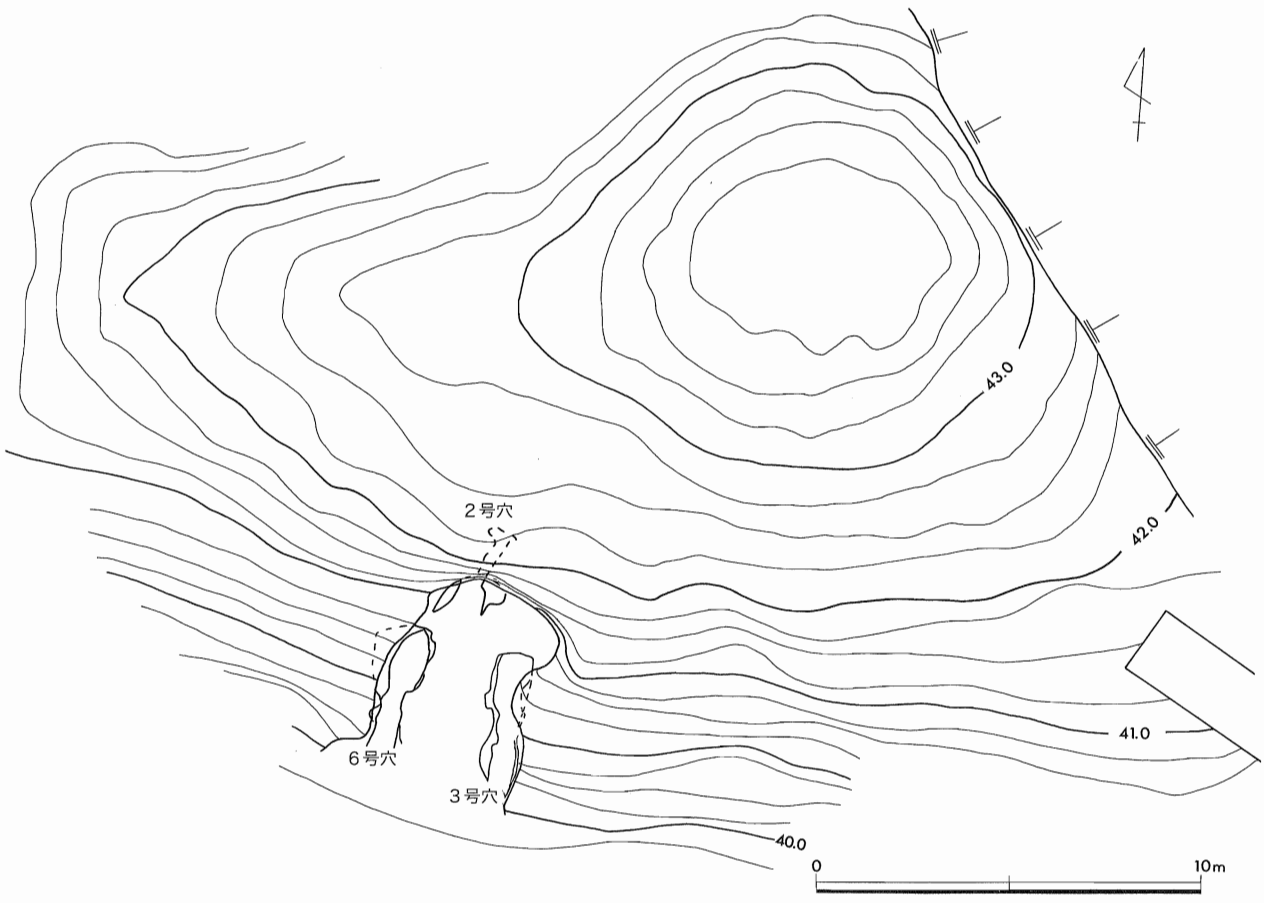
意識している可能性もある。

遺物出土状況（第56図）

２号穴の羨道部、玄門玄室からは遺物は出土しなかったが、周辺及び前庭部からは多量の須恵器片が確認された。これらの多くは前庭部の前側、特に前庭部先端から斜面に傾斜が変わる付近に集中している。床面から出土したものはほとんどないが、土器片を接合した結果、坏身１点、大甕４点を復元することができた。なお、平面図で３・６号穴上にも須恵器片の出土を示す点があるが、いずれも２号穴前庭部埋土中からの出土で、３・６号穴に伴うものではないと見られる。



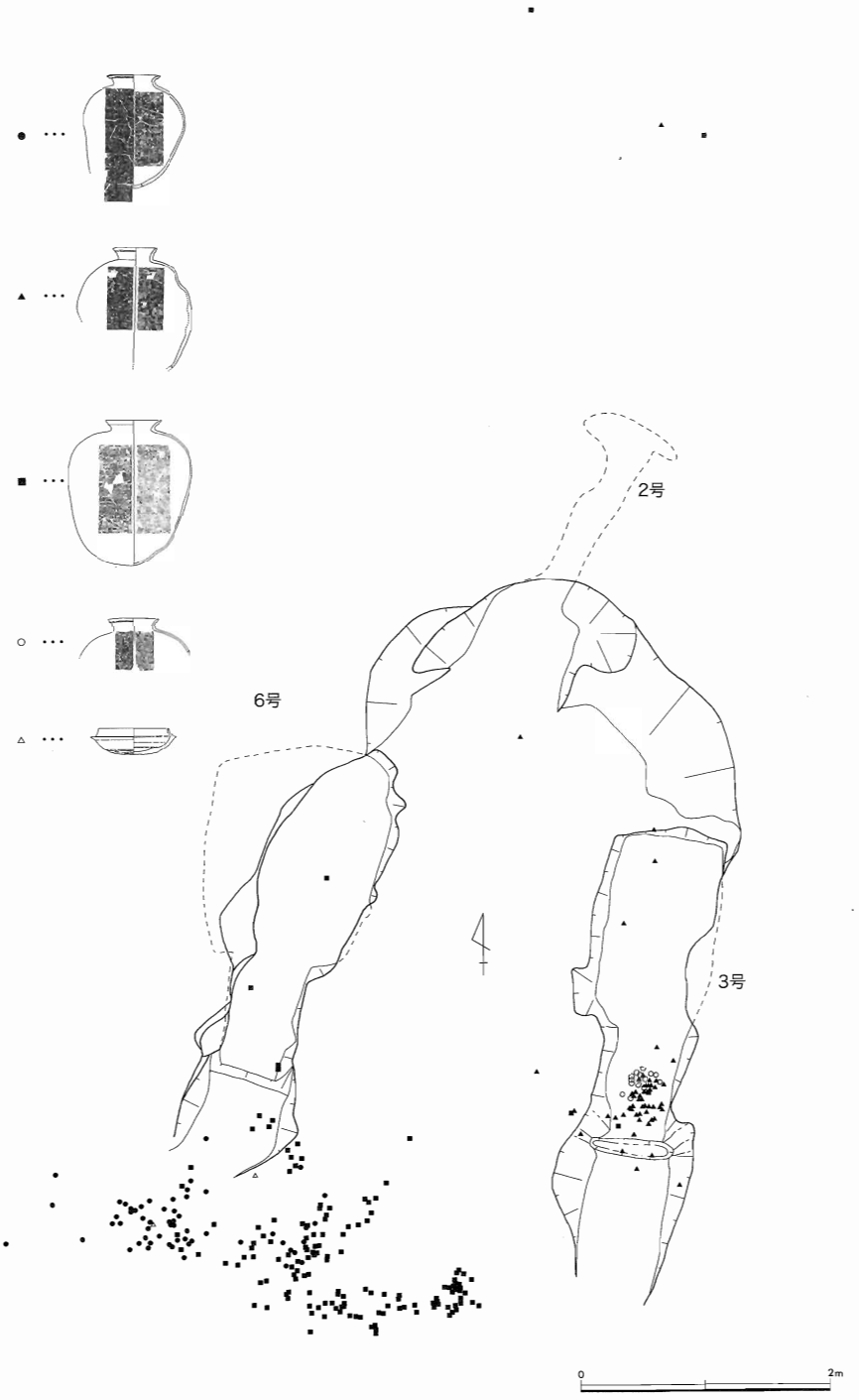
第54図　屋敷古墳群Ⅱ区２号穴実測図（S＝１：60）



第55図　屋敷古墳群Ⅱ区後背墳丘測量図（S＝１：200）

２号穴前庭部出土遺物（第57図）

１は坏身で、口径11.0㎝、器高4.3㎝である。外面底部付近は回転ヘラケズリで調整される。２～５は大甕である。口縁部、体部ともゆがみがあるものが多く、底部が割れており器として用を成さないものもあった。口縁部は外面に面をもち、複合口縁状を呈する。口径は２が19.8㎝、３が22.0㎝、４が16.4㎝、５が21.4㎝である。器高は３が58.1㎝であるが、ほかは底部付近を復元できなかったため不明である。時期を推定できる遺物が坏身しかないため詳細は不明であるが、およそ出雲４期～５期と考えられる。



第56図　屋敷古墳群Ⅱ区２・３・６号穴周辺土器片分布状況（Ｓ＝１：60）

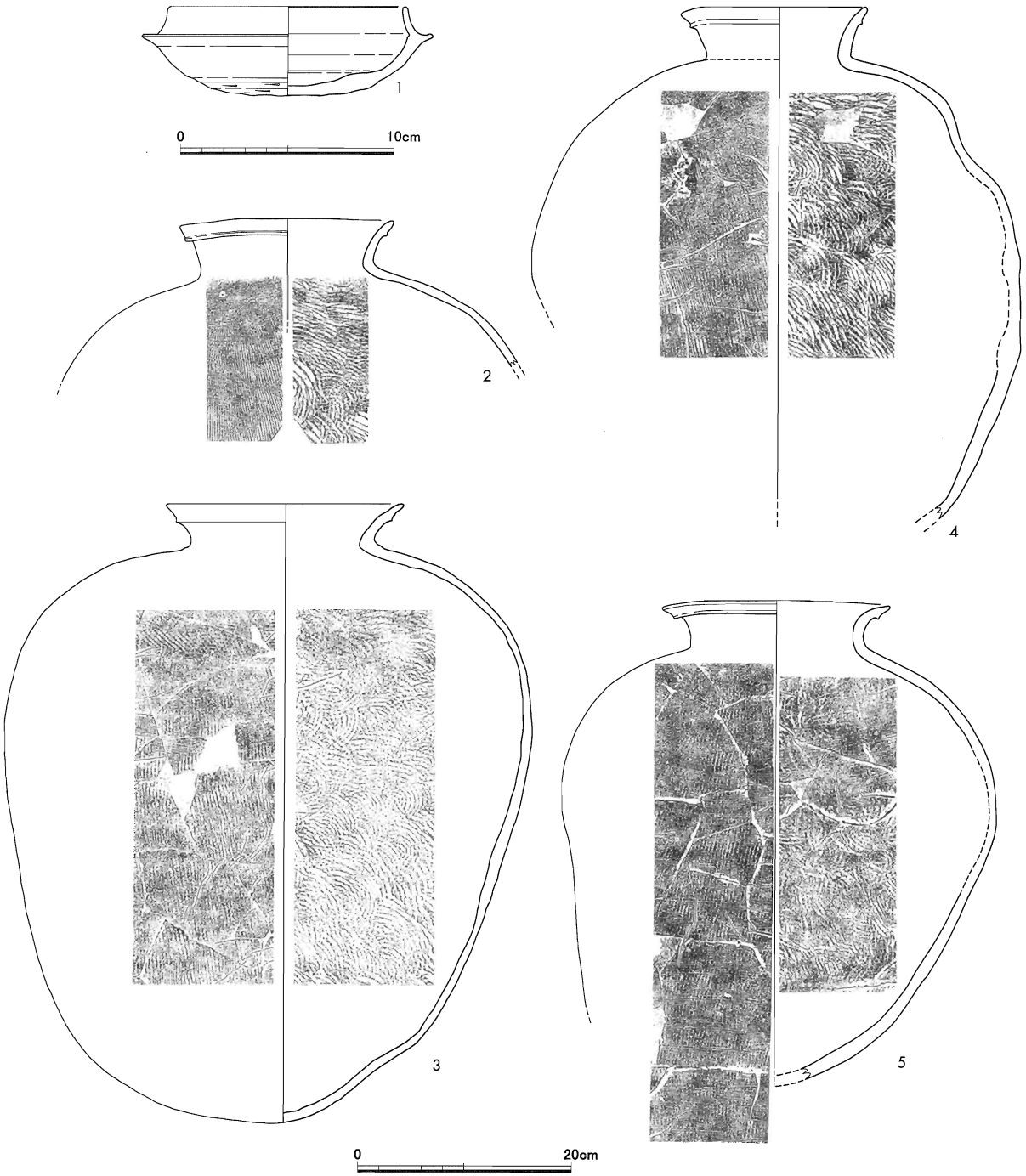
３号穴（第58図）

２号穴前庭部の右側壁沿いで検出された小規模な横穴墓で、標高は墓道床面で約39mである。２号穴前庭部の掘削に伴い、右側壁上部から天井部、左側壁の大部分を失っている。横穴墓と認識したのは、半分以上掘り下げた後だったため、墓道の土層堆積状況は不明である。

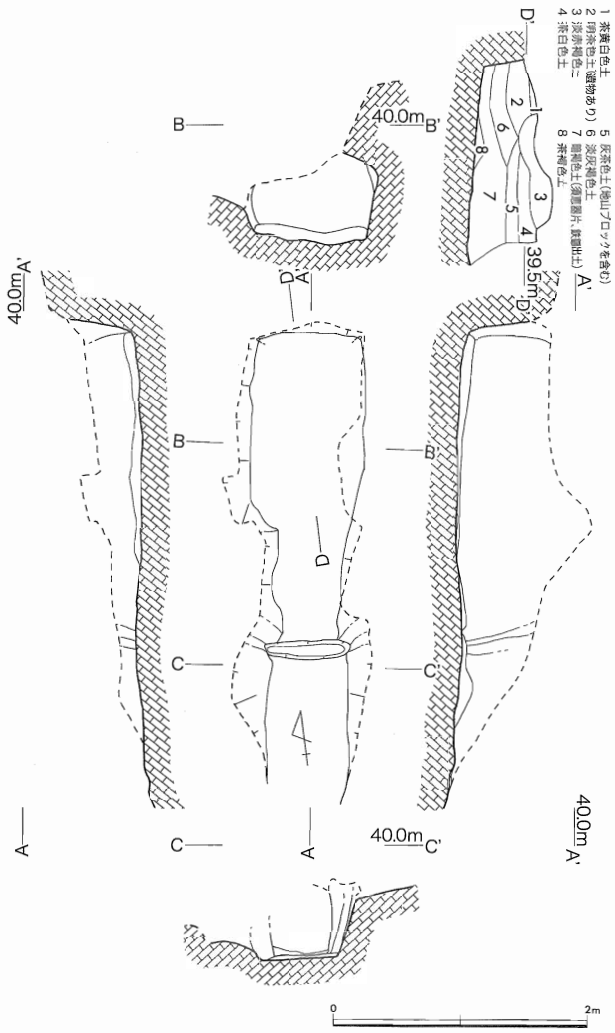
墓道　長さは検出時で1.2m、幅は0.6mで平面形は長方形である。床面はほぼ水平で玄門に至る。

玄門　長さ1.0m、幅0.5mである。墓道との境界付近の床面から側壁にかけて、閉塞用のものとみられる幅10cmの浅い掘り込みがあるが、閉塞石などは認められなかった。

玄室　床面で長さ1.6m、幅0.9mである。玄門と玄室との境界が不明瞭で、左側壁では鈍角ながら



第57図　屋敷古墳群Ⅱ区２号穴前庭部出土遺物実測図
（１のみS＝１：３　　２～５　S＝１：６）



第58図　屋敷古墳群Ⅱ区３号穴実測図（Ｓ＝１：60)

角をもつが、右側壁では玄門から玄室へ緩やかにつながり、徳利形とでもいうべき平面形である。玄室形態は天井部のほとんどが失われ、軒線なども認められないため、不明である。

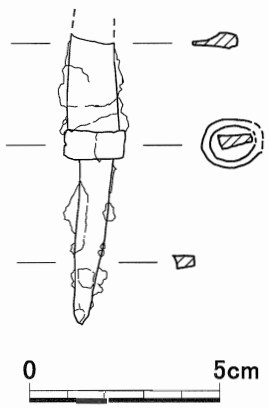
堆積状況　墓道から玄室まで完全に土砂が堆積していた。２号穴前庭部の掘削に伴うのは３～５層で、その他はそれ以前の堆積と考えられるが、どの層がこの横穴墓に伴うのかは明らかにできなかった。

３号穴出土遺物（第59図）

墓道の埋土から出土した刀子で、刀身の一部と茎である。前庭部の土層は不明だが、出土位置から７層中から出土したものと推定した。現存長は7.7㎝で、鎺金具が認められる。茎の断面は四角形を呈する。

６号穴（第60図）

２号穴前庭部の左側壁沿いで検出された小規模な横穴墓で、規模・形態とも３号穴に酷似する。２号穴前庭部主軸線で３号穴と対称の位置にあり、２号穴前庭の掘削で右側壁から天井部にかけて失われている。床面の標高は約38mである。



第59図　屋敷古墳群Ⅱ区
３号穴出土遺物実測図
（Ｓ＝１：２）

墓道　幅、長さとも0.7mと規模が小さく、西側に湾曲している。床面は玄門に向かって高くなる。

玄門　長さ1.0m、幅0.5m～0.6mで墓道床面より10㎝高くなる。この段の法面から側壁にかけて面取りされているが、これは閉塞用の加工と見られる。

玄室　長さ1.6m～1.8m、幅1.0m～1.3mで奥壁側が広く台形に近い平面形である。玄門と玄室の境界は３号穴と異なり明瞭である。天井部の右側約１／２を欠くため玄室形態は不明である。

堆積状況　６号穴も完全に埋没しており、２号穴前庭部掘削による影響を受けていると見られるが、どの層が掘削時の埋土かは明らかにできなかった。

玄室内遺物出土状況（第61図）

玄室内から須恵器の蓋坏、甕片が出土している。蓋坏は蓋と身が４点ずつ検出され、床面直上もしくはそれに近い位置にあったことから、この横穴墓に伴なうものと考えられる。

６号穴出土遺物（第62図）

１～４は坏蓋、５～８は坏身である。１は口径10.1cm、器高3.1cmで、他の３点と比べて器壁が厚く小ぶりである。天井部と体部の境界付近は沈線のみで、口縁端部にも浅い沈線を巡らせる。２・３は天井部と体部の境界付近に２本の沈線を入れ、口縁端部に浅い沈線を巡らすなどよく似る。口径は２が13.0cm、器高4.3cm、３が口径12.3cm、器高4.1cmである。４は突帯が明瞭に表現され、口縁端部がやや鋭くなるもので口径11.1cm、器高4.1cmである。いずれも天井部付近は回転ヘラケズリが施され、１と４は天井部外面にヘラ記号をもつ。

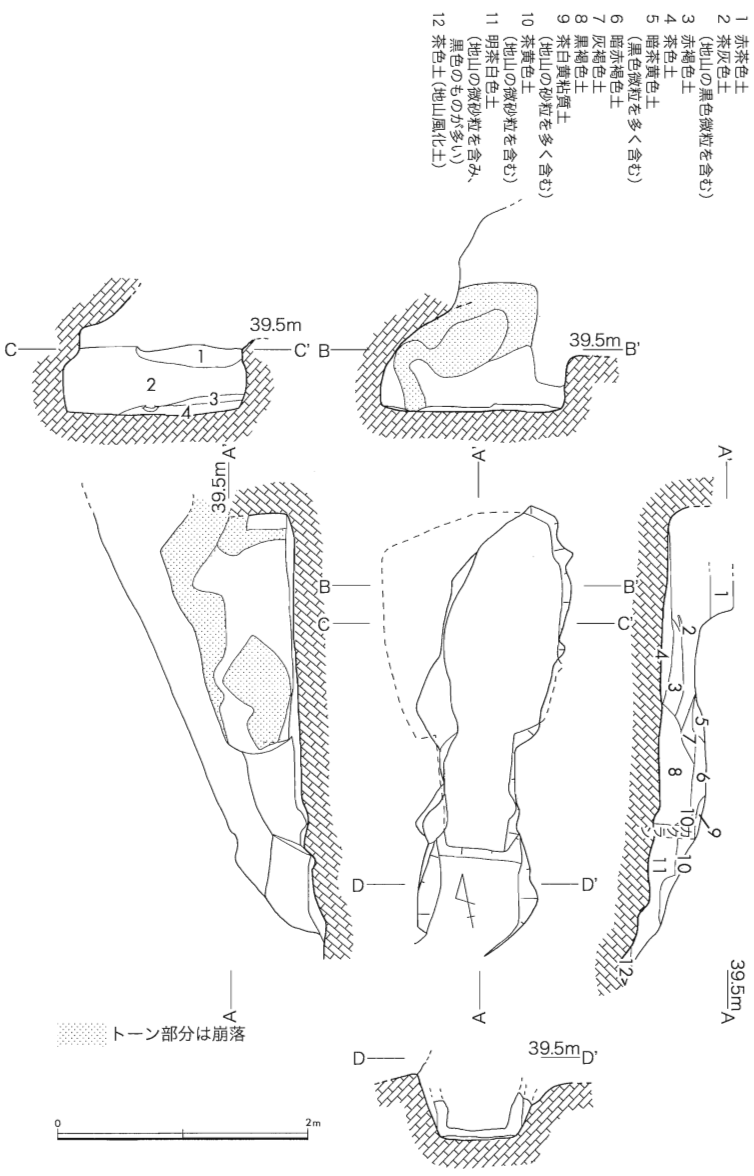
５～８は坏身で、６と８には焼き歪みがある。５は口径11.6cm、器高4.1cmで、立ち上がりは短く外湾する。６は口径11.6cm、器高4.1cmで立ち上がりは直線的に伸びる。７は口径10.7cm、器高4.5cmで、立ち上がりが大きく内傾する。８は本来６に近い器形と考えられるが、歪みのため口径は8.9cm、器高4.2cmとなっている。調整は底部付近にヘラケズリを施すものが多いが、８にはヘラケズリは認められず回転ナデで仕上げる。遺物の時期は出雲４期と考えられる。

４号穴（第63図）

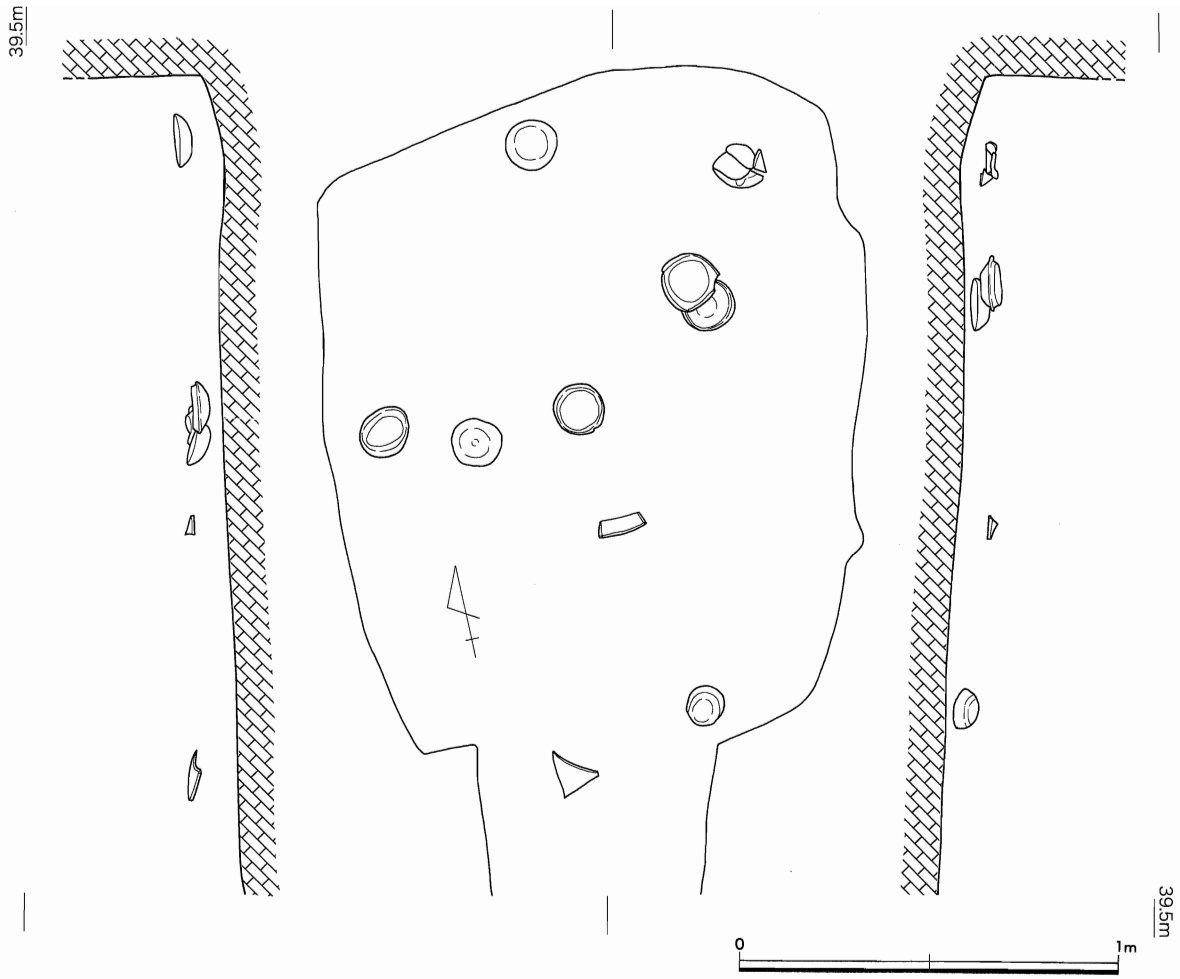
４号穴は、調査区東部の南側斜面に開口し、１号穴の南西４mに位置する。この横穴墓の調査開始直前に、玄門から玄室天井部にかけて天井部が落盤した。標高は墓道床面で約33mで、開口方向は南東である。

墓道　幅1.3m前後で、玄室に対して軸が西へ振れているものと見られるが、ほとんどが失われているため詳細は不明である。

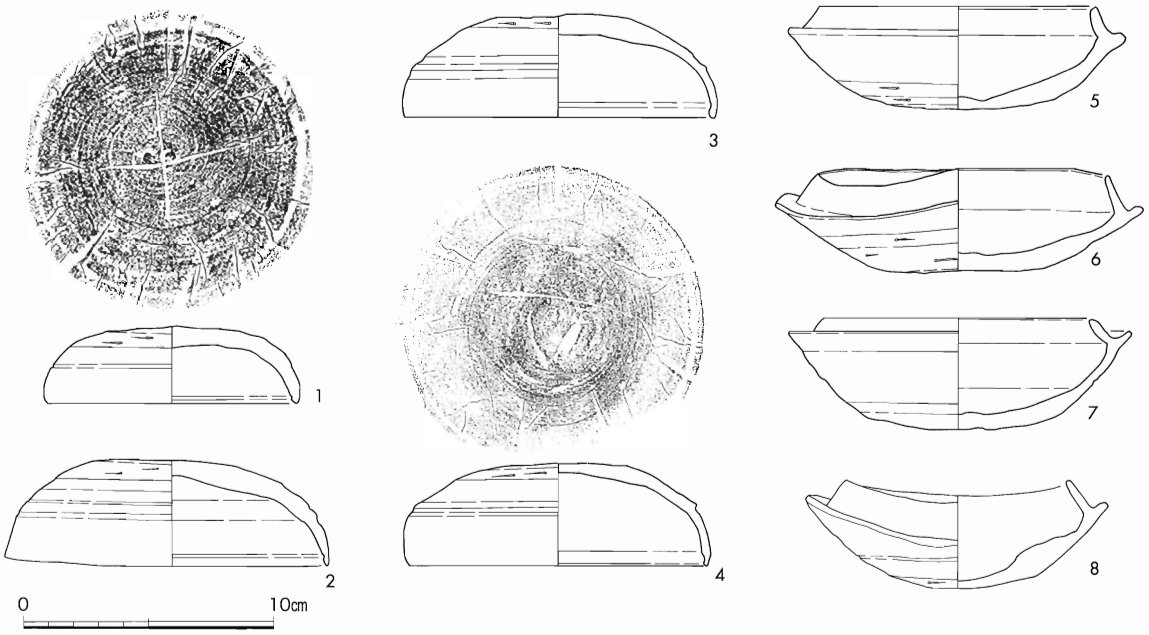
玄門　長さ0.7m～0.9m、幅0.7mで、墓道との境界付近



第60図　屋敷古墳群Ⅱ区６号穴実測図（S＝1：60）



第61図　屋敷古墳群Ⅱ区６号穴玄室内遺物出土状況（S＝１：20）



第62図　屋敷古墳群Ⅱ区６号穴出土遺物実測図（S＝１：３）

に閉塞用の掘り込みをもつが、閉塞石などは認められなかった。玄室にかけて浅い掘り込みが存在する。

玄室　長さ1.8m、幅1.7m～1.5mで、奥壁側がわずかに幅狭となるが正方形に近い平面形である。玄門から玄室中央付近にかけて、幅20㎝～60㎝の浅い溝状に掘り込むことで、玄室奥壁側と両側壁側を一段高くし、簡単な屍床としている。界線は比較的明瞭であるが、天井が崩落したため玄室形態は不明である。なお、この横穴から遺物は出土していない。

堆積状況　墓道から玄室まで地山ブロックを多量に含む土が堆積していた。この層は分層できなかったことから、調査前の落盤による堆積土と考えられる。

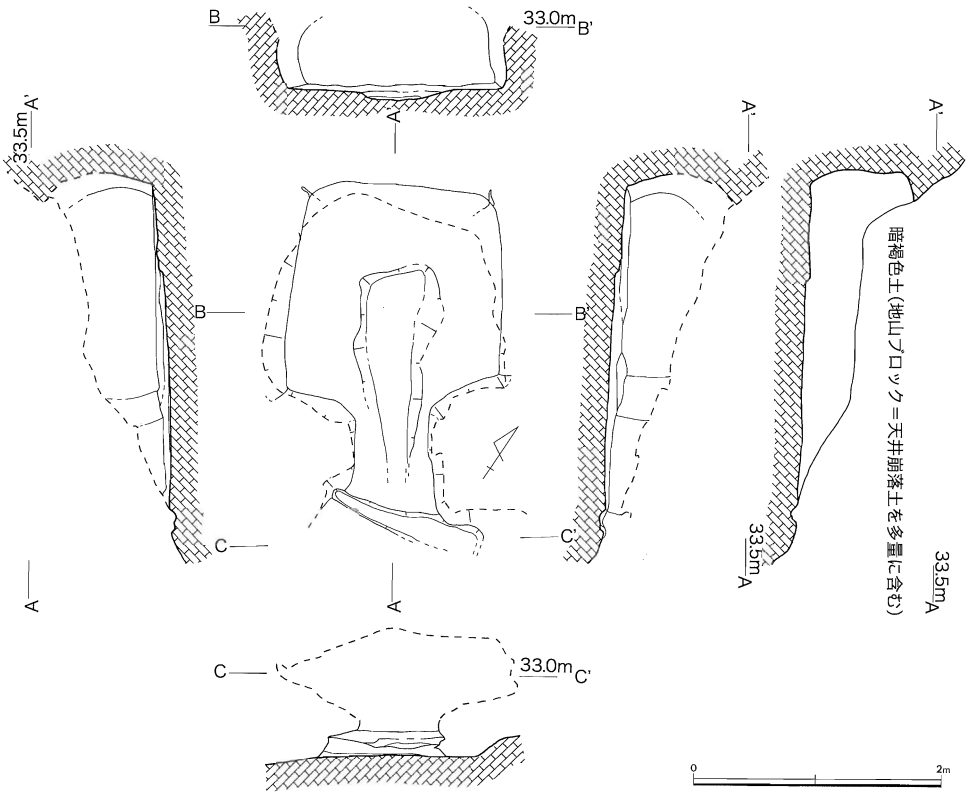
５号穴（第64図）

４号穴の南西約６ｍに位置し、南東に開口する。標高は約33mで今回検出された横穴墓の中で最も低い位置にある。玄門から玄室中央にかけて天井が崩落しており、規模、形態は４号穴に近い。

墓道　先端部は山道により失われているが、現状で床面の長さ１.0m～1.7m、幅0.7m～0.9mで、先端に行くにつれて南側に曲がっていく。床面はほぼ水平である。

玄門部　玄室前壁までの距離が左右で異なり、玄門部の長さは右0.7m、左1.2mとなる。幅0.4mであるが、墓道側では0.8mまで広がる。床面はほぼ水平で、墓道との境界付近では床面に閉塞用の掘り込みをもつ。天井形態は崩落のため不明である。

玄室　玄室の長さは左側壁沿いで1.6m、右側壁沿いで2.1mと大きな差がある。幅は2.0mで前壁側と奥壁側とで差はない。玄室床面は両側壁側が１段高く、奥壁側はそれよりさらに１段高くなり、屍床を意識した造りになっている。界線は比較的明瞭だが、天井崩落のため、玄室形態は不明であ



第63図　屋敷古墳群Ⅱ区４号穴実測図（S＝１：60）

る。また、右側壁側には板状の石を積み重ねて石床を設けている。石の厚さは最大20cmで極端に厚いものはないが、風化が著しく割石に加工したものかどうかは確認できなかった。

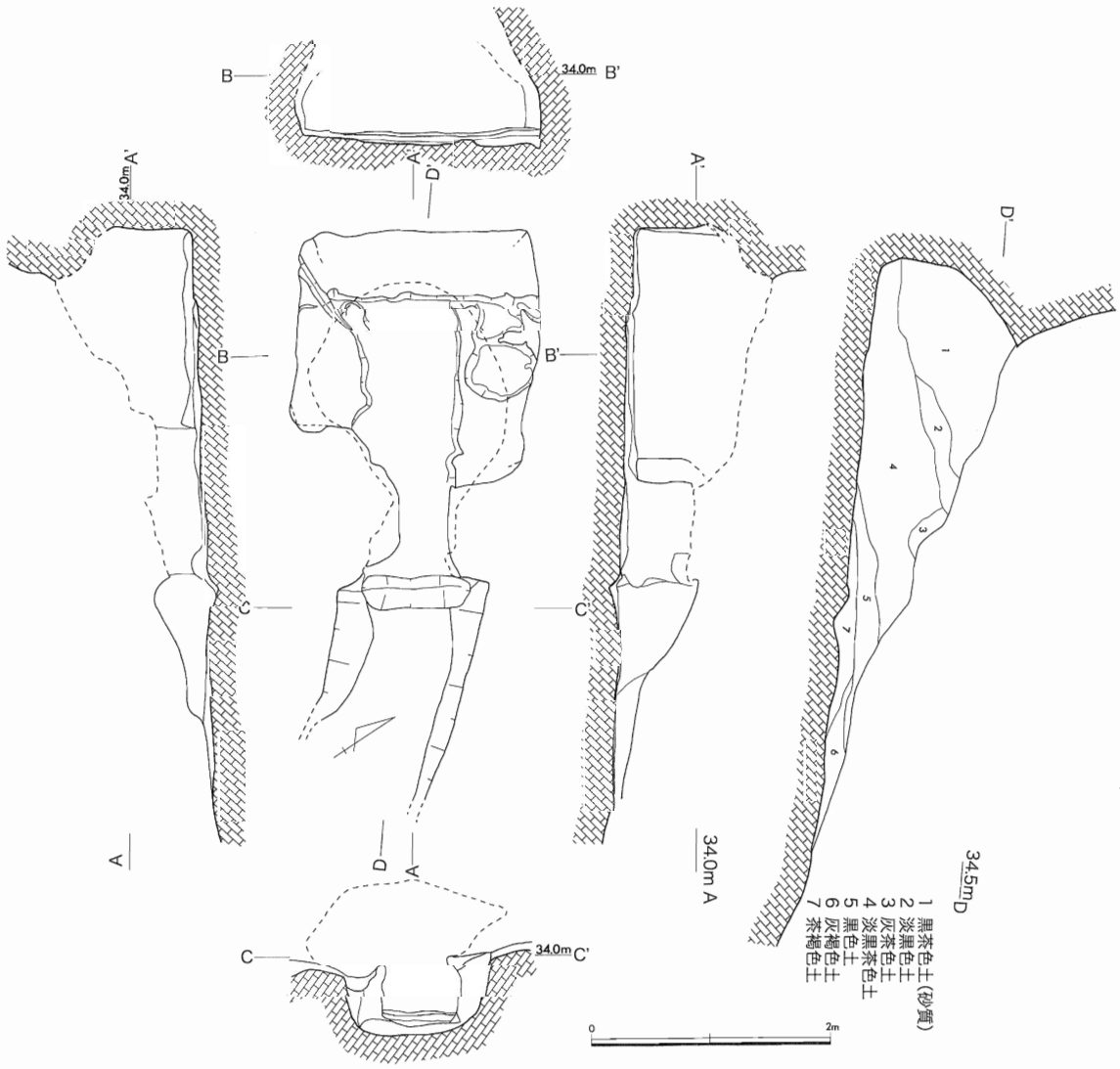
堆積状況　天井崩落などにより、玄室内まで完全に土砂が堆積していた。これらは８層に分層できるが、追葬や盗掘、崩落に伴う層がどの層かを明らかにすることはできなかった。

遺物出土状況（第65図）

石床の上面から須恵器の坏蓋、坏身各1点と耳環が２点出土している。これらは、出土位置から石床への埋葬に伴う可能性が高い。このほか玄室内の４層中から高坏が出土している。

５号穴出土遺物（第66図・67図）

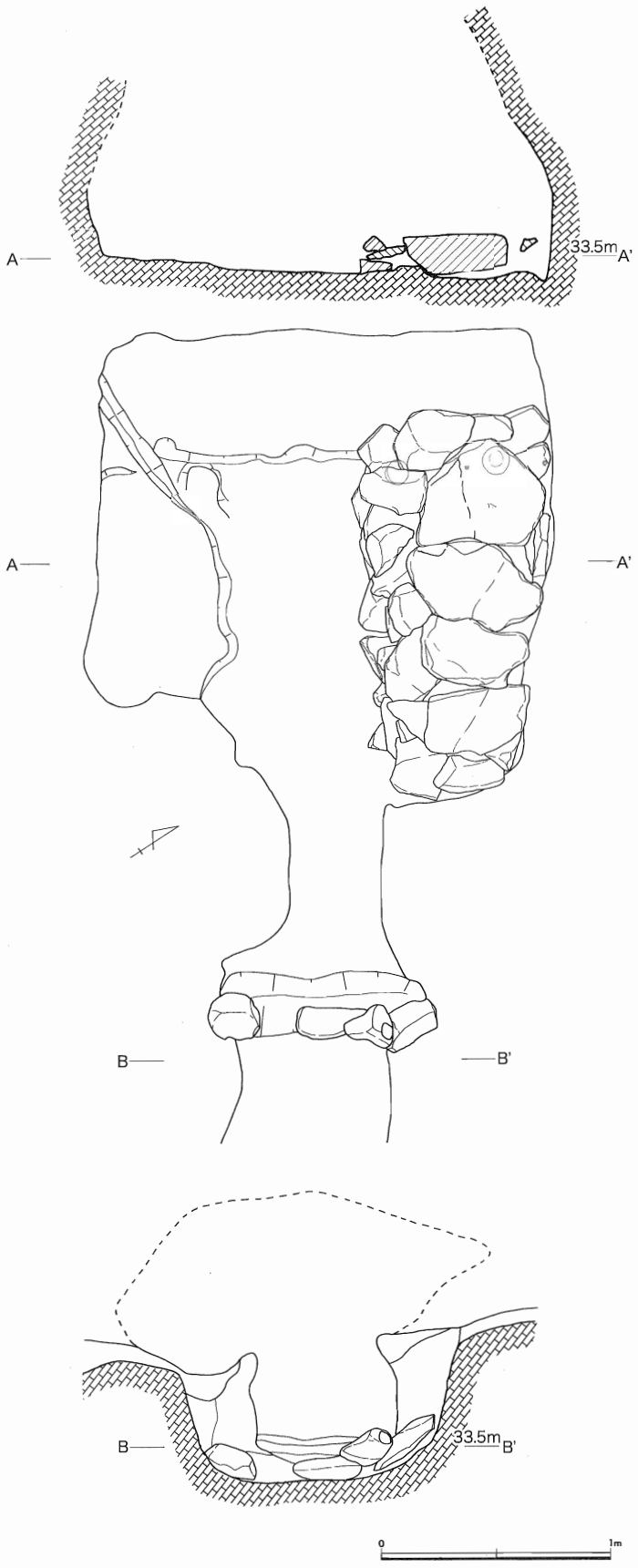
１は坏蓋で、口径は11.5cm、器高3.1cmである。外面の突帯は表現されず、口縁端部も丸くおさめられ、沈線などは施されない。調整は、ナデと回転ナデのみである。２は坏身で、口径10.0cm、器高4.1cmである。立ち上がりは短く、底部付近は回転ヘラケズリ調整が施される。また、底部外面には「×」字状のヘラ記号をもつ。３は高坏で、口径8.8cm、器高8.6cmの脚部が短くなるものである。坏部外面には３本の沈線が巡る。脚部には切り込み状の透孔が３方向に入り、端部は肥厚し



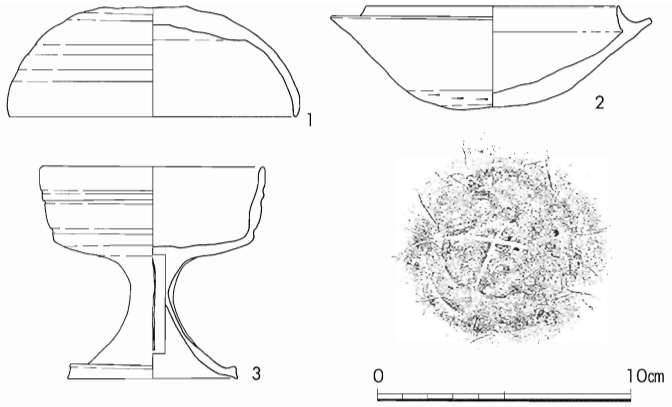
第64図　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴実測図（S＝１：60）

て外面に面をもつ。第67図は耳環である。１、２とも長径2.0㎝、短径1.8㎝で、断面形は隅丸長方形となる。

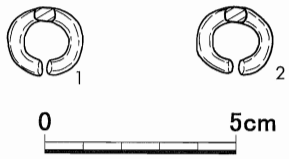
遺物の時期は、蓋坏の特徴などから出雲５期と考えられる。



第65図　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴閉塞石・屍床・遺物検出状況
（S＝１：30）



第66図　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴出土遺物実測図(1)
（S＝１：３）



第67図　屋敷古墳群Ⅱ区５号穴
出土遺物実測図(2)
（S＝１：２）

７号穴（第68図）

Ⅱ区の北側斜面で唯一検出された横穴墓である。北西に開口し、標高は墓道床面で約35mである。先述したとおり主軸は１号墳に向けられている。なお、工事中の発見であったため、玄室天井の一部が失われている。

墓道　長さ3.4m、幅0.7m～1.0mと比較的狭長で、玄門部側がやや幅狭となる長方形の平面形を呈する。床面はほぼ平坦である。

玄門部　長さ1.7m、幅0.5mで、高さは約１mと考えられる。床面は墓道よりも20cm高くなり玄室に向かって徐々に高くなっていく。墓道との境界付近には浅い掘り込みが認められ、閉塞用の施設と見られるが、閉塞石などは検出されていない。また玄門部入り口は上端が下端より狭くなり、正面からみると台形である。天井部は残存部の状況から平坦なものと推定される。

玄室　長さ1.8m～2.1m、幅1.5mで平面形は縦長の長方形に近いが、左側壁が右側壁に比べ短く、軸が墓道－玄門部より東に振る。床面は平坦であるが奥壁に向かって徐々に上っており、奥壁沿いでは前壁沿いより20cm程度高くなる。天井形態は、中央付近が失われているが軒線が比較的明瞭に残っており、妻入りの家形と推定される。

堆積状況　墓道と玄門部の境界付近にある12層は、その位置などから閉塞に伴う埋土ではないかと考えられる。なおこれを切って玄門部に堆積している５、７、13層については、天井からの崩落土である可能性が強いが、詳細は不明である。

墓道遺物出土状況（第69図）

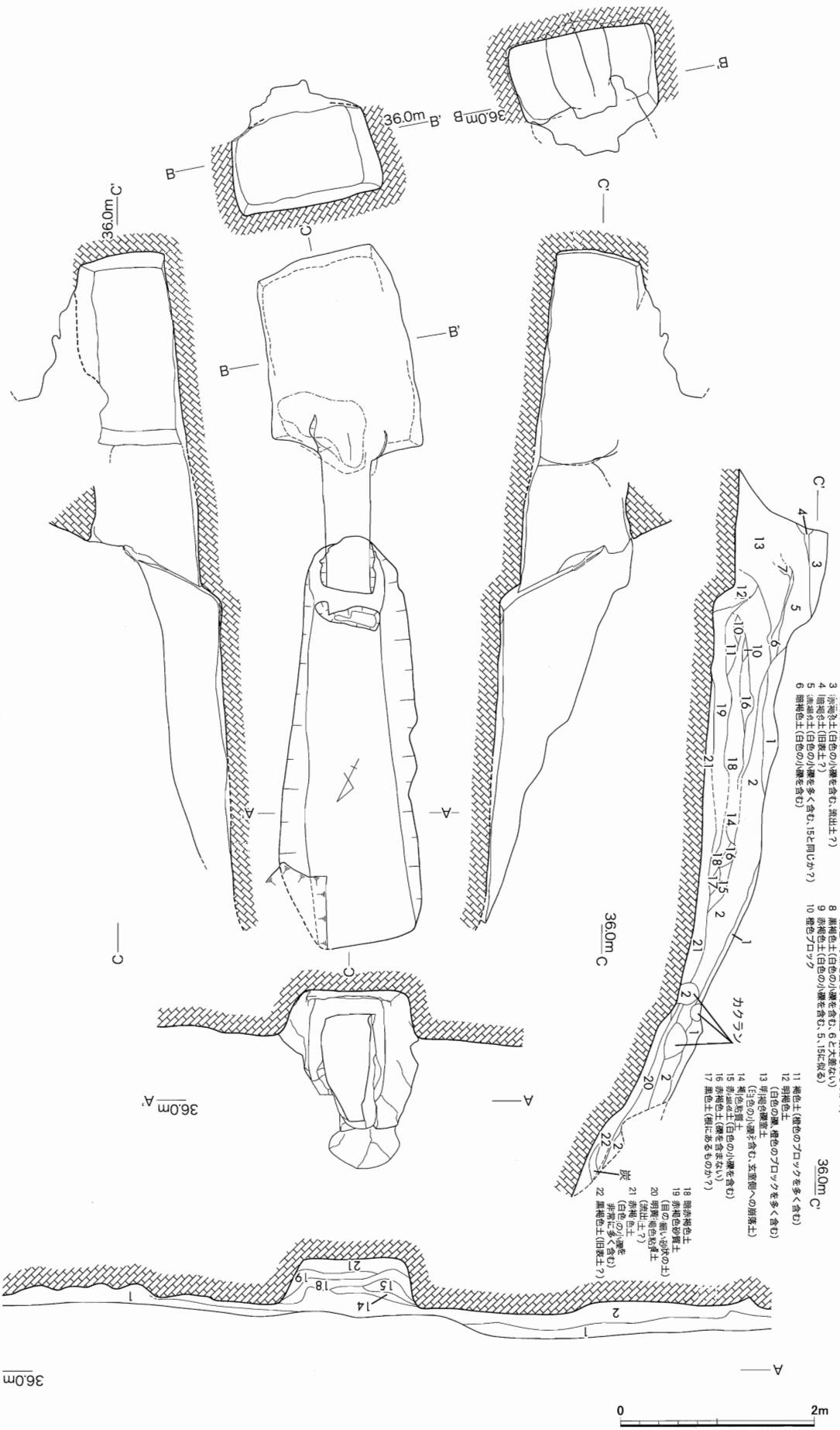
墓道では、埋土中から土師器の甕、須恵器の高坏、短頸壷が出土した。いずれも埋土の中でも高い位置からの出土で、この横穴墓に伴なうものかどうかは明らかではない。

玄室内遺物出土状況（第70図）

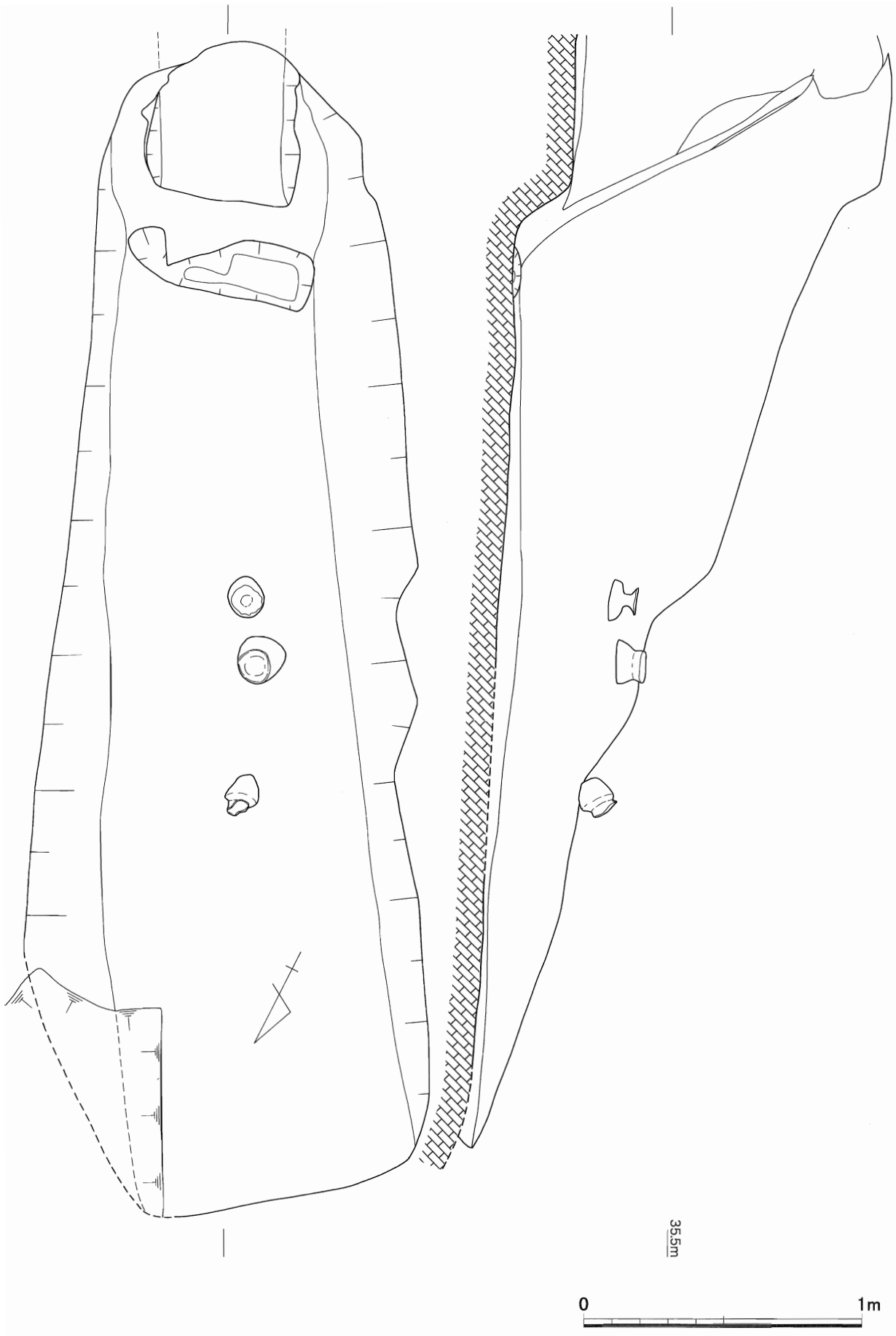
玄室内からは床面で須恵器、刀子のほか人骨が出土した。須恵器の坏身１点が玄室入り口付近で検出されたほかは、いずれも玄室右側の奥壁沿いからの出土である。人骨についての詳細は第10章を参照されたい。

７号穴出土遺物（第71図～第73図）

第72図は墓道から出土した遺物で、１は土師器甕の頸部付近である。内面頸部以下にヘラケズリが認められる。２は須恵器の高坏であるが、焼成が不良で風化が著しい。口縁部と脚端部を失なっ

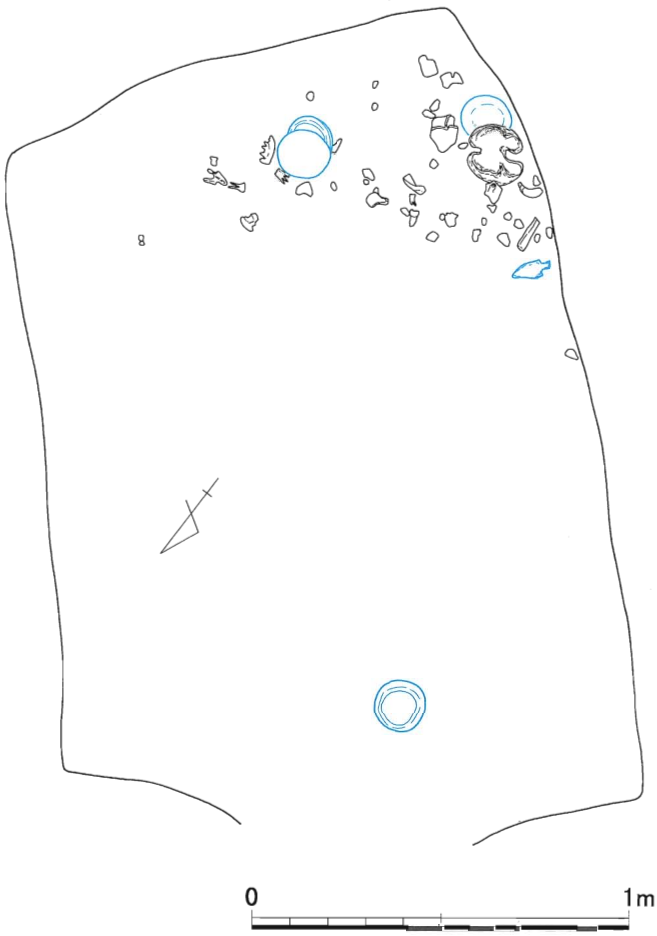


第68図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴実測図（S＝1：60）

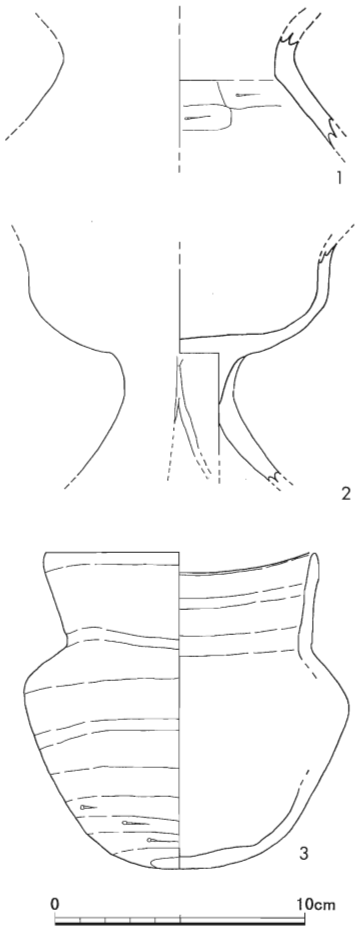


第69図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴前庭部立面図・断面図（S＝１：20)

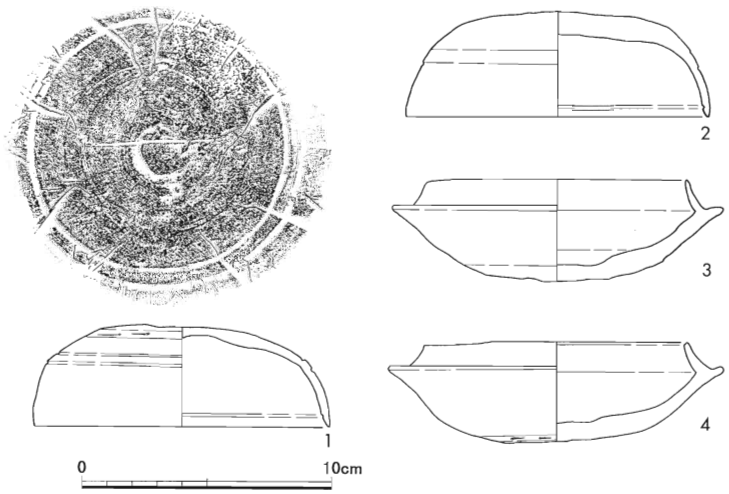
ており口径等は不明だが、三角形透かしを2方向にもつものである。３は須恵器の直口壷で焼き歪みがある。口径10.8cm、器高12.8cmで、外面底部付近は回転ヘラケズリが施される。第73図は玄室内出土の須恵器で、１・２は坏蓋、３・４は坏身である。１は口径11.8cmで、外面の突帯は２本の



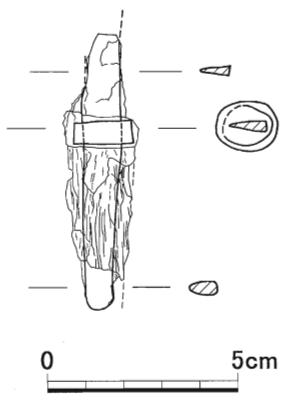
第70図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴遺物出土状況（S＝1:20)



第71図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土遺物実測図(1)（S＝１：３）



第72図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土遺物実測図(2)（S＝１：３）



第73図　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土遺物実測図(3)（S＝１：２）

沈線で表現され、口縁部内面には沈線を施す。回転ヘラケズリは外面天井部付近にのみ認められる。２は口径12.1㎝で、器形は１に近いが、沈線が浅く不明瞭になる。調整はナデと回転ナデのみが施される。３は口径10.4㎝で、調整は回転ヘラケズリを施さず、ナデで仕上げるものである。４は口径10.7㎝で器形は３に近いが、底部付近にヘラケズリが施される点が３と異なる。

第74図は刀子の茎部で、現存長7.2㎝である。刃部のほとんどを欠くが、鏃金具、木質が残っている。

遺物の時期は72－３が出雲４期に、73図の須恵器が出雲４期～５期に相当すると考えられる。

ＳＫ－０１（第74図）

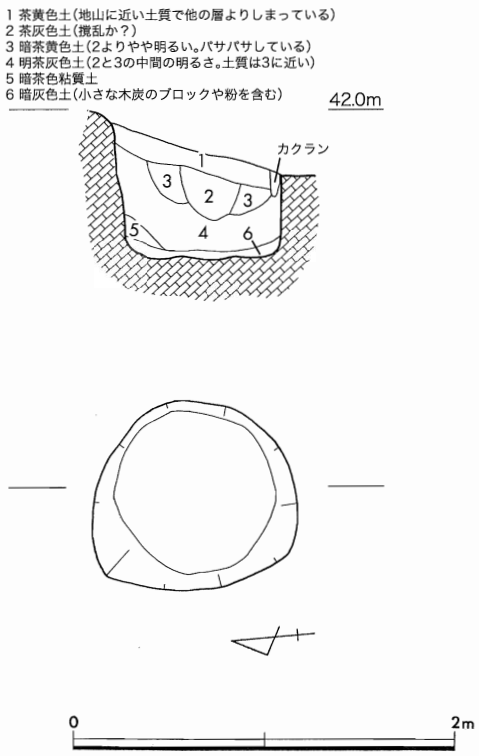
丘陵頂部からやや南に下った緩斜面で検出した土坑で、検出面の標高は約42mである。平面形はほぼ円形で、径1.6m、深さ0.7m～1.2mである。周囲にこれに関連するような土坑、ピットは存在せず、遺物も出土しなかったため土坑の時期・性格は不明である。

ＳＸ－０１（第75図）

南側斜面の中腹、丘陵頂部から約10m下った急斜面で検出した遺構で、標高は32m～34mである。形態から掘削途中で放棄された横口式炭窯と見られ、焚き口と横口７個を確認した。焚き口、横口とも地山を掘り込んでつくられている。なお、煙道に相当するものは検出できなかった。

焚き口は幅1.0m、奥行き1.5mで、前端から約１m付近に燃焼部に相当するトンネルが掘られている。トンネルは床面で幅0.5m、高さ0.5m～0.8mで２m掘り進んだ所で止まっており、焚き口に最も近い横口とつながっている。トンネル床面は焚き口より約10㎝高くなる。

横口は1.1m～1.5mの間隔を置いて掘り込まれる。横口は地山の風化もあり不整形だが、幅30㎝～50㎝、高さ20㎝～40㎝で、焚き口とつながる1個以外は約１m掘り進んだところで止まっている。横口の床面は焚き口から遠くなるほど標高が高くなり、焚き口床面と東端横口床面では1.3mの差がある。横口の前方は、一部に幅20㎝の狭いテラスが認められるほか傾斜が非常に緩やかになる部分が存在する。ただこの付近は山道が走っていた部分であるため、これらがどの程度まで炭窯に伴うものかは不明である。この遺構に伴う遺物は出土していない。

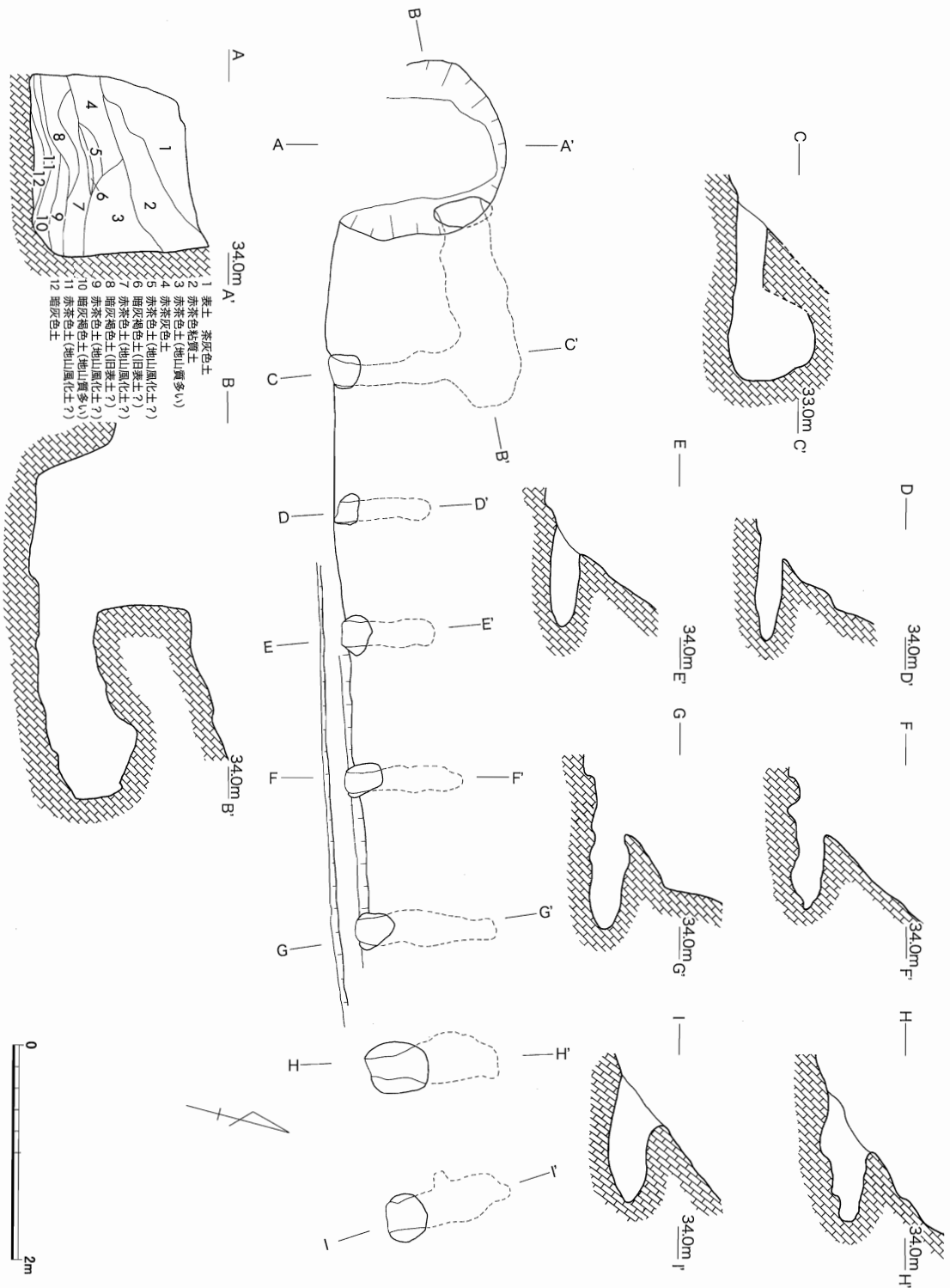


第74図　屋敷古墳群Ⅱ区ＳＫ－０１実測図
（Ｓ＝１：40）

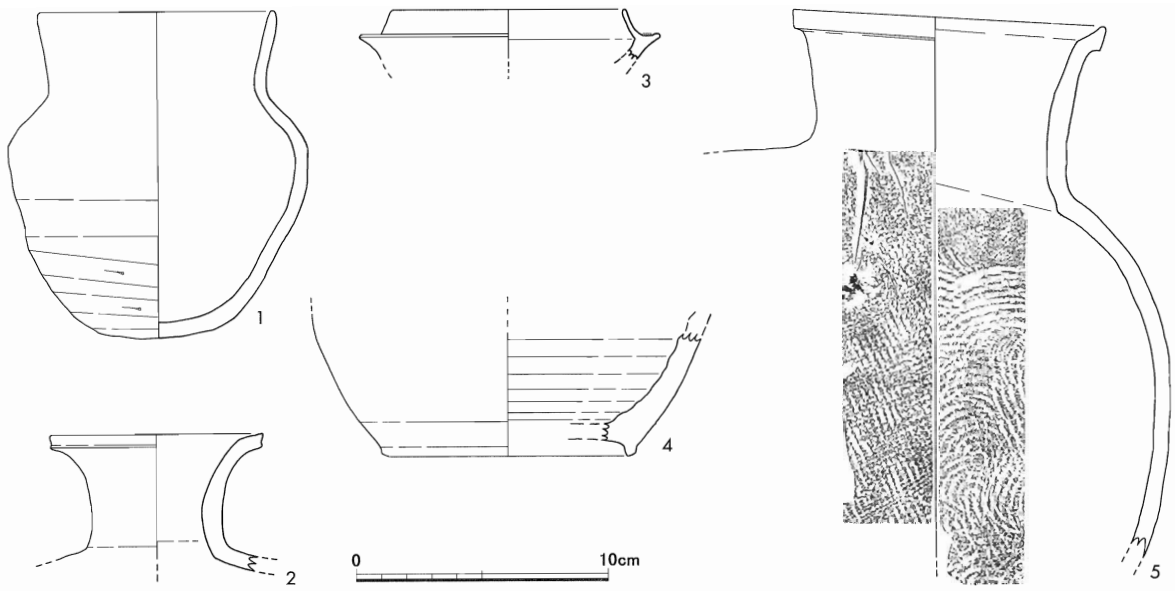
後背墳丘・遺構外出土遺物（第76図）

１は直口壷で、体部下半に回転ヘラケズリを施すものである。２は口縁部で口径8.4㎝であるが、器種の詳細は不明である。３は坏身の口縁部付近で、口径9.3㎝である。４は大形の坏ないし椀と見られる。底部には高台がつき、回転ナデ調整を施す。５は平瓶の破片で、口径12.8㎝を測る。

遺物の時期は出雲３期以降と見られる。



第75図　屋敷古墳群Ⅱ区ＳＸ－０１実測図（Ｓ＝１：60）



第76図　屋敷古墳群Ⅱ区後背墳丘・遺構外出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

第４節　小結

１．竪穴住居跡について

竪穴住居跡は計３基検出した。

時期を考えてみると、出土遺物が少なく断定はできないが、ＳＩ－０２（草田１期）→ＳＩ－０１（草田３期）→ＳＩ－０３（草田４期）という順になる。切り合い関係からＳＩ－０２→ＳＩ－０１となるのは確かである。なお、平面プランはどれも隅丸方形であるが、ＳＩ－０２の方が丸に、ＳＩ－０３の方が方形に近くなっている。

宍道町内では、弥生時代の集落遺構の検出件数が少なかったことから、当遺跡は弥生時代後期前半から後半までの一連の集落のあり方を考える上で重要な遺跡となった。とくに低地における弥生時代の集落遺構は皆無に等しく、また、宍道湖近くにある遺跡としても隣接する北ヶ市遺跡とともに重要な位置にある。

北ヶ市遺跡の竪穴住居跡は出土遺物から草田３期と考えられ、当遺跡と時期が重複することから一体の集落であったと考えられる。

他に特筆すべきことは、当地域における外周溝である。北ヶ市遺跡の竪穴住居跡にも外周溝が確認されており、その時期はいずれも草田３期である。他の時期の竪穴住居跡からは確認されていないことから、当地域での草田３期の特徴であったことがうかがえる。なお、いずれも当集落内では比較的大規模な住居址であり、草田３期に当集落が最も発展したとも思われる。

ただし、宍道湖南岸低地における弥生時代集落のデータが少なく、また、集落に伴う墓が確認されておらず、今後の資料の増加を待って再度検討すべきである。

２．横穴墓について

横穴墓は計７基を検出した。横穴墓の位置関係や形態から考えると、北側斜面で検出した７号穴は単独で存在し、３号穴と６号穴、４号穴と５号穴がそれぞれ群を構成していたと見られる。１号穴については４・５号穴に近接するが、羨道部や閉塞施設の構造が異なるため、４・５号穴とどの

ような関係にあったかは検討を要する。２号穴は３・６号穴に後出し、構造も異なることから群を構成するものではないと考えられる。

横穴墓の玄室形態については、天井部が崩落しているものが多く詳細は不明だが、平面形でみると３号穴、６号穴は小規模な縦長長方形を呈する。１号穴、４号穴、５号穴は両側壁の長さが異なったり、奥壁が幅狭になるなど不整形であるが、基本的には正方形を指向しているのではないかと考えられる。７号穴は縦長長方形で、妻入りの家形と見られることは先に延べたとおりである。次に、横穴墓の時期について見る。出土した須恵器から、６号穴が最も古く出雲４期と考えられ、７号穴が出雲４～５期、５号穴が出雲５期、１号穴が出雲５～６期に相当する。２号穴は、前庭部から出土した須恵器が２号穴の時期を示すとすると出雲４～５期である。

これらをまとめると、屋敷古墳群においては出雲４期では横穴墓の玄室平面形は縦長長方形で、出雲５期には縦長長方形と正方形指向の両方を造っていると言うことができる。この時期、出雲地方東部では石棺式石室の影響を受け、平入りの整正家形で平面形が正方形ないし横長長方形の玄室をもつ横穴墓が造られるようになるとされる[5]。Ⅱ区１・４・５号穴もこの影響をうけて正方形の玄室プランを指向したのではないだろうか。

一方、宍道町内に所在する横穴墓で土に穿たれたものは40基近いが、平入りであることが確実なものは２例しかない[6]。屋敷古墳群の横穴墓も全て土に掘られたもので、妻入りとなる可能性が高く、玄室平面形と玄室形態が関連を持つことは考えにくい。

宍道町では時期が明らかになっている横穴墓が少なく、玄室の形態によって出雲西部や山間部との比較がなされてきた。今回の調査で、時期が明らかな横穴墓の新資料を加えることができ、玄室平面形の差違には時期的な問題が関わっている可能性が見えてきた。しかし岩盤に穿たれる横穴墓と土に穿たれるものとの性格の違いや、石棺式石室など横穴式石室との関連などは、今後の資料の増加を待って再検討すべき課題である。

３．炭窯について

Ⅱ区南斜面で検出したＳＸ－０１は横口式炭窯と考えられ、何らかの理由で掘削途中に放棄されたと推定される。構造は、斜面を利用して等高線と平行に窯体をトンネル状に掘り、これに焚き口、横口が付属するものである。構築方法は、まず焚き口と横口を設け、横口の先端を通るように窯体を掘り進むものと考えられる。このタイプの炭窯に通有な、作業面とされる平坦面と窯体先端の煙道は、窯体の掘削後に設けるものと見られＳＸ－０１では確認できなかった。

ＳＸ－０１の時期については、遺構に伴う遺物がなく自然科学的な年代測定もできなかったため不明である。ただ、形態的には横口の間隔が１m以上と広い点、横口が小形化する点は横口式炭窯の中でも新しい要素と考えられる[7]。

島根県内における横口式炭窯の検出例は今までに３例あるが、いずれも宍道湖南岸地域で確認されている。この地域では、玉湯町玉ノ宮Ｄ－Ⅱ地区で７世紀末の製鉄炉が発見されている[8]ほか、鳥取県西部から島根県東部にかけての海岸部では鍛冶関連遺跡の発見も相次いでいる[9]。横口式炭窯は製鉄用炭の生産を行ったと考えられていることから当遺跡周辺にも製鉄関連の遺跡が存在する可能性が考えられる。一方、出雲地方山間部では、横口式炭窯は今のところ発見されていない。山間部と沿岸部で様相がどのように異なるのか、既に指摘されているように[10]、横口式炭窯が当地方で一般的かどうかも含め、検討していく必要があるだろう。

註　1）『宍道町史　史料編』　宍道町　1999

2）『南講武草田遺跡』 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　鹿島町教育委員会　1992
以下、草田○期と記したものは、この編年による。

3）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994
以下、出雲○期と記したものは、この編年による。

4）杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８

5）『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会　1987

6）『宍道町歴史資料集』古墳時代編Ⅰ　宍道町教育委員会　1993

7）たたら研究会委員　穴澤義功氏の御教示による

8）『出雲玉作跡保存管理計画策定報告書Ⅱ－玉ノ宮地区』玉湯町教育委員会　1990

9）『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡』一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12　島根県教育委員会　1996

10）『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡』一般国道９号松江道路（西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書４　島根県教育委員会　1997

表３　屋敷古墳群Ⅱ区遺物観察表

（単位：cm）

挿図番号	種類 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・焼成	備考
51-1	須恵器 坏（蓋）	12.3		3.7	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	１号穴羨道部　取上No.１ 980701	１mm弱の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	内側中央部に赤色の付着物あり
2	須恵器 坏（身）	11.5		3.7	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	１号穴羨道部　取上No.２ 980701	１mm大の砂粒を含む 淡灰色　良好	
3	須恵器 坏（身）	11.4		4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	１号穴玄室内（暗褐色土層中） 980701	１mm大の砂粒を含む 濃灰色　良好	底部に淡黄色、淡褐色の付着物あり
4	須恵器 直口壺	8.9		13.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ、ヘラおこし 内面：回転ナデ、指ナデ	１号穴羨道部　上層面 980623	１mm大の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
5	須恵器 直口壺	10.3		13.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	１号穴羨道部　取上No.６ 980701	２mmの砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
6	須恵器 高坏	14.7	8.7	9.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	１号穴羨道部　取上No.５ 980701	１mm小の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	方形透かし２方向１段
7	須恵器 高坏	16.4	9.5	9.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、指ナデ	１号穴羨道部　取上No.４ 9807010	２mm大の砂粒を含む 淡灰色　良好	切り込み状透かし２方向１段
8	須恵器 高坏	16.0	9.3	9.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、指ナデ	１号穴羨道部　取上No.３ 980701	１mm大の砂粒を含む 青淡灰色　良好	切り込み状透かし２方向１段
57-1	須恵器 坏（身）	11.0		4.3	外面：回転ナデ、ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	２号穴　PNo.９６　980714　２号穴①PNo.３４５　9807024	１mm大の砂粒を含む 淡灰色　良好	反転復元
2	須恵器 大甕（口縁）	19.8			外面：回転ナデ、タタキ痕 内面：回転ナデ、アテ具痕	２号穴③PNo.269，273，274，275，277，288，281，282　980723	１mm大の砂粒を含む 淡青灰色　良好	
3	須恵器 大甕（口縁）	22.0		58.1	外面：回転ナデ、タタキ痕 内面：回転ナデ、アテ具痕	２号穴②　980713、980714	１mm大の砂粒を含む 外面：淡灰色、内面：淡橙色　良好	反転復元
4	須恵器 大甕	16.4			外面：回転ナデ、タタキ後カキ目　内面：回転ナデ、アテ具痕	小横穴墓玄室茶色土・床直 980730　２号穴前庭部③ほか	１mm大の砂粒を含む 暗灰色　良好	外面に一部自然釉付着、一部磨滅
5	須恵器 大甕	21.4		45以上	外面：回転ナデ、タタキ後カキ目　内面：回転ナデ、アテ具を当てた後回転ナデ、アテ具痕	２号穴①　980723　２号穴② 980724	２mm大の砂粒を含む 青灰色　良好	焼き歪みあり
62-1	須恵器 坏（蓋）	10.1		3.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	６号穴　取上No.２　980805	１mm大の砂粒を含む 外面：淡青灰色、内面：淡灰色　良好	上面にヘラ記号「×」あり
2	須恵器 坏（蓋）	13.0		4.3	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	６号穴　取上No.８　980805	１mm大の砂粒を含む 淡茶灰色　良好	
3	須恵器 坏（蓋）	12.3		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	６号穴　取上No.７　980805	１mm大の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
4	須恵器 坏（蓋）	11.1		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	６号穴　取上No.１０　980805	１mm大の砂粒を含む 淡灰色　良好	上面にヘラ記号あり
5	須恵器 坏（身）	11.0		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	６号穴　取上No.４　980805	１mm大の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
6	須恵器 坏（身）	11.6		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	６号穴　取上No.５　980805	１mm小の砂粒を含む 淡灰色　良好	焼き歪みあり
7	須恵器 坏（身）	10.7		4.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	６号穴　取上No.６　980805	１mm弱の砂粒を含む 淡灰色　良好	一部反転復元 外面一部磨滅
8	須恵器 坏（身）	8.9		4.2	外面：回転ナデ、ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	６号穴　取上No.９　980805	１mm大の砂粒を含む 青紫灰色　良好	焼き歪みあり 外面に自然釉付着、表面磨滅

挿図番号	種類 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・焼成	備考
66-1	須恵器 坏（蓋）	11.5		3.1	外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	５号穴　取上No.１ 980801	１㎜小の砂粒を含む 淡灰色　良好	
2	須恵器 坏（身）	10.0		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ？ 内面：回転ナデ	５号穴　取上No.２ 980801	１㎜大の砂粒を含む 淡灰色　良好	底部にヘラ記号「×」あり
3	須恵器 高坏	8.8	6.7	8.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	５号穴　第４層　玄室内 980731	１㎜小の砂粒を含む 淡黄灰色　やや軟	切り込み状透かし３方向１段
71-1	土師器 短頸壺				風化？	７号穴前庭　取上No.７ 980904	２㎜大の砂粒を含む 橙褐色　不良	
2	須恵器 高坏				風化	７号穴前庭　取上No.８ 980904	１㎜大の砂粒を含む 淡灰色　不良	三角形透かし２方向１段
3	須恵器 直口壺	10.8		12.8	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラおこし痕　内面：回転ナデ、ナデ	７号穴前庭　取上No.６ 980904	１㎜位の砂粒を含む 淡青灰色　良好	焼き歪みあり
72-1	須恵器 坏（蓋）	11.8		4.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	７号穴　取上No.３ 980903	１㎜大の砂粒を含む 淡灰色　良好	焼き歪み　上面にヘラ記号、油脂分の沈着
2	須恵器 坏（蓋）	12.1		4.3	外面：回転ナデ、 内面：回転ナデ、ナデ	７号穴　取上No.4　980903	１㎜大の砂粒を含む 外面：淡青灰色、内面：淡黄灰色　良好	上面に油脂分の付着あり
3	須恵器 坏（身）	10.4		4.1	外面：回転ナデ、磨滅、回転ヘラケズリ　　内面：回転ナデ、ナデ	７号穴玄室内　取上No.１ 980903	１㎜大の砂粒を含む 外面：淡黄灰色、内面：淡青灰色　良好	
4	須恵器 坏（身）	10.7		4.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	７号穴　取上No.５ 980903	２㎜大の砂粒を含む 淡灰色　良好	かえりほぼ全周に重ね焼きの痕跡
76-1	須恵器 直口壺	9.1		13.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	後背墳丘　２号穴上 980723	１㎜大の砂粒を含む 淡灰色　良好	反転復元
2	須恵器 口縁 （提瓶？）	8.4			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	南斜面　中央土坑 980507	１㎜以下の白色の砂粒を含む　暗青灰色　良好	
3	須恵器 坏（身）	9.3			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	南西斜面	０．５㎜の砂粒を含む 淡青灰色　良好	
4	須恵器 椀（坏）		9.4		外面：回転ナデ、ナデ 内面：回転ナデ	南斜面・南北トレンチ東側　表土　980526ほか	１㎜弱の砂粒を含む 淡灰色　良好	
5	須恵器 平瓶	12.8			外面：回転ナデ、タタキ目 内面：回転ナデ、アテ具痕	南斜面・南北ベルト③以西表土～茶色土　980601外	１㎜大の砂粒を含む 淡灰色　良好	

（単位：cm）

挿図番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	刃部厚	出土場所・年月日	備考
52-1	鉄鏃	(10.5)	7.0	3.2	0.25	１号穴　No.４	
2	鉄鏃	(5.4)				１号穴　前庭部　980608	
59	刀子	(7.7)	(2.6)	1.1	0.4	３号穴　前庭　埋土　980724	
73	刀子	(7.2)	(2.2)	0.8	0.2	７号穴　No.２　980903	

（単位：cm）

挿図番号	器種	長径	短径	断面径	出土場所・年月日	備考
67-1	耳環	2.0	1.8	長径0.6　短径0.4	５号穴　耳環１　980801	重量5.08ｇ
2	耳環	2.0	1.8	長径0.6　短径0.4	５号穴　耳環２　980801	重量5.11ｇ

第４章　鋤崎古墳群

第１節　調査の経過と概要

鋤崎古墳群は、八束郡宍道町大字佐々布2331外に所在する。宍道町西部を流れる江尻川東岸に位置し、西へのびる丘陵が北西と南西へ分岐する付近の丘陵頂部から斜面にかけて立地する。丘陵の標高は、調査区内の最高所で42mである。周辺の遺跡は第２章に記したとおりであるが、北西にのびる丘陵の先端近くには前方後方墳１基、方墳３基が存在し、遺跡の名称は本来この古墳群につけられていたものである。また、第３章に掲載した屋敷古墳群は、北西約100mに位置する。

この遺跡は宍道町教育委員会により分布調査と範囲確認調査が行われ、丘陵頂部に存在する２つの高まりが古墳と考えられていた。

発掘調査は平成10年月11月６日に着手した。２つの高まりはいずれも古墳ではなかったが、北側のものについては、横穴墓の後背墳丘と見られる。ほかに、北西斜面で１基、西斜面で２基、南側の丘陵先端付近の斜面で１基、計４基の横穴墓を検出し、12月25日に調査を終了した。

全面調査の方法は、人力による表土掘削の後、人力による掘り下げ・清掃を行って遺構を検出した。遺物の取り上げ、実測は調査員による実測と遺跡調査システム「ＳＩＴＥ」を併用し、後者については調査員による補正を行った。

調査後の遺跡全体写真撮影は、リモコンヘリコプターにより実施し、調査後の調査区地形測量についても、リモコンヘリコプターによる空中写真をもとに図化を行った。

第２節　調査の結果

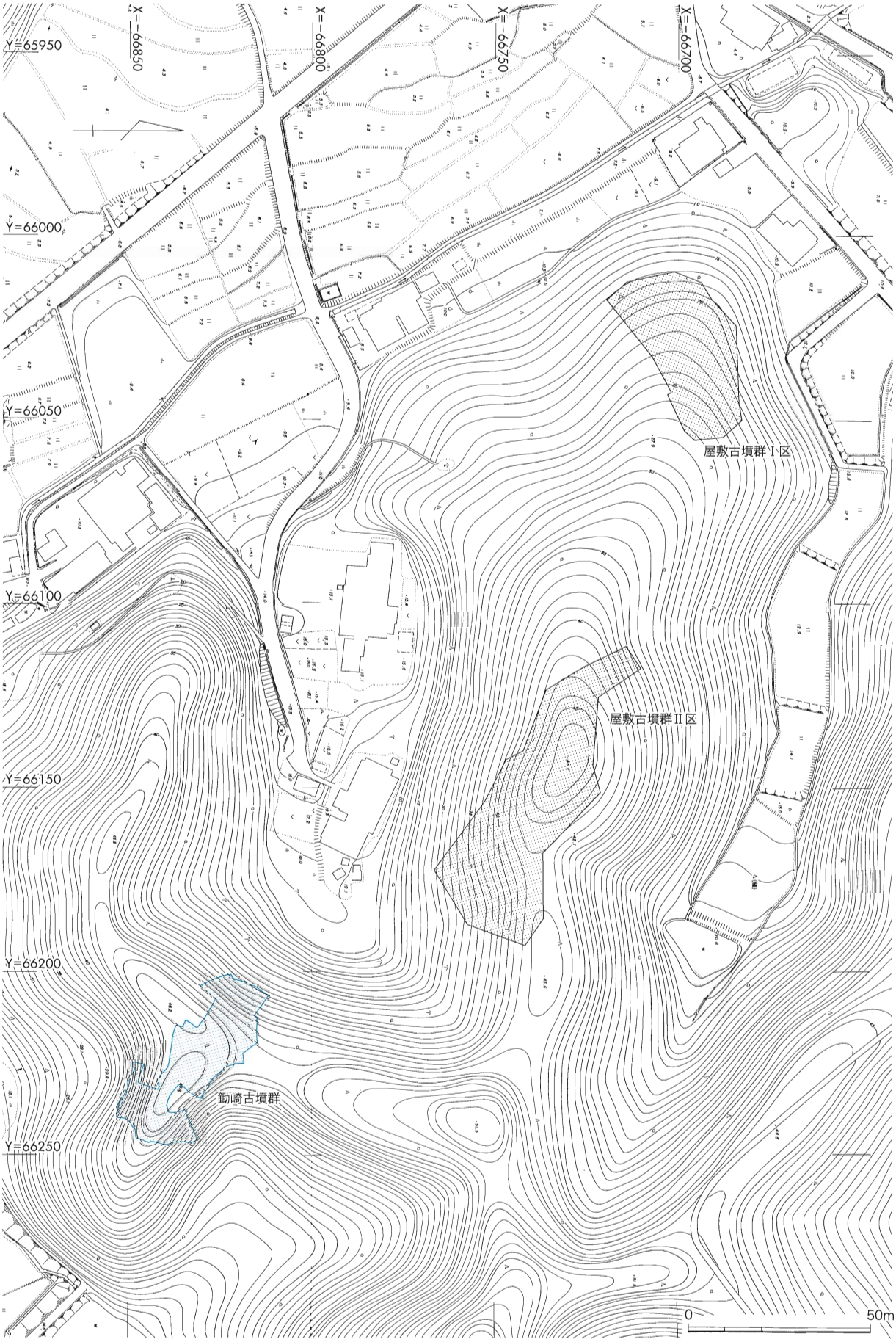
後背墳丘（第79・80図）

調査区北西部の丘陵上に存在する２基の高まりのうち、北西側のものは最高所で標高約42mをはかる。平面形は不整形な四角形で、当初約10m×５m、高さ約１mの古墳とみられた。地山面まで掘り下げて主体部の検出と墳端の確認をおこなったが、主体部は検出できなかった。墳端については、一部でテラス状の部分が確認されたものの、人為的な加工かどうかは不明であり、古墳ではないと判断した。一方この高まりの下方となる北西斜面には後述する鋤崎1号穴が検出されており、これとの位置関係や須恵器の出土状況から、１号穴を主体とする不整形な後背墳丘であると判断した。南東側の高まりについては、後世に山道がつけられた際に北西側およそ１／２が１m以上掘り下げられていた。この断面の土層観察では、撹乱がひどく盛り土や周溝などは認められなかった。この後、地山面まで掘り下げたが主体部や遺物などは認められず、自然地形と判断した。

後背墳丘周辺で出土した須恵器は計７点で、完形品やそれに近いものが多い。器種は坏蓋と坏身で、墳丘南西側から坏蓋２点（第81図－２・３）と坏身１点（第81図－５）、墳丘北東端の尾根筋から斜面へ移行する付近から坏蓋と坏身をそれぞれ１点（第81図１・４）を検出している。

後背墳丘周辺出土遺物（第81図）

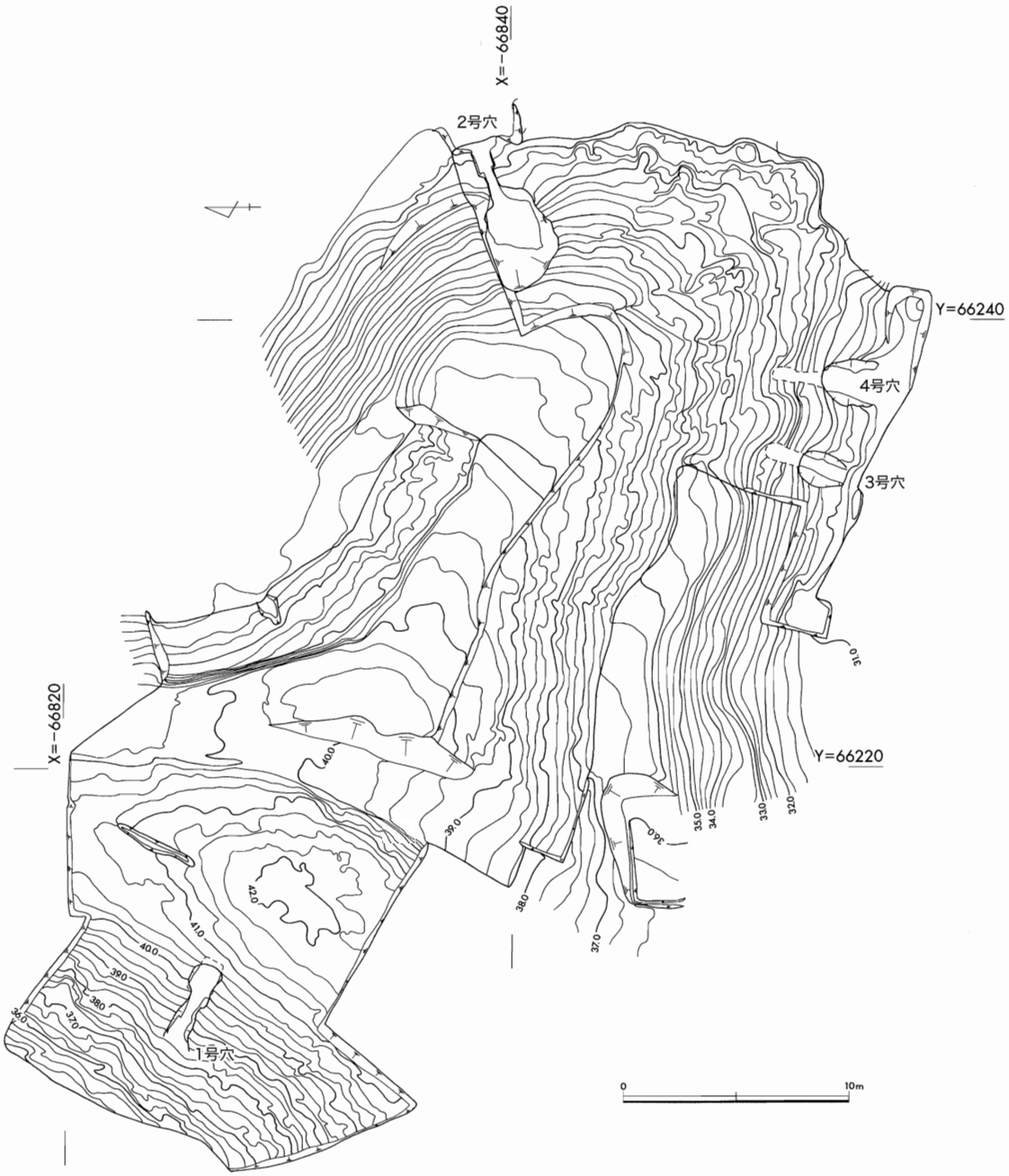
１～３は坏蓋である。１は口径12.7㎝、器高は4.1㎝で、体部と天井部の境界付近に２本の沈線を施し、突帯を表現している。口縁端部は段状になっており、回転ヘラケズリが天井部付近にのみ施される。２は口径12.6㎝、器高4.0㎝で、突帯の表現、回転ヘラケズリの位置など調整の手法も



第77図　鋤崎古墳群調査区位置図

ほぼ１と同様であるが、口縁端部のやや上位に沈線を巡らす点が異なっている。３は天井部付近の破片で口径、器高とも不明であるが、突帯の位置が１や２と比較して天井部に近い印象を受ける。突帯の表現方法、回転ヘラケズリの位置などは１・２と同様で、天井部外面には「×」状のヘラ記号をもつ。

４・５は坏身である。４は口径10．6cm、器高4.1cmで、立ち上がりは内傾し、端部を丸くおさめるものである。内外面とも回転ナデで調整され、回転ヘラケズリは認められない。５は口径11.2cm、器高4.1cmで、全体に器壁が厚く体部は内湾しながら口縁部に至る。体部は回転ナデで調整され、底部外面は回転糸切りの痕跡が残る。遺物の時期は、1～４は大谷編年の出雲４期[1)]、５は出雲８期に相当すると考えられる。



第78図　鋤崎古墳群調査後地形測量図（S＝１：300）

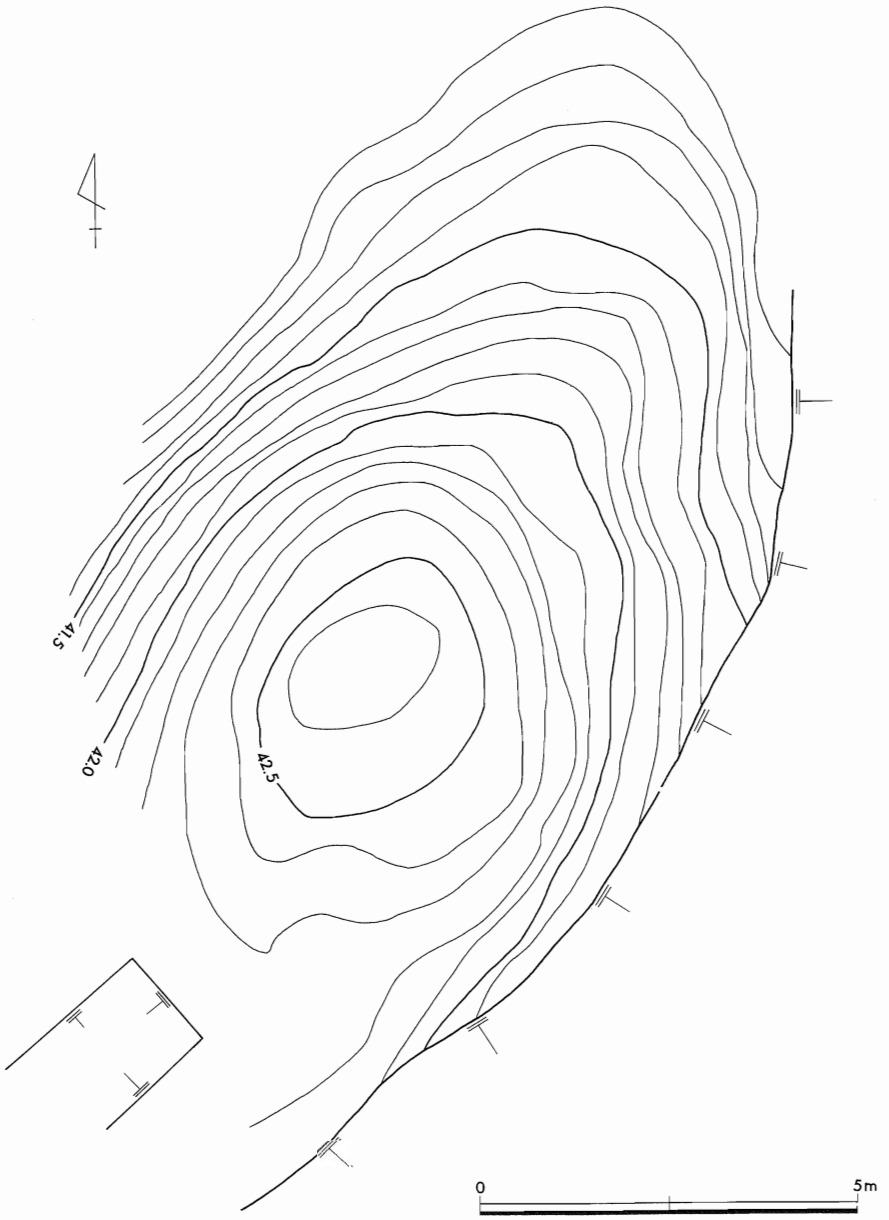
横穴墓

1号穴（第82図）

1号穴は調査区の北西側斜面で検出した横穴墓で、先に述べたように後背墳丘をもつ。丘陵頂部に近い高さに掘り込まれ、床面の標高は38.5mで今回検出された横穴墓の中では特に高い位置にある。後背墳丘頂部との標高差は約5mである。今回、北西側斜面で検出された横穴墓はこの1基のみで、単独で存在するものである。開口方向は北西である。

前庭部　床面で幅1.1m～0.7m、長さ1.2mで、先端部はある程度流出していると見られる。平面形はほぼ長方形であるが、先端に行くにつれて床面は低く傾斜し南側の壁が南へ大きく開く。

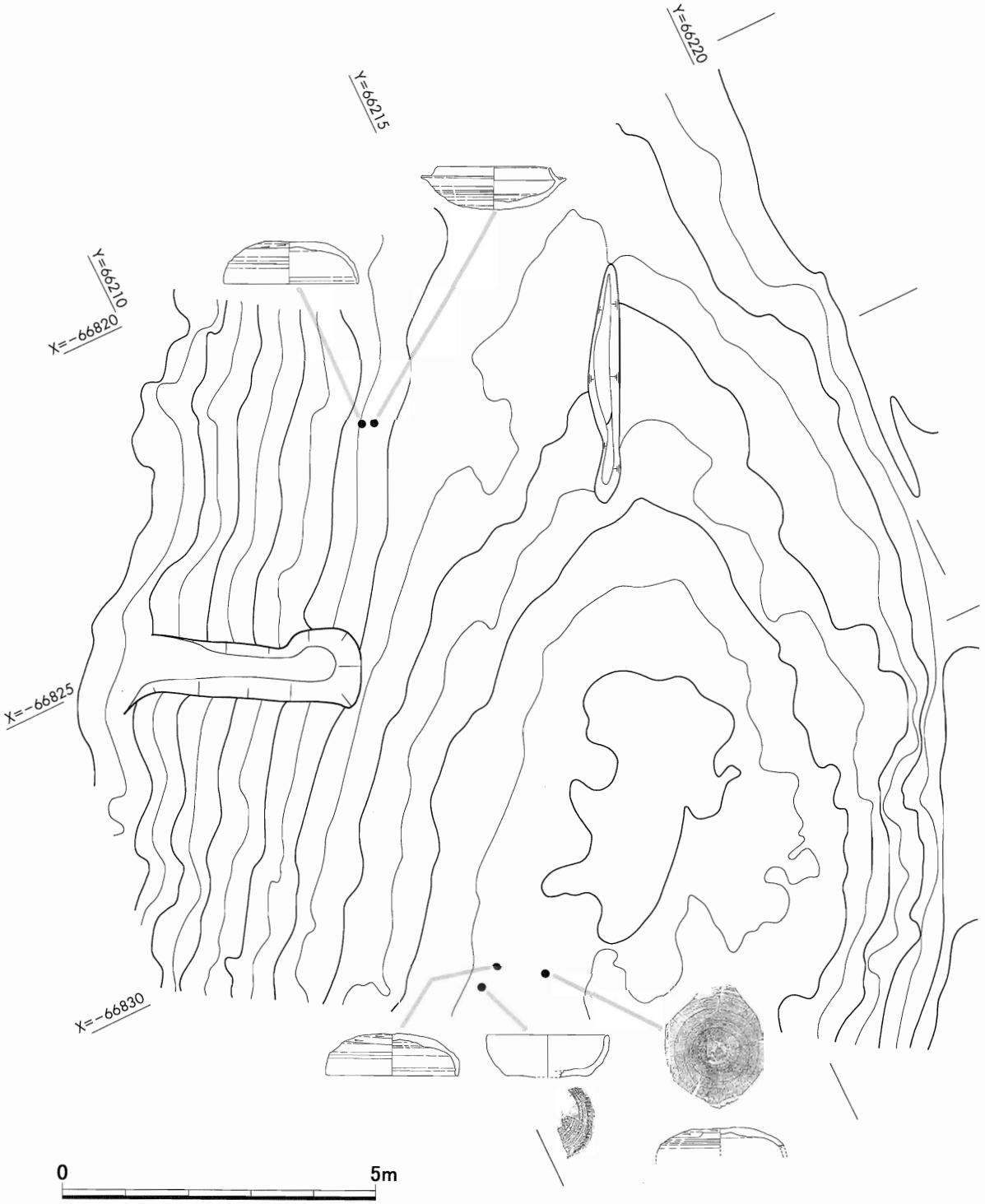
羨道部　幅は0.5m～0.6mで、玄室側でやや広くなる。長さは1.5m、高さは入り口付近が破損して



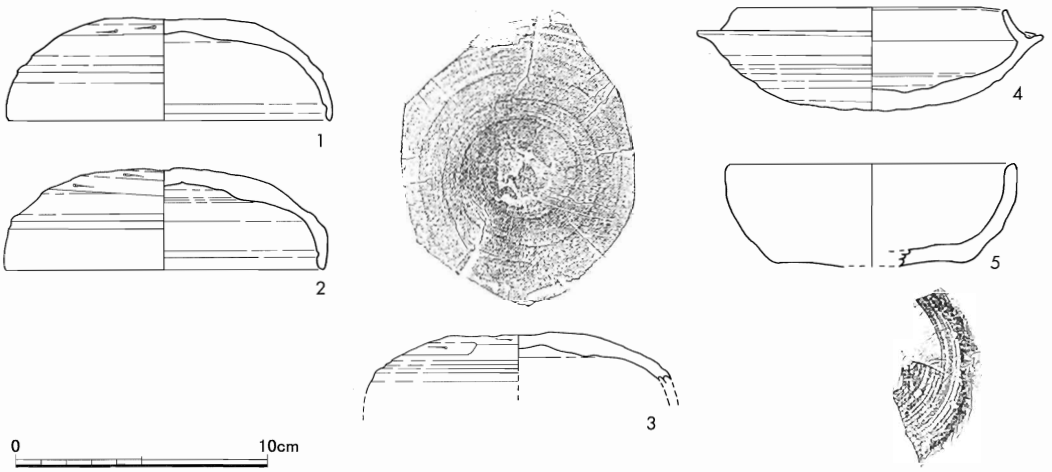
第79図　鋤崎古墳群後背墳丘調査前測量図（S＝1：100）

いるが0.6m前後であったと見られる。横断面は半円形で、床面は前庭部との境界で約10㎝高くなりさらに玄室に向かって徐々に徐々に高くなる。閉塞用の刳りこみや閉塞石などは検出できなかった。

玄室　前庭や羨道部の主軸とわずかに異なる主軸をもつ。幅は1.1m～0.8mで奥壁側がわずかに幅が狭くなり、長さは1.9mでほぼ長方形の平面形を呈する。高さは天井部の剥落が進んでおり、判然としないが１m程度と考えられる。棟線、軒線は確認できず、玄室形態は特定できない。



第80図　鋤崎古墳群後背墳丘調査後地形測量図・出土遺物位置図（S＝1：100　遺物S＝1：6）

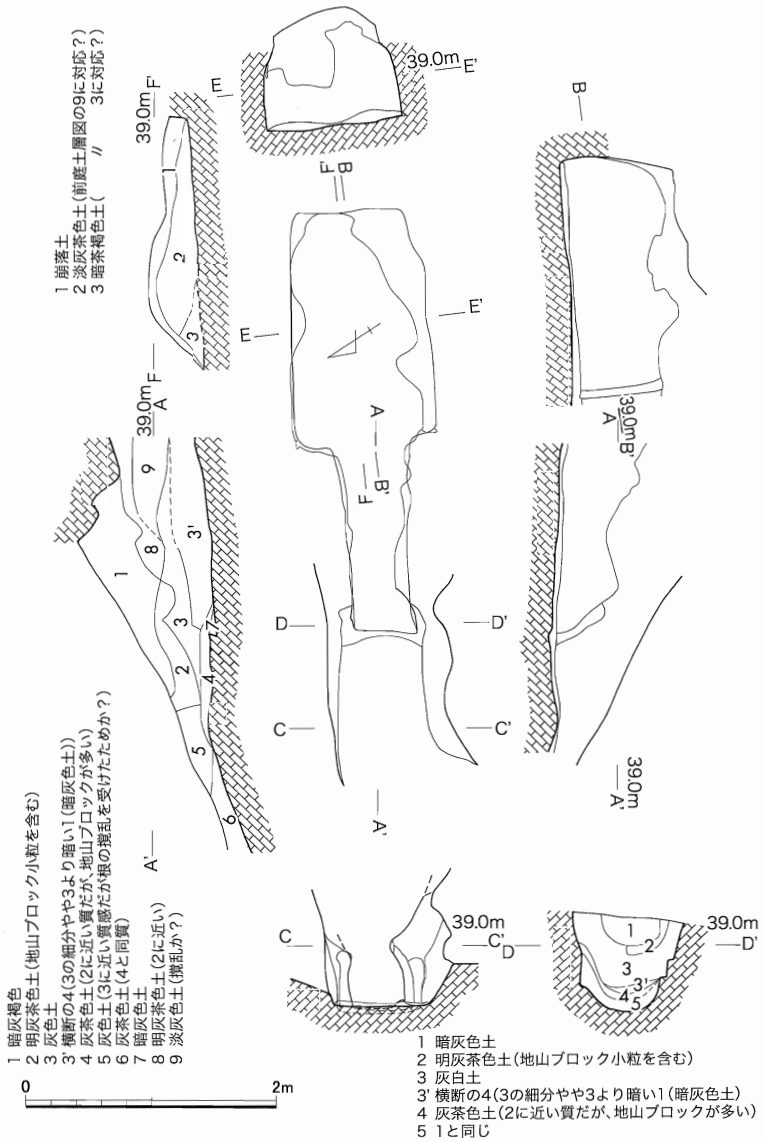


第81図　鋤崎古墳群後背墳丘出土遺物実測図（S＝1：3）

土層堆積状況　羨道部の状況などから、盗掘を受けた可能性は高く、2層及び8層の上面が侵入面と見られる。また玄室内の土層は、1層が天井から剥落した土の堆積と見られ、2層は前庭部の9層、3層は同じく3'層に対応すると判断した。なお、2層中からは須恵器が出土している。

玄室内遺物出土状況
（第83図）

須恵器が3点出土した。2層と3層は土をふるいにかけたが、他の遺物は検出できなかった。須恵器は2層から出土し、床面から5cm～15cm浮いた状態で検出された。出土状況から二次的に動かされており、追葬の可能性もあるが土層も勘案すると盗掘の影響によることも考えられる。



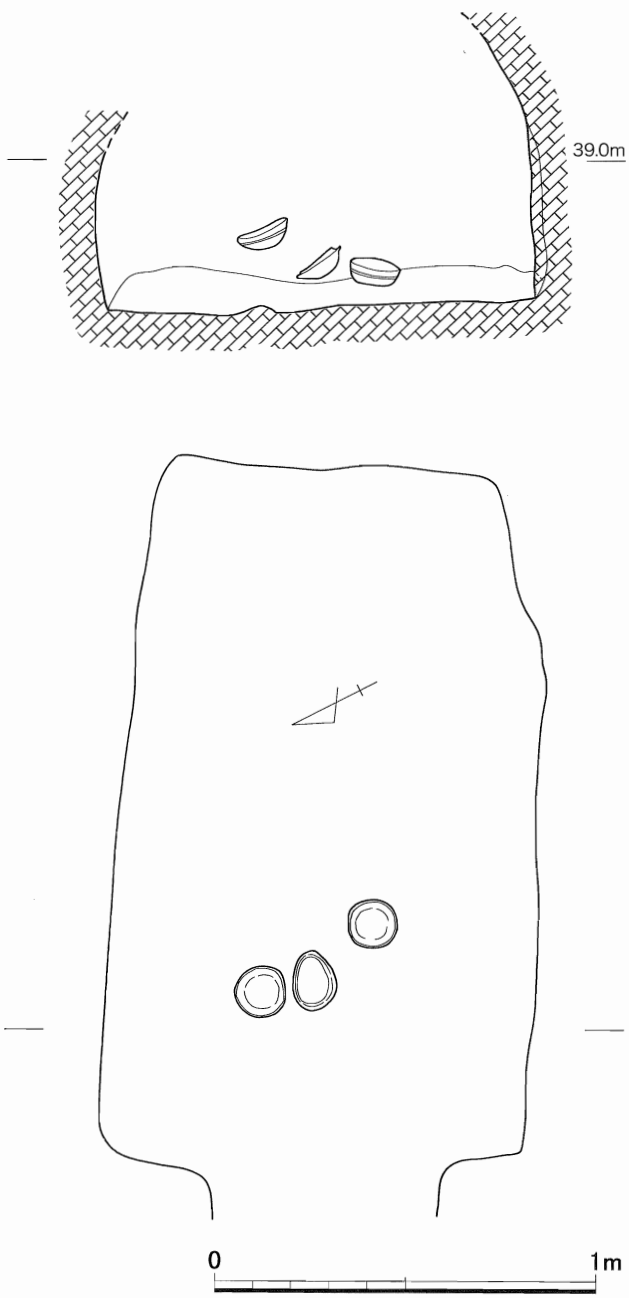
第82図　鋤崎古墳群1号穴実測図（S＝1：60）

前庭部遺物出土状況（第84図）

前庭部先端付近から前方の斜面にかけて、須恵器、土師器、石製紡錘車などが出土した。主として前庭部の５層に含まれているが、土器が確認された時点で既に１層をある程度掘り下げていたため、１層と５層の切り合い関係は不明である。前庭部の先端付近の床面から約10cm浮いた位置に、須恵器の蓋坏、短頸壷、瑞、土師器の高坏などが積み重なって出土し、斜面下方側に50cm離れて提瓶が１点検出された。出土状況から二次的に移動しているのは明らかであるが、いつの時点で動かされたかのは不明である。このほか、耳環１点が羨道部との境界付近の壁際から出土している。これは盗掘時に移動された可能性が高い。

１号穴出土遺物（第85・86図）

１・２が坏蓋、３・４が坏身である。１は口径13.0cm、器高4.0cmで、体部と天井部との境界付近に２本の沈線を巡らせ、口縁端部は丸くおさめる。天井部付近のみ回転ヘラケズリを施す。２は口径12.8cm、器高4.1cmで、突帯が沈線１本のみで表現される。口縁部内面のやや上方に沈線を巡らせ、ヘラケズリは天井部の一部に施される。３は口径10.4cm、器高4.2cmで、たちあがりは大きく内傾する。回転ヘラケズリを底部の狭い範囲に施す。



第83図　鋤崎古墳群１号穴玄室内遺物出土状況
（S＝１：20）

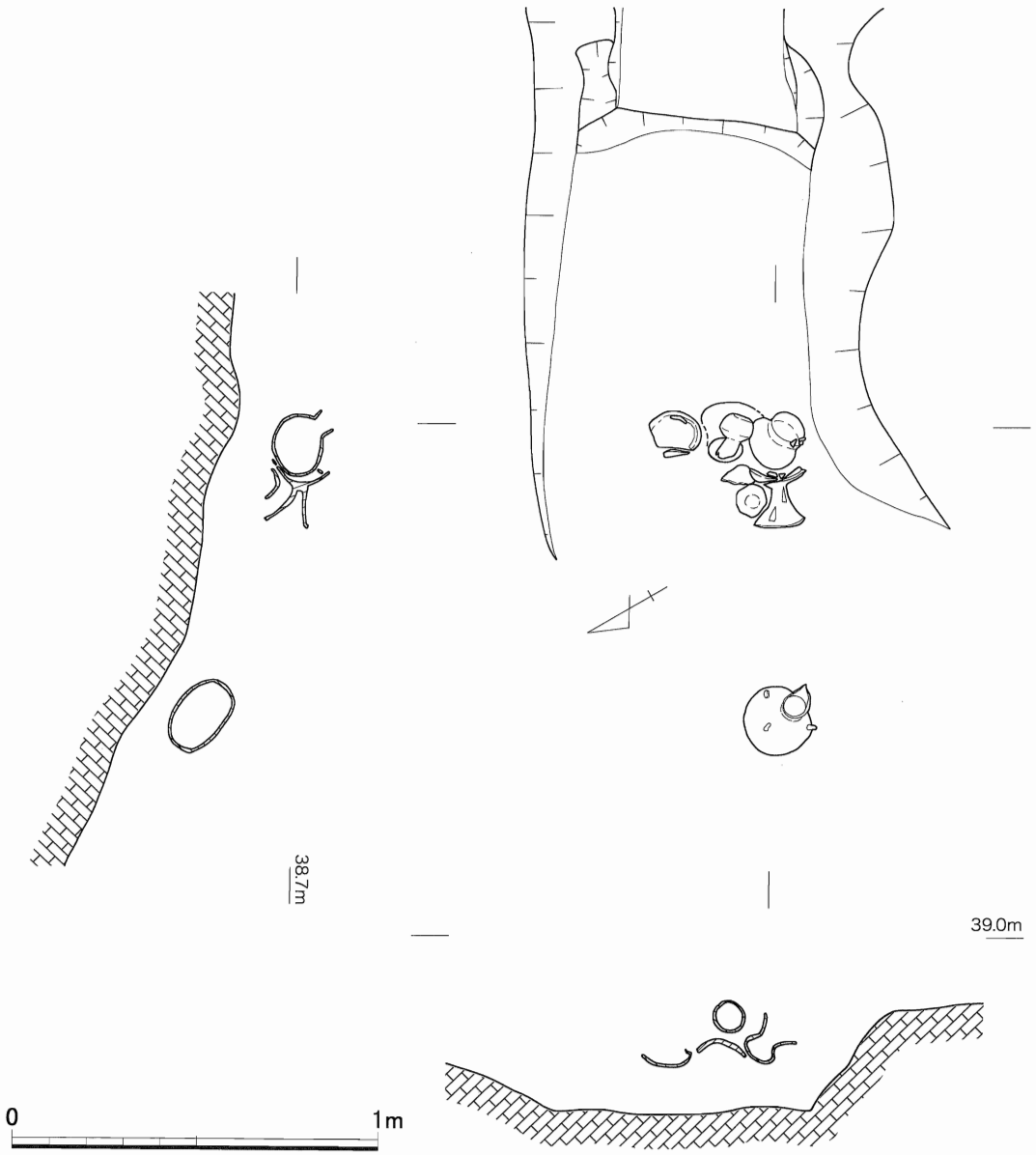
４～10は前庭部で出土した土器で、４～７・10は須恵器、８・９は土師器である。４は坏身で口径9.8cm、器高4.2cmで器形、調整などの特徴は３と同様である。５は瑞で、平底の底部をもち底径は5.1cmである。頚部には波状文と沈線、体部には刺突文が施される。調整は体部上半はカキ目、下半は回転ヘラケズリである。６は直口壷で、口径11.1cm、器高14.1cmである。口縁部～体部最大径付近は回転ナデ、体部の中位はカキ目、体部の下位～底部は回転ヘラケズリで調整する。７は有蓋高坏で、口径は12.7cm、底径13.1cm、器高は15.3cmである。立ち上がりは内傾し端部は丸くおさめるもので、脚は直線的にのびる。透かしは三角形の２段３方向で、上段と下段を互い違いに

入れ、間に１本の沈線を施す。調整はナデと回転ナデである。８・９は高坏で、９の底径が10.1cmを測るほかは、法量は不明である。器形は８・９とも同様で、器壁が厚く、坏部は口縁に向かって直線的にのびる。脚は端部で大きく外反し、ほぼ水平になる。調整は丁寧なナデが施され、器表には赤色の顔料ないしは化粧土が塗布されていたと見られる。10は提瓶である。口径は10.1cm～11.0cmで、端部外面には面をもつ。胴部の片面は不明瞭だがやや偏平になっている。把手はつぶれ気味だが、環状で比較的しっかりしたものである。

86－1は耳環で、長径2.3cm、短径2.2cmで断面径は楕円形である。銅環に鍍金されている。２は石製紡錘車で、径3.3cm、厚さ1.6cmで、孔の径は0.6cmである。上面から側面にかけて面取りされ、丁寧な研磨で仕上げられる。j遺物の時期は、玄室内出土の蓋坏が出雲４期、前庭部出土のものは出雲３期～４期と見られる。

２号穴（第87図）

２号穴は南東にのびる丘陵先端の斜面で検出された。横穴墓が検出された高さは床面で約33mで、

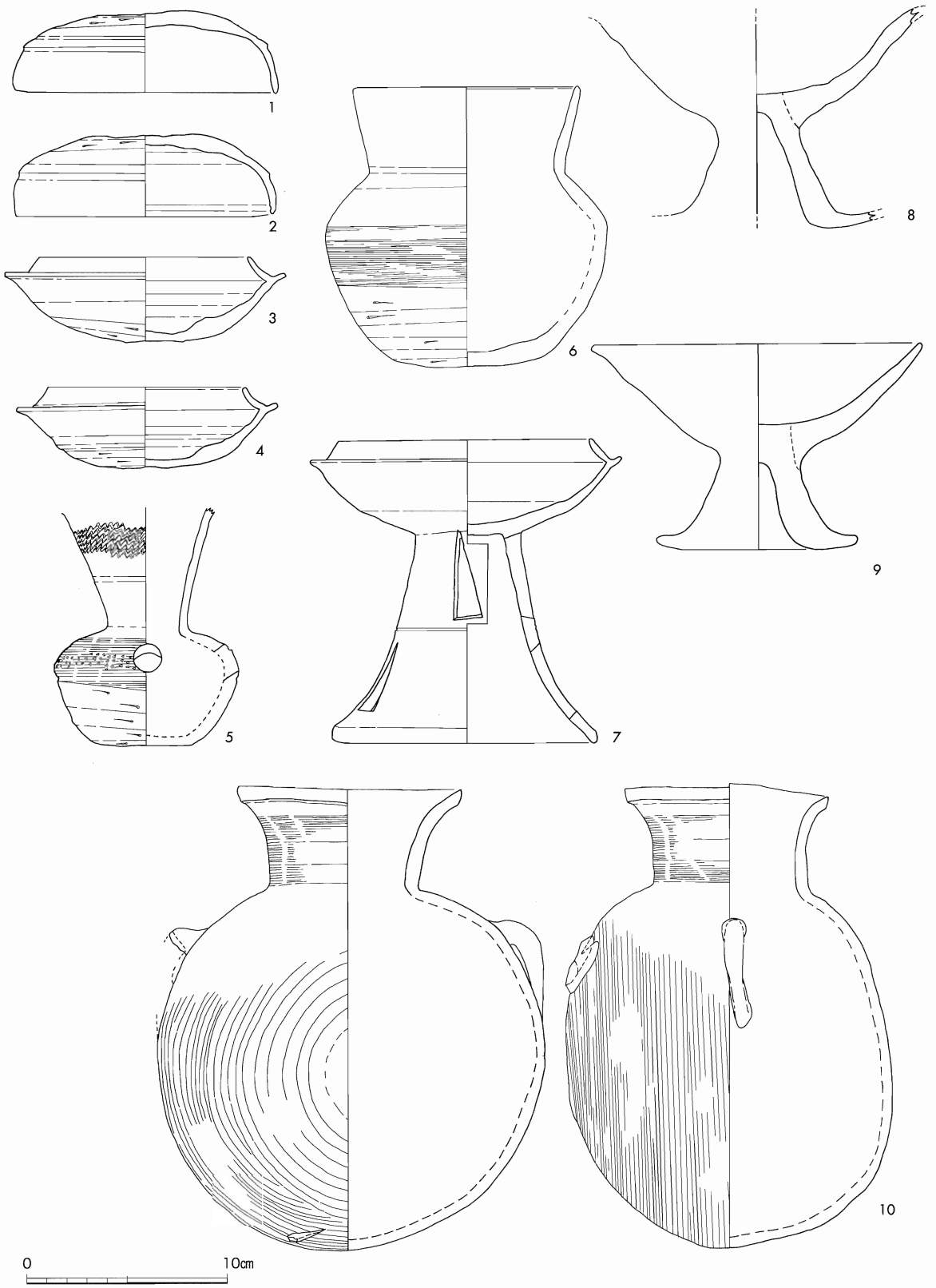


第84図　鋤崎古墳群１号穴前庭部遺物出土状況（S＝１：20）

丘陵頂部との標高差は約６ｍである。横穴墓の標高は後述する３・４号穴と近いものの開口方向や規模などは大きく異なり、単独で存在すると考えられる。開口方向は北東である。

前庭部　床面で幅0.8m、長さ1.0mである。平面形はほぼ長方形である。

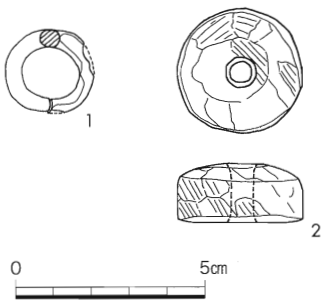
羨道部　幅は0.4m～0.6mで、玄室側でやや広くなる。長さは1.6m、高さは天井部が完全に崩落し



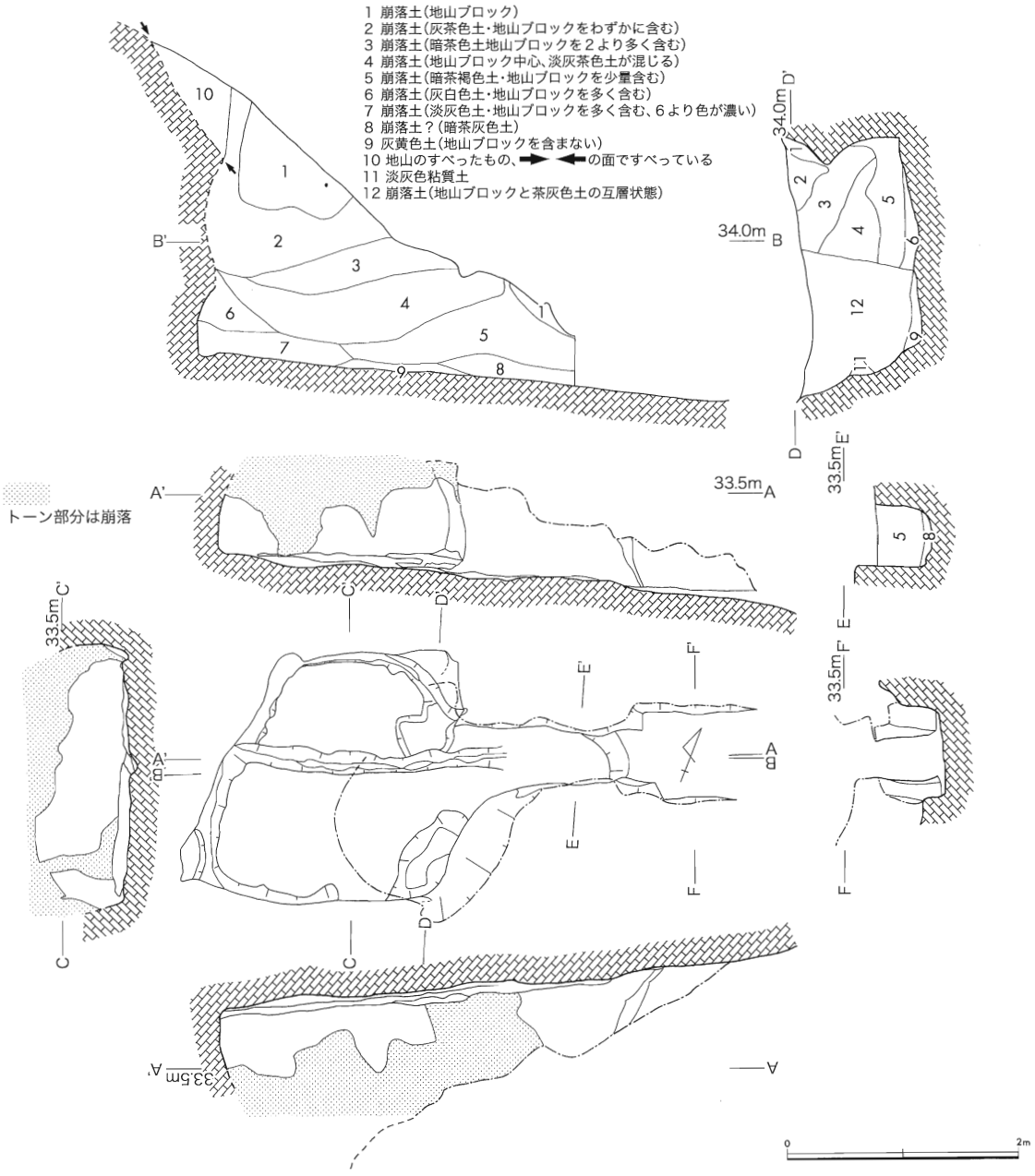
第85図　鋤崎古墳群１号穴出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１：３）

詳細は不明だが、0.6ｍ以上あったとみられる。床面は前庭部より約10㎝高いが明瞭な段はもたない。閉塞石などは検出できなかった。

玄室　平面形はかなり不整形な四角形となっている。規模は前壁側で幅2.1m、奥壁側で幅2.2mであるが、玄室の長さは、左右の側壁沿いで0.7mの差があるため、奥壁が前壁に対して大きく傾く。羨道と玄室との境界、各壁の境界も一部を除いて不明瞭である。床面には幅10㎝～20㎝の溝が設けられ、屍床を意識したものとみられる。天井部崩落のため、高さ及び形態は不明である。



第86図　鋤崎古墳群１号穴出土遺物実測図(2)

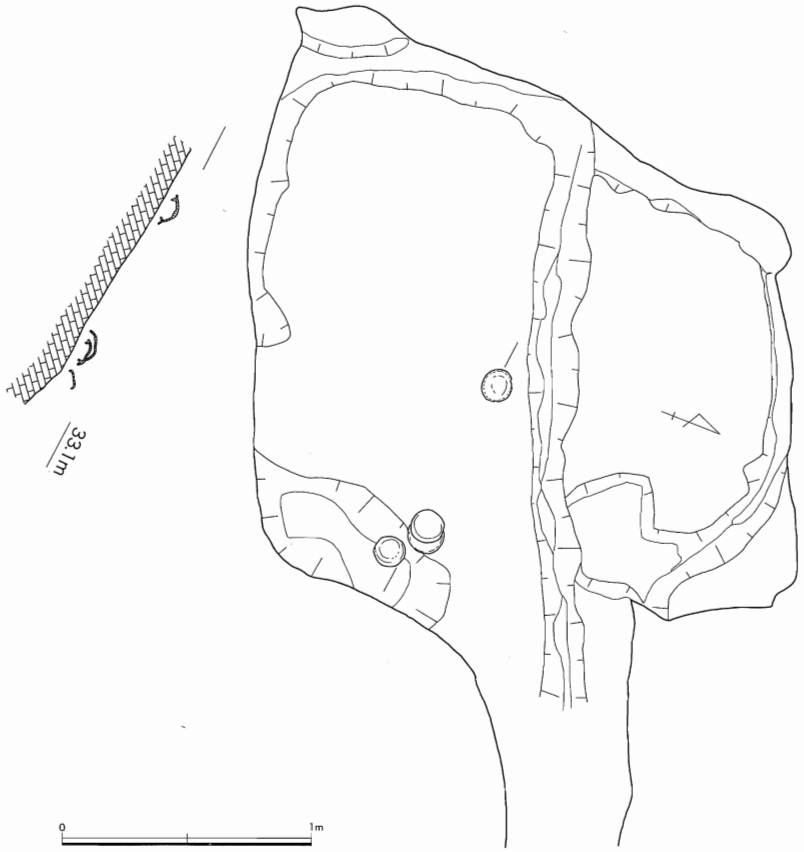


第87図　鋤崎古墳群２号穴実測図（S＝1：60）

土層堆積状況　羨道部、玄室内の堆積土とも９層を除いて天井の崩落土とみられる。

玄室内遺物土状況（第88図）

玄室内からは蓋坏がほぼ地山直上で検出された。

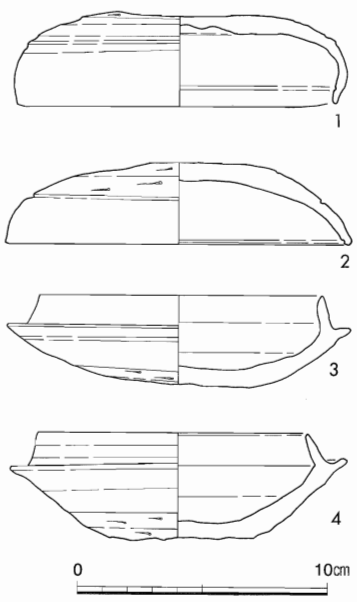


第88図　鋤崎古墳群２号穴遺物出土状況（S＝１：30）

２号穴出土遺物（第89図）

１・２は坏蓋、３・４は坏身である。１は口径12.8㎝、器高3.7㎝である。体部と天井部との境界付近に２本の沈線を巡らせるもので、口縁部は内湾し端部やや上方には沈線を施す。回転ヘラケズリの範囲は天井部付近のみである。２は口径13.6㎝、器高3.3㎝で、天井部と体部の境界は沈線で表現される。口縁端部内面に沈線を巡らせており、回転ヘラケズリは沈線の直上から施される。３は口径11.4㎝、器高3.6㎝で、たちあがりは直立して短く、端部はやや鋭くなる形態である。４は口径10.8㎝、器高4.2㎝でたちあがりが短くやや内傾するものである。回転ヘラケズリは底部の一部のみに施される。

遺物の時期は、坏蓋の特徴から出雲４期に相当すると考えられる。

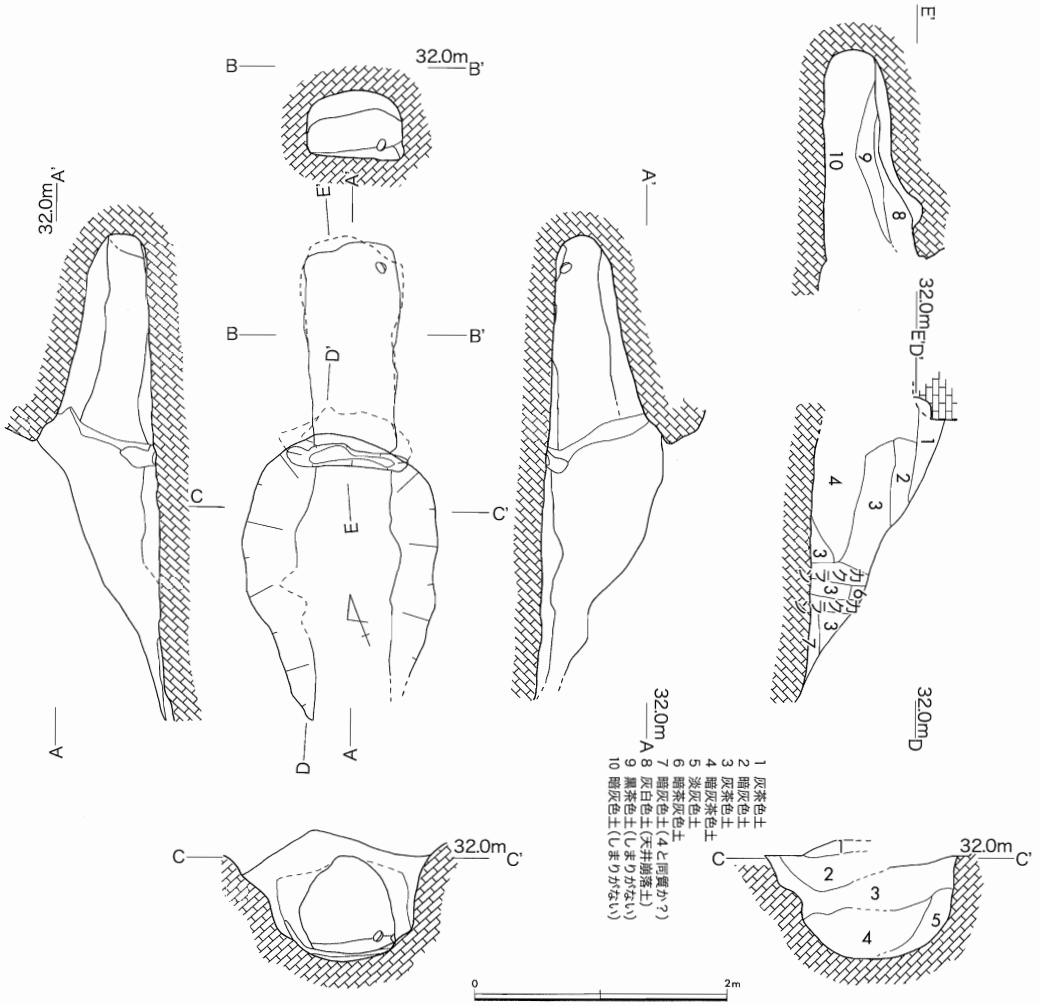


第89図　鋤崎古墳群２号穴出土遺物実測図（S＝１：３）

３号穴（第90図）

３号穴は、２号穴と同じ丘陵の西側斜面で確認された横穴墓である。丘陵先端に比較的近い位置に掘り込まれ、高さは床面で約33mである。東側４mには４号穴が存在する。開口方向は南西である。３号穴の前庭部は横穴墓に通有のものだが、奥は羨道、玄室の区別がつかない構造をとる。このため、ここでは閉塞部分より前を前庭部、奥を玄室と呼称して記述する。

前庭部　床面で幅0.6m～0.8m、長さ2.0mで平面形はほぼ長方形である。床面は中央付近がわずかに窪み、レンズ状を呈する。



第90図　鋤崎古墳群３号穴実測図（S＝１：60）

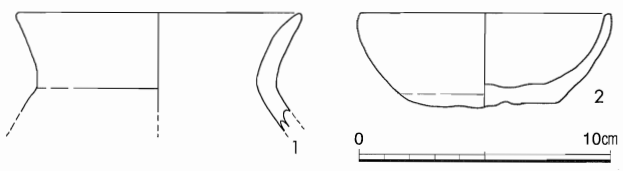
また玄室との境界には長さ1.0m、幅0.2mの掘り込みをもつ。

玄室　内部は、土砂でほぼ完全に埋没していた。長さは1.7m、幅は0.6m～0.7mで、平面形は奥壁側がわずかに広い長方形である。床面は奥壁側でやや高くなっており、天井は玄室前側が1.0m、奥壁沿いが0.3mで、玄室形態は奥壁側が最も低くなるトンネル状である。各壁を画する明瞭な線は認められないが、床と側壁、天井は不明確ながら区別されている。

土層堆積状況　前庭部については、横断面で４層と５層の切り合い、縦断面で３層と４層の切り合い関係があるが、追葬や盗掘を示すものかどうかは明らかにできなかった。また前庭部との対応関係が充分に掴めなかったが、玄室内の埋土はいずれかの時点で流入した土であると考えられる。

３号穴出土遺物（第92図）

前庭部の７層から土師器の甕、玄室内で10層内から須恵器の坏が出土している。いずれも埋土中からの出土だが、この横穴墓に伴うものとみられる。１は口径11.2cmで、口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸く



第91図　鋤崎古墳群３号穴出土遺物実測図
（S＝１：３）

おさめる。２は坏身で、不安定な平底をもち、口径10.0㎝、器高3.8㎝を測る。調整は回転ナデで、ヘラおこしの跡が認められる。遺物の時期は、坏身が高台をもたず糸切りが用いられないことから、出雲６期と考えられる。

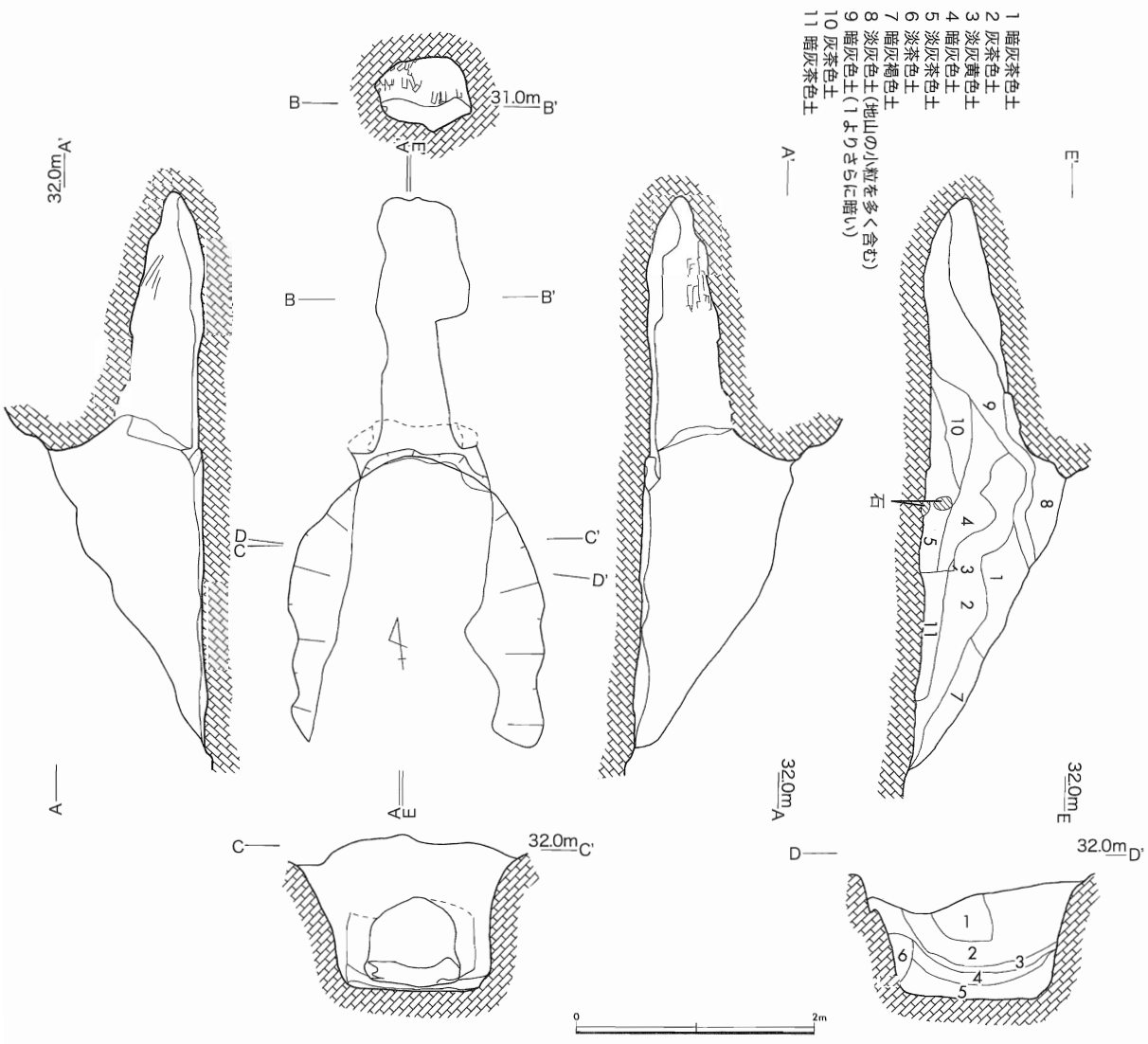
４号穴（第92図）

４号穴は３号穴の南に隣接し、位置や構造などから３号穴と群を構成するものと判断される。床面の標高は約31ｍで、今回検出された横穴墓の中ではもっとも低い。開口方向は南西である。この横穴墓に伴う遺物は出土していない。

前庭部　床面の幅1.5m～1.1m、長さは2.4mで、規模は今回検出した横穴墓の中で最大である。平面形は先端側が幅広くなる台形を呈し、床面はほぼ水平である。

羨道部　幅は0.5m～0.7m、長さは1.1mで玄室側の幅が狭くなる。床面は前庭部より一段高く、その差は約10㎝である。天井は高さ0.6m～0.7mで玄室に向かって徐々に低くなる。先端部には閉塞用の掘り込みが明瞭に残るが、閉塞石などは検出できなかった。

玄室　幅は0.6m～0.8mで奥壁側の幅が狭くなり、長さは1.0mで不整形な長方形の平面形を呈する。



第92図　鋤崎古墳群４号穴実測図（S＝1：60）

片袖状の構造で、右側壁は羨道と玄室が明瞭に区別できるが、左側では羨道の壁がそのまま玄室壁へ続いている。高さは羨道部との境界付近では0.6mであるが、天井と床面の間は徐々に狭くなるため、面としての奥壁は存在しない。玄室奥側の天井及び側壁にはノミ痕が認められた。

土層堆積状況　横断面、縦断面とも追葬や盗掘を窺わせる土層は認められなかった。

第３節　小結

今回の鋤崎古墳群における調査では、横穴墓４基と後背墳丘と見られる高まりを検出した。検出された横穴墓は天井が崩落していたため玄室形態の不明瞭なものや、遺物が検出できなかったため掘削された時期の特定が困難なものもあるが、時期と玄室平面形の問題を中心に整理し、小結としたい。

横穴墓の時期は、出土遺物の時期から、１号穴と２号穴が出雲４期、３号穴が出雲６期と考えられ、出雲５期の横穴墓は確認されていない。なお、１号穴については、前庭部で出土した須恵器の中に出雲３期のものが含まれている。これは追葬時に前庭部に持ち出された可能性もあり、１号穴は出雲３期にさかのぼることも考えられる。また、１号穴と２号穴の玄室内から出土した蓋坏は、ともに出雲４期の範疇であるが、比較してみると、体部と天井部の境界付近にある段の表現など１号穴出土蓋坏のほうがやや古い様相を呈するように思われ、４期の中での前後関係の存在も推察される。４号穴については出土遺物がなく時期不明であるが、３号穴に隣接し、玄室形態も近いことから３号穴と同時期のものである可能性が高い。

次に、横穴墓の形態について見る。

横穴墓は、玄室などの形態から１号穴、２号穴、３・４号穴の３つに分類される。１号穴は、玄室平面形が縦長長方形となるものである。２号穴は、不整形であるものの玄室前壁・左側壁・奥壁の長さがほぼ一致することから、玄室平面形は横長長方形または正方形を指向している可能性がある。また、屍床を意識した構造になっている点も注意される。３・４号穴は羨道と玄室の境界が不明瞭で、全体に縦長長方形に近い構造をとる。側壁・奥壁と天井との区別が明瞭ではなくアーチ形の玄室形態をとるもので、羨道～玄室の天井形態を知り得たのはこの２穴のみである。

横穴墓の玄室平面形と時期の関係については第３章でも触れたが、鋤崎古墳群においては、出雲４期と考えられる１号穴と２号穴の玄室平面形が異なり、玄室平面形が縦長長方形と、横長長方形ないし正方形を指向するとみられる２種類の横穴墓が造られている。出雲５期の様相については、この時期の横穴墓が確認されていないため不明であるが、出雲６期には玄室平面形が縦長長方形となる３・４号穴が造られる。

つまり、この遺跡で玄室平面形が正方形を指向する横穴墓は、出雲４期にのみ確認されると言うことができる。これは、この時期に出雲東部で石棺式石室の影響を受けた整正家形の横穴墓が造られるようになること[2]と無関係ではあるまい。さらに、１号穴と２号穴に先に述べたような時期差が認められるとすれば、玄室平面形が時期によって変化している可能性も考えられる。

この遺跡の周辺となる佐々布川、江尻川流域の横穴墓には、岩盤に掘り込まれたものと土に掘り込まれたものの２種類がある[3]。宍道町内で横穴墓は約60基発見されているが、このうち１／３が来待石に掘られたもので、玄室平面形は正方形ないし横長長方形で、平入り構造である。一方、土に掘られた横穴墓の玄室平面形は縦長長方形が多く、平入りとなるものはごくわずかであること[4]

など、この２種類の横穴墓の形態には差違が認められる。今回発見された横穴墓は、いずれも土に掘り込まれたもので、資料数が少ないこともあり、来待石に掘られたものを含めたこの地域の横穴墓に普遍化できるものではないと思われる。この地域の横穴墓の全体像については、来待石に掘られたものを含め、既発見資料の再検討と、今後の資料の増加を待って検証していく必要があると考えられる。

註

１）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994
　以下、出雲○期と記したものはこの編年による。

２）『石棺式石室の研究』出雲考古学研究会　1987

３）ａ『宍道町歴史資料集』古墳時代編Ⅰ　宍道町教育委員会　1993
　ｂ『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』中国横断道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７
　島根県教育委員会　2001

４）註３文献aに同じ

表４　鋤崎古墳群遺物観察表

（単位：cm）

挿図番号	種類 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・焼成	備考
81-1	須恵器 坏（蓋）	12.7		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	１号墳ＮＷ区０２層　PNo.１２　981201	１㎜大の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	一部反転復元
2	須恵器 坏（蓋）	12.6		4.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	１号墳ＳＷ区０２層　PNo.１１　981211	１㎜小の砂粒を含む 淡灰色　良好	
3	須恵器 坏（蓋）				外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	１号墳・北西区南端第２層 981126ほか	１㎜大の砂粒を含む 淡灰色　良好	
4	須恵器 坏（身）	10.6		4.1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	１号墳ＮＷ区０２層　PNo.１３　981201	１㎜弱の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
5	須恵器 椀（坏）	11.2			外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	１号墳　PNo.７，９，１０ 981130	１㎜位の砂粒を含む 橙褐色　不良	反転復元 拓本あり
85-2	須恵器 坏（蓋）	13.0		4.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	１号穴玄室内　取上No.１ 981215	１㎜大の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
2	須恵器 坏（蓋）	12.8		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ	１号穴玄室内　取上No.３ 981215	１㎜大の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
3	須恵器 坏（身）	10.4		4.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	１号穴玄室内　取上No.２ 981215	１㎜位の砂粒を含む 淡灰色　良好	
4	須恵器 坏（身）	9.8		4.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	１号穴前庭取上　No.６ 981214	１㎜大の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	一部反転復元
5	須恵器 瑞		5.1		外面：回転ナデ、カキ目、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	１号穴前庭　取上No.２ 981214	１㎜弱の砂粒を含む 淡灰色　良好	一部反転復元　波状文、列点文あり
6	須恵器 直口壺	11.1		14.1	外面：回転ナデ、カキ目、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	１号穴前庭　取上No.３ 981214	２㎜大の砂粒も含む 淡灰色　良好	
7	須恵器 高坏	12.7	3.1	15.3	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	１号穴前庭　取上No.４ 981214	１㎜大の砂粒を含む 淡青灰色　良好	三角形透かし３方向２段
8	土師器 高坏				丁寧なナデ	１号穴前庭　取上No.７	１㎜小の砂粒を含む 橙褐色　良好	反転復元
9	土師器 高坏	16.2	0.1	10.4	丁寧なナデ	１号穴前庭　取上No.５	１㎜大の砂粒を含む 橙褐色　良好	一部反転復元
10	須恵器 提瓶	長径：11.0 短径：10.1		23.4	外面：回転ナデ、カキ目、タタキ痕 内面：回転ナデ、ナデ、アラ具痕	１号穴前庭　取上No.１ 981201	１㎜大の砂粒を含む 淡灰色　良好	外面に自然釉、須恵器片窯着
89-1	須恵器 坏（蓋）	12.8		3.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	２号穴玄室　取上No.４ 981211	２㎜大の砂粒も含む 淡青灰色　良好	焼き歪みあり
2	須恵器 坏（蓋）	13.6		3.3	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	２号穴玄室　取上No.１ 981211	３㎜大の砂粒も含む 淡青灰色　良好	内面に油脂系の付着物あり
3	須恵器 坏（身）	11.4		3.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	２号穴玄室　取上No.３ 981211	２㎜位の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
4	須恵器 坏（身）	10.8		4.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	２号穴玄室　取上No.２ 981211	１㎜大の砂粒を含む 淡黄灰色　良好	
91-1	土師器 甕（口縁）	11.2			外面：磨滅（回転ナデ？） 内面：磨滅	３号穴前庭　床面近く 981203	２㎜大の砂粒も含む 淡黄色　良好	
2	須恵器 坏（身）	10.0		3.8	外面：回転ナデ、ヘラおこし 内面：回転ナデ、ナデ	３号穴玄室？　取上No.３	１㎜大の砂粒を含む 淡灰色　良好	

（単位：cm）

挿図番号	器種	長径	短径	断面径	出土場所・年月日	備考
86-1	耳環	2.3	2.2	0.5	１号穴羨道上部　茶褐色土中　取上No.１５　981209	銅環に金渡金 重量４．９５ｇ
2	紡錘車	3.3		厚さ1.6	１号穴前庭　981026	孔の径０．６cm

第５章　足頭古墳群

第１節　調査の経過と概要

足頭古墳群は、八束郡宍道町大字佐々布3245－３外に所在する。宍道町の北西部、斐川町との境界に近い丘陵上に位置し、宍道湖に向かって北にのびる丘陵の先端に近い頂部に立地する。丘陵の標高は、最高所で42mと周辺の丘陵よりもやや高く、また丘陵先端付近という立地のため眺望は開けており、北東に宍道湖、北西に出雲平野を眼下に望む。調査区は、北西へのびる丘陵とそこから西へ派生する丘陵上に設定した。

この古墳群は、分布調査によって確認されたもので前方後円墳が存在する可能性も考えられていた。また、昭和60年には宍道町教育委員会によって同じ丘陵の北側先端部で発掘調査が行われ、このときに確認された２基の古墳が、それぞれ足頭１号墳、２号墳となっている。いずれも方墳で、１号墳は割竹形木棺１基、２号墳は箱式石棺２基を主体部にもつもので、古墳時代前期～中期に築造されたと推定されている[1)]。

今回の調査は、平成10年８月11日に着手した。トレンチによる調査範囲の再確認と地形測量を実施した後全面調査を開始し、調査区内の最高所となる北東の丘陵頂部で古墳１基を検出した。地形測量以前の段階では、調査区東側に存在する大小２つの高まりは前方後円ないし前方後方墳の可能性もあったが、調査の結果北側にある大形の高まりが方墳であることが確認され、足頭３号墳とした。前方部の可能性をもっていた南側の高まりとの間は溝で切断されており、西側に存在する高まりについても加工された痕跡はなかったためいずれも自然地形と判断した。３号墳では、箱形木棺、箱式石棺など主体部３基を検出し、南側の斜面から埋葬施設１基を検出した。最後に３号墳の地形測量、調査区全体の空中写真撮影、測量を実施して11月５日に終了した。

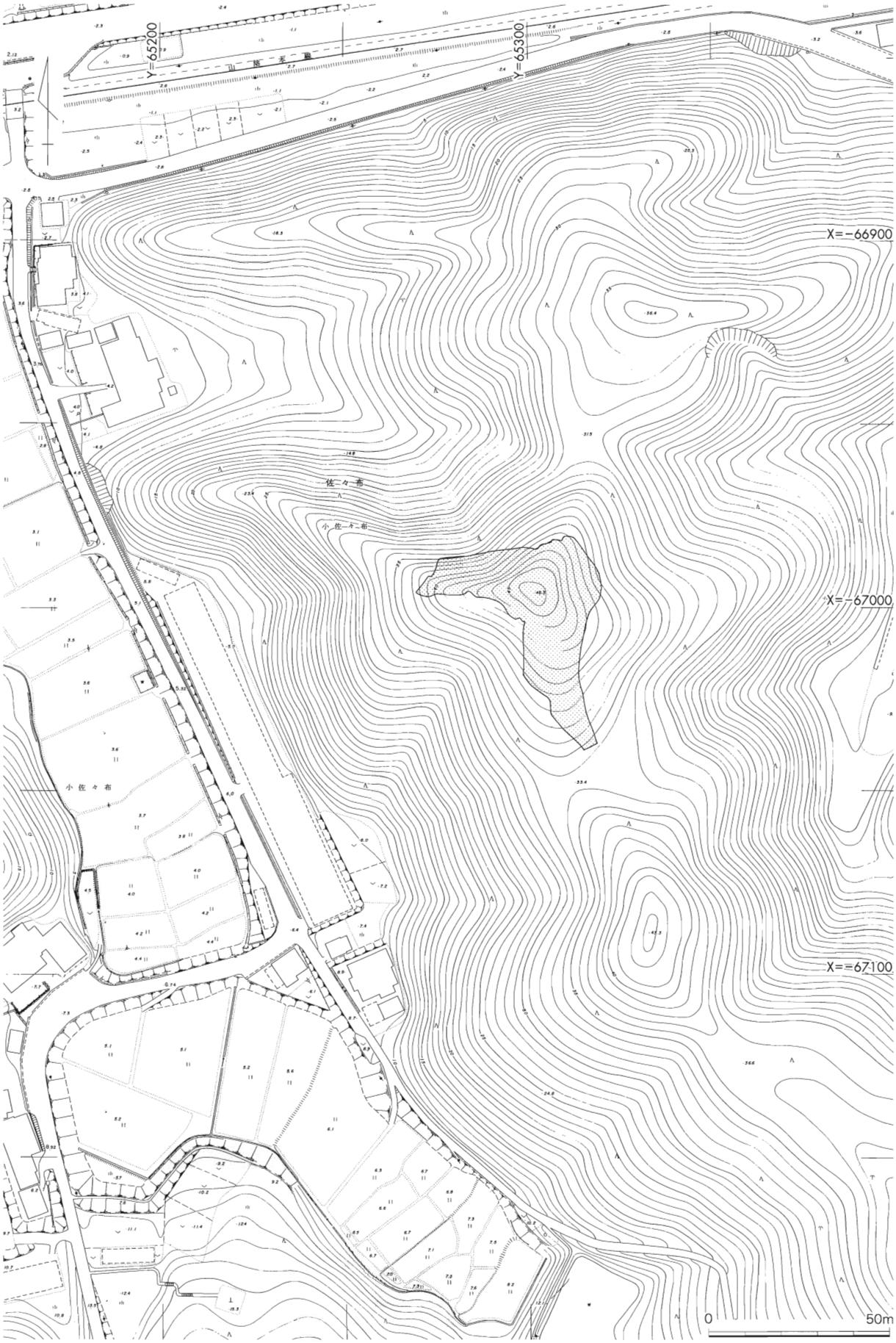
全面調査の方法は、重機及び人力による表土掘削の後、人力による掘り下げ・清掃を行って遺構を検出した。遺物の取り上げ、実測には調査員による実測と遺跡調査システム「ＳＩＴＥ」による実測を併用し、後者については調査員による補正を行った。

調査後の遺跡全体写真撮影は、リモコンヘリコプターにより実施し、調査後地形測量もこれによる空中写真をもとに図化を行った。

第２節　調査の結果（第93図）

調査区は、標高約42mの丘陵頂部に立地する３号墳とその南側、西側にそれぞれ存在する高まりを中心に設定した。南側の高まりは頂部で標高約40m、西側のものは同じく標高約37mであった。

調査前の段階では３号墳を後円部ないし後方部とする前方後円（方）墳が存在する可能性が考えられたため、３号墳とその南側にある高まりについて地形測量を実施した。前方後円（方）墳の可能性については、南側の高まりは前方部としては墳端、墳裾のラインが明確でないことからやや低くなった。３号墳は、北西の墳端と見られる付近が後世の地形改変により削り取られており、東側が急傾斜の谷状になっていることなどから、この時点ではマウンドの形状は確定できなかったが、墳丘東側の等高線が直線的であり１辺15m程度の方形であると見られた。なお、マウンドも低く、墳丘上面の平坦面も墳丘規模と比較し広いものであったことから墳丘の盛土は流出してしまってい



第93図　足頭古墳群調査区位置図（S＝1：1500）

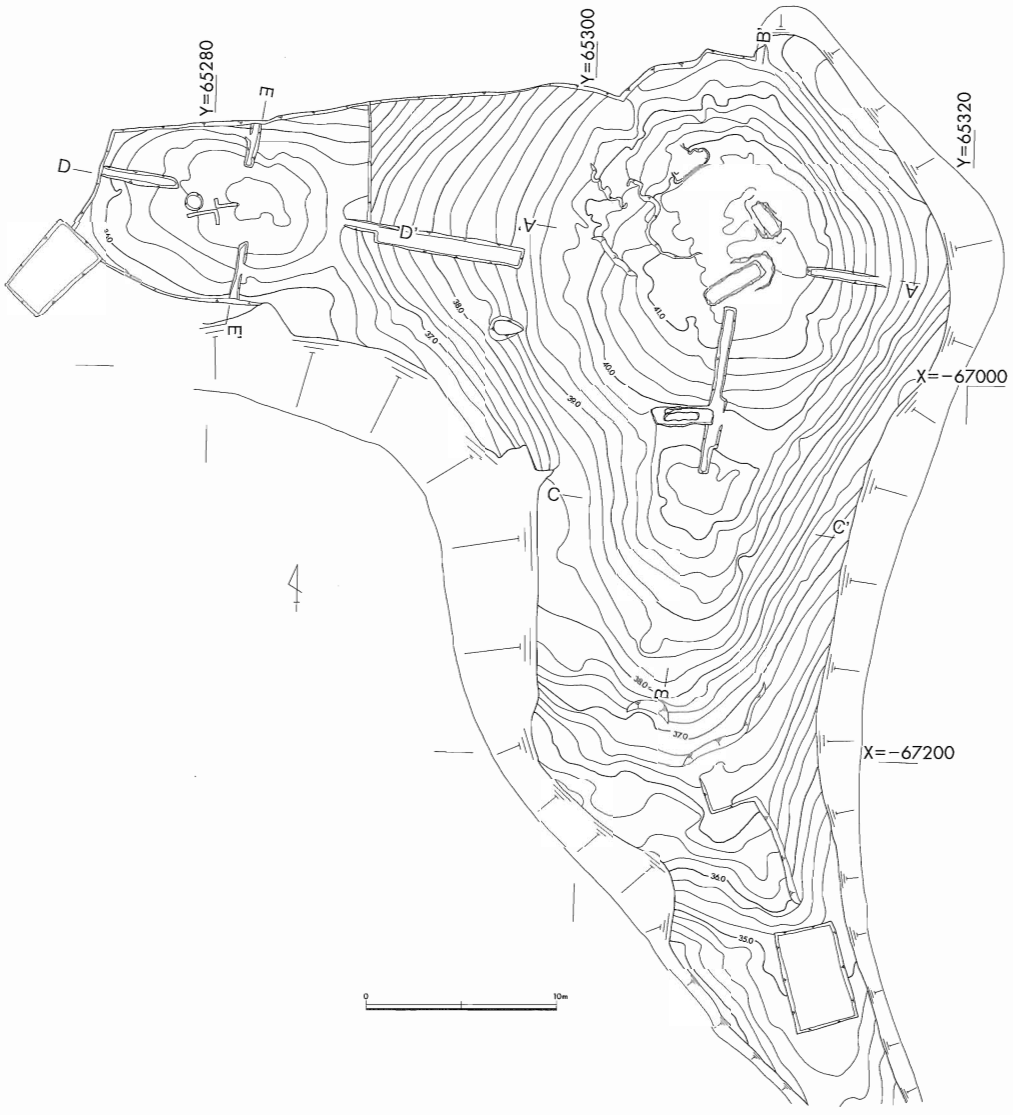
ることも想定された。

発掘調査では、３号墳とその南側の高まりを南北に貫くラインを設定し、これにそって土層観察用トレンチを設けたほか、３号墳、南側高まりそれぞれに東西方向にもトレンチを設け土層観察を行った。(第96図)

３号墳の土層観察からは、調査前の想定どおり堆積土は極めて薄く、墳頂などの浅い部分では10㎝、深い部分でも50㎝足らずで地山に達することがわかった。堆積している土も表土や地山の風化土がほとんどで、墳端部分でも旧表土、流出した盛り土などは確認できなかったが、中央付近に主体部と見られる落ち込みが確認され、古墳であると判断した。また南側と西側の高まりでも土層の堆積状況は同様であったが、主体部や地山の加工なども認められず古墳と判断する積極的な根拠がないため、自然地形と判断した。

３号墳（第95・97図）

３号墳は、調査区北東の調査区内最高所に立地し、標高は約41mである。調査の結果、墳丘北側、東側から南側にかけて直線的な等高線が描かれたため、墳丘形態は南北方向に長軸をもつ方墳と推定した。墳丘の規模は東西約11m、南北約15m、墳頂平坦面は南北10m、東西10mである。墳端に



第94図　足頭古墳群調査後地形測量図（S＝1：400）

ついては、調査後の墳丘測量でも明確な傾斜変換点は認められなかったが、墳丘南側及び北側では40.5mの等高線付近で若干傾斜が緩やかになるため、この付近を墳端とした。東側と西側でも同様にして墳端を推定した。また３号墳と南側の高まりの間は、尾根筋に直交する浅い溝状の加工により切断されていた。この溝は、上端で幅約２m、深さは0.2m～0.3mと浅いものであったが、底面は平坦になっていた。墳丘の高さは、現状では約1.5mであるが、先述したように後世の地形改変や盛り土の流出などがあったと見られるほか、地山の土質が砂質で風化しやすいものであるため、地山も風化・流出した可能性が考えられる。これは、後述する第１主体の検出状況からも窺うことができる。

足頭３号墳で検出した埋葬施設は、確実なものが２基、可能性のあるものを含めると３基である。これらを検出順に第１～第３主体部と呼称する。埋葬施設の配置は、箱形木棺と推定される第１主体部が墳頂平坦面の中央からやや南側に位置し、主軸を北東―南西にとる。組み合わせ式の箱式石棺である第２主体は、墳頂平坦面の中央からやや北東寄り、第１主体部の北東約３mの位置にある。

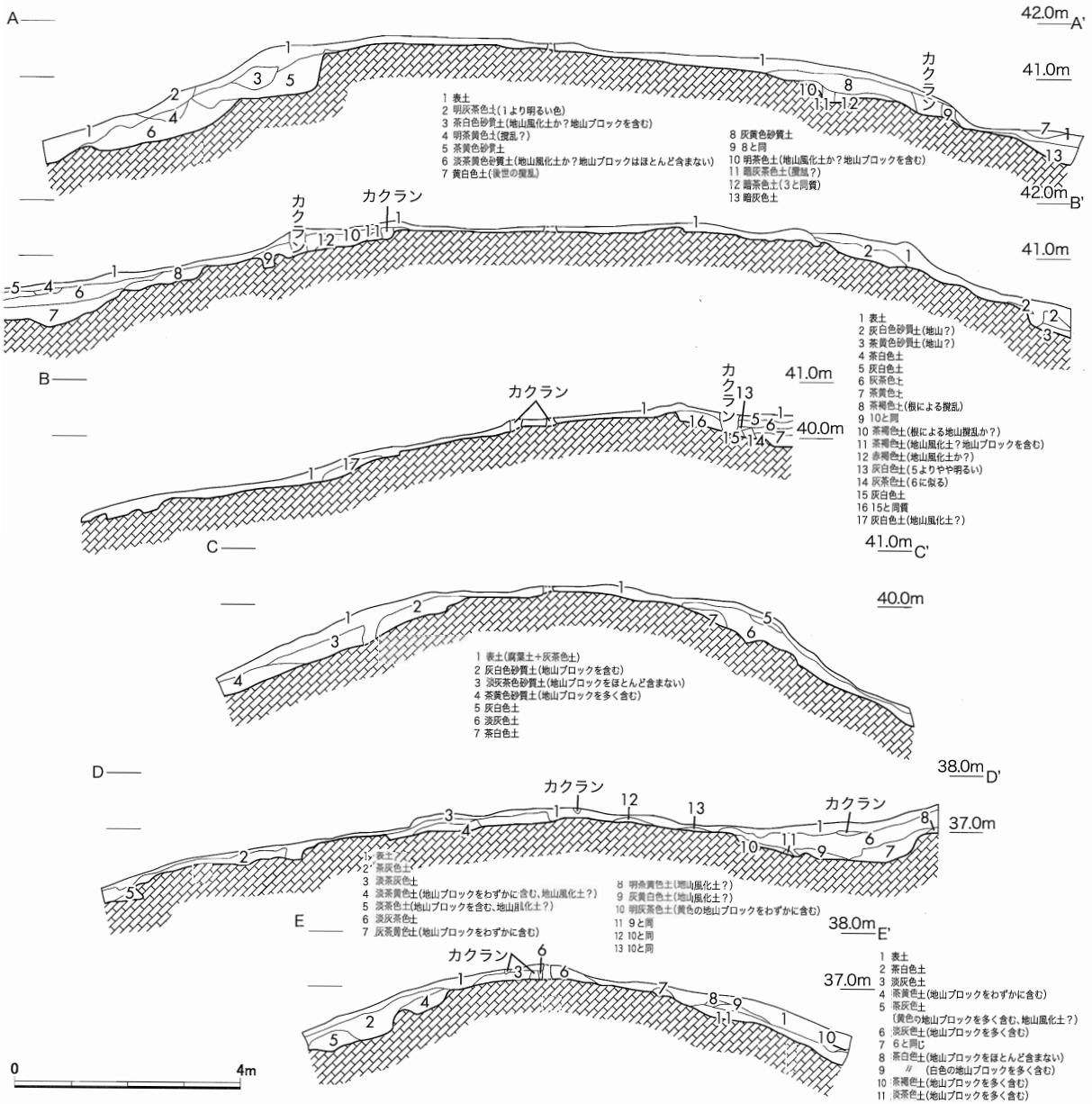
第95図　足頭３号古墳群調査前地形測量図（S＝1：200）

主軸は北西－南東にとる。第３主体部は墳頂平坦面の北西端に位置し、第２主体部から北西に約５mの距離にある。主軸は北東－南西にとるものである。以上のように、第１主体部～第３主体部はいずれも墳丘の軸と主体部の軸とが大きく異なっている。

これらの主体部のうち、位置や規模から中心となる主体部は第１主体部と考えられる。このほかに、３号墳と南側高まりの中間に土壙が１基存在する。主軸をほぼ東西にとるもので、木棺を内蔵した墓壙と考えられる。以下、第１主体部から順に述べる。

第１主体部（第98図）

第１主体部は、箱形木棺と考えられるもので、墳頂平坦面の中央からやや南に寄った位置で検出された。主体部の主軸はN―53°―Eである。墳丘平坦面は表土がわずかに地山を覆っていたのみで、墳丘を構成するような盛り土は全く認められなかったため、検出面は地山面であった。検出当初は素掘りの墓壙と見られたが、精査中に墓壙の北～南東にかけてわずかな落ち込みが確認された



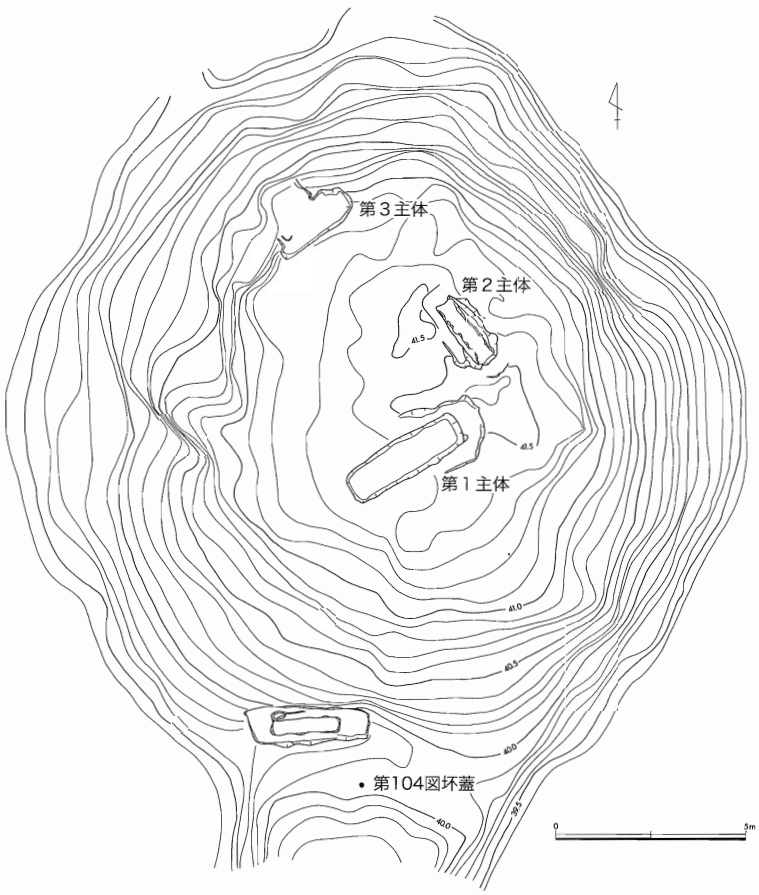
第96図　足頭古墳群土層図（S＝1：120）

ため、二段掘りの墓壙であることがわかった。また、１段目の墓壙がごく浅く一部でのみ検出されたことから、墳丘は盛り土だけでなく地山についても風化・流出している可能性が高い。

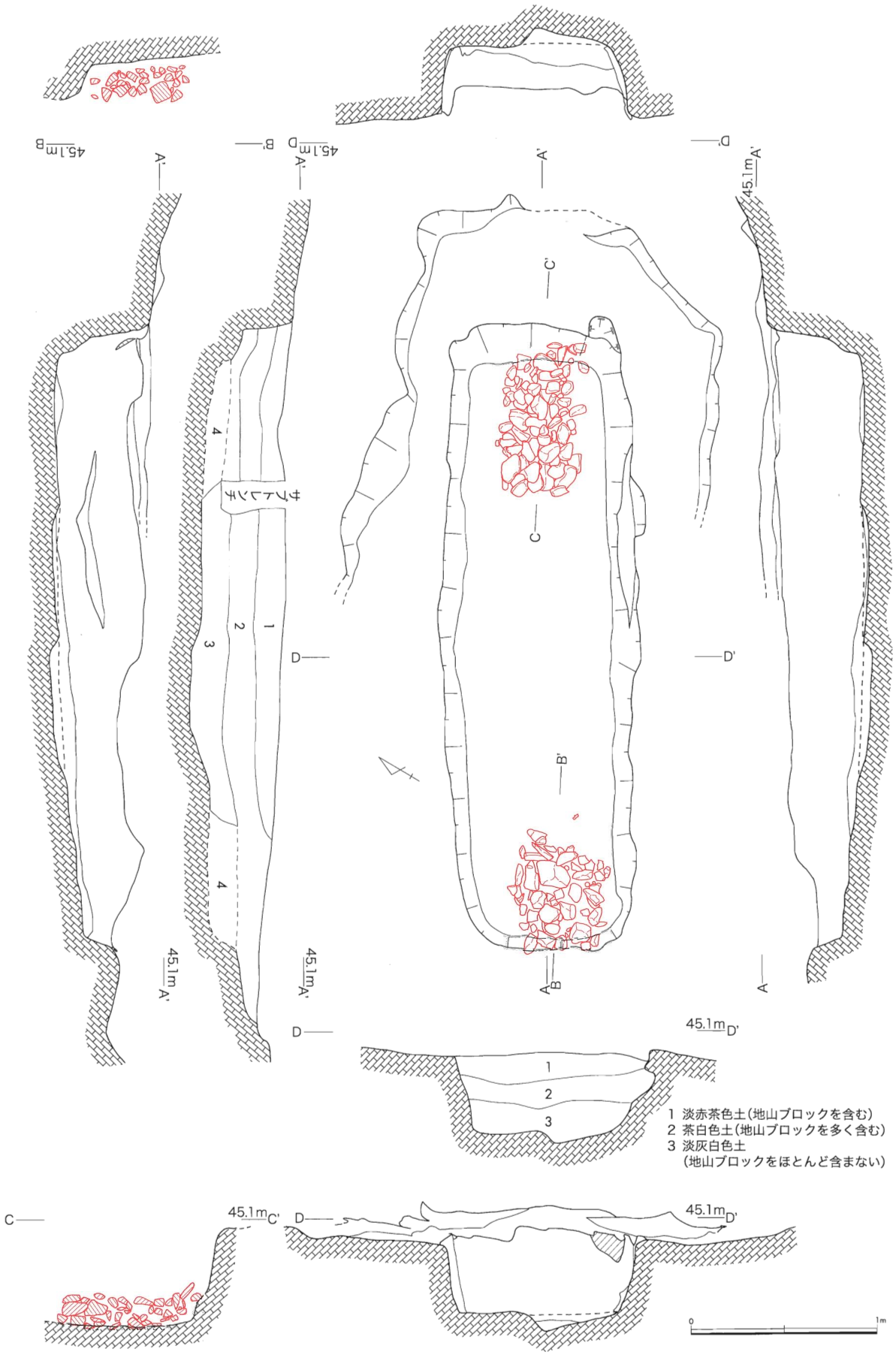
墓壙の一段目は南西側が半分以上失われているが、長楕円形ないし長方形の平面形とみられ、残存部の状況から規模は幅1.8m以上、長さ約4.5mと推定され、検出時の深さは最大でも５cm程度であった。二段目は長さ3.3m、幅は1.0～1.1mで北東側がわずかに広くなっており、深さは約40cmである。底面はほぼ平坦であるが、南西側がやや低く傾斜している。また、底面の北東端と南西端の中央付近には小形の礫多数が集中している様子が認められた。礫は底面から壁面に接するように積み重ねられており、北東端では80cm×40cm、南西端では60cm×40cmの範囲で、厚さはいずれも約20cmである。この礫は木棺の小口部を押さえる役割をしたものと見られ、ここから棺の長さは約２m、棺の幅については40cm～50cmと推定される。なお、礫はいずれも長軸側の側壁とは明確に離れていることから、木棺の側板は２m以上の長さをもって小口板を挟み、壁と礫によって支えられるような構造であった可能性が考えられる。墓壙内の覆土についてはほぼ水平な堆積を示し、木棺の痕跡を示すような層位は認められなかった。遺物は墓壙内の覆土中から鉄器が出土している。

第１主体部出土遺物（第99図）

第１主体部からは鉄器が２点出土している。１は刀子で、現存長４cm、幅１cm、厚さ0.3cmである。２は刀子の茎部と見られるが、詳細は不明である。現存長６cm、幅１cm～1.5cm、厚さは0.2～0.3mmで、断面形は台形を呈する。X線写真では不明瞭ながら目釘孔らしきものも確認されている。



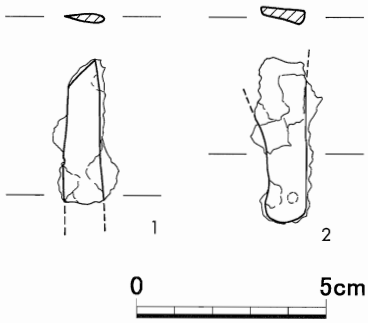
第97図　足頭３号墳調査後地形測量図（S＝１：200）



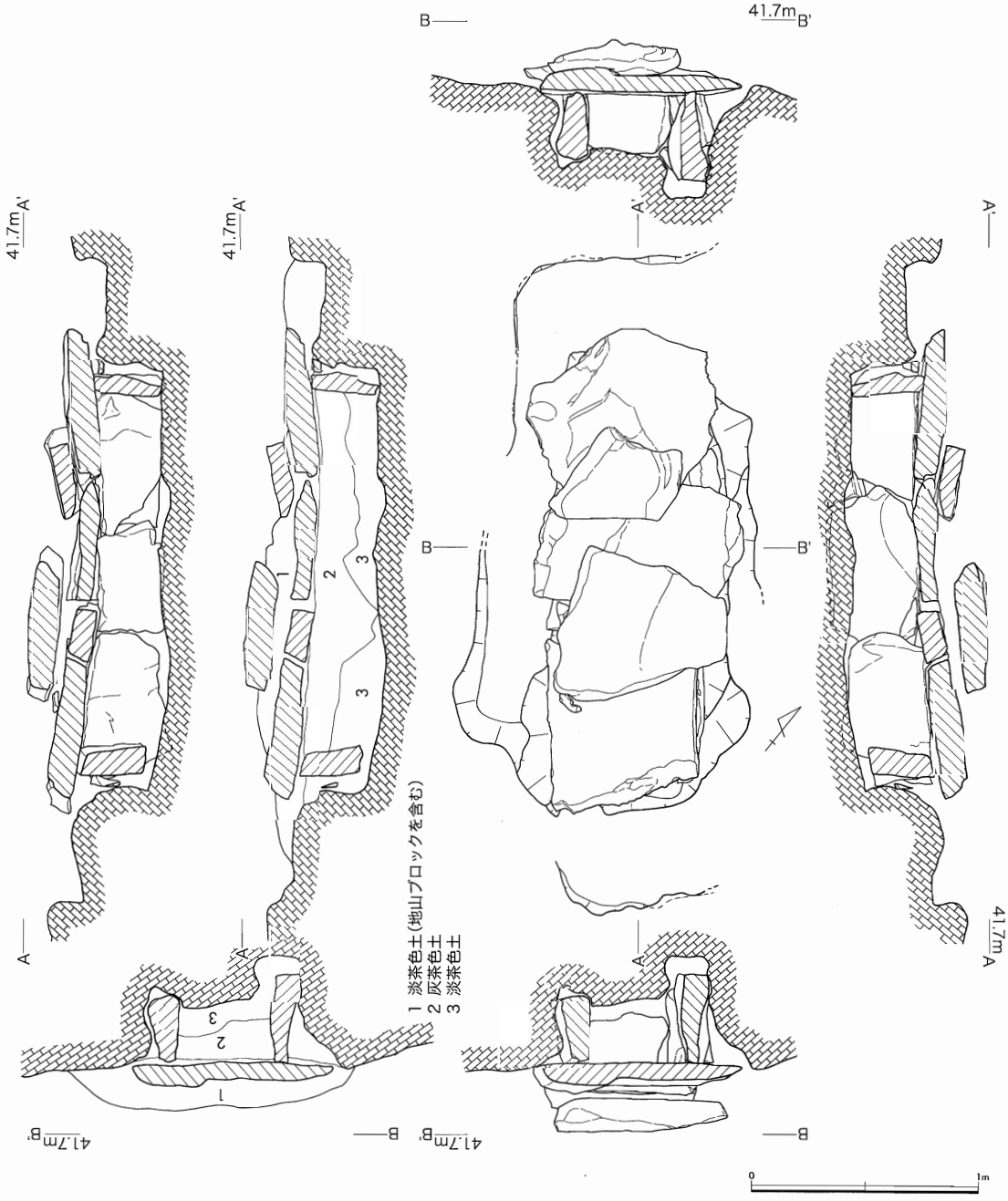
第98図　足頭３号墳第１主体部実測図（S＝1：30）

第２主体部（第100図・101図）

第２主体部は、大形の板石を組みあわせて造られた箱式石棺で、第１主体部の北東で検出された。主体部の主軸はＥ―53°―Ｓで第１主体部にほぼ直交する。墓壙は二段掘り状のものであるが、第1主体部と同様に地山の流出があったと見られ、石棺の天井石が墓壙の掘り方を検出した面よりも高い位置で確認された。掘り方についても、一段目の下端を北西から南西及び南東の一部で確認するにとどまり、北東側では全く認められなかった。



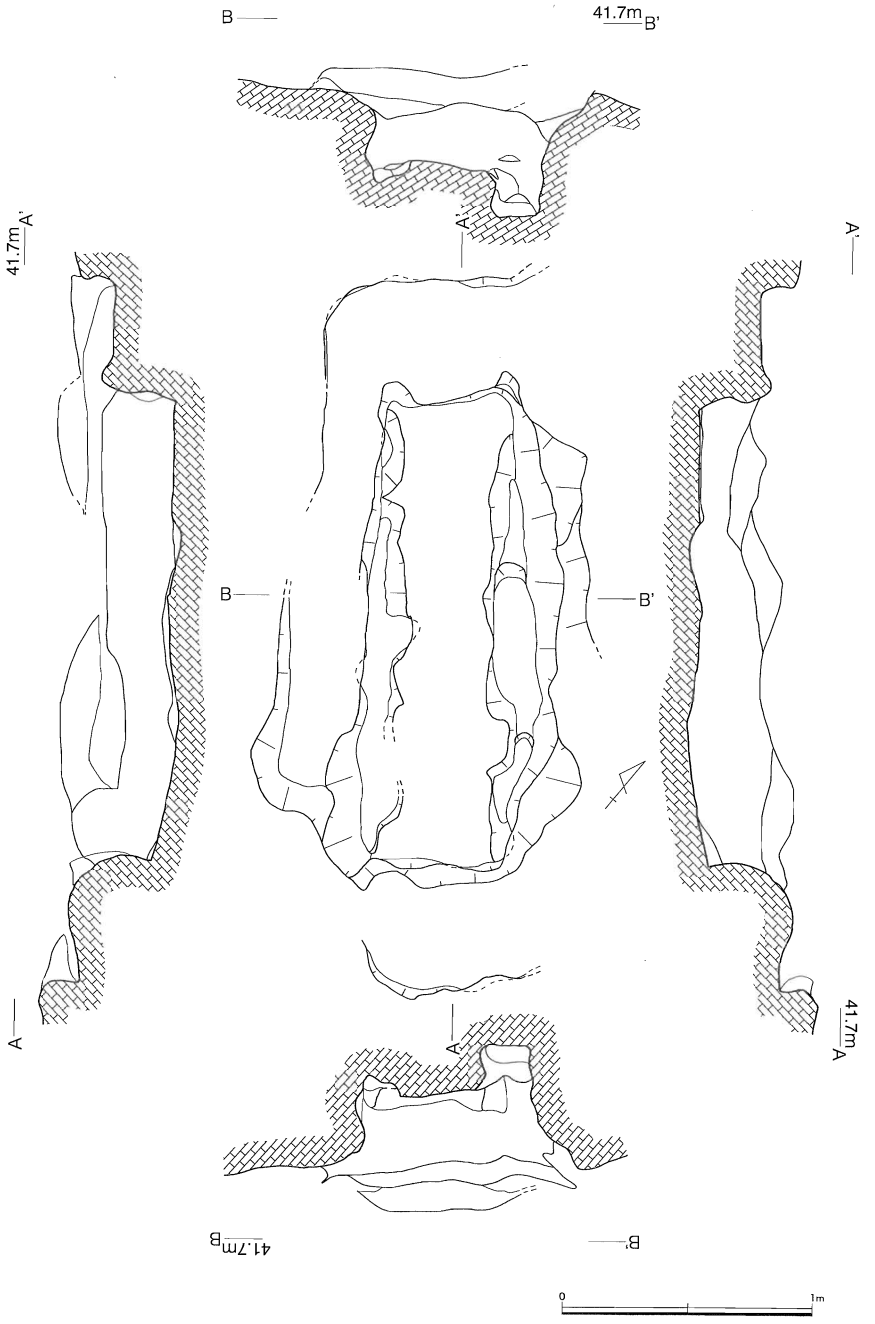
第99図　足頭３号墳第１主体部出土遺物実測図（Ｓ＝１：２）



第100図　足頭３号墳第２主体部（石棺）実測図（Ｓ＝１：30）

墓壙一段目の平面形はほぼ長方形と考えられ、規模は長さ2.9m、幅は墓壙下端の位置から推測すると1.2m～1.4m程度であろう。現状での深さは、もっとも深い所でも内側の墓壙掘り込み面まで0.2mである。二段目は、平面形はほぼ長方形で長さ約2m、幅は0.5～0.8mで南東側がわずかに広くなっている。深さは底面までで0.3mである。底面はほぼ平坦であるが、両側の側壁に沿って側石を据えるための掘り込みが認められる。なお、覆土の堆積状況からは、石棺の裏込めまたは目貼りをした痕跡は認められなかった。

箱式石棺は、墓壙のほぼ中央にあったものと考えられ、主軸も墓壙とほぼ同じである。蓋石、棺身共に厚さ10cm前後の板石を用いて構築されており、いわゆる「来待石」は使用されていない。基本的には節理に沿って板状に割り取られたものとみられ、表面を平滑にするなどの加工痕は認めら



第101図　足頭３号墳第２主体部（掘り方）実測図（S＝１：30）

れなかったが、内面に赤色の顔料が塗布されていた。規模は、内法で長さ1.6m、幅0.4m～0.5mで、墓壙と同様南東側がわずかに広くなっている。床面から蓋石下面までの高さは0.3mである。蓋石は長さ20cm～70cm、幅60cm～80cmの板状の石を4枚乗せた後、さらに２枚の石材をその上に積み重ねている。棺身は、両側石で小口側の石を挟む構造をとり、蓋石と同一の石材を使用する。長さ40cm～70cm、高さ30cm～40cmの板状の石を南西側、北東側とも３枚ずつ用いており、石材の高さにはばらつきがあるが、これは据え付けのための掘り込みを石ごとに変えることで上面が水平になるよう調整されている。側石にも目貼りの痕跡は認められなかった。小口側は石を据えるための掘り込みは存在しないが、石と掘り方との隙間に小さな石材が置かれており、石を支えていたと見られる。

この主体部及び周辺から遺物は出土していない。

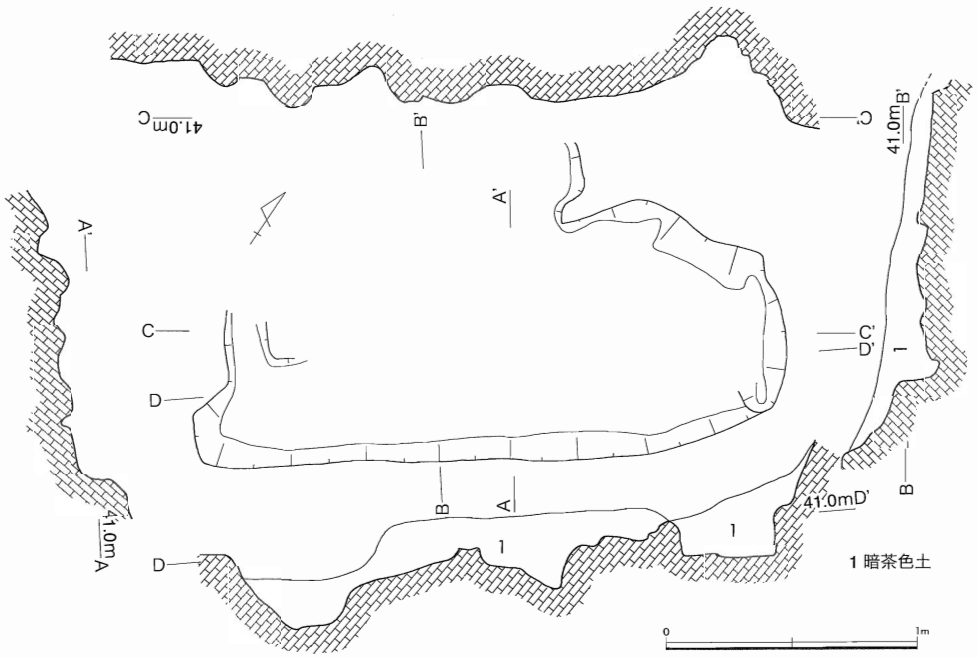
第３主体部（第102図）

第３主体部は、墳頂平坦面の北西隅で検出された。３号墳北西側は土砂の流出に加え後世の地形改変も受け、最も遺存状況が悪い部分である。位置的にも主体部が置かれるには適当でないが、土坑状の落ち込みを検出したため主体部の可能性を持つものとしておく。

主体部の主軸はＮ―57°―Ｅで第1主体部とほぼ同一方向である。墓壙は北西側の多くが失われているが平面形はほぼ長方形と推測され、規模は上端で長さ2.3m～2.4m、幅0.7m～0.9mと考えられる。深さは現状で0.2mである。墓壙全体が風化の影響を著しく受け、特に床面では凹凸が激しいため、詳細は不明である。この主体部からも、遺物は検出されていない。

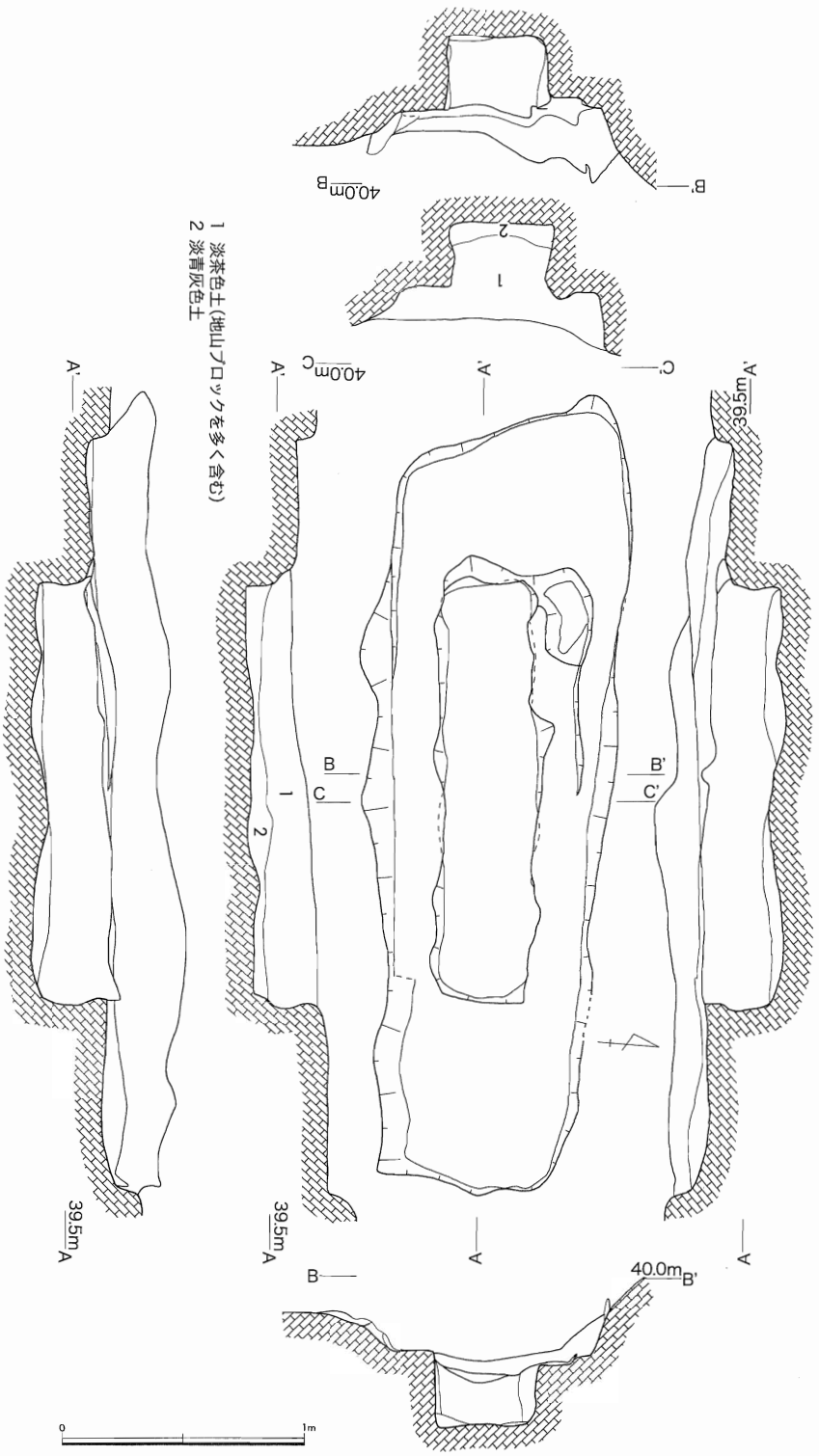
３号墳南溝内墓壙（第103図）

３号墳の南側の溝では、尾根筋よりやや西に寄った場所から墓壙が検出された。これは墳丘斜面を掘り下げている時に地山直上で確認したものである。墓壙は二段掘りで、主体部の主軸はＮ―85°―Ｅとほぼ東西方向にとり、尾根筋に直交する。

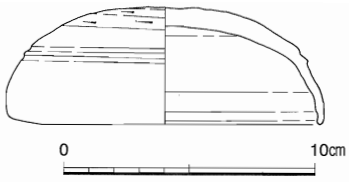


第102図　足頭３号墳第３主体部実測図（Ｓ＝１：30）

墓壙の一段目は平面形がやや崩れた長方形で、長さ3.0m～3.3m、幅は0.7m～1.0mで西側が幅広くなっている。深さは二段目の掘り込み面までで10㎝～20㎝である。二段目は長さ1.8m、幅は0.7mと均等で一方が広がっている様子は見られず、深さは約30㎝である。底面はほぼ中央付近がやや高くなっているほか、西側が東側よりわずかに低く傾斜している。また、底面に棺材を据える



第103図　足頭３号墳南溝内墓壙実測図（S＝1：30）



第104図　足頭３号墳南溝内出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

ための掘り込みは認められなかった。このほか、二段目の墓壙北西側に浅い落ち込みなどの加工がなされていた。この墓壙から遺物は出土していない。

３号墳南溝内出土遺物（第104図）

今回出土した土器の内、図化可能なものは須恵器の坏蓋１点のみで、口径は12.4cm、器高4.7cmである。２本の沈線で突帯を表現し、口縁部内面のやや上方に沈線を入れ、天井部には回転ヘラケズリを施す。時期は、大谷編年の出雲４期[2]と考えられる。

土器の出土位置は３号墳南側の溝覆土中であり、墳丘盛り土の流出に伴い流れ込んだ可能性もあるが、この土器の時期が３号墳の時期を示す確証は得られなかった。

第３節　小結

今回の調査では、主体部３基をもつ方墳１基と、古墳南側の溝内から墓壙１基を検出した。

足頭３号墳の墳丘規模は、調査の結果11m×15mと考えられ、３つの主体部が設けられている。位置や形態から主体部ではない可能性が残る第３主体を別にしても、複数の主体部をもつ点は注意される。遺物については刀子を検出したのみで古墳の時期を確定する遺物は出土しなかった。

３号墳から北へ100mの丘陵先端付近にはかつて足頭１・２号墳が存在し、発掘調査が行われている。このときの調査でも古墳の時期が特定できる遺物は発見されておらず、１号墳では主体部が割竹形木棺と推定されることから古墳時代前期～中期、２号墳では主体部が箱式石棺であることから中期以前の可能性を指摘している[3]。足頭２号墳で確認された２基の箱式石棺のうち大形のものは、規模、構造ともに足頭３号墳第２主体の石棺に近く、石棺材の内面に赤色顔料が残されていた点も似ている。積極的な根拠ではないが、こうした類似点から、足頭３号墳も足頭２号墳とほぼ同時期に築造された古墳と考えられる。

今回の調査では、遺物が少なく古墳の時期や性格について充分に明らかにしたとは言い難いが、中期古墳とされてきた足頭古墳群について、新たな資料を提供することができた。古墳群の詳細な位置づけは周辺の遺跡の調査を待って改めてなされる必要がある。

註

１）「足頭古墳群」『宍道町史』史料編　宍道町　1999

２）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994

３）註１に同じ

表５　足頭古墳群遺物観察表

挿図番号	種類 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・焼成	備考
104	須恵器 坏(蓋)	2.35		4.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ　内面：回転ナデ、ナデ	１号墳十字トレンチ南側３層PNo.２１　980827	１mm位の砂粒を含む淡黄灰色　良好	

（単位：cm）

挿図番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	刃部厚	出土場所・年月日	備考
99-1	刀子	(3.8)		1.05	0.25	１号墳　第１主体　墓壙内 981111	
-2	刀子	(4.4)				１号墳　第１主体　墓壙内側　３層上面　981019	

第６章　長廻古墳群

第１節　調査の経過と概要

平成９年７月～12月にかけて遺跡の概要等を把握するため丘陵尾根上のトレンチ調査を行った結果、石棺の蓋と思われる石材が検出された。

全面調査は平成10年８月10日より開始した。調査区内が伐採されて、調査区の全体像が把握できるようになったため、丘陵斜面を中心にトレンチの数を増やして調査した。石棺の蓋と思われる石材を検出した部分は古墳であると想定されるため、石材を中心に十字のラインを設定し、調査を実施した。また、丘陵先端斜面には張り出し平坦面が確認でき、山城の郭跡であると想定されたため、平坦面を中心にトレンチを設定し調査した。

調査を進めると、石材は形態より石棺であることが分かった。しかし、墳丘については山城として利用されたためか、判然としなかった。

斜面のトレンチからは遺構らしきものが、なかなか確認できなかったが、調査終盤の９月下旬になると横穴がいくつか検出された。しかし、横穴墓の形態を呈しておらず、性格不明の穴であったが、その下方より横穴墓を検出した。

横穴墓を検出したことにより、その斜面には横穴墓群が検出される可能性があるため、調査範囲を拡大し、その斜面一面の調査を急遽実施したが、それ以外に横穴墓は検出することができなかった。

調査は終盤になり横穴墓を検出するなどあわただしかったが11月１日に調査を終了した。

しかし、調査終了後、道路建設のため同遺跡の掘削が行われると、丘陵先端斜面より横穴墓が検出された。急遽調査を実施した。

第２節　調査の結果

調査区の立地

本古墳群は、弥生時代後期の住居址や古墳が検出された屋敷古墳群、弥生時代後期の住居址が検出された北ヶ市遺跡の向かい側の丘陵尾根端部付近（標高およそ35mの丘陵尾根端部を中心に南および北東の斜面）に存し、北東側に宍道湖を望むことができる。

当調査区域面積は、約1,700㎡である。

当調査区では古墳、横穴墓、山城跡、坑道状遺構を検出した。古墳、横穴墓、山城跡、坑道状遺構の順に各立地について記述したい。

古墳の立地

古墳を１基検出し、１号墳とした。

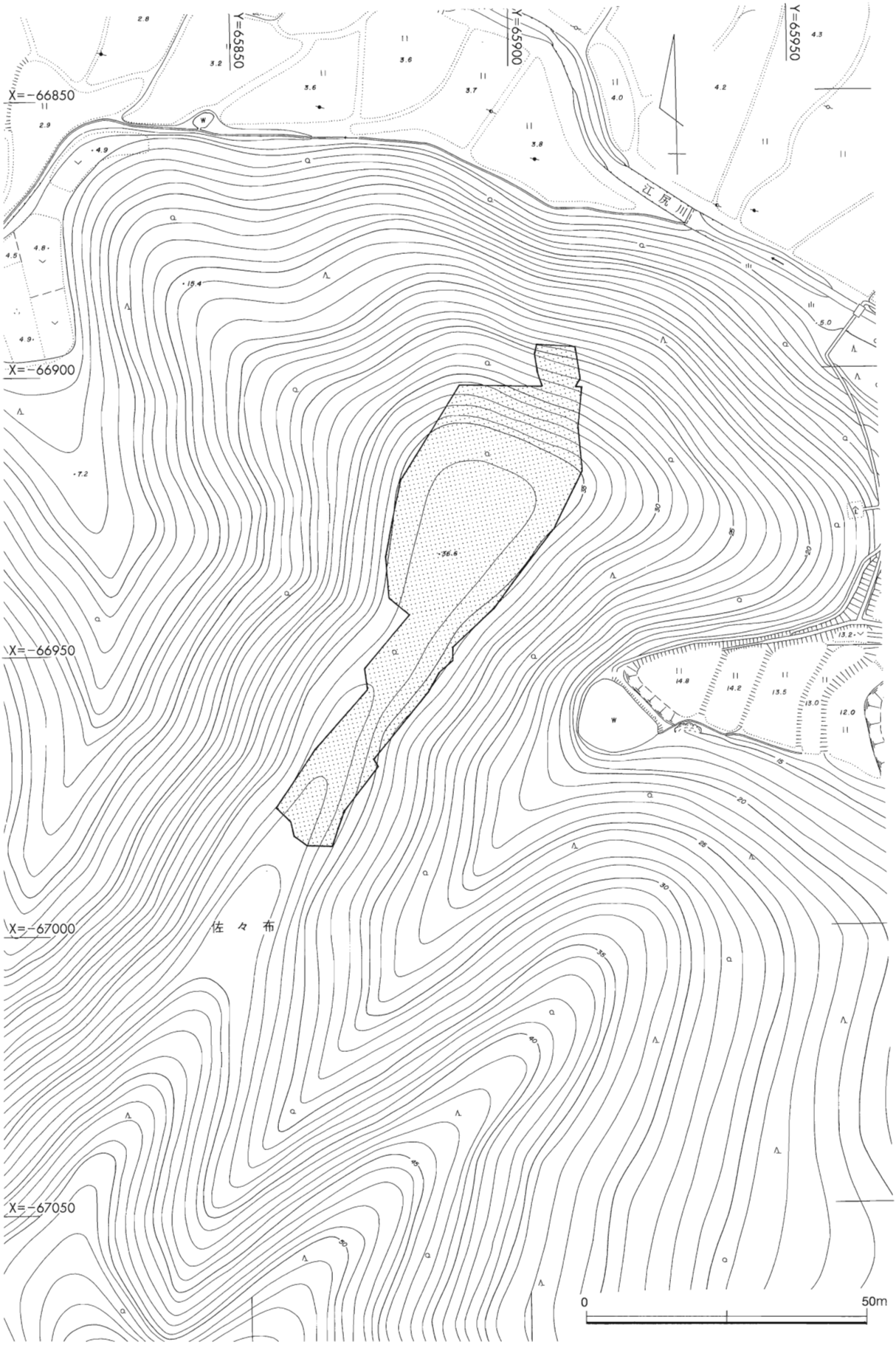
１号墳は、当調査区北東、標高約36mの丘陵尾根中央先端部に位置している。

横穴墓の立地

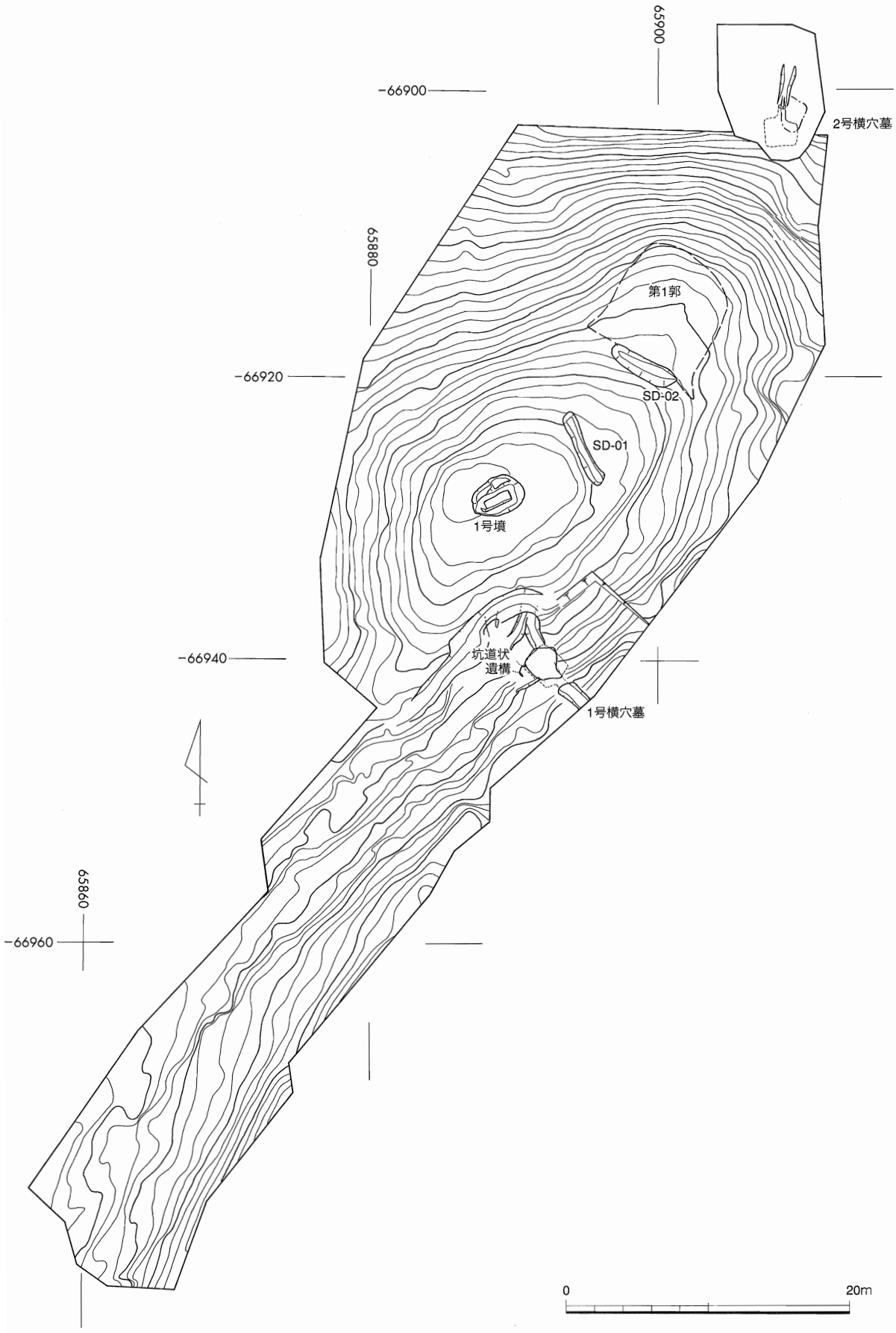
横穴墓は２穴検出した。それぞれ、１号横穴墓、２号横穴墓とした。

１号横穴墓は、当調査区中央南東、標高約32mの丘陵尾根南東側斜面に位置している。

２号横穴墓は、当調査区北東端、標高約24mの丘陵北東端斜面に位置している。



第105図　長廻古墳群調査前周辺地形図（S＝1：1000）



第106図　長廻古墳群調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1：400）

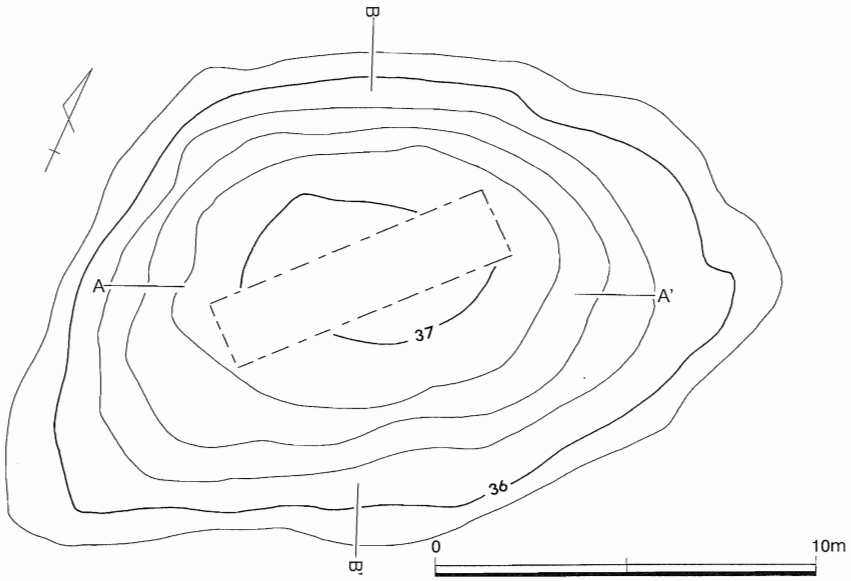
山城跡の立地

調査区北東、標高約35mの丘陵尾根北東端に山城跡と思われる平坦面（郭）が確認できた。

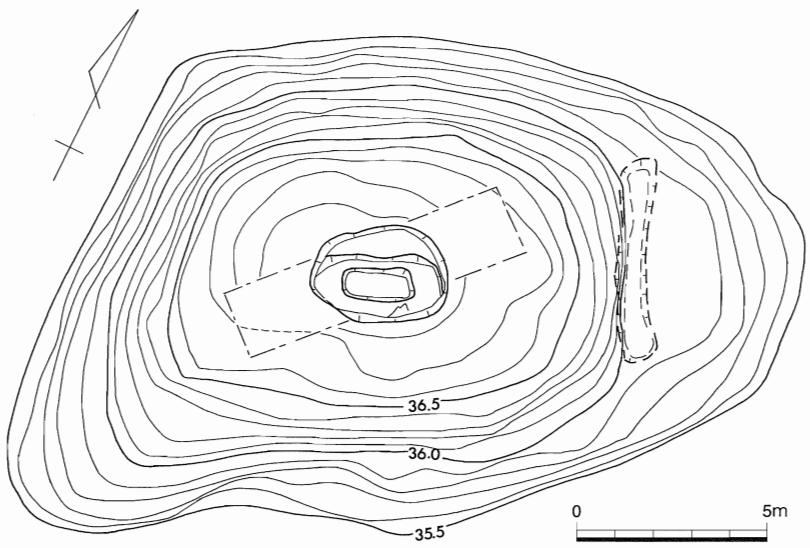
坑道状遺構の立地

調査区中央南東、標高約35mの丘陵尾根南東斜面、１号横穴墓の真上に、奥深くまで続く坑道状の遺構（以下、「坑道状遺構」と呼ぶ）が確認できた。

以下、古墳、横穴墓、山城跡、坑道状遺構の順で各遺構の概要について述べる。



第107図　長廻古墳群１号墳調査前地形測量図（Ｓ＝１：200）



第108図　長廻古墳群１号墳調査後墳丘測量図（Ｓ＝１：200）

１．古墳の調査

１号墳

調査区の設定　測量調査を実施したところ、方墳の可能性が強かったため、各辺の中心と考えられる点を結んだ十字のラインを設定し、４つの区に分けて調査を実施した。

①　墳丘の概要（第108図）

規模・形態　１辺約５ｍの小形の方墳である。

墳丘の高さについては、墳丘が後世の山城造成により削平された可能性が強く、正確な数値は不明であるが、現状で約１ｍである。

当古墳の北西側斜面（宍道湖側）の墳裾は不明瞭であった。自然の丘陵傾斜を墳丘の一部として取り入れ、墳丘を大きく見せようとしたのではないかと考えられる。

周溝についても、後世の削平により正確ではないが、現状で墳丘北東直線状の溝を検出した。

墳丘からは、遺物は検出できなかった。

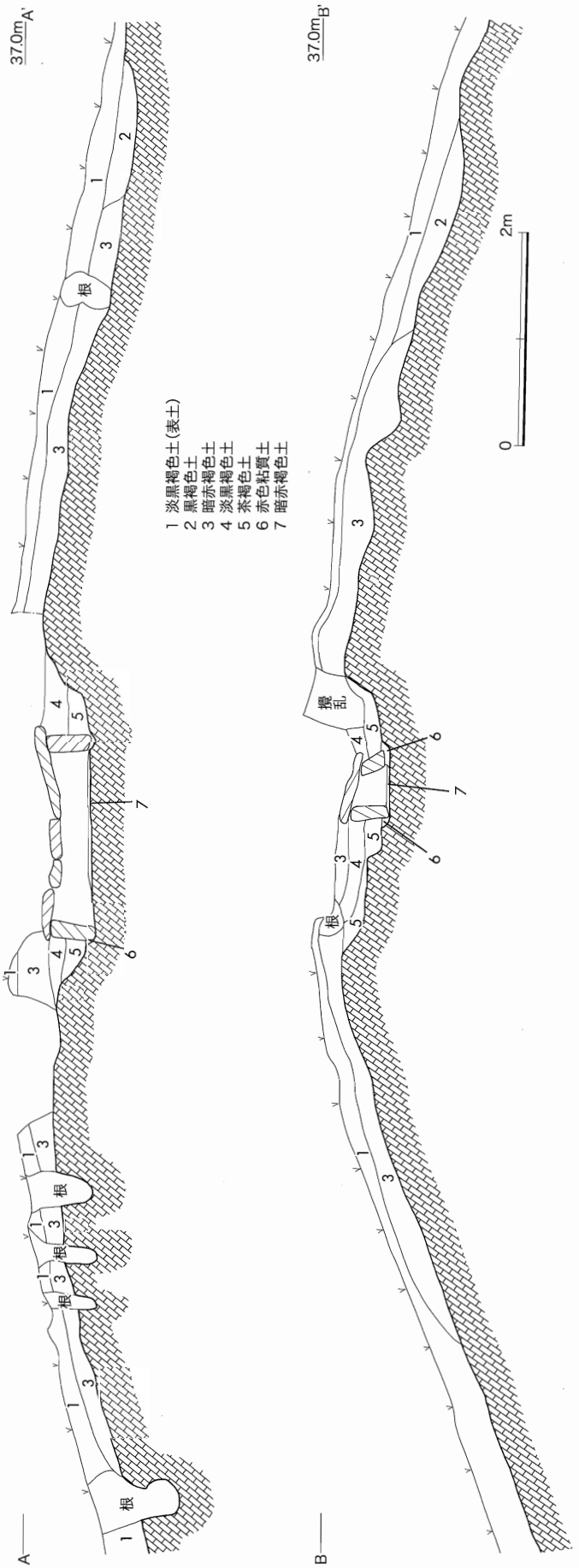
②　墳丘の築成（第109図）

墳丘築成の概要　後世の削平を受けているため判然としないが、基本的に地山を削って周溝を設けて、その残土を盛り上げて墳丘としたと推定される。

③　埋葬施設

主体部の配置　主体部と考えられる石棺を墳頂中央付近に１基検出した。石棺の主軸はほぼ北東－南西に向いている。

墓壙（第114図）　地山を掘り込んで墓壙を設けたと考えられ、墓壙は、基本的に二段掘りで、平面形は長方形である。若干北東側の幅が広くなってい



第109図　長廻古墳群１号墳墳丘土層断面図（Ｓ＝１：60）

る。

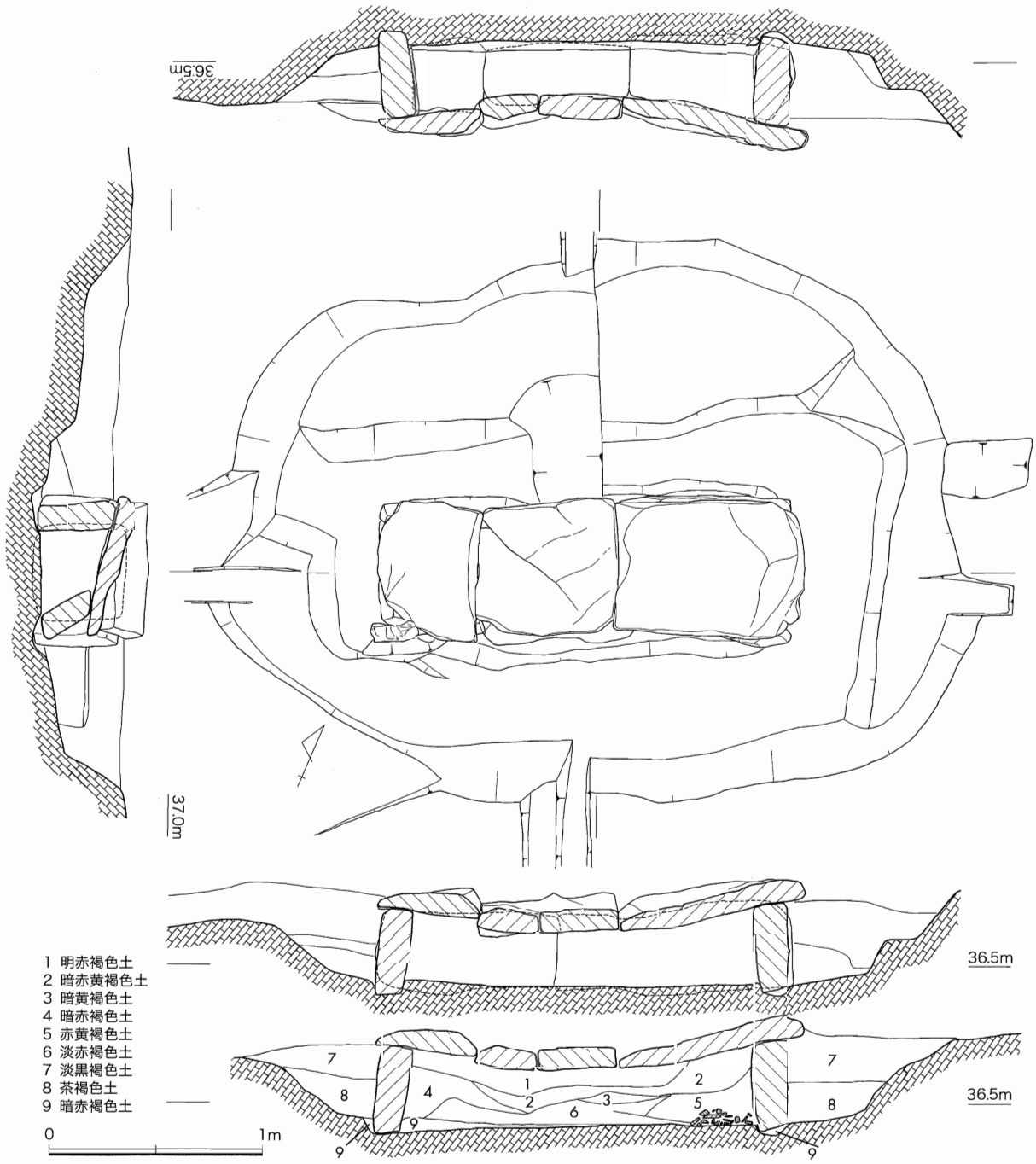
石棺（第110図・第111図）

石材　棺材に用いた石材は、いわゆる来待石である。

規模　石棺は墓壙のほぼ中央に位置している。南東側の側石が石棺内側へ傾いており正確な数値は不明だが、石棺の規模は内法で長さ1.62m、幅40cm、高さ33cmで、北東側が若干幅広くなっている。

棺身　棺の構造は側石で小口板を挟み込むタイプのものである。北西側の側石には２枚、南東側の側石には３枚の石材を使用している。両小口に掘り方を設けた後、石材を配置している。

石棺内部　南東側の側石が内側へ若干倒れており、そこから土砂が流入していた。



第110図　長廻古墳群１号墳主体部実測図(1)（S＝1：30）

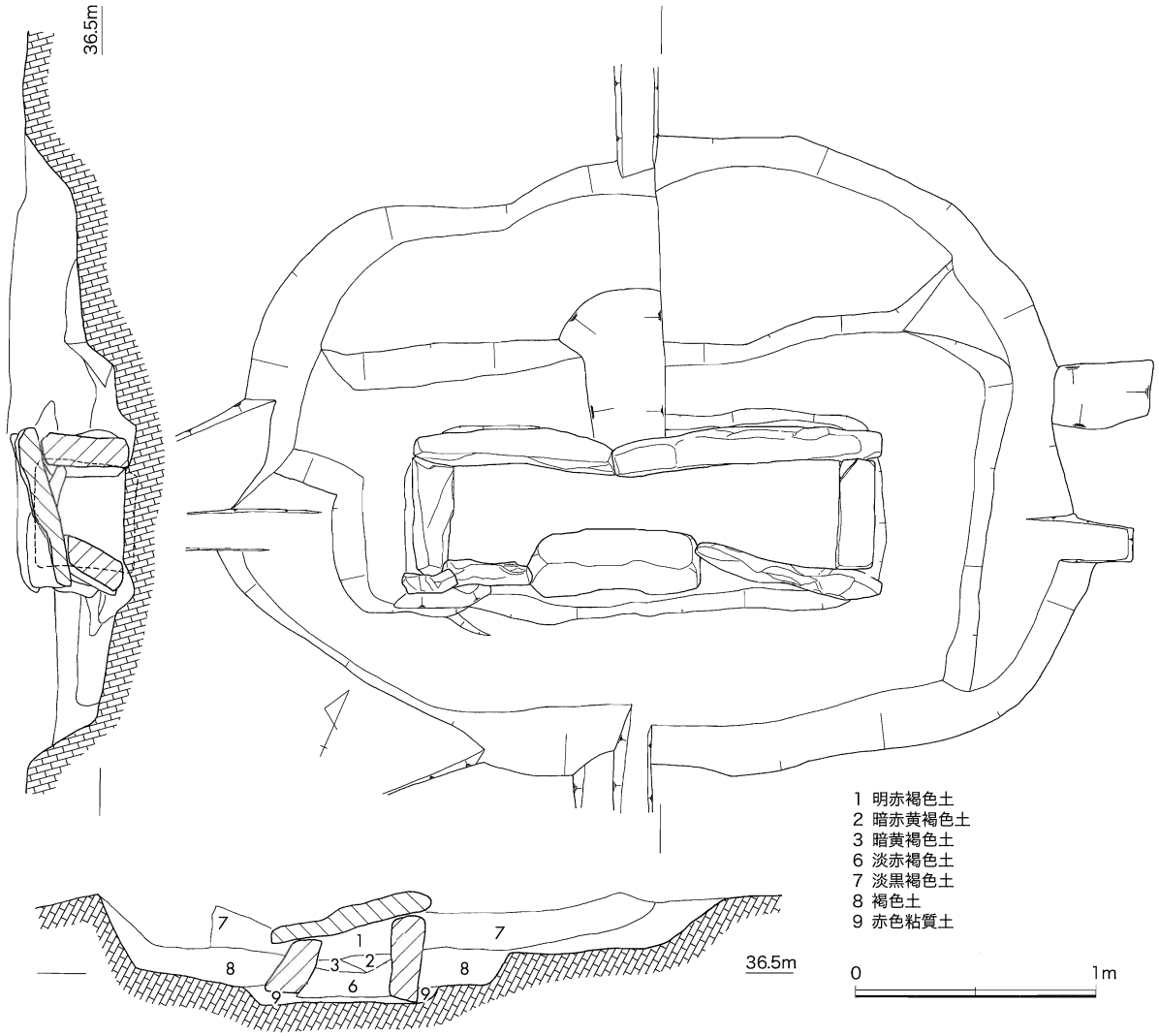
礫　石棺内北東端に親指大ほどの多数の礫が山状に積まれているのが確認された。その山の中央にはくぼみができるように積まれていた。ちょうど枕のような状態になっていた。

遺物の出土状況（第112図）　枕状の礫のすぐ南側の脇から刀子が出土した。

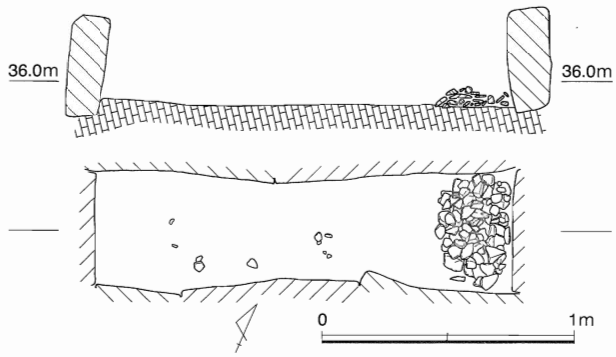
１号墳出土遺物（第113図）

詳細は遺物観察表に譲る。

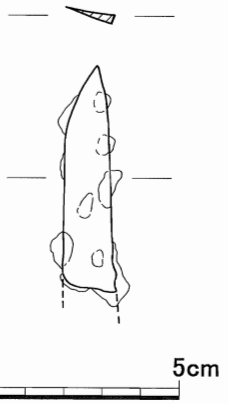
年代　出土遺物が刀子１点のみであり不明である。



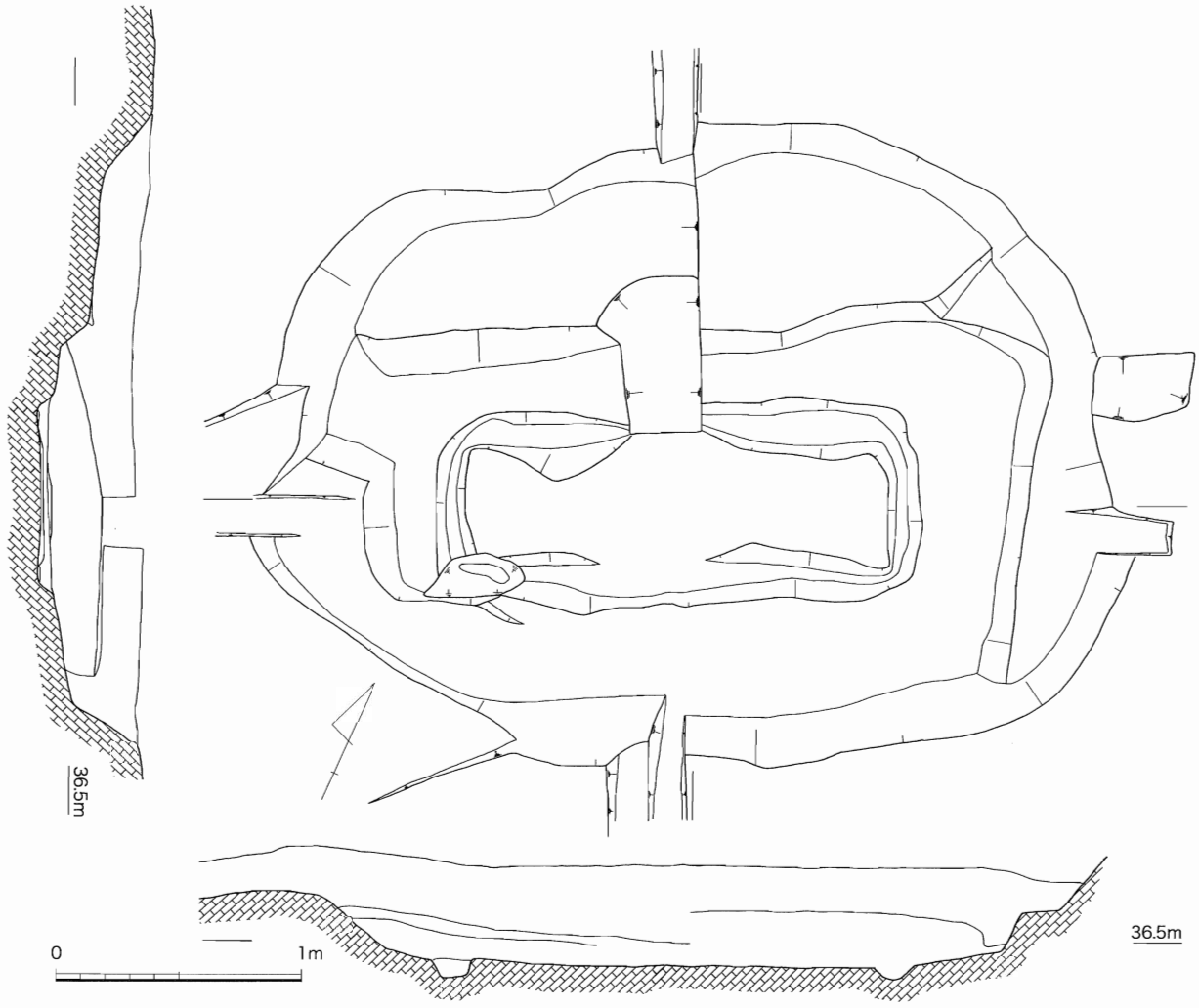
第111図　長廻古墳群１号墳主体部実測図(2)（S＝１：30）



第112図　長廻古墳群１号墳石棺内遺物・礫出土状況実測図（S＝１：30）



第113図　長廻古墳群１号墳出土遺物実測図（S=1：2）



第114図　長廻古墳群１号墳主体部掘方実測図（石棺除去後）（S＝１：30）

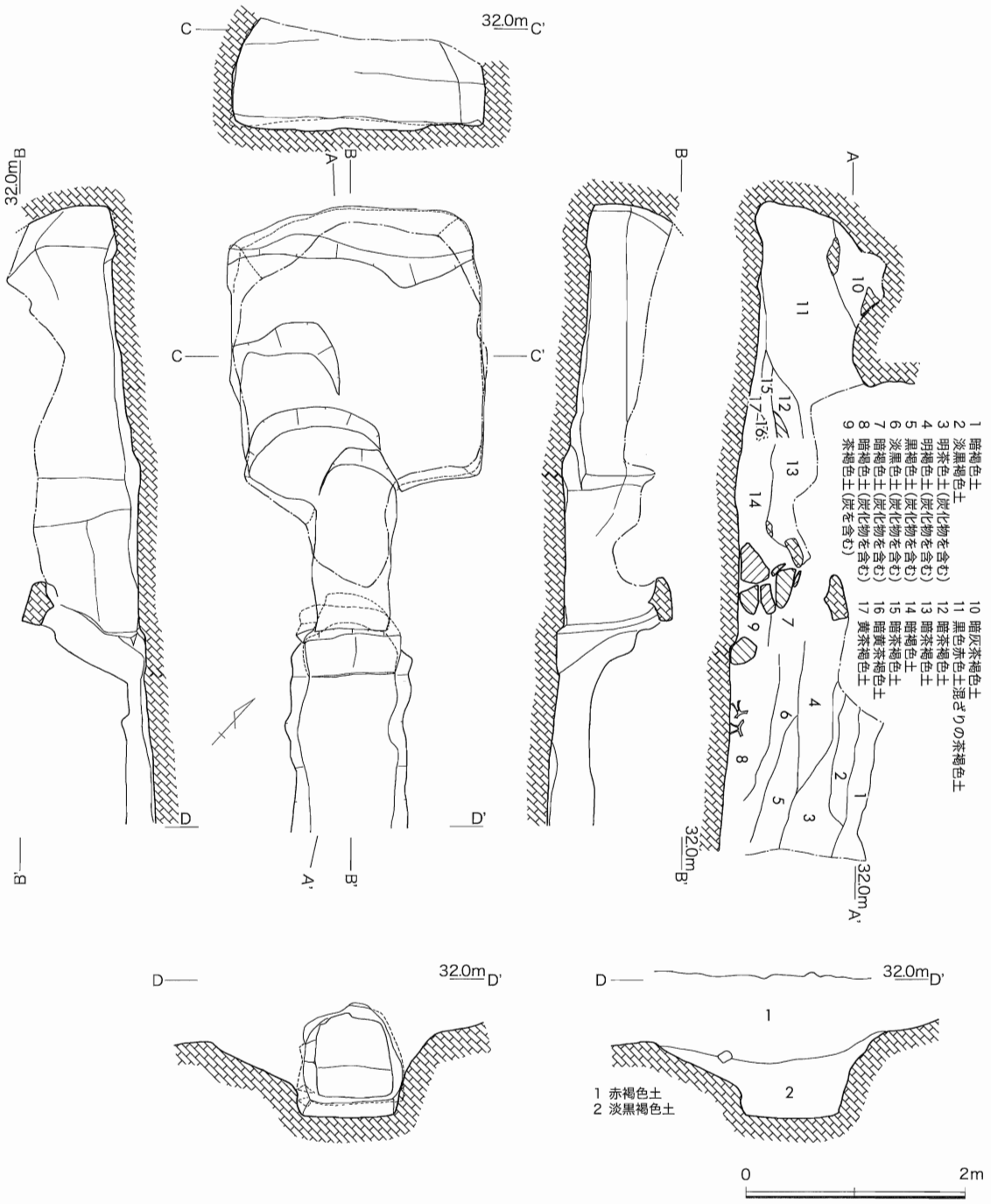
2．横穴墓の調査

1号穴（第115図～第119図）

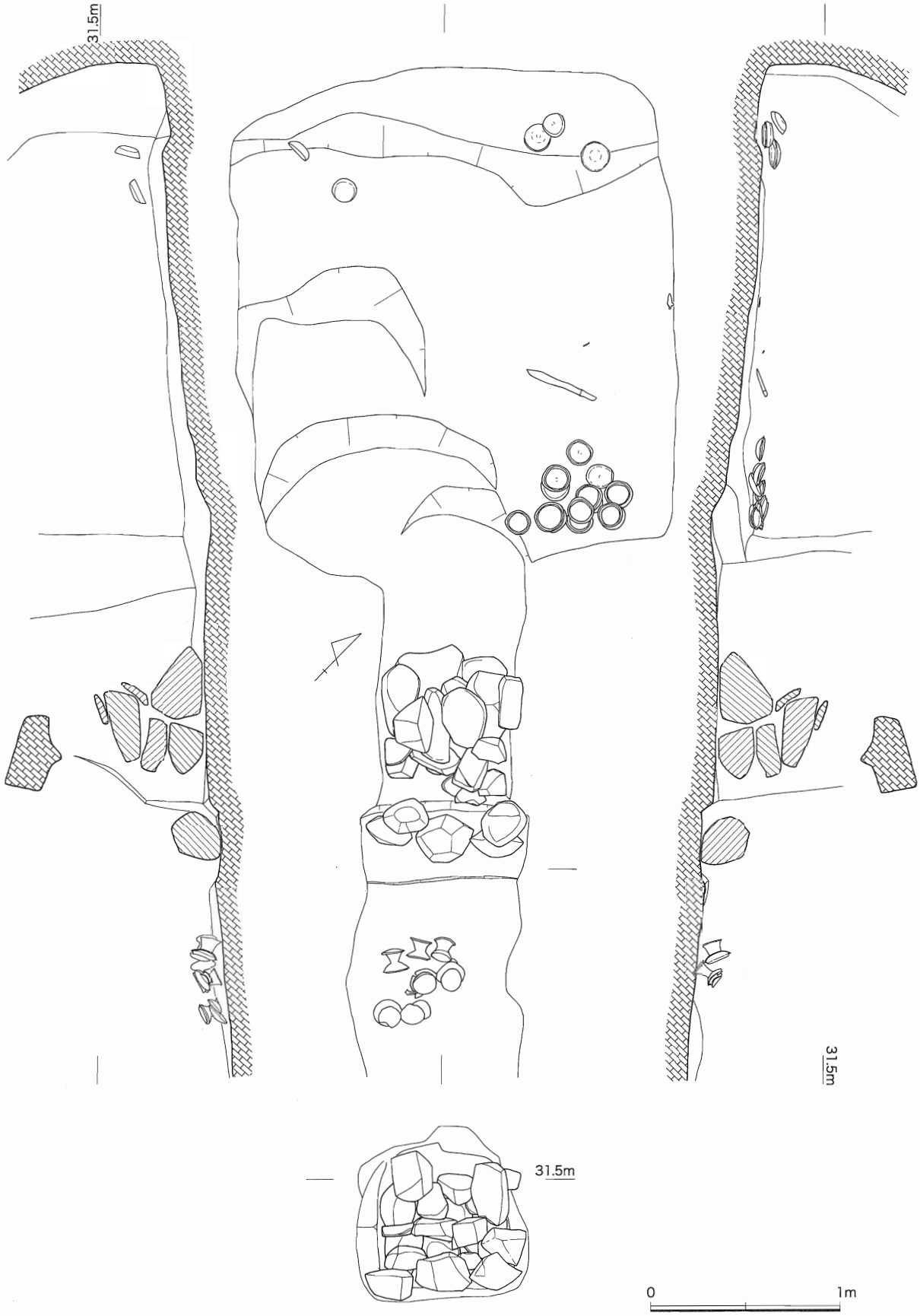
玄室が北西に向かって設けられており、ほぼ1号墳に向かっている。1号墳からは人骨は検出されておらず、1号墳が1号穴の後背墳丘である可能性もある。

南東向きに開口している。

前庭部　1号穴は調査区南東端境より検出されており、前庭部の一部は調査区外にあり、前庭部全



第115図　長廻古墳群1号穴実測図（S＝1：60）



第116図　長廻古墳群１号穴遺物・閉塞石出土状況実測図（S＝１：30）

体の調査ができなかったため、全容は明らかでないが、奥幅0.8mである。床面は羨道部に向かって僅かな上りの傾斜となっている。

玄門部　天井部崩落のため高さ、断面形態は不明であるが、平面は奥幅0.8m、手前幅0.7m、長さ1.2mである。

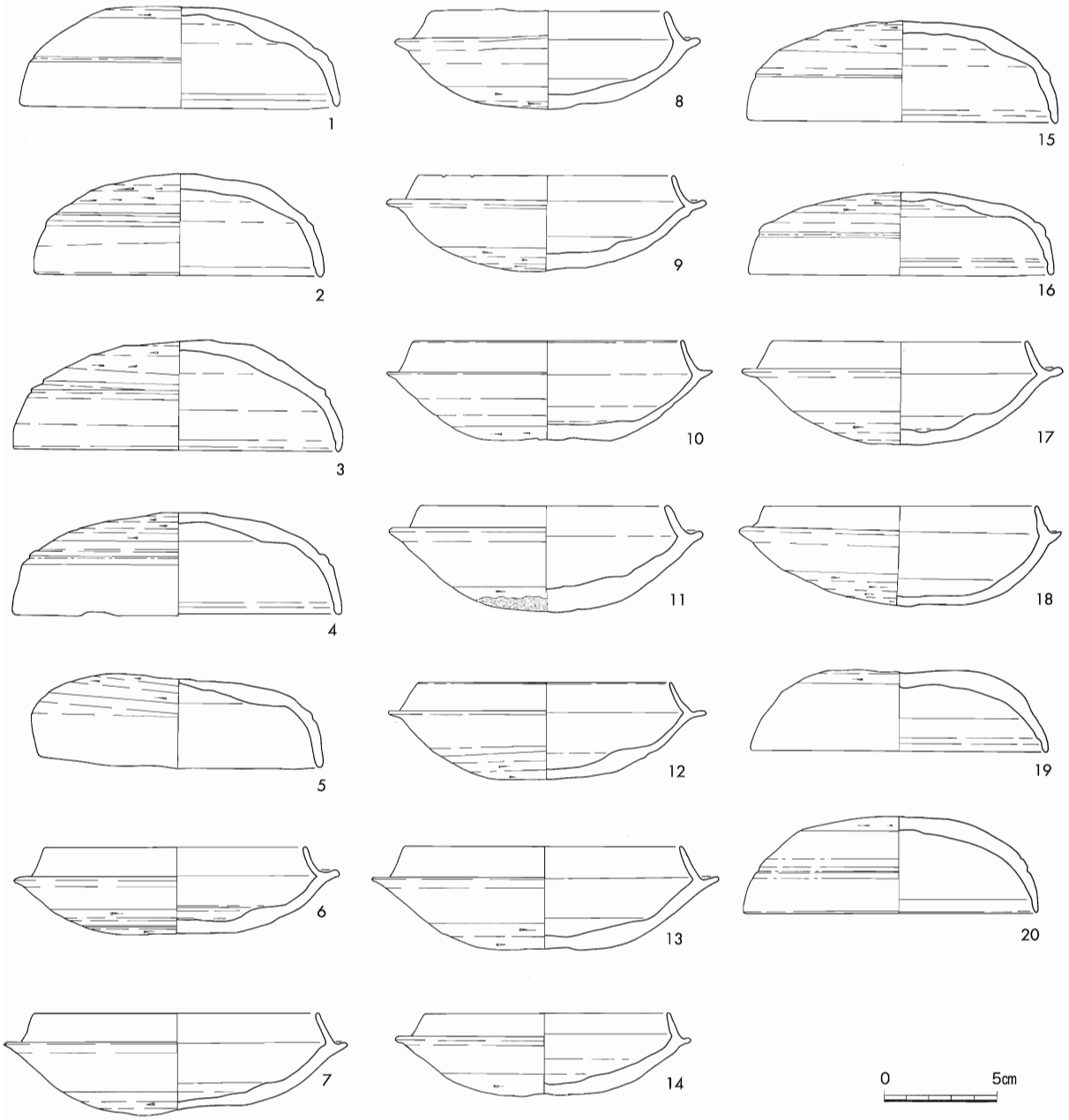
玄室　入口は前庭部の中央よりやや南西側に位置している。平面規模は奥壁側で2.2m、中央幅2.3m、袖側で2.1m、奥行き2.7mで、やや縦長の長方形プランを呈する。天井部崩落のため高さは不明である。四隅からは界線が立ち上がり稜線へと続く。

閉塞状況　閉塞石はいわゆる来待石で、人頭大の石を積み上げて閉塞している。

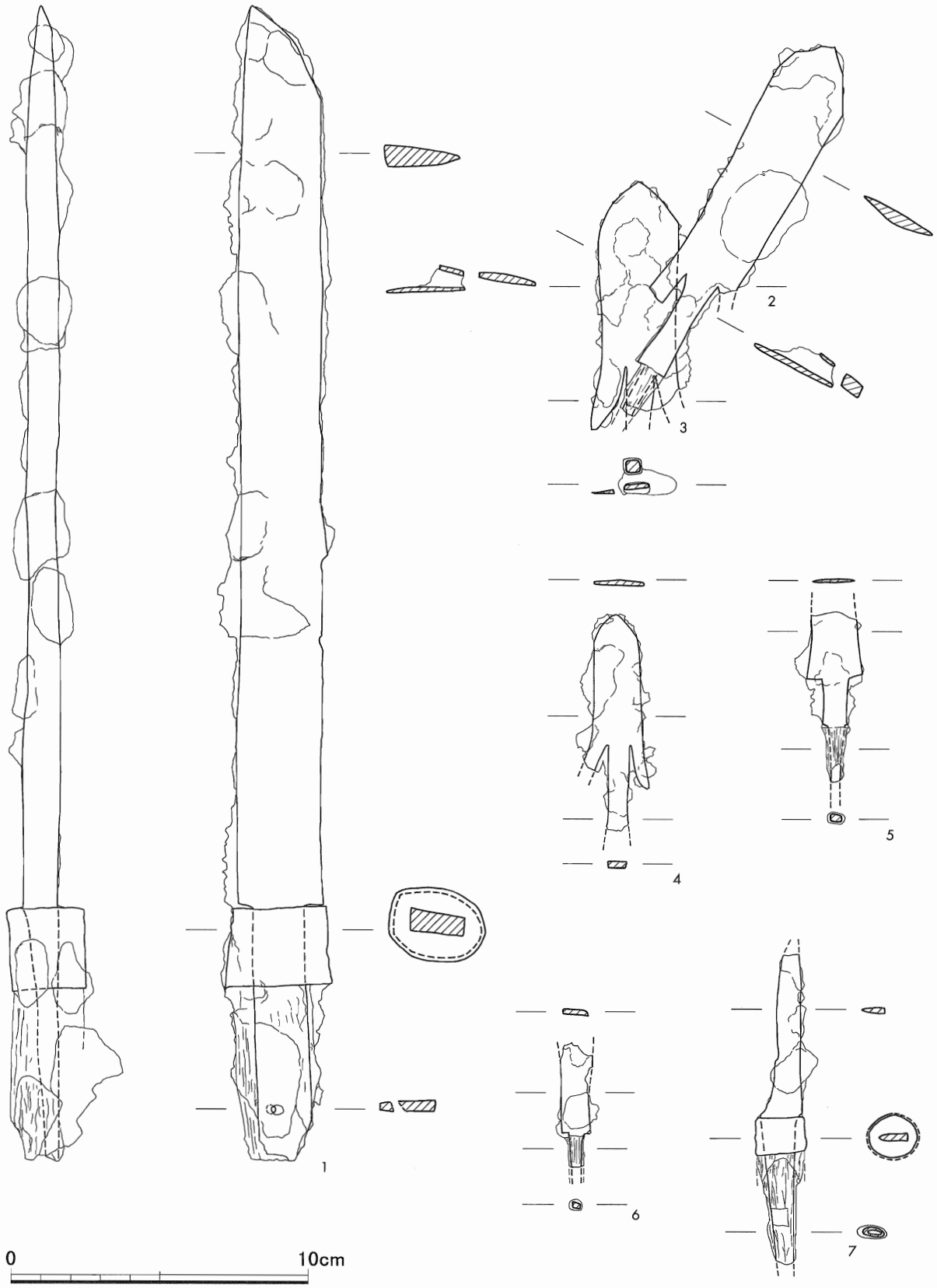
遺物の出土状況（第116図）　遺物は前庭部奥端部と玄室内からまとまって出土している。

前庭部では床面直上に須恵器の有蓋高坏が整然とまとまって出土した。

玄室内では入口北側付近から須恵器の蓋坏が整然とまとまって出土した。中央北側付近からは大



第117図　長廻古墳群１号穴玄室内出土遺物実測図（S＝１：３）



第118図　長廻古墳群１号穴出土遺物実測図（Ｓ＝１：２）

刀や鏃など鉄製品が出土した。玄室奥壁付近からは須恵器の蓋坏が点々と出土した。

玄室内出土遺物（第117図・第118図）　須恵器蓋坏と鉄製品が出土している。

年代　蓋坏の特徴から大谷編年の３期もしくは４期[2]であると思われる。

前庭部出土遺物（第119図）　須恵器坏蓋と有蓋高坏が出土している。１と３、２と10、４と５が整然と重なり合って出土した。詳細については遺物観察表に譲る。

年代　坏蓋の特徴から大谷編年の出雲３～４期であると思われる。

２号穴（第120図～第123図）

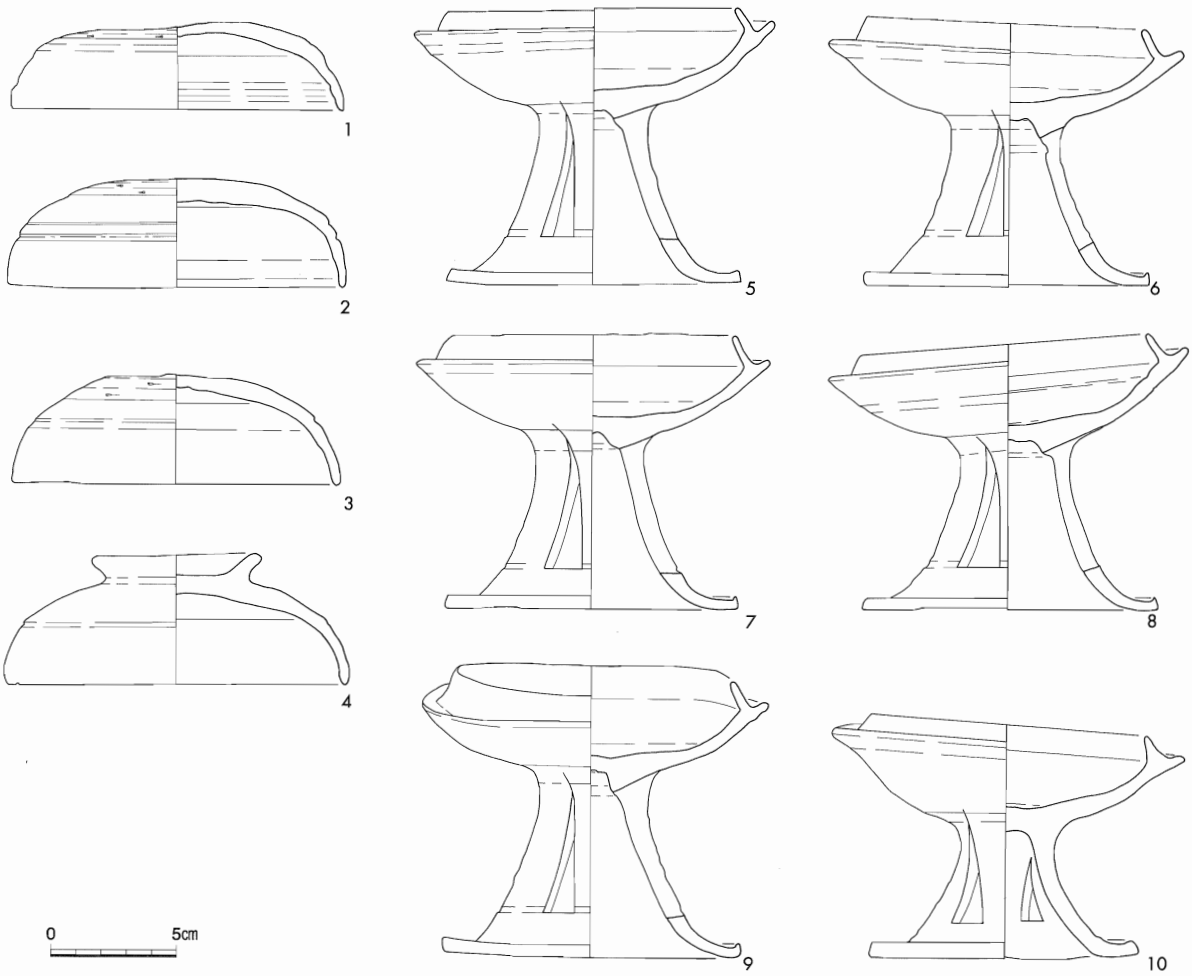
北向きに開口している。

前庭部　奥幅0.72m、中央幅0.3m、前端幅0.6m、奥行き3.36mで、平面形態は中央が狭くなっている。床面は前端部に向かって緩やかに下りの傾斜となっている。

玄門部　奥幅0.48m、手前幅0.42m、奥行き0.72mである。天井部崩落のため高さ、断面形態については不明である。床面中央には排水溝と見られる溝が検出された。

玄室　前庭部の主軸よりやや東側に振った状態で掘られている。入口は中央に位置している。幅は奥壁側２m、袖側2.1m、奥行き1.9mで、ほぼ平面形を呈する。入口付近の天井が崩落しているが、高さは１mである。４隅からは界線が立ち上がり稜線へと続く。

閉塞状況　１号穴と同様、人頭大の来待石を積み重ねて閉塞している。



第119図　長廻古墳群１号穴（前庭部）出土遺物実測図（床面付近）（S＝１：３）

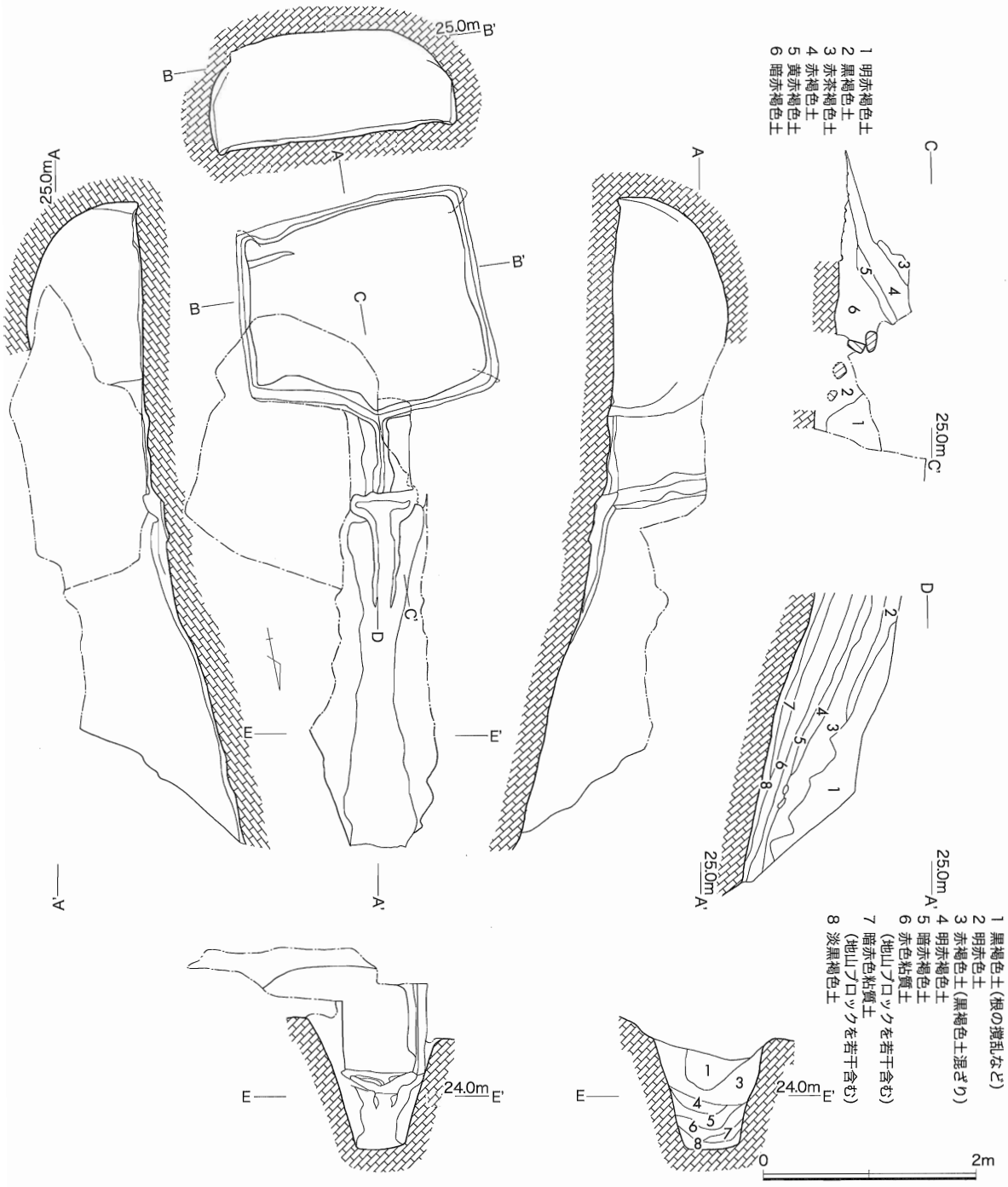
礫床　玄室の北西部分を除いた床面には親指大の礫が一面に敷かれていた。

人骨　奥壁側の礫床上には人骨が点々と出土した。

遺物の出土状況（第121図）　玄室内から須恵器蓋坏、鉄鏃が出土している。

玄室内出土遺物（第122図、第123図）　詳細については観察表に譲る。

年代　出土遺物が少なく判断が困難であるが、須恵器蓋坏の特徴から大谷編年の出雲３期ではないかと思われる。

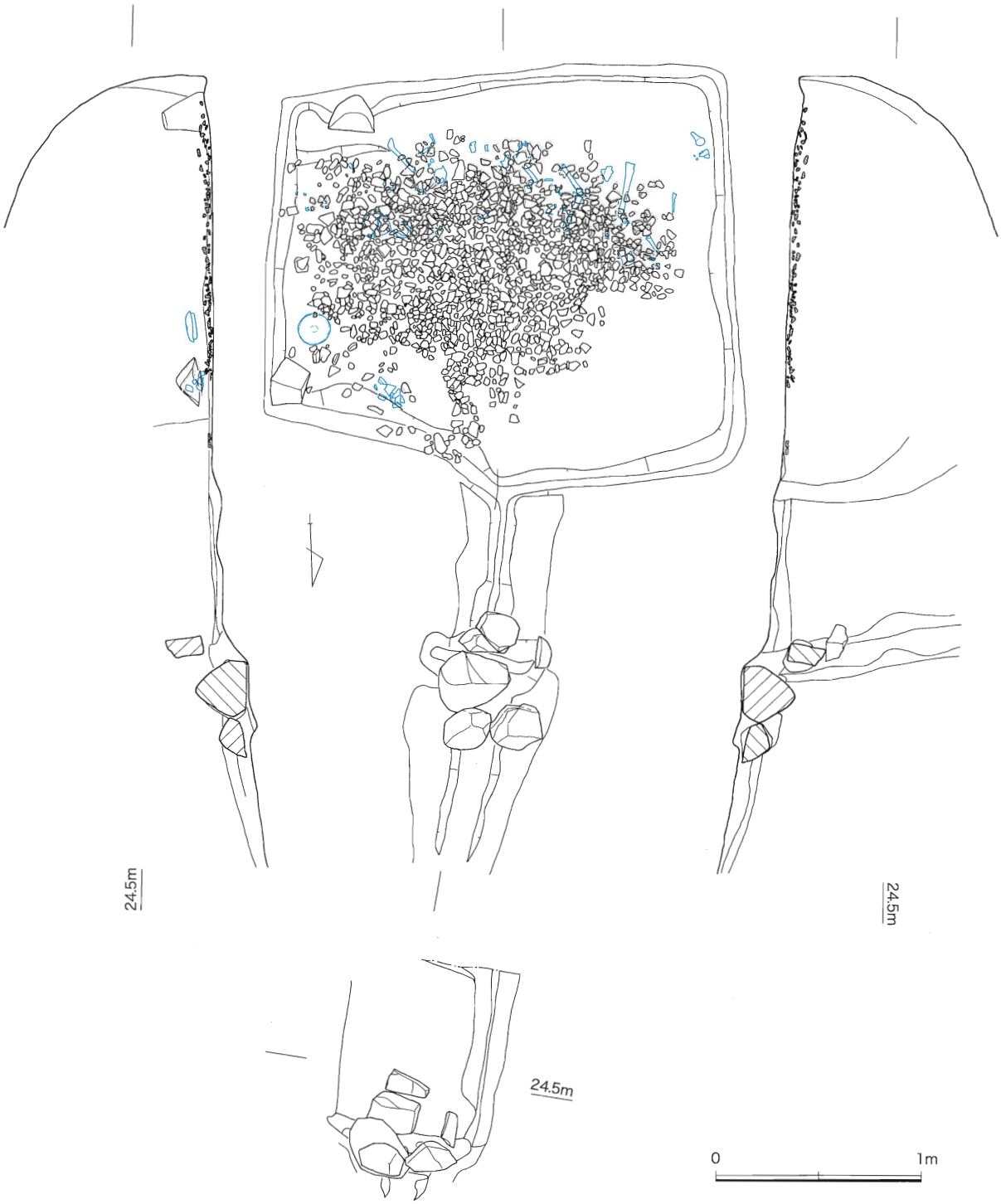


第120図　長廻古墳群２号穴実測図（S＝１：60）

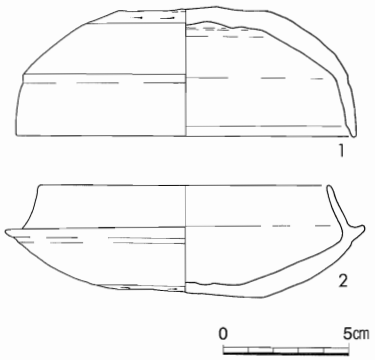
３．山城跡の調査

第１郭（第124図～第126図）

調査区の設定　測量調査を実施し、郭と思われる張り出し平坦面の各辺の中心と考えられる点を結んだ十字のラインを設定し、盛土の状況等を確認するため土層を中心に調査した。

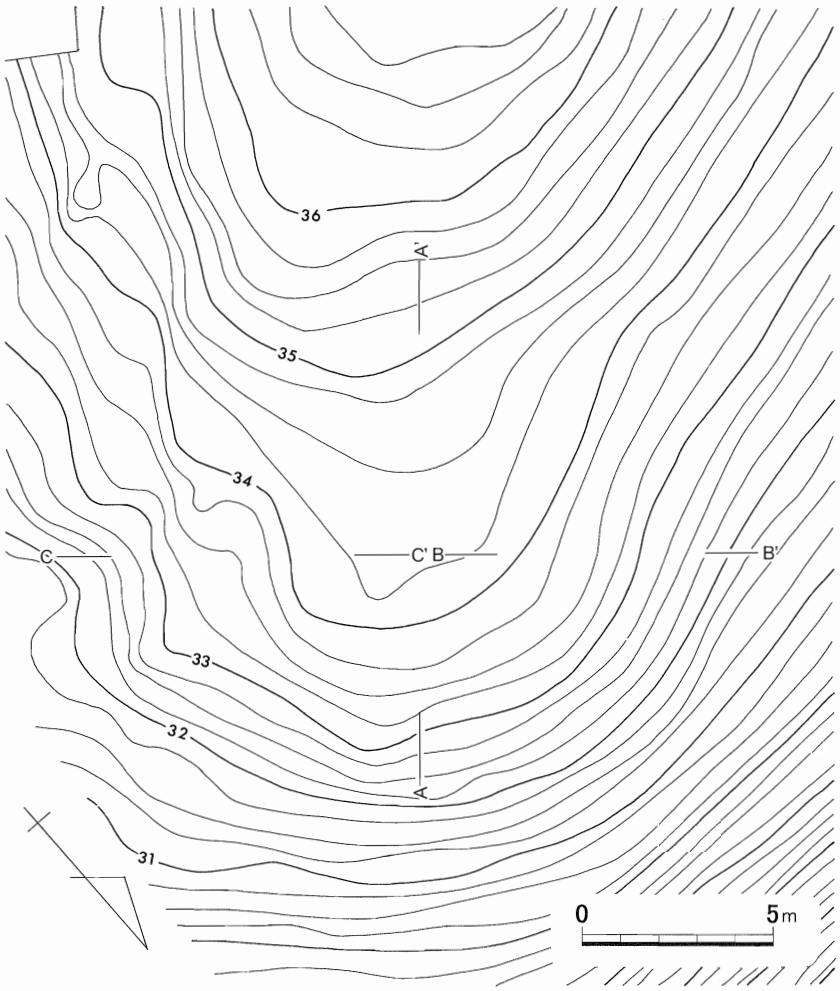


第121図　長廻古墳群２号穴遺物・人骨・閉塞石出土状況実測図（S＝１：30）

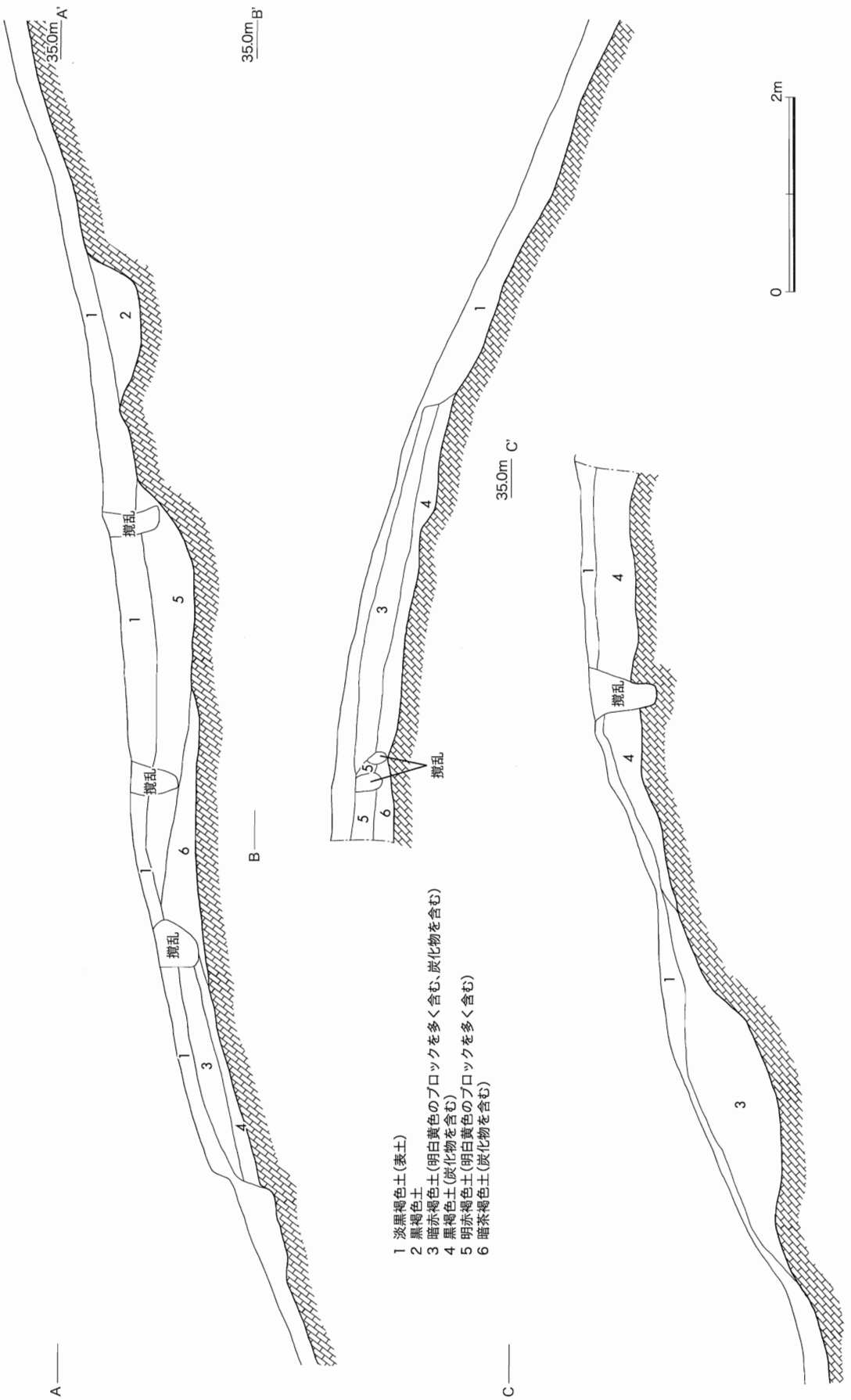


第122図　長廻古墳群２号穴玄室内
出土遺物実測図（S＝１：３）

第123図　長廻古墳群２号穴
出土遺物実測図（S＝１：２）



第124図　長廻古墳群第１郭調査前地形測量図（S＝１：200）



第125図　長廻古墳群第１郭土層断面図（S＝１：60）

① 郭の概要

規模・形態　一辺８ｍの正方形プランを呈し、丘陵尾根側の裾には幅約１ｍ、長さ約５ｍ、深さ約40㎝の溝が検出された。

② 郭の築成

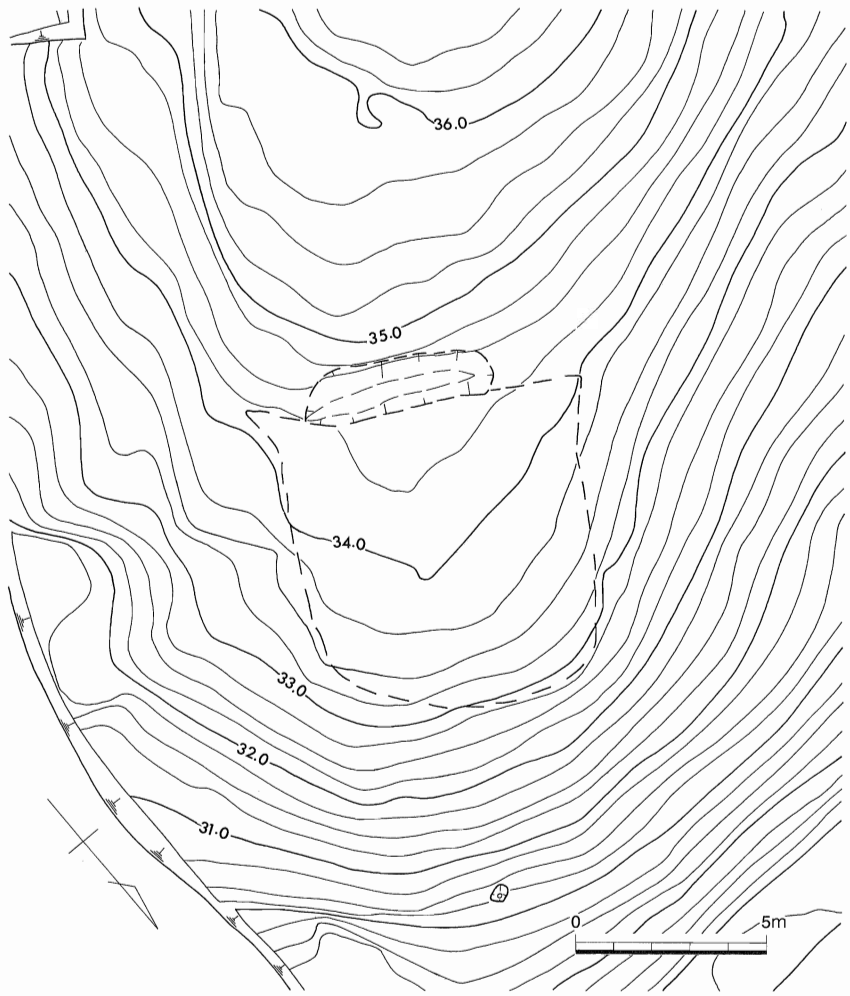
郭築成の概要　土層の状況から基本的に尾根側の斜面を削り、残土を前面に盛土し、平坦面を設けていたと想定される。

盛土の種類　基本的に周辺の地山を削りだしたものを利用していると考えられる。盛土は暗茶褐色土、明赤褐色土、黒褐色土、暗赤褐色土の４種類があると思われる。

年代　出土遺物がなく不明である。

４．坑道状遺構の概要

１号穴の直上に位置していることもあり、当初穴が確認されたときは横穴墓として調査を進めていたが、横穴墓の形態をとっておらず、また穴が奥深くまで続いており、坑道状遺構とすることにした。この坑道状遺構は相当奥深くまで続いており、崩落の危険があったため、また坑道状遺構の直上には１号墳もあり天井部を取り壊すこともできないため、調査は可能なところまでで断念した。



第126図　長廻古墳群第１郭調査後地形測量図（Ｓ＝１：200）

第127図　長廻古墳群坑道状遺構実測図（S＝1：60）

基本的に３穴確認した。

１号穴の直上にある東側の穴には羨道らしきものが２ルート確認できた。

どの穴の入口前にも平坦面があり、穴は奥に向かって下がっている。

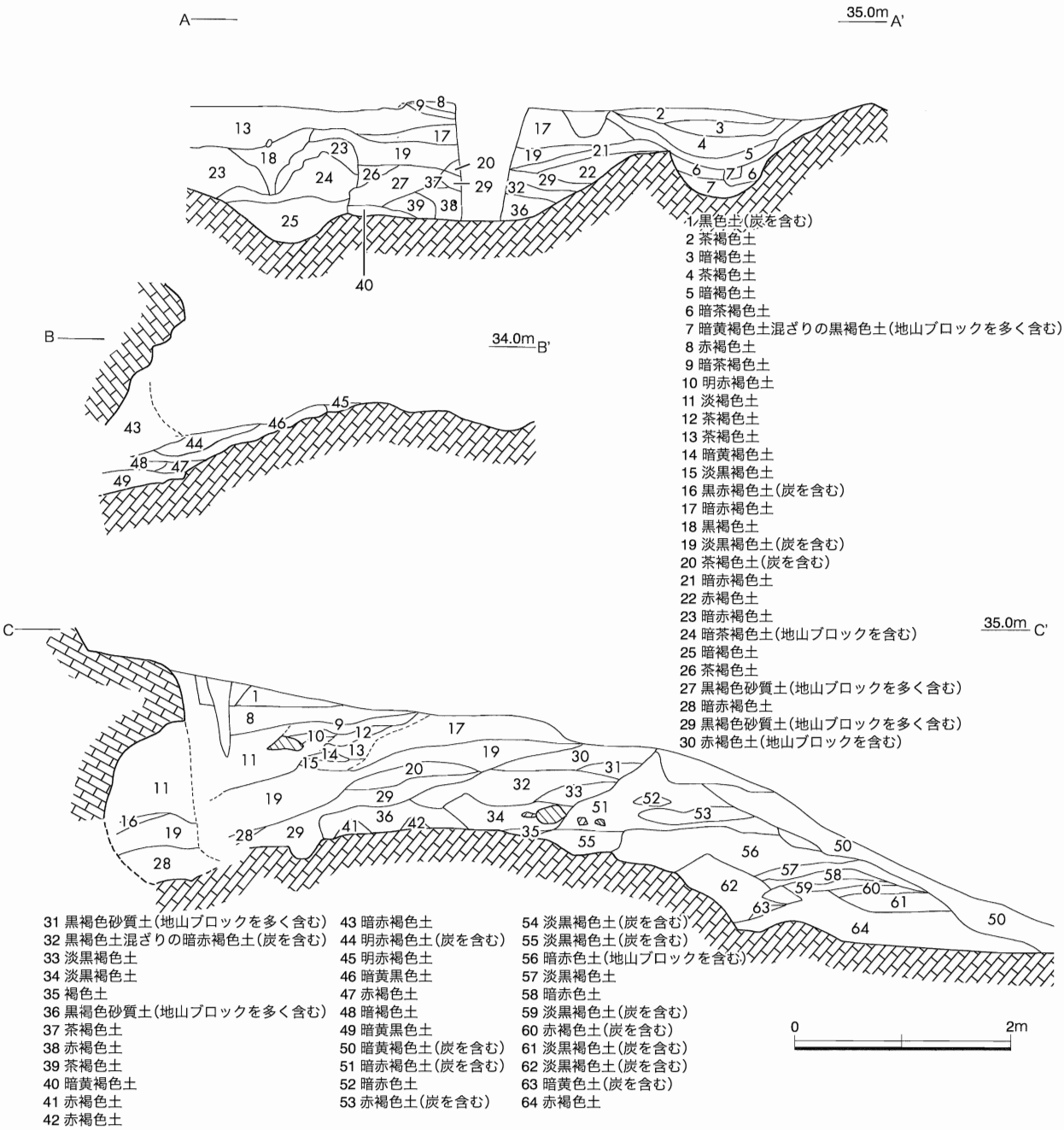
年代　出土遺物がなく不明である。

遺構外出土遺物（第129図）

詳細については遺物観察表に譲る。

第３節　小結

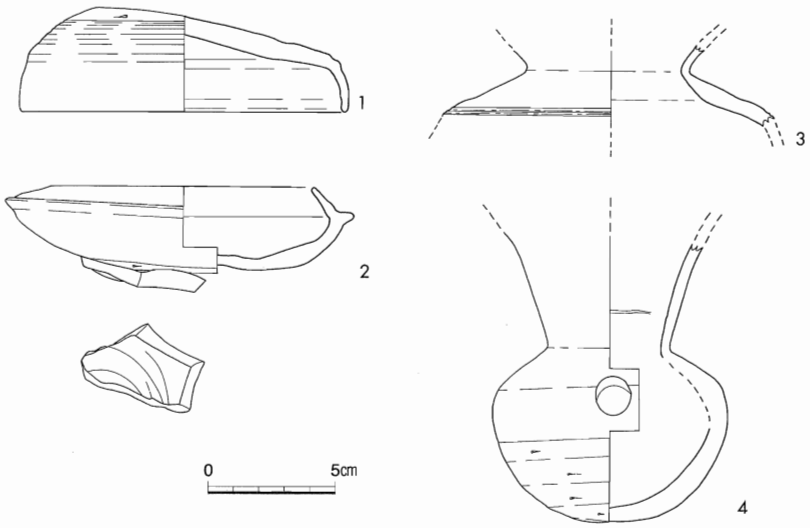
長廻古墳群で確認した遺構のうち、古墳及び横穴墓について整理し、小結としたい。



第128図　長廻古墳群坑道状遺構土層断面図（S＝１：60）

1．古墳

古墳は１基検出した。当古墳で特筆すべきことは、埋葬施設である箱式石棺内から検出した積み上げられた礫である。本県では、そのような遺構は確認されていないが、石枕と同様の性格のものではないかと推定される。資料の増加を待って再検討されたい。



第129図　長廻古墳群遺構に伴わない遺物測量図（Ｓ＝１：３）

2．横穴墓

横穴墓は２基検出した。１号穴と２号穴は位置する斜面及びレベルについても異なる。１号穴及び２号穴はどちらも単独で存在すると考えられるが、２号穴は調査区外の状況がわからないため、今後の資料待ちとしたい。

横穴墓の構造については、１号穴及び２号穴とも狭長な前庭部で、羨道部と幅はほとんど変わらない。閉塞についても、どちらの横穴墓も人頭大の石が積み上げられていた。玄室形態については天井部が崩落しており詳細は不明だが、１号穴は縦長長方形の平面プランを呈し、２号穴は正方形もしくは横長長方形の平面プランで家形を呈すると考えられる。

出土した須恵器から、１号穴は出雲３～４期に相当し、２号穴は出雲３期に相当する。２号穴の出土須恵器の数が少ないため断定はできないが、同じ出雲３期でも、２号穴の須恵器の方が、若干古い形態を呈していると思われる。出雲３期となると、１号穴、２号穴とも宍道町内での横穴墓では最も古い部類の横穴墓になると考えられる。

このことから、前述の１号墳は、古墳と横穴墓との位置関係、横穴墓の時期の古さ、単独の横穴墓であることなどから、１号穴の後背墳丘である可能性が高くなった。

２つの横穴墓に共通な、狭長な前庭部で羨道部と幅が変わらない点、人頭大の石を積み上げて閉塞する点、及び単独で存在する点は、宍道町に導入され始めた横穴墓の特徴であるかもしれない。ただ、資料が少なすぎるため、今後の資料の増加を待って再検討すべきであろう。

註

１）『宍道町史　史料編』宍道町　1999

２）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994
以下、出雲○期と記したものはこの編年による。

表６　長廻古墳群遺物観察表

挿図番号	種類 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	胎土・色調・焼成	備考
117-1	須恵器 坏（蓋）	14.2		4.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	玄室内　取上No.15 981112	3㎜大の砂粒を含む　外面：淡灰色（一部淡黄灰色）　内面：淡黄灰色　良好	
2	〃	13.0		4.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ起こし　内面：ナデ、回転ナデ	玄室内　取上No.19 981112	１～２㎜程度の砂粒を含む　淡青灰色　良好	
3	〃	14.8		5.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	玄室内　取上No.22 981112	１～２㎜の砂粒を含む　淡黄灰色　良好	焼成時に少し変形
4	〃	14.5		4.7	〃	玄室内　取上No.13 981112	2㎜大の砂粒を含む　淡灰色　良好	
5	〃	12.2		4.3	〃	玄室内　取上No.20 981112	4㎜大の砂粒を含む　淡灰色（外面頂部淡黄白色）　良好	やや変形
6	須恵器 坏（身）	11.4 （最大14.7）		4.0	〃	玄室内　取上No.10 981112	２㎜大の砂粒を含む　淡青灰色（外面やや黄色）　良好	
7	〃	12.5 （最大15.4）		4.6	〃	玄室内　取上No.14 981112	２㎜大の砂粒を含む　外面：淡青灰色内面淡黄灰色　良好	
8	〃	10.5 （最大13.7）		4.5	〃	玄室内　取上No.17 981112	２㎜大の砂粒を含む　青灰色　良好	
9	〃	11.4 （最大14.4）		4.4	〃	玄室内　取上No.16 981112	2㎜大の砂粒を含む　外面：淡青灰色（一部淡灰色）　内面：淡灰色　良好	
10	〃	12.1 （最大14.7）		4.5	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ後ナデ	玄室内　取上No.21 981112	２㎜以下の砂粒を含み密　内・外面：灰色　良好	ヘラ起こしの痕跡あり
11	〃	11.2		4.9	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	玄室内　取上No.18 981112	１㎜大の砂粒を含む　外面：淡灰色 内面：淡青灰色　良好	外面に付着物あり
12	〃	11.3 （最大14.3）		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ後ナデ	玄室内　取上No.23 981112	２㎜以下の砂粒を若干含む　外面：灰色 内面：淡灰色　良好	ヘラ起こしの痕跡あり
13	〃	12.3 （最大15.5）		4.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ起こし　内面：回転ナデ、ナデ	玄室内　取上No.12 981112	2㎜大の砂粒を含む　外面：淡黄灰色 内面：淡白灰色　良好	
14	〃	11.0 （最大13.3）		3.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	玄室内　取上No.11 981112	6㎜以下の砂粒を含む　淡青灰色　良好	
15	須恵器 坏（蓋）	13.8		4.6	〃	玄室内　取上No.７ 981112	１～３㎜程度の砂粒を含む　灰色　良	
16	〃	13.6		3.8	〃	玄室内　取上No.6 981112	２㎜大の砂粒を含む　淡青灰色（外面上部灰色強い　内面やや淡い）　良好	
17	須恵器 坏（身）	11.2 （最大14.5）		4.7	〃	玄室内　取上No.8 981112	１㎜大の砂粒を含む　淡黄灰色（外面上部は淡青灰色）　良好	
18	〃	12.3 （最大14.6）		4.7	〃	玄室内　取上No.9 981112	1㎜大の砂粒を含む　淡青灰色　良好	器形が変形している
19	須恵器 坏（蓋）	13.0		3.7	〃	玄室内　取上No.4 981112	3㎜大の砂粒を含む　淡青灰色（外面は色が濃い）　良好	
20	〃	13.1		4.4	〃	玄室内　取上No.5 981112	3㎜以下の砂粒を含む　淡灰色　良	
119-1	須恵器 坏（蓋）	12.9		3.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	墓道　取上No.１ 981029	2㎜大の砂粒を含む　外面：淡青灰色 内面：淡白灰色　良好	外面に土付着
2	〃	13.2		4.4	〃	墓道　取上No.3 981029	3㎜大の砂粒を含む　外面：灰色　内面：淡青灰色　良好	〃
3	〃	12.8		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ　内面：回転ナデ、ナデ	墓道　取上No.5 981029	4㎜大の砂粒を含む　外面：灰色（一部淡灰色）　内面：淡青灰色　良好	
4	〃	13.2		5.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	墓道　取上No.8 981029	4㎜大の砂粒を含む　外面：淡青灰色 内面：淡白灰色　良好	輪状つまみ
5	須恵器 有蓋高坏	11.4 （最大14.4）	11.7	11.1	〃	墓道　取上No.9 981029	4㎜大の砂粒を含む　外面：灰色～淡灰色　内面：淡青灰色　良好	三角形透かし３方向１段（少々変形）
6	〃	11.4 （最大14.7）	11.2	10.8	〃	墓道　取上No.7 981029	4㎜大の砂粒を含む　外面：淡灰色 内面：淡青灰色　良好	〃
7	〃	11.2 （最大14.1）	11.5	11.1	〃	墓道　取上No.2 981029	4㎜大の砂粒を含む　外面：淡灰色～淡青灰色　内面：淡灰色　良好	〃
8	〃	11.4 （最大14.4）	11.9	11.1	〃	墓道　取上No.6 981029	4㎜大の砂粒を含む　外面：淡灰色 内面：淡青灰色　良好	〃
9	〃	11.1 （最大13.8）	11.6	11.8	〃	墓道　取上No.4 981029	5㎜大の砂粒を含む　外面：淡灰色 内面：淡青灰色　良好	〃
10	〃	11.0 （最大14.2）	10.7	9.8	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ後ナデ	墓道　取上No.10 981029	2㎜大の砂粒を含む　淡青灰色（外面1/3淡灰色　良好	三角形透かし２方向１段（少々変形）
122-1	須恵器 坏（蓋）	13.6		5.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ起こし　内面：回転ナデ後ナデ	玄室内　取り上げ No.2　981216	1～3㎜程度の砂粒を含む　淡黄白色やや軟質	
2	須恵器 坏（身）	11.6		4.5	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	玄室内　取り上げ No.1　981216	1㎝大の砂粒を含む（1×0.4㎝大の石１個含む）　淡黄白色　やや軟質	
129-1	須恵器 坏（蓋）	13.1		4.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳南東区第１層 PNo.14　98111?	2㎜以下の砂粒を含む　淡青灰色　良好	焼成時につぶれ、変形している
2	〃	10.4 （最大13.9）		3.4	〃	2号墳南東区第１層 981111	1㎜大の砂粒を含む　外面：淡茶褐色 内面：淡青灰色　良好	外面に５㎝弱の須恵器片付着
3	須恵器 器種不明				内・外面：ナデ	2号墳南東区第１層 PNo.13　98111?	1㎜大の砂粒を含む　外面：淡茶褐色 内面：淡灰色　良好	反転復元
4	須恵器 瑕				外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	2号墳南東区第１層 PNo.15　981111	4㎜大の砂粒を含む　淡灰色　良好	

（単位：cm）

挿図番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	刃部厚	出土場所・年月日	備考
113	刀子	6		1.4	0.2	１号墳石棺内　取上No.１	
118－1	大刀	39.4	30.8	2.6	0.8	１号穴	
2	鉄鏃	14.3	10.4	2.1	0.4	〃	
3	〃	8.5	8.5	2.7	0.2	〃	
4	〃	7.4	5.9	1.7	0.2	〃　玄室内　取上No.３	
5	〃	5.8	2.3	1.5	0.2	〃　床面上No.２	
6	〃	4.3	3.2	0.9	0.2	〃　取り上げNo.２	
7	〃	10.6	5.5	0.8	0.2	〃　南東第２層＋床面上No.１	
123	〃	5.5	3	1.8	0.2	２号穴玄室入り口付近	

第７章　海部城跡

第１節　調査の経過と概要

調査前から広い平坦面が広がっており、宍道町遺跡地図（宍道町教育委員会　1993）にも「海部城跡」となっており、山城跡であると想定されていた[1)]。

現地調査は平成10年11月２日より開始した。

調査区内の樹木が伐採されて、調査区の全体像が把握できるようになったため、平坦面の中心ラインに土層観察用のトレンチを設定し調査を実施した。

調査を進めると、平坦面の土層は１層しかなく、また、さまざまな時代の遺物が混在して出土したため、後世に屋敷などに利用された可能性があることが分かった。

また、遺物の中には埴輪片が混在しており、遺構は確認できなかったが、以前、古墳が存在したと想定された。

当初、山城跡ということもあり、遺物、遺構の検出はあまりないと考えていた。遺物についてはあまり検出されなかったが、遺構については調査区東端より性格不明の穴を検出した。その穴からは人頭大の石が検出された。遺跡は後世の削平により丘陵東端（調査区東端）が途中で途切れており、この穴は、当時はもっと続いていたかもしれない。

山城跡ということもあり、遺物、遺構が少なく、12月21日に調査は終了した。

第２節　調査の結果

調査区の立地

国道54号線のためか丘陵先端部が切られているが、東にのびている標高約19m～24mの丘陵先端部上に位置している。

当調査区の面積は、約400㎡である。

(1)　調査前の状況

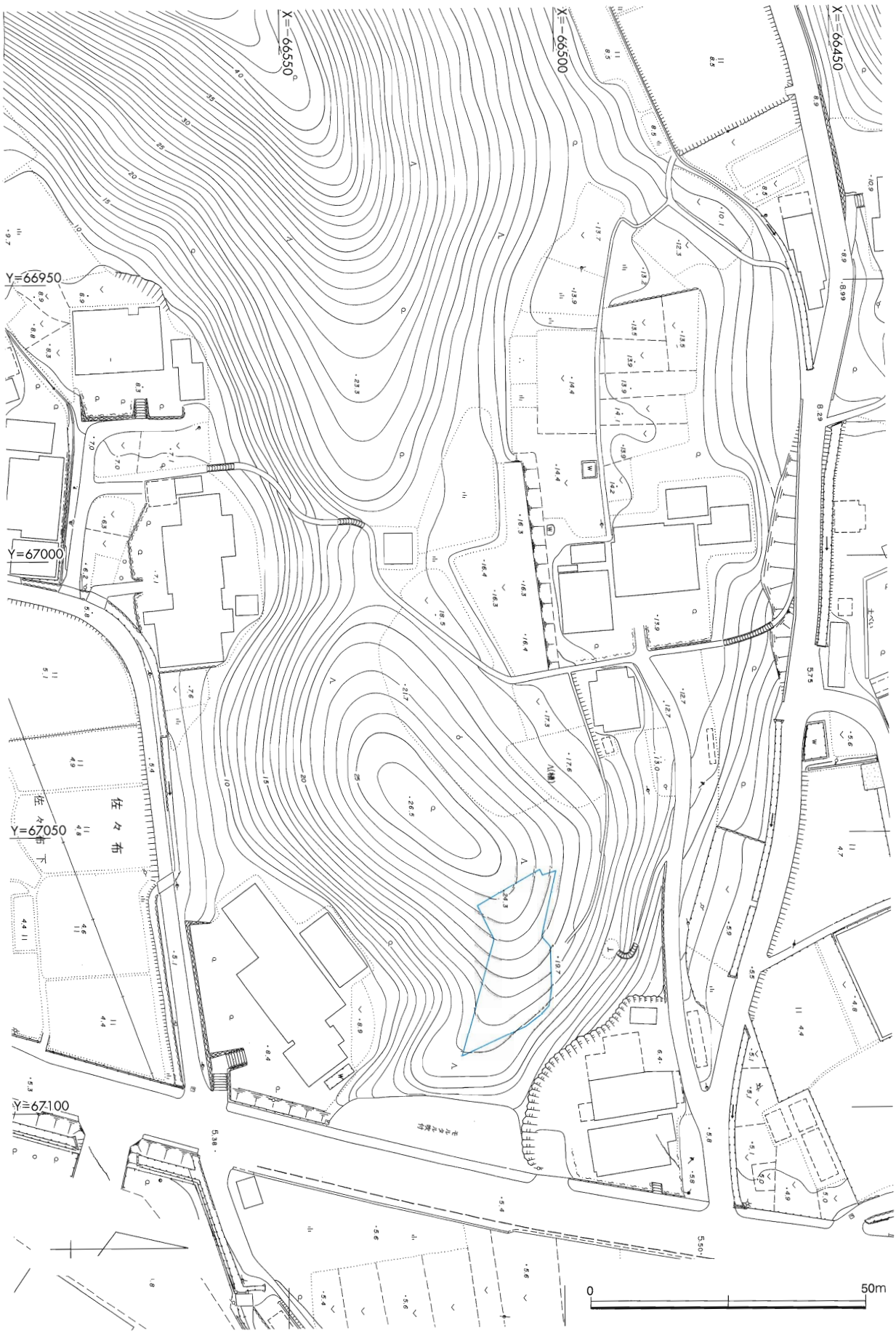
調査前から国道54号線沿いにある現在の丘陵先端部に比較的広い平坦面が確認できていて、立地条件、形状からも山城跡であろうと想定していた。

(2)　調査の結果

調査区の設定　郭と想定される平坦面の中央に、盛土等の状況を確認するため、等高線に直角となるラインを設定し、土層を中心とした調査を実施した。

調査の結果　調査区の範囲の関係と当丘陵が削平されていることから当時の郭の規模・形態は不明であるが、丘陵尾根側の裾には幅約２m～３m、深さ約50cmの溝と、調査区東端より性格不明の穴を３穴を検出した。

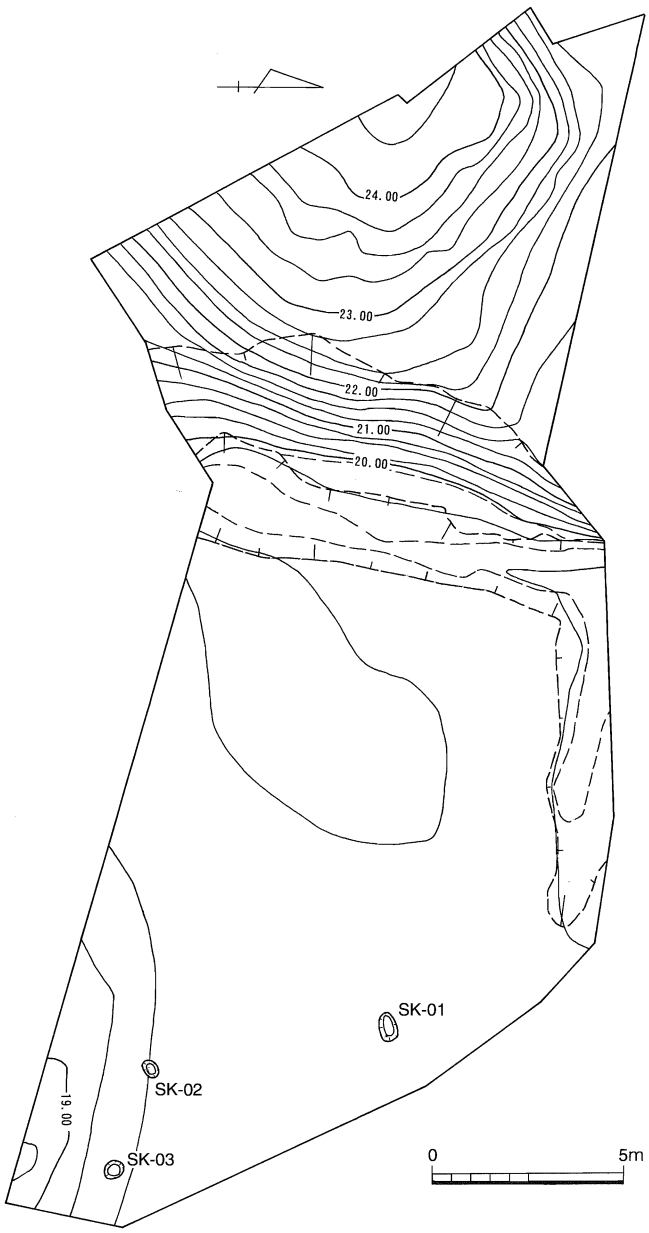
土層を見ると埋土は１層しかなく、またその土層よりさまざまな時代の遺物が数点混ざりながら出土しており、後世に削平、撹乱されている可能性がある。また、調査区南東端からは埴輪片と思われる遺物が出土し、当山城跡は古墳を取り壊して造成した可能性がある。ただし、その古墳の周溝などほかの手がかりは確認できなかった。



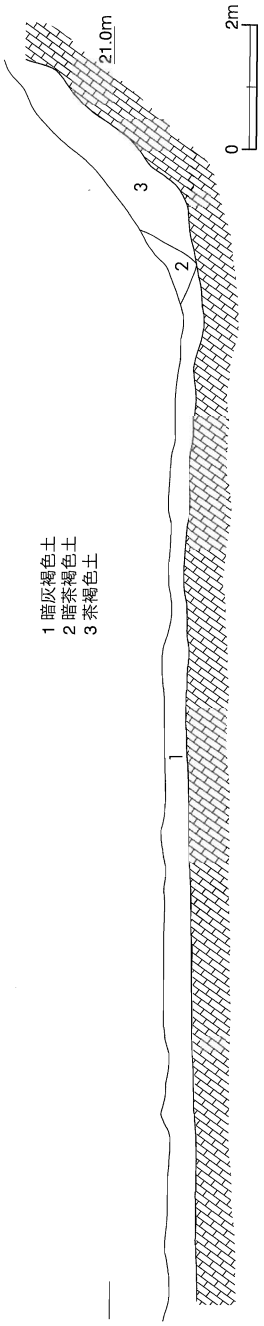
第130図　海部城跡位置図（S＝1：1000）

性格不明の穴３穴（ＳＫ－０１、ＳＫ－０２、ＳＫ－０３）のうち、後世の削平によるためなのかＳＫ－０１とＳＫ－０２の深さは約20cmと浅かった。しかし、この２穴からはこぶし大～人頭大の石が地山直上から検出された。これに比べ、ＳＫ－０３は深さ約20cmと深く、ここからは石などは確認できなかった。

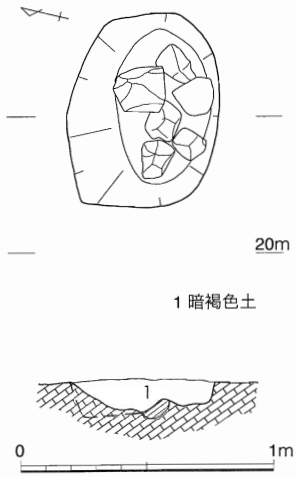
年代　遺構に伴う出土遺物がなく不明である。



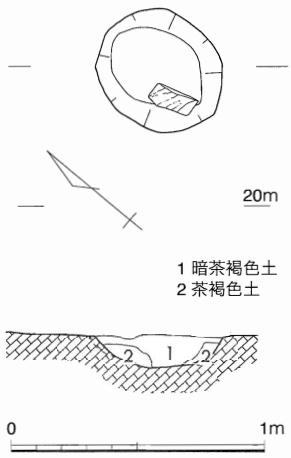
第131図　海部城跡調査後地形測量図・遺構配置図
（Ｓ＝１：200）



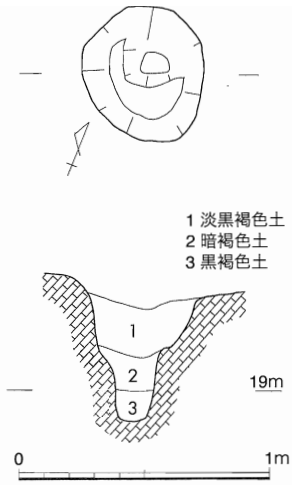
第132図　海部城跡縦断土層
断面実測図（Ｓ＝１：120）



第133図　海部城跡
ＳＫ－０１（pitNo.４）実測図
（Ｓ＝１：30）



第134図　海部城跡
ＳＫ－０２（pitNo.２）実測図
（Ｓ＝１：30）

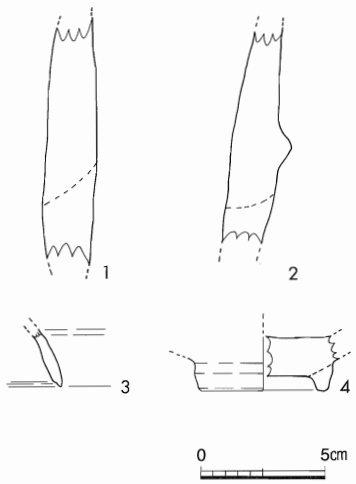


第135図　海部城跡
ＳＫ－０３（pitNo.１）実測図
（Ｓ＝１：30）

出土遺物　遺構に伴う遺物がなく、遺物はすべて第１層から出土した。出土遺物点数が少なく、その中でも図化できる遺物は第136図の４点のみであった。１・２は埴輪片である。時期については残りが少ないため分からなかった。

図化できた埴輪片はこの２点だけであるが、他にも埴輪片はいくつも出土しており、山城造成前には古墳が存在した可能性を示した。３は須恵器片である。坏蓋の口縁部であると思われ、残りが少なく判然としないが、出雲２期もしくは３期[2]であると思われる。

年代　遺構に伴う出土遺物がなく不明である。



第136図　海部城跡出土遺物
（Ｓ＝１：３）

第３節　小結

今回発掘調査を実施した海部城跡は、文献等の記録もなく、調査地が主郭部分から派生する尾根上の限られた部分であったので、また、後世に改変されているので、山城の規模や構造の全容を明らかにすることはできなかった。

ただ、ピットは調査区端より検出され、当時の平坦面は、もっと国道54号線にのびて広大なものであったということが分かった。

註

１）このほか、山根正明「海部城」『宍道町史　史料編』宍道町　1999に記載がある。

２）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994

第８章　杓子観音Ｉ古墳群

第１節　遺跡の位置と調査の経緯・経過

杓子観音Ｉ古墳群は、八束郡宍道町佐々布3262－１外に所在する。斐川町との境界に近い宍道町の北西部に位置し、北西にのびる丘陵の頂部から西側斜面にかけて立地する５基の古墳からなり、調査時は山林となっていた（第137図）。分布調査では、５基の古墳のうち今回発掘調査を実施した１基（以下、１号墳とする）について前方後円墳の可能性が指摘されていた。標高は、本古墳群内の最高所で51mである。

周辺には、同一の丘陵の東側尾根上に基の古墳からなる杓子観音Ⅱ古墳群[1)]、３基の古墳からなる小佐々布古墳群[2)]があり、この付近が丘陵の最高所となり標高約60mである。また丘陵北西の先端付近には第７章で記した足頭古墳群が位置するほか、隣接する北東斜面に杓子観音Ｉ遺跡[3)]、谷を挟んで北東側には古墳時代～平安時代の集落遺跡である荻田遺跡[4)]が存在した。このように、本古墳群周辺には、比較的小規模な古墳群や、古墳時代以降の集落などの遺跡が散在している。

本古墳群は、主要地方道宍道インター線改築工事に伴い発掘調査を実施したものである。この事業に伴う発掘調査は平成10年に実施しており報告書作成を残すのみとなっていたが、平成１２年８月に本古墳群の所在する丘陵で地滑りが発生し、２基の古墳が崩壊、１号墳にも地割れが生じ、再度地滑りが起きるおそれがあった。当時、古墳群北側の隣接地で主要地方道宍道インター線の改築工事が進められており、地滑りの発生による工事への影響が懸念されたため、急遽発掘調査を実施した。調査は平成12年９月18日から測量調査を開始し、９月25日から掘り下げを行った。測量調査の結果、方墳の可能性が高まったことと、測量調査終了後に地面に新たな亀裂が見つかったことから掘り下げは測量範囲南側の高まりについて実施した。９月29日には主体部を検出し、10月６日には完掘、10月13日には全景写真撮影を行い、調査後の地形測量を実施して調査を終了した。現地調査期間中には、大きな地滑りは起きなかったものの基準杭の高さが10cm程度ずれるなどの影響があった。なお、10月６日の鳥取県西部地震発生時は墳丘上で主体部の実測中であったが、幸い調査員にも遺構にも被害はなかった。発掘した面積は最終的には150㎡であった。

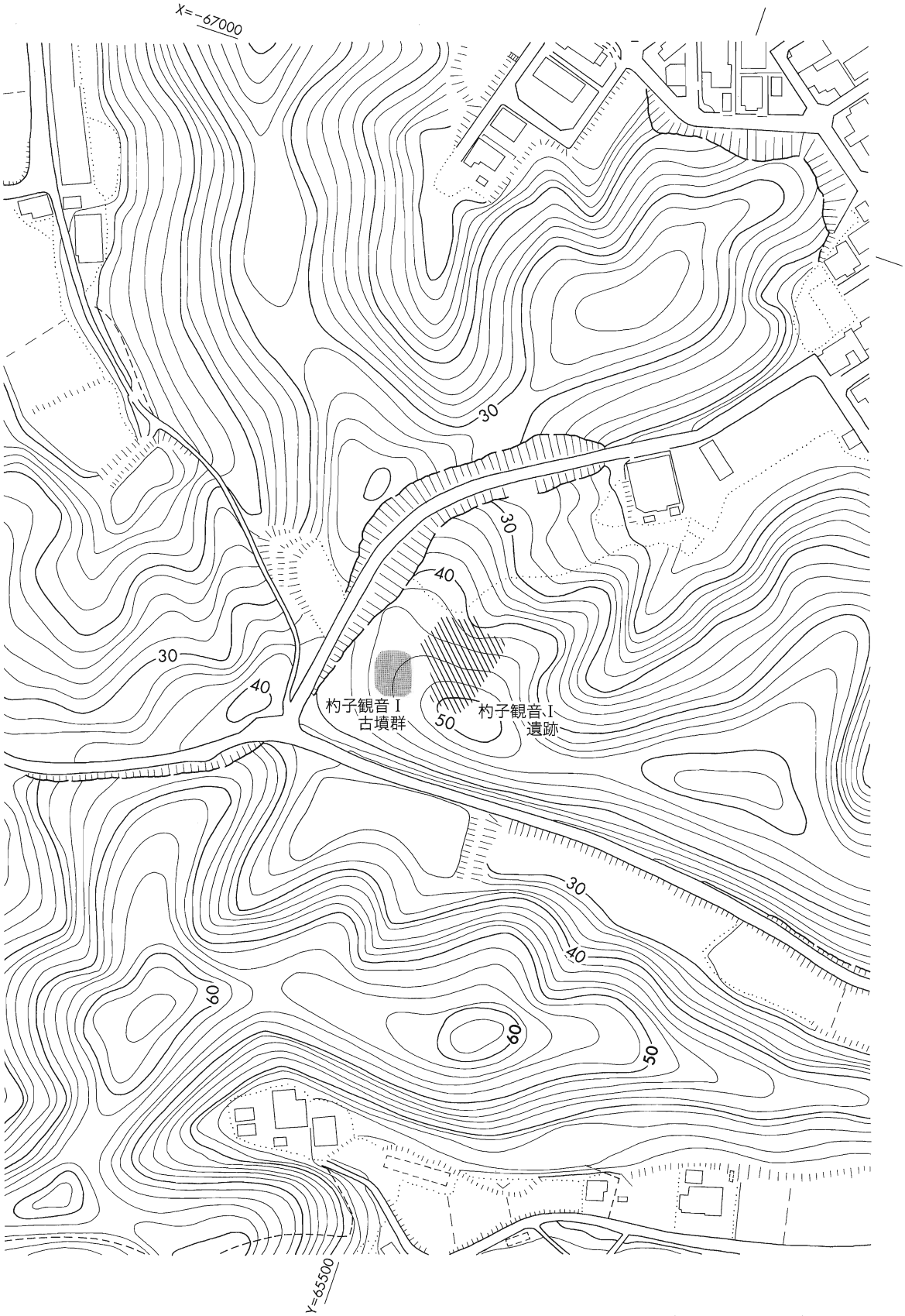
第２節　調査の結果

墳丘と土層堆積状況（第138図～第140図）

１号墳は西へのびる丘陵が北西へ派生する分岐点付近の頂部に立地し、標高は墳頂部で約50mである。墳形は方墳と見られ、南側が広くなる不整形な長方形を呈する。規模は８～13m×15mと推定され、丘陵がのびる方向が長くなっている。墳丘の高さは１m～1.5mであるが、地滑りが発生するようなゆるい地盤であることから、盛り土が流出したことが想定された。土層堆積状況は、地山までの深さが10cm～30cmと浅く、明らかな旧表土や盛り土は認められないが、墳丘東側の土層観察用ベルトでは、先端付近でわずかながら地山を削り込んだような土層や盛り土の可能性をもつ層が観察できた。北側ベルト北端でも、地山風化土が急激に落ち込む部分があり、この付近が墳端ではないかと考えられる。主体部は１基を確認した。

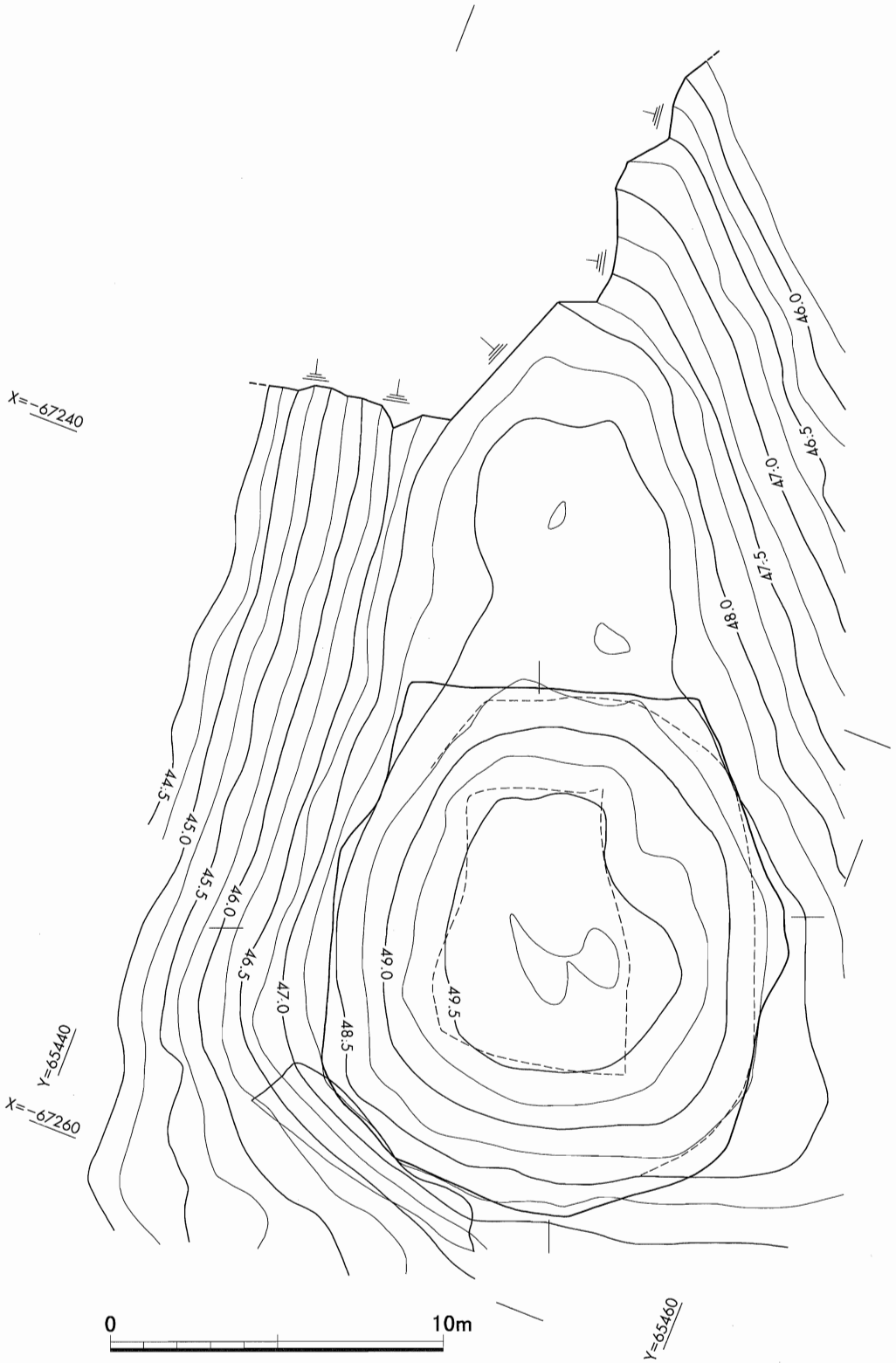
主体部（第141図）

主体部は、箱形木棺と推定され、墳頂平坦面中央からやや東寄りで検出した。墓壙は、主軸を墳丘の長軸方向からわずかに東へ振る。規模は長さ4.6m、幅は北側で1.4m、南側で1.7mと南側がやや幅広となる長方形を呈する。深さは0.3～0.5mである。墓壙の側壁には、幅10cm～20cmのテラス

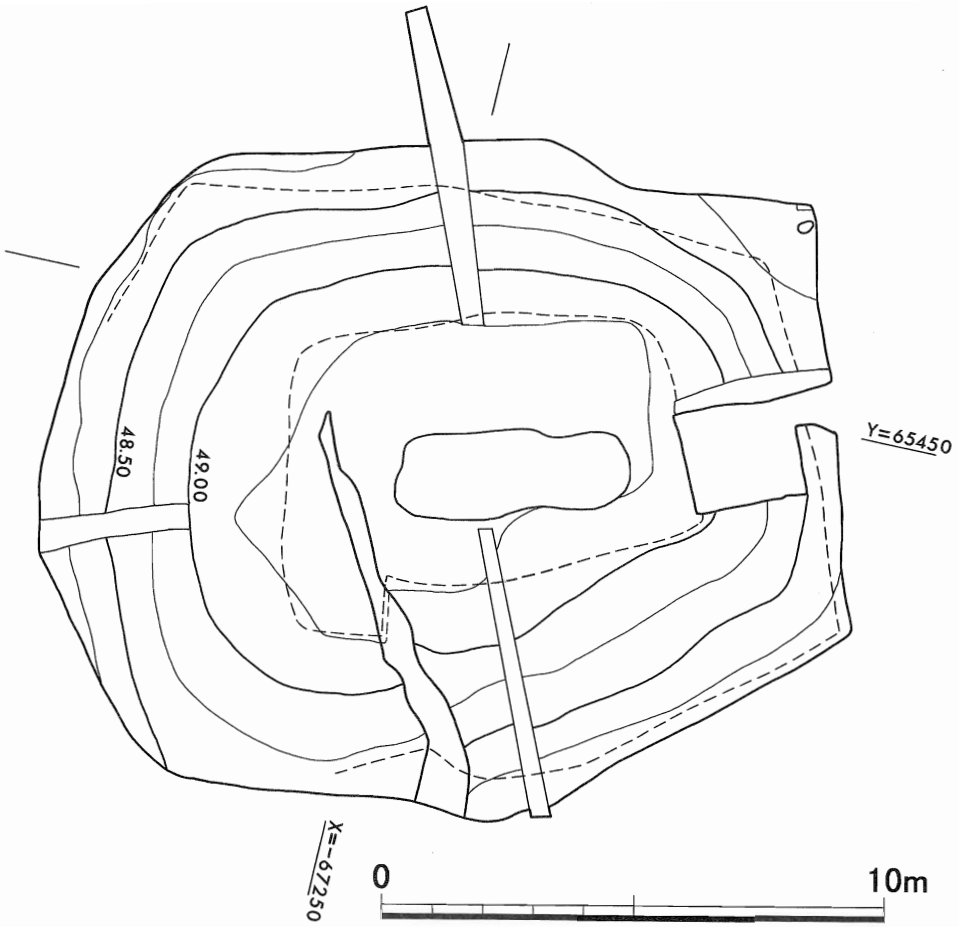


第137図　杓子観音Ⅰ古墳群・杓子観音Ⅰ遺跡調査区位置図（S＝1：2500）

状の加工が施され、南西側の一部では小口側へ回り込んでおり、一見二段掘り状を呈する。墓壙下端部には底面壁沿いを全周する幅10cm～40cm、深さ約10cmの溝が掘り込まれ、墓壙中央が高くなるように掘り残されている。この範囲は棺底を示すと考えられ、棺の内法とほぼ一致するものであろう。範囲は現状で2.4m×0.5mで、わずかに南側が広くなっている点、また北側に低く傾斜している点から、南頭位であったと見られる。

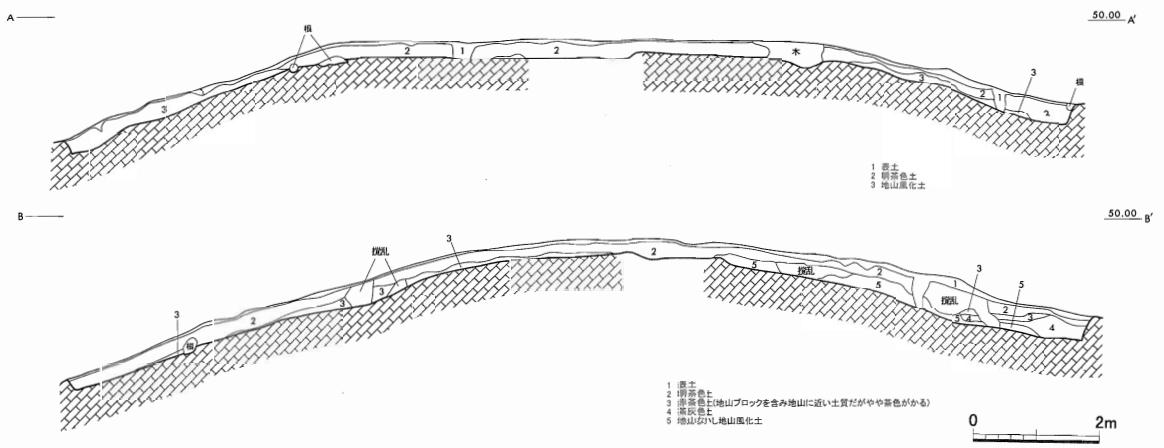


第138図　杓子観音Ⅰ古墳群1号墳地形測量図（S＝1：200）

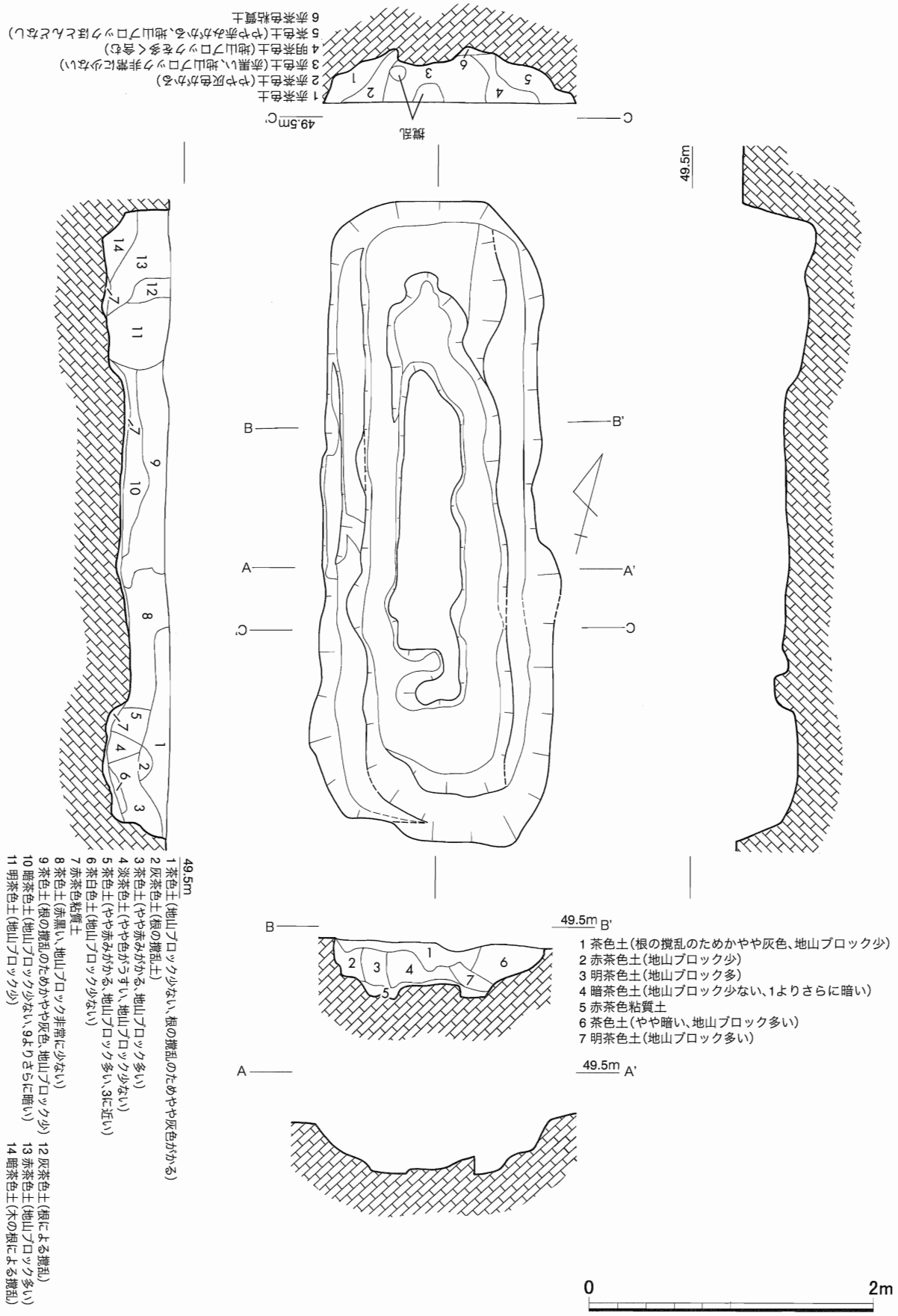


第139図　杓子観音Ⅰ古墳群1号墳調査後地形測量図（S＝1：150）

墓壙内の土層観察では、棺の明確な痕跡を確認することはできなかったが、木棺の規模を推定できる層が認められた。縦断面の土層では、墓壙底面中央の高まりに接するように地山のブロックを含む茶色土（5層、11層）、溝内及び底面中央の一部にかけて粘質土（7層）が存在し、横断面でも同様の堆積が観察されている。地山ブロックを含む層は、木棺が腐朽した後そこに流入した土ないし木棺の裏込めに使用された土と考えられる。溝内と棺底で検出された粘土層については詳細は不明であるが、棺材が存在したと見られる位置から見つかっていることから木棺との何らかの関係



第140図　杓子観音Ⅰ古墳群1号墳土層断面図（S＝1：120）



第141図　杓子観音Ⅰ古墳群1号墳主体部実測図（S＝1：40）

が想定される。なお、墓壙底面の溝は墓壙側壁に沿って小口側の下端まで達しており、棺底の小口側に掘り込みが認められないことから、両側の側板で小口板を挟むタイプのものと考えられる。

出土遺物　今回の発掘調査では、土器、鉄器などは出土しなかった。墳丘の調査中に石材１点と、主体部底面近くで石を１点検出したが、いずれも人為的な加工は認められない。主体部から出土した石は自然石で、加工痕、顔料の痕跡なども認められないが、調査区周辺で見られる石ではないため、自然に落ち込んだものではなく、外から持ち込まれた可能性も考えられる。

第３節　小結

今回の調査では、方墳１基を検出した。墳丘に対して墓壙の規模が大きく、主体部は二段掘り状の構造をとるもので、底面には棺材を据えるためのしっかりした溝を巡らせていた。

底面に溝を有するこのような墓壙は、周辺では長廻古墳、足頭２号墳、同３号墳第２主体部などで確認されているが、いずれも棺は箱式石棺を採用するもので、箱形木棺を主体部とする類例がない。今回の調査では石棺材が確認できなかったこと、土層観察でも石棺材が抜き取られた痕跡は認められなかったことから、棺には箱形木棺が使用されたと推定したが、検出例の増加を待って検討すべき問題である。

古墳の時期については、墳丘、墓壙いずれからも遺物が出土していないため判断は困難である。杓子観音Ⅰ古墳群に属する他の古墳も未調査で、遺物も採集されていないため時期推定の材料とはならないが、同一丘陵の北側先端付近に位置する足頭古墳群が古墳時代前期～中期とされることから、この古墳も足頭古墳群とほぼ同じ時期と見ておきたい。

古墳が所在する佐々布地区には、土師器を出土し前期古墳とされる佐々布下１号墳が存在し、古墳時代前期末には南西約２㎞に上野１号墳が築かれる。中期以降、周辺の各地域でも古墳が築造されるようになるが、前期古墳からの流れを追うことができるこの地区で新資料を加えることができた。

註

１）『宍道町遺跡地図』宍道町教育委員会　1993
２）註１に同じ
３）註１に同じ
４）村上勇「宍道・荻田住宅団地遺跡（Ⅰ・Ⅱ）」『島根県埋蔵文化財調査報告書』ⅩⅡ・ⅩⅣ　1986・1988
５）『宍道町歴史資料集』古墳時代編Ⅰ　宍道町教育委員会　1993
６）『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』中国横断道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７　島根県教育委員会　2001

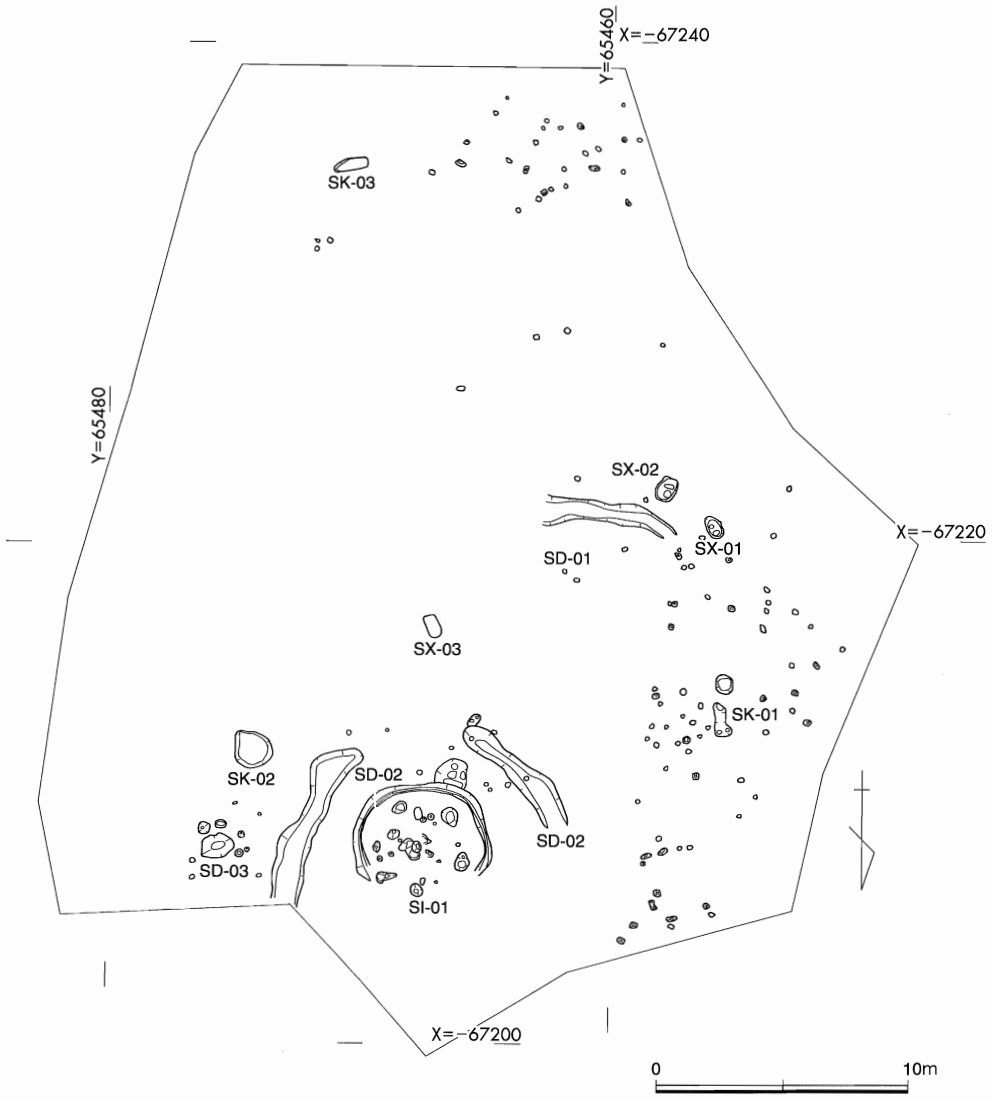
第９章　杓子観音Ⅰ遺跡

第１節　杓子観音Ⅰ遺跡の調査の経過と概要

調査の経過

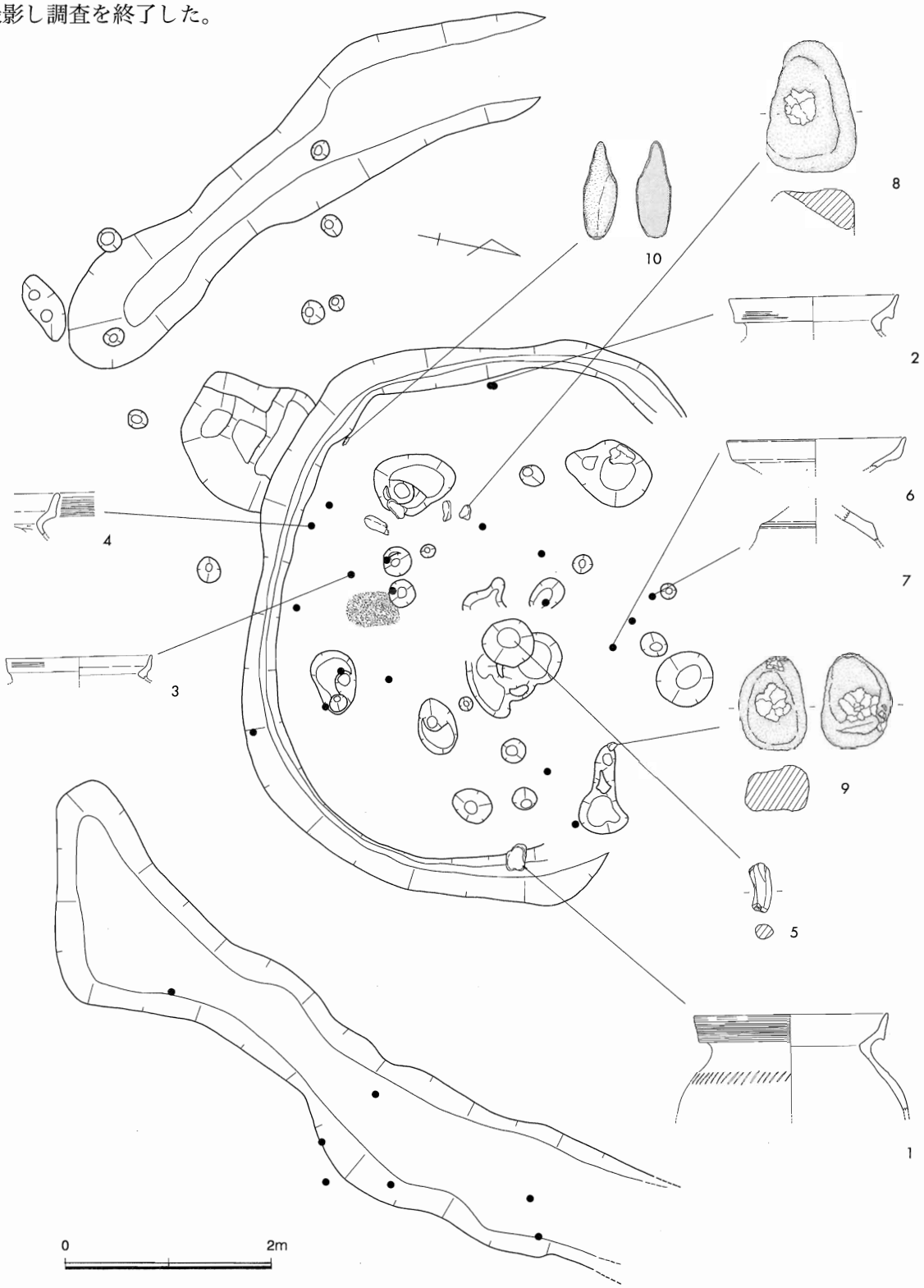
杓子観音Ⅰ遺跡の調査は、宍道インター線の敷地内に地滑りによる亀裂が確認され、平成13年９月に10ヶ所のトレンチを設定して、試掘調査を行った。その結果、石器、弥生土器、中近世の遺物が出土し、本調査に着手した。

調査は、立木の伐採の後に調査対象地全面の表土を除去し、10月22日から発掘調査を行った。体を動かすと汗ばむような気候の中で表土を除去し、調査区のほぼ中央部から五輪塔の石材が確認された。本調査は、調査区の北側の斜面の低い方から、人力掘削により精査を行いながら南側の斜面上部へと進めていった。暗褐色の土を除去すると、黄褐色の地山に掘り込まれたピットが多数確認された。また、斜面の下方において大きな黒色のプランが見られ、住居址の存在が確認された。住居址と思われる場所の近くからは土器片も数点出土し、その位置を記録しながら掘り進めた。斜面の中央部の五輪塔が確認された場所では、長方形のプランが確認された。

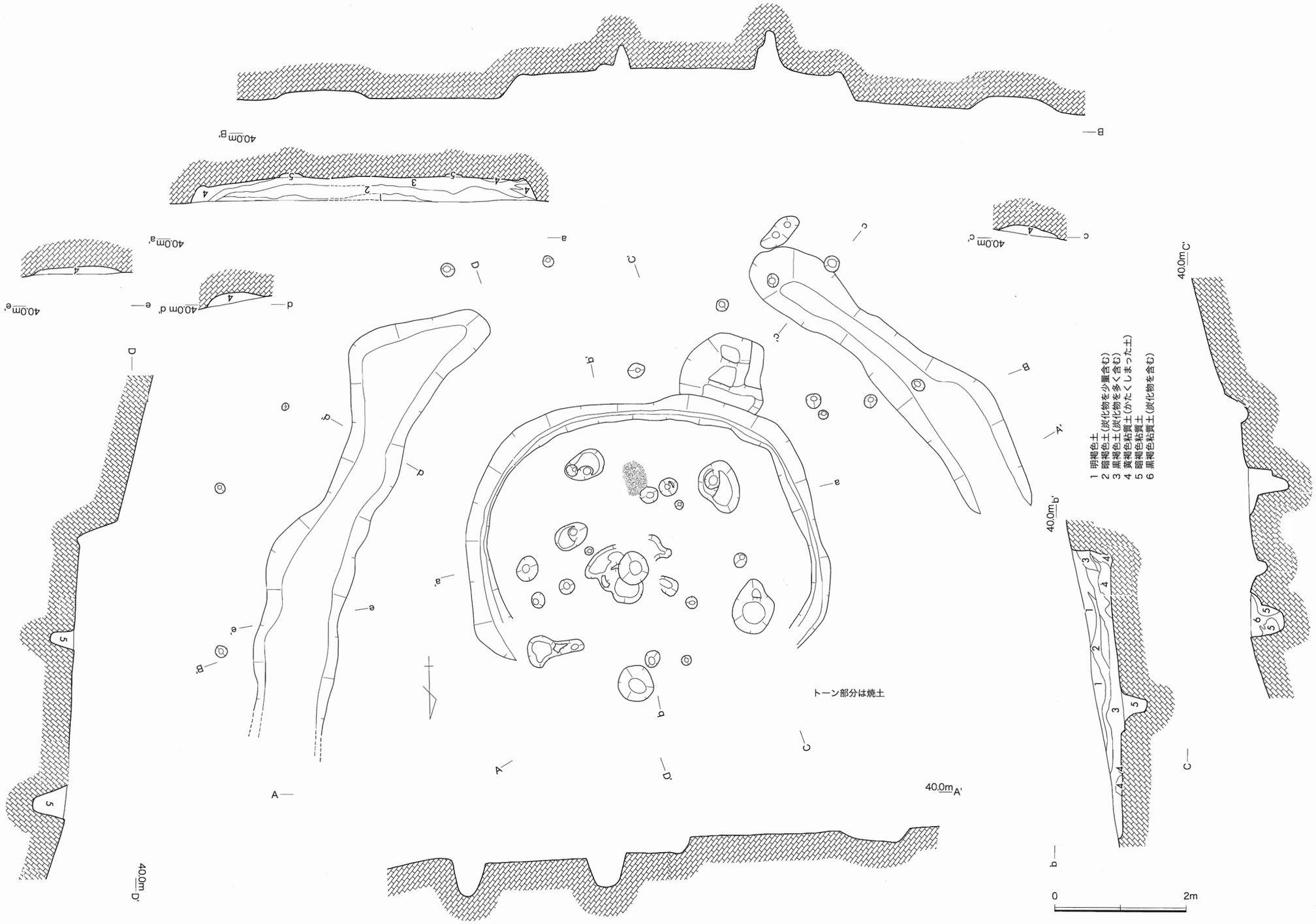


第142図　杓子観音Ⅰ遺跡遺構配置図（S＝1：300）

竪穴住居を検出したところ、その外側に暗褐色の土が巡り、溝状の遺構が確認され、住居址を取り巻く溝であることが判明した。調査区中央部の長方形のプランは掘り下げると、壁が全面赤く焼けており、底には石が敷かれており同様に焼けていた。同じような遺構は、全部で３基確認している。ピットは調査区の西側の斜面に集中することが判り、順次検出していった。11月28日、休憩用の小屋ではストーブが必要な寒さとなる頃、住居址の図面を記録し、北側の丘陵部から全景写真を撮影し調査を終了した。



第143図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＩ－０１・ＳＤ－０２遺物出土状況（Ｓ＝１：60）



第144図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＩ－０１・ＳＤ－０２実測図（Ｓ＝１：60）

第２節　調査の概要と結果

１．調査の概要と遺構の配置

杓子観音Ｉ遺跡は北向きの斜面に位置している。この緩斜面は、北東方向に開く谷へと続いており、昭和48年に調査され住居址が検出された荻田遺跡がある。斜面上部の丘陵の西側、南側頂上には杓子観音古墳群が位置している。

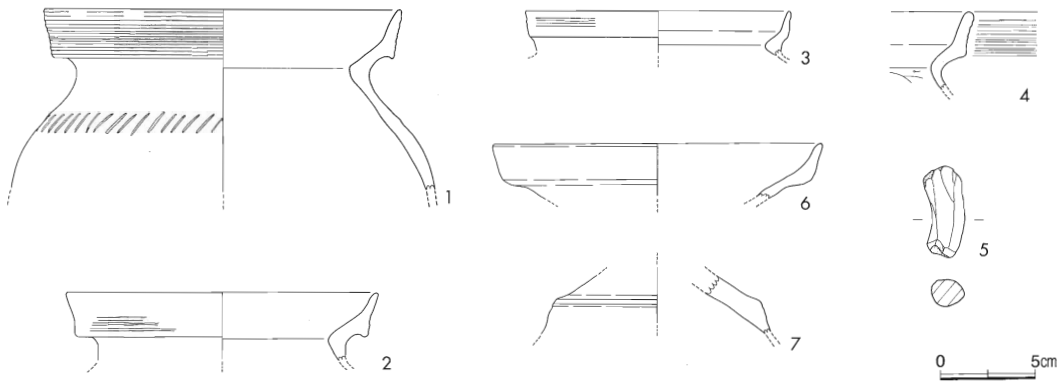
遺構は、斜面の北側において竪穴住居跡１（ＳＩ－０１）、中央部において中近世の火葬墓３（ＳＸ－０１～０３）、時期不明の土抗３（ＳＫ－０１～０３）、西側において溝１（ＳＤ－０１）、ピット多数を検出している。調査区の東側に南北方向に伸びる地滑りによる段差が見られるが、この場所から遺構は検出していない。

２．調査の結果

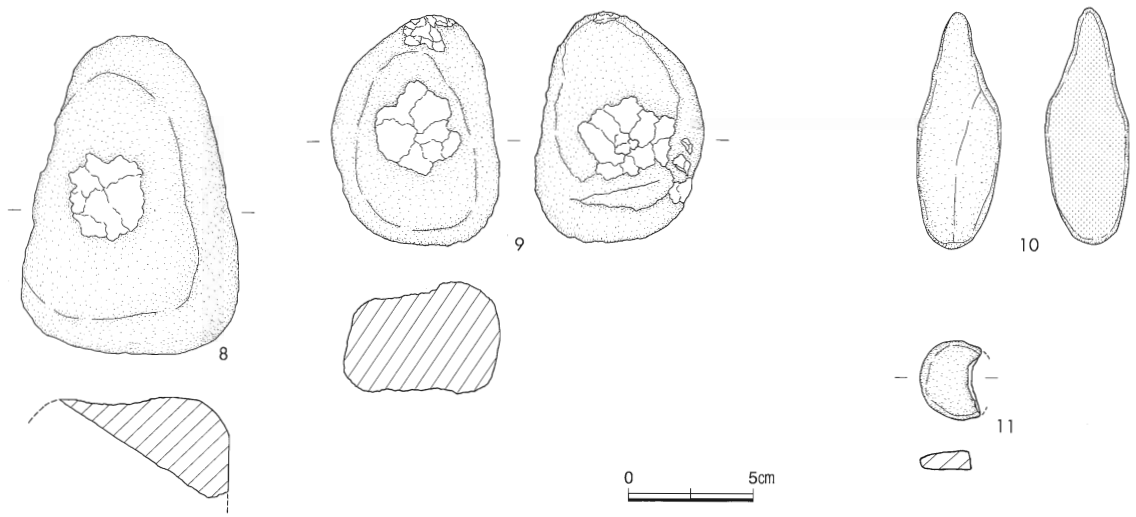
ＳＩ－０１（第144図）

調査区の北側、標高40mの北向きの斜面に位置している竪穴住居跡である。住居跡の位置する場所の斜面は、谷筋の中央にあり傾斜が緩やかである。

掘り方の位置と柱穴の配置に多少のずれが見られるものの、主柱穴４本で平面が隅丸方形である。規模は床面の壁体溝の内側で長軸5.0m、短辺4.3m以上である。竪穴の東西の外側1.2～1.5mの場



第145図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＩ－０１出土土器実測図（Ｓ＝１：４）



第146図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＩ－０１出土石器実測図（Ｓ＝１：３）

所に溝が巡っている。南側の高い場所では溝が途切れている。住居跡の北側の斜面下側は流失のため遺構が確認できなかった。本来の地山が傾斜しており、竪穴は盛り土により壁が作られていたと考えられる。竪穴の中に堆積した土は、上層から明褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黄褐色粘質土の順に堆積している。

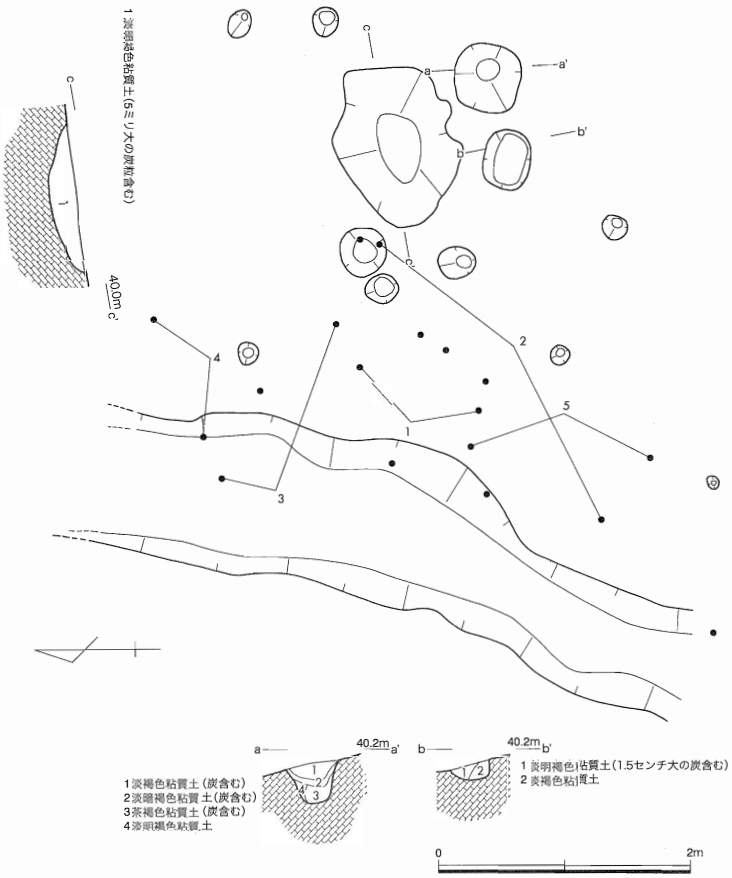
柱穴の規模は、Ｐ１が60×80㎝、深さ60㎝、Ｐ２が70×80㎝、深さ50㎝、Ｐ３が50×55㎝、深さ50㎝、Ｐ4が35×55㎝、深さ35㎝であり、Ｐ４だけ深さが浅くなっている。柱間距離は2.2mで、Ｐ３とＰ４の間が2.4mである。床面のほぼ真中に中央ピットがある。中央に円形の深いピットがあり、その周囲に浅い落込みが取り囲む形となっている。中央ピットの深さは、40㎝である。Ｐ１とＰ４の中間の床面が50×30㎝の範囲で焼けており、赤く変色している。

竪穴の南西コーナーのから外へ向けて幅1.3m、長さ1.0mの落込みがみられる。この中は階段状に加工されており、合計３段が確認された。住居の斜面上部に向けての入り口と考えられるもので、住居外の溝もこの部分は途切れている。

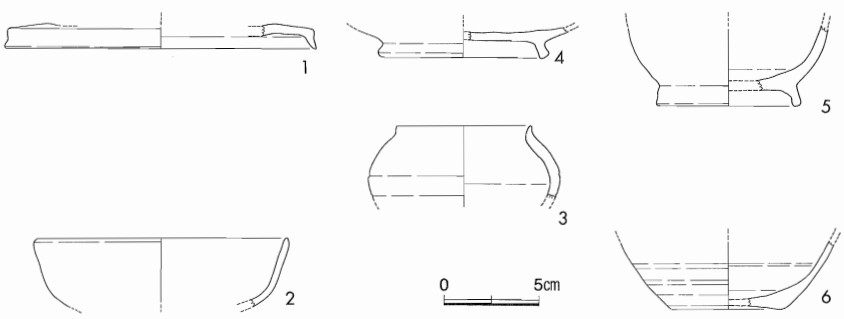
竪穴の外側の溝は、東西に分かれ、弧状に曲がる形で掘られている。西側は、幅0.6～1.2m、深さ0.15mである。東側は、長さ７m以上、幅0.8～1.45m、深さ15㎝である。

遺物出土状況（第143図）

竪穴内からは、土器、石器が出土している。Ｐ１とＰ４の間で弥生土器（３，４）、石器（８，10）が出土している。中央ピット内から、弥生土器（５）が、Ｐ３の付近から弥生土器（６，７）が出土し、床面の東端しで弥生土器・甕（１）が口縁部を上に向けて出土している。土器は床面から、やや浮いた状態で出土している。図示出来なかった土器片は、竪穴の中央部と住居を取り巻く東側の溝内から出土している。



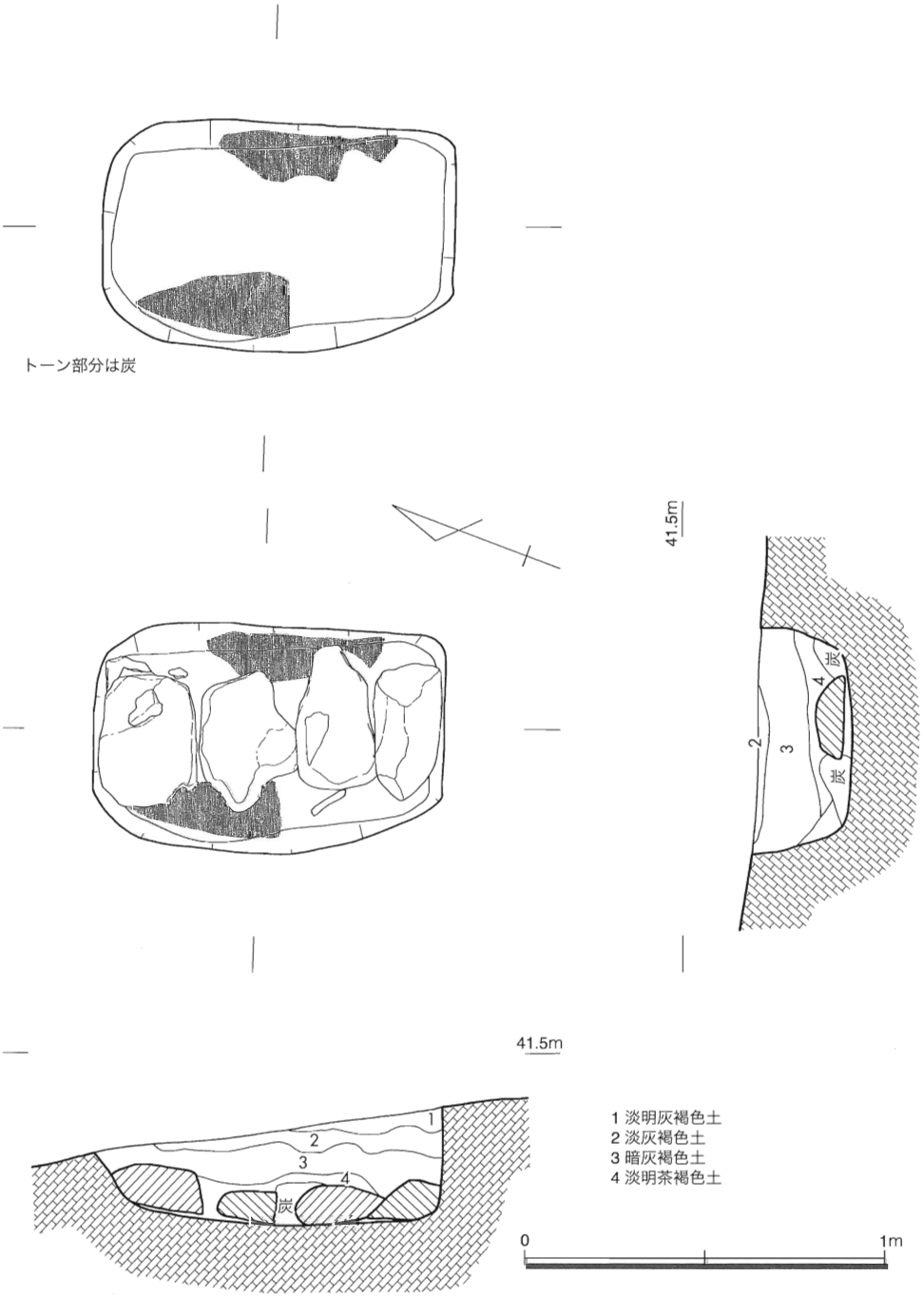
第147図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＩ－０１東側Pit群実測図（Ｓ＝１：60)



第148図　杓子観音Ｉ遺跡Pit群周辺出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

遺物（第145図、第146図）

１は甕で口径18.8cmを測る。口縁部が上方に伸び、下端部は僅かに下方に突出する。口縁の外面に７条の沈線を入れ、体部外面の上半に板状の工具によると思われる押し引き状の刺突文を施している。内外面とも風化が進み調整の残りが悪いが口縁部の内面はヘラミガキ、内面頸部以下はヘラケズリ、体部の外面にヘラミガキを施している。外面の全体にススの付着がみられる。２は小形の甕で、口縁部が上下に突出している。推定口径16.5cmを測り、口縁部の外面に４条以上の沈線を巡らす。口縁部の内面にヘラミガキを施している。３も小形の甕で推定口径13.6cmを測る。内外面とも風化が著しいため、調整が不明であるが口縁外面に２条の沈線を入れている。４は甕の口縁部である。外面に６条の沈線を施し、内面頸部以下にヘラケズリを施している。口縁部の外面にススが



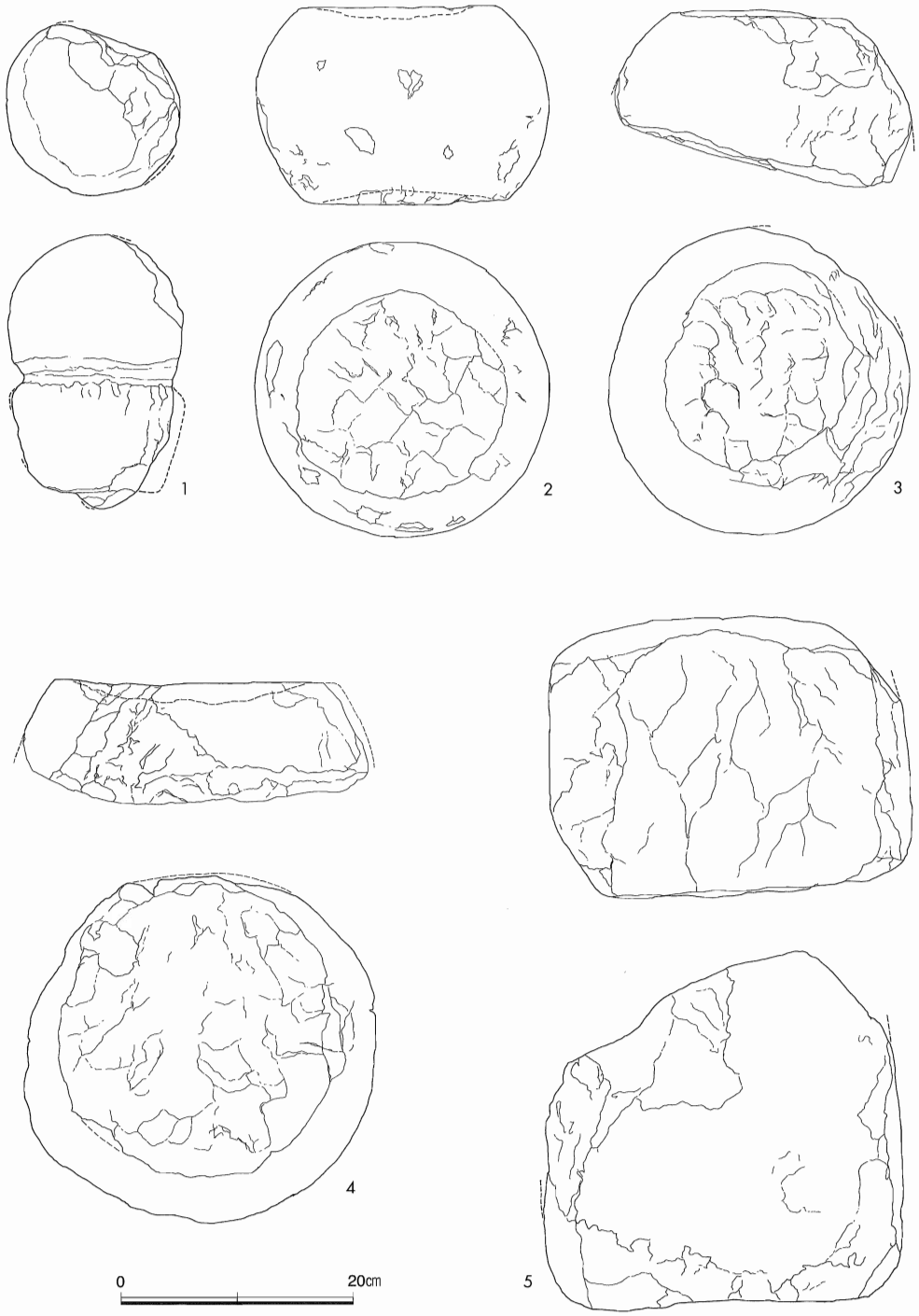
第149図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＸ－０３実測図（Ｓ＝１：20）

付着している。５は取っ手の破片である。６は器台の受け部と思われる。内面にヘラミガキが施される。７は器台の脚部で風化のため調整は不明である。８，９は石器で、敲き石で８は片面、９は両面に使用による窪みが残る。10は全面に使用により摩滅している。11も丁寧に磨かれている。弥生土器の時期はⅤ－２期[1]と考えられる。

ＳＩ－０１東側ピット群

（第147図）

ＳＩ－０１の東側において検出したピットである。表土を除去する段階からこの周辺において遺物が出土しており、遺物を取り上げ精査しピットを検出している。中央にやや大きめのピットがあ



第150図　杓子観音Ⅰ遺跡ＳＸ－０３五輪塔実測図（Ｓ＝１：６）

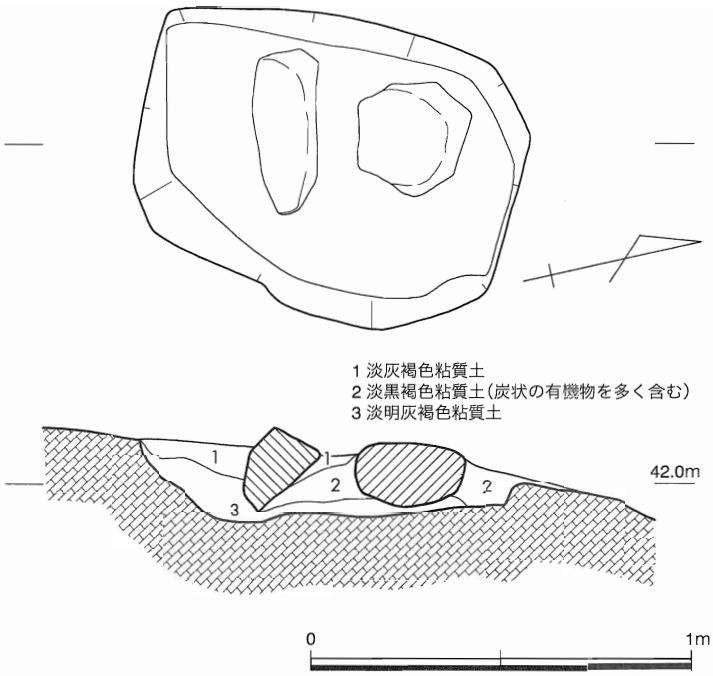
り、その周囲に小さめのピットがある。建物に伴う柱穴のように明確な掘り方ではなく、それぞれに規格性は認められない。

遺物（第148図）

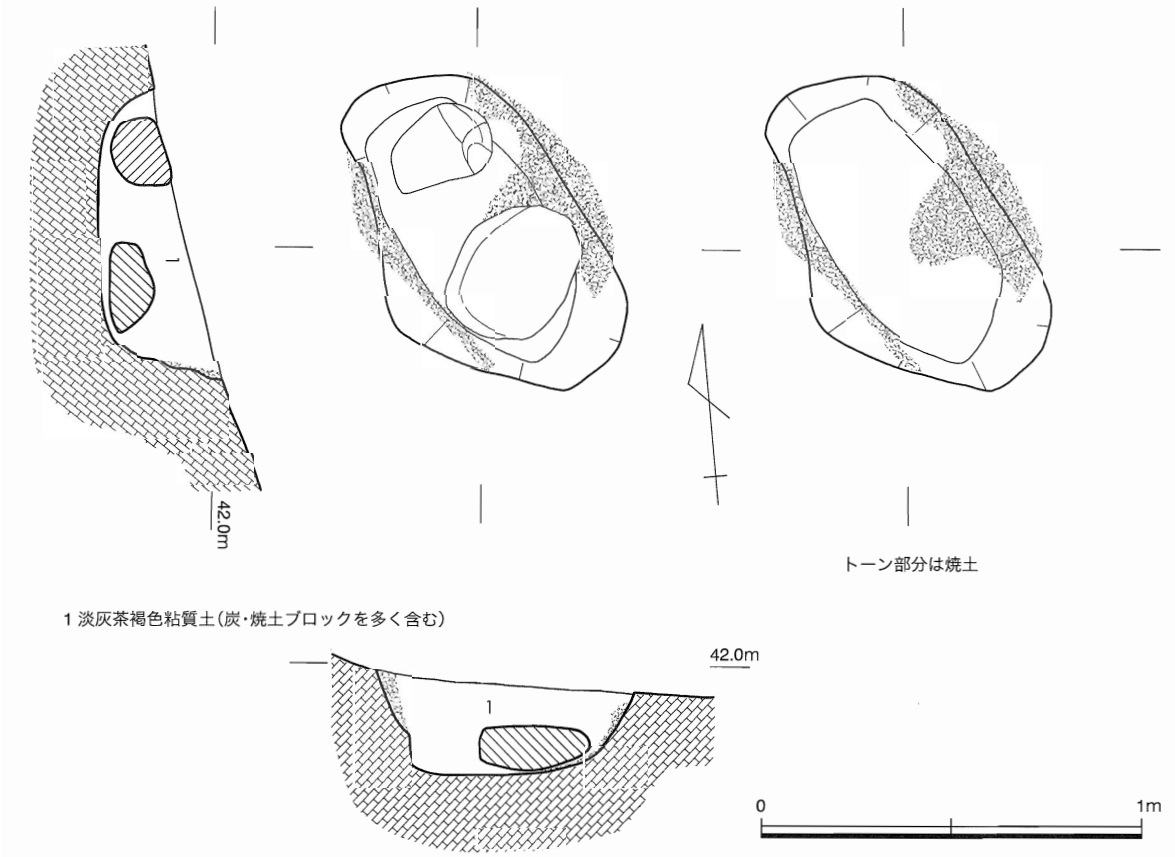
出土遺物遺物は、須恵器である。１は、輪状のつまみが付くと思われる杯・蓋である。２は杯で高台を有していたと思われる。４は、高台をもつ杯である。底部外面に回転糸切り痕を残している。３は、短頸壺である。５は、高台を有する壺、６も壺である。須恵器の時期は、１，２が大谷編年８期[2)]と考えられる。

ＳＸ－０３（第149図）

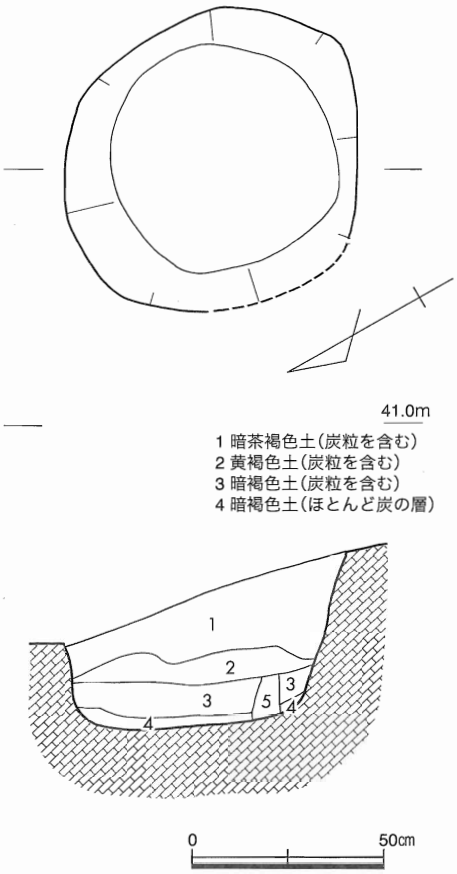
調査区のほぼ中央部から出土している。主軸方向がＮ－20°－Ｗとほぼ南北方向を向いている。



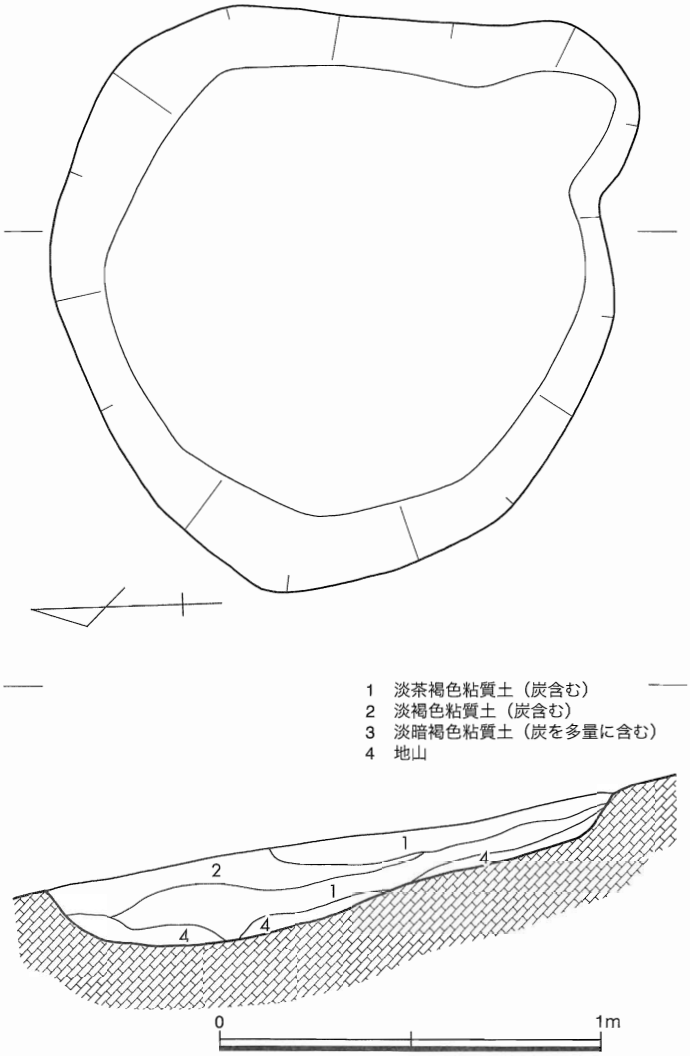
第151図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＸ－０２実測図（Ｓ＝１：20）



第152図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＸ－０１実測図（Ｓ＝１：20）



第153図　杓子観音Ｉ遺跡
ＳＫ－０１実測図（Ｓ＝１：20）

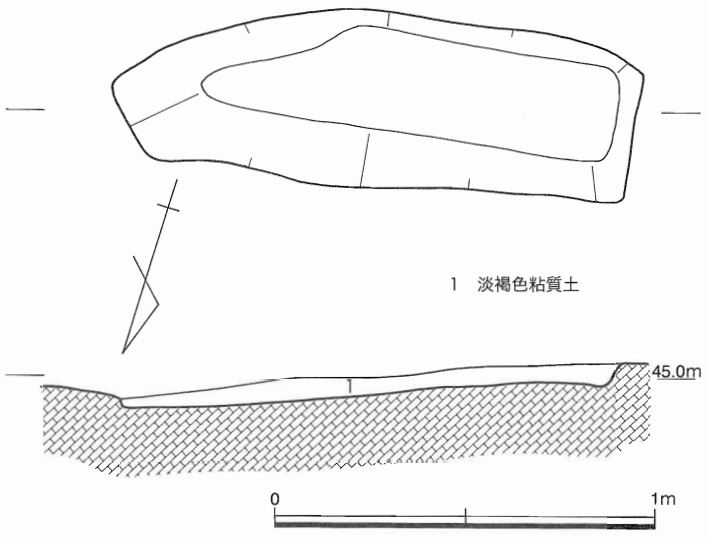


第154図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＫ－０２実測図（Ｓ＝１：20）

平面形は長方形で、規模は長さ0.98m、幅0.63m、深さ0.3mを測る。地山を長方形に掘り窪め底に石を４個敷き詰めている。石の表面と土壙の側壁は、焼けて赤く変色している。覆土中には炭が多く含まれており、原形を保つものもあった。底面近くから骨の破片も確認され、火葬墓であると考えられた。この土壙の上部からは五輪塔が確認されている。

五輪塔（第150図）

五輪塔の部材は全部で５点出土している。１は空風輪部、２～４は水輪部、５は地輪部と思われる。石材は地元山の石が使用されている。２の空風輪部が白来待石（安



第155図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＫ－０３実測図（Ｓ＝１：20）

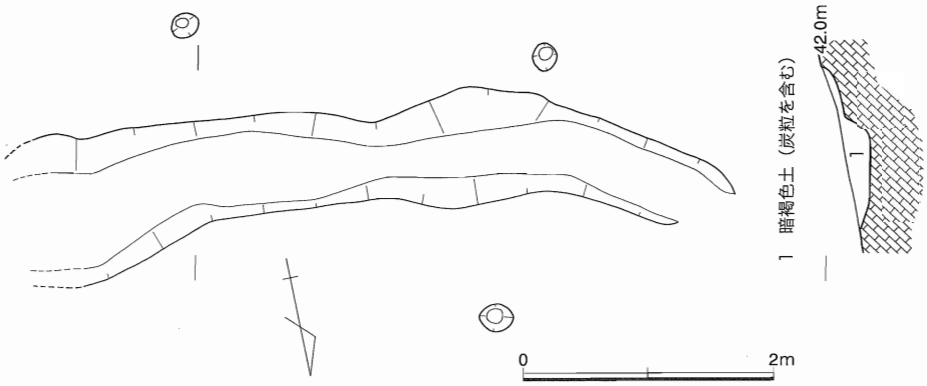
山岩溶岩)、その他は来待石（凝灰質砂岩）である。各部材とも30㎝大の石から加工された小形品であり、梵字も表現していない。１の空風輪部は一石で造られている。空輪は尖りがなく丸く仕上げられている。空輪と風輪の径がほぼ同じでくびれも浅い。水輪部は２の一点のみが完形である。上下面は浅く窪み粗い工具痕を残している。胴部はあまり張らない。５は幅30㎝、高さ24㎝の長方体で、幅に比して高さがある。これらの所産年代は16世紀を中心とする時期ではないかと考えられる。

ＳＸ－０２（第151図）

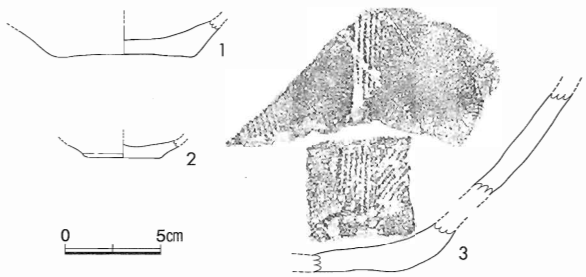
調査区中央部の西側で、ＳＸ－０２と近接する位置にある。平面形は、長方形を呈している。土壙の四壁は、焼けて赤く変色している。底には石が２個入れられており、石の表面も焼けている。覆土は淡灰褐色土、淡黒褐色土、淡明灰褐色土でいずれも炭を多く含んでいる。

ＳＸ－０１（第152図）

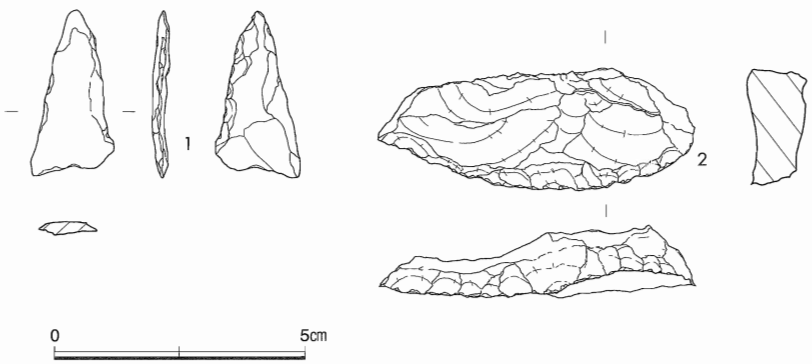
平面形は不整長方形で、壙底には石が２個置かれていた。長さ0.95m、幅が0.57m、深さ0.25mである。土壙の四壁と石の表面は焼けて、赤く変色している。底面の一部も焼けている。



第156図　杓子観音Ｉ遺跡ＳＤ－０１実測図（Ｓ＝１：60）



第157図　杓子観音Ｉ遺跡遺構外出土土器実測図（Ｓ＝１：４）



第158図　杓子観音Ｉ遺跡遺構外出土石器実測図（Ｓ＝２：３）

ＳＫ－０１（第153図）

調査区の北西側の斜面に位置している。径0.8mを測る、平面形が円形の土抗である。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。覆土は、上層から暗茶褐色土、黄褐色土、暗褐色土でいずれも炭化物を含んでいるが、最下層は炭の層であった。遺物は出土していない。

ＳＫ－０２（第154図）

調査区の東側に位置している。平面形は不整の円形を呈している。底面は傾斜しており、覆土は淡褐色土に炭を多く含んでいる。遺物は出土していない。

ＳＫ－０３（第155図）

調査区の南側の斜面上部に位置している。平面形は長方形の短辺が崩れた形である。長さ1.87m、幅0.46m、深さ0.06mと極めて浅いものである。覆土は淡褐色粘質土で、遺物は出土していない。

ＳＤ－０１（第156図）

調査区の中央部やや西側の斜面に位置している。長さ5.5m以上、幅0.6～1.2m、深さ0.2mである。覆土は淡褐色土であり、炭化物を含んでいる。溝の底はほぼ平坦で傾斜は見られない。遺物は出土していない。

遺構外出土遺物（第157図、第158図）

1は調査区の北側から出土した、弥生土器・壷の底部である。底径7.4㎝を測り、外面にナデを施している。内面の調整は風化が著しく不明である。２は中世の土師器・椀の底部である。底部外面が風化するものの、回転糸切りにより切り離される。３は中世の擂鉢・底部にかけての破片である。内面に擦り目が残り、使用により摩滅している。焼成は土師質のものであり、在地で生産されたものと思われる。1は石鏃で、石材はサヌカイトと考えられる。２は黒曜石製のスクレーパーであり、刃部は一方から剥離しており、その対角の面は礫ひ面が残る。

第３節　小結

今回の調査は、前年度の調査した古墳の北側の斜面であった。この斜面の谷筋を下ると、古墳時代の住居跡が調査されている荻田遺跡がある。今回の調査で発見された住居跡は弥生時代後期後半のものであり、時代的には溯るものの集落の広がりが確認された。弥生時代の竪穴住居跡で斜面の上部に溝を巡らすものは、安来市から宍道町にかけての中海、宍道湖沿岸部に顕著に見られる。また、住居への入り口と見られる階段状の遺構は、松江市勝負遺跡[3]において確認されている。

中世墓は３基検出しており、いずれも火葬墓である。土坑の底に石を敷き、その中で遺体を焼いたものである。中世後半の同様の火葬墓としては、松江市中竹矢遺跡[4]、二反田遺跡[5]において確認されている。両者ともその周辺において石塔を確認しており、石塔を伴う墓として共通している。

註

1）　松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　1992

2）　大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994

3）、４）　島根県教育委員会『国道９号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査Ⅳ』1983

5）　松江市教育委員会『二反田古墓』1987

第10章　自然科学的分析

第１節　屋敷古墳群Ⅱ区１号穴出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

島根県八束郡宍道町地内の屋敷古墳群Ⅱ区の１号穴の玄室右奥部に、人骨が若干、集骨状に散在していたが、骨の遺残性は不良である。

被葬者は１体で、若年者の女性である。

出土人骨について、その概要を下記の順に報告する。

１．骨の遺残性
２．遺残骨名とその部位
３．推定性別
４．推定年齢
５．推定身長
６．その他
７．考察
８．まとめ

１．骨の遺残性

遺残骨は集骨状に散在、脆弱化しており、遺残骨数は少なく、遺残性は不良である。

２．遺残骨名とその部位

頭蓋骨
　歯牙：遊離歯牙　１ヶ
　　右上顎第２小臼歯（ 5| ）
脊椎骨
　頚椎骨：No.不明の椎体部の１部
　胸椎骨：No.不明の椎体部の１部
　腰椎骨：No.不明の椎体部の１部
胸郭骨
　肋骨：左；第１肋骨
上肢骨
　尺骨：左；近位～遠位部（茎状突起部欠）補完最大長215㎜
　　右；近位～遠位部
　橈骨：右；近位～骨体下部
下肢骨
　腓骨：左；骨体中央部
　　右；骨体の一部

足骨：左右不明；踵骨の1部

左右不明；楔状骨の1部

3．推定性別

遺残する上肢骨(尺骨と橈骨)と、下肢骨（腓骨）は細く、きゃしゃで粗面の発達も弱い。

歯牙（ 5| ）の歯冠径も小さいことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4．推定年齢

上肢骨の左右の尺骨の遠近両端の骨端線は完全閉塞（融合)、右橈骨の近位部の骨端線は完全閉塞(融合)していることから、本屍は成人域（20才以上）に達している。

歯牙（ 5| ）は完全萌出、咬耗度は極めて軽微であることから、本屍の年令は若年者で、壮年前期（20代前半）位が推定される。

5．推定身長

遺残する左尺骨はほぼ完形、補完最大長215㎜から、本屍の生前の身長は藤井法[1)]で146.0㎝である（ピアソン法[2)]は尺骨からの身長推定式がない)。

6．その他

遺残骨数が少なく、完形骨もなく、脆弱化しているので、遺残骨からは特異的損傷、骨折、疾病の有無は不詳である。

7．考察

玄室右奥部に人骨が若干、集骨状に散在していた。

右奥部に遺残する人骨の部位は、骨格順に示すと、歯牙１ヶ、脊椎骨の１部、肋骨の１部、尺骨（左右)、橈骨（右)、腓骨（左右）と足骨（左右不明）の１部である。

本屍が埋葬されて、白骨化後、恐らく祭祀の際（？）人為的に骨の移動が行われた形跡がある（遺残骨の配置具合からみて)。

玄室中央部に位置していたと思量される本屍の主要骨（頭骨、上腕骨、骨盤、大腿骨、脛骨）上に、真上の天井からの落土が大量に堆積、その為に主要骨は風化、消失したものと推察される。

そして、たまたま玄室右奥部は天井からの落土がなく、上記の人骨が若干遺残したと推察される。

8．まとめ

島根県八束郡宍道町地内の屋敷古墳群Ⅱ区の１号穴には、玄室右奥部に遺残性不良の人骨が若干、集骨状に散乱していた。

被葬者は１体で若年者である。

本屍骨は、性別女性、年令壮年前期（20代前半）位、身長約146.0㎝と推定する。

遺残骨をみる限り、後世の人為的撹乱（集骨状）の形跡がみられた。

文献

１．藤井 明（1960）；四肢長骨の長さと身長との関係について。順天大保健体育、３，49－61.

２．Pearson,K.（1899）：Mathematical contributions to the theory of evolution,V.On the reconstruction of the stature of prehistric races,Phill.Trans.Roy.Soc.London.ser.A.192,169－244

第２節　屋敷古墳群Ⅱ区７号穴出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

はじめに

島根県宍道町地内の屋敷古墳群Ⅱ区７号穴には、被葬者２体が埋葬されていた。

横穴玄室の右奥部に集骨状に遺残する人骨を１号人骨、左奥部に若干遺残する人骨を２号人骨と仮称する。

玄室中央部は天井の土砂の崩落があり、その真下に位置する骨は土砂の堆積で埋まり、風化消失していた。

右奥部の集骨状（成人骨）の遺残骨（１号人骨）の中に、２号人骨の小児骨の頭骨片が一部混在していた。

両者の骨の遺残性は不良であった。

１号人骨

玄室右奥部に、集骨状に遺残していた一群の人骨で、主に頭骨（上、下顎歯牙：遊離歯牙）と下肢骨若干であった。

１）骨の遺残性

遺残性はきわめて不良で、完形の骨はない。

上、下顎の歯牙はすべて遊離歯牙で散乱状に遺残していた。

２）遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：頭頂部～後頭部（右人字縫合上部にインカ骨１ヶ）、左後頭骨片、鼻骨の一部、左頬骨上顎部、右眼窩下縁～頬骨部、右側頭骨（錐体部を含む）、右上顎骨（7～1：歯槽開放、死後欠）

下顎骨：剥離状を呈し、破損化

左下顎体歯槽部（頬側のみ）、右下顎体歯槽部（頬側のみ）

歯　牙：全て遊離歯牙21ヶ

∬７６×××××∬	２３４５６７８
７６５４　　１	２３４５６７８

∬：破損部位

×：死後欠（歯槽開放）

下肢骨

大腿骨：左；骨体中央部（後面）、骨片化

脛　骨：左右不明；骨体の一部

3）推定性別

本屍頭骨後頭骨の項平面が平滑である、外後頭隆起の突出がきわめて弱い、歯牙の歯冠径が比較的小さいことから、本屍骨は女性骨と推定する。

4）推定年齢

① 頭蓋冠縫合

外板：矢状縫合は少し離開ぎみで、融合の程度不明、人字縫合は左右とも未融合。

内板：矢状縫合は孔間部融合、後部やや融合、人字縫合は左右とも未融合。

② 口蓋縫合

切歯縫合はほぼ完全融合、横口蓋縫合は未融合。

③ 歯牙の咬耗度

中、側切歯：ブロカーの２度

小 臼 歯：咬耗なし

大 臼 歯：ブロカーの１度

以上から、本屍の年齢は壮年中期（30代）位と推定する。

5）推定身長

遺残する本屍骨の長管骨（下肢骨）が骨片化しており、完形骨がないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6）疾病・骨折の有無

本屍の遺残骨をみる限り、疾病の有無は不詳である。

損傷（骨折）

左頭頂骨の中央部に板間層（頭蓋骨の外板と内板の中間層）に達する不整形の陥没（凹）部（よこ10×たて16.5×深さ2.5～3.5㎜）が１ヶみられた。

損傷部周辺骨の増殖が認められることから、受傷後ある期間生存していたものと推察される。

成因は不詳であるが、生前鈍器による骨折で、法医学的には上記損傷は“頭蓋骨陥没骨折”という。

7）その他

本屍の頭蓋骨後頭骨の人字縫合部の右上部にインカ骨（介在骨）を１ヶ認めた。

２号人骨

玄室左奥部に若干の未熟な骨が散在していた。玄室右奥部の１号人骨（成人女性）の遺残骨の中に、２号人骨の頭骨片が一部混在していた。

1）骨の遺残性

遺残骨数少なく、骨の遺残性きわめて不良であった。

2）遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭 骨：骨片化

前頭骨後面、頭頂骨片（矢状縫合部）、左側頭骨の一部（錐体部）、右側頭骨の一部（錐体部）

下顎骨：下顎体（前面正中部）

∬３２１	１２３∬
×××	×××

×：死後欠（歯槽開放）

∬：破損部位

歯　牙：遊離歯牙１ヶ；右下顎第１大臼歯（ $\overline{6}$| ）、歯根２／３形成

３）推定性別

本屍骨は骨片化、歯牙（ $\overline{6}$| ）は永久歯で萌出歯牙であるが、10才未満の小児で、性別は不詳である。

４）推定年齢

遺残歯牙（ $\overline{6}$| ）は永久歯で萌出歯牙で６才以上、しかし、歯根形成は未完で10才以下、歯根は２／３形成されている所から、本屍の年齢は７～８才位の小児と推定される。

５）推定身長

本屍の遺残骨は頭骨のみで、長管骨がないので、本屍の生前の身長は不詳である。

６）疾病・骨折の有無

本屍の遺残骨をみる限り、疾患・骨折の有無は不詳である。

７）その他

特記事項なし。

考察

インカ骨

島根県横田町地内の角・宮ノ峠横穴墓[1]には被葬者２体が埋葬されていた。

１号人骨は40代熟年前期の女性、

２号人骨は40代後半の壮年後期の女性であった。

両者の頭蓋後頭部に、同じ形態のインカ骨を認めた。

両者の副葬品の須恵器はともに山陰編年歴のⅣ期で時期差もあまりなく、母娘の関係よりも、姉妹の関係が推察された。

このインカ骨の出現頻度は、日本人では男性3.1%、女性2.2%ときわめて少ない[2]。

インカ骨は遺伝形質であり、血縁関係の濃い間柄では出現頻度が高くなる。

本遺跡第７号横穴墓の１号人骨（壮年中期30代の女性）の頭蓋後頭部の人字縫合の右上部にインカ骨を１ヶ認めた。

もし、２号人骨（７～８才の小児）の頭蓋骨が遺残し、後頭部の人字縫合部が完形で、同時にインカ骨が認められたら、１号人骨（30代の女性）と２号人骨（７～８才の小児）とはきわめて血縁関係の濃い間柄が思量される。

しかし、２号人骨の頭骨後頭部が遺残していないので、両者間の血縁関係の有無は不詳である。

まとめ

島根県宍道町地内の屋敷古墳群Ⅱ区７号穴には、被葬者２体が埋葬されていた。

玄室右側奥部の１号人骨は、女性、年齢は壮年中期（30代）位、身長は不詳である。

本屍頭骨左頭頂部の中央部に、不整形の陥没（凹）部があり、生前の“頭蓋骨陥没（凹）骨折”痕が認められた。

さらに、後頭骨の人字縫合部の右上部にインカ骨を１ヶ認めた。

玄室左側奥部の２号人骨は、10才未満（７～８才位）の小児（性別不詳)、身長不詳である。

本屍頭骨は骨片化しており、インカ骨の有無は不詳である。

従って、被葬者同士の血縁関係の有無は不詳である。

文献

１．井上晃孝（1994）：横田町宮ノ峠横穴墓出土人骨について、角・宮ノ峠横穴、柏原遺跡発掘調査報告書、14－25，島根県横田町教育委員会。

２．Dodo,Y.（1975）:Non-metric traits in the Japanese crania of the Edo period,Bull. Nath.Sci.Museum.Ser.D.41-45.

第３節　長廻古墳群２号穴出土人骨

鳥取大学医学部法医学教室
井　上　晃　孝

はじめに

島根県八束郡宍道町地内の長廻２号穴には、玄室やや奥部に集中して、骨が集骨状または散乱状に遺残していた。

骨の掘り上げに際し、左奥から左手前に向かっての１群の骨を１号人骨、次にその右側に位置する人骨を２号人骨、その右側の骨群を３号人骨、次に４号人骨と５号人骨に分けて骨を採取した。

全般的に、骨の遺残性は不良。とくに、小児骨が多かったので、未熟骨のため、破損、消失骨が多い。

被葬者数は５体で、成人１体、小児４体であった。

歯牙の記載法

Ａ～Ｅ：乳歯

１～８：永久歯

○　：釘植歯牙

△　：遊離歯牙

×　：死後欠（歯槽開放）

●　：埋伏歯（可視）

・　：埋伏歯（不可視）

最後に、長廻古墳群２号穴出土人骨一覧（付表）にまとめた。

１号人骨

玄室左奥部に頭骨片と歯牙が遺残、骨の遺残性が極端に悪く、上、下顎の歯牙９ヶを検出した。

１．骨の遺残性

遺残性はきわめて悪い。

２．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：左右の頭頂骨片

下顎骨：左右不明の歯槽部骨片

歯　牙：遊離歯牙（９ヶ）

△△	△	△	△	△
５４	１	１	４	６
５			５	７
△			△	△

3．推定性別

遺残歯牙は全て永久歯で、その歯冠径をみると、一般的に小さく、本屍歯牙は女性と推定される。

4．推定年齢

遺残歯牙の咬耗度はブロカーの１～２度で、本屍の年齢は壮年期（30代）が推定される。

5．推定身長

遺残頭骨片と歯牙からは、身長推定できないので、本屍の生前の身長は不詳である。

6．その他

遺残骨からは、これ以上の情報は得られない。

２号人骨

１号人骨の右隣りに位置する１群の骨を２号人骨とした。

遺残骨は頭骨片、下顎骨（完形）と上肢骨若干であった。

1．骨の遺残性

本屍骨は幼若骨で、下顎骨を除いて遺残性は悪い。

2．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：左右不明の頭頂骨、側頭骨片

上顎歯牙１ヶ（遊離歯牙）

下顎骨：完形（乳歯、永久歯：釘植、埋伏歯）

歯　牙：

	△ A
E D C B A	A B C D E
○○××××	××××○○
7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7
●●・・・●●	●●・・・●●

上肢骨

鎖　骨：左右不明；骨体の一部

上腕骨：　左　；骨体部

左右不明；骨体の一部

3．推定性別

本屍骨は幼若骨（未熟骨）で小児骨であるので、性別は不詳である。

4．推定年齢

本屍の下顎骨は完形で、乳歯と永久歯が併存している。

乳歯は左右の第１，２乳臼歯（D，E）が萌出、乳中切歯（A）、乳側切歯（B）、乳犬歯（C）は萌出していたが、死後欠であった。

永久歯は左右の第１大臼歯（6、M_1）は未萌出の状態で、当分萌出する気配がない。

通常、この歯牙は６才頃萌出するので、６才臼歯と言われる。しかし、この歯牙は埋伏歯の

状態で、現代の小児なら４才位である。

しかし、古墳時代の栄養状態が現代よりも若干悪かったと想定すると、歯牙の萌出も若干遅れ気味が推察されるので、本屍の年齢は４～５才位と推定される。

５．推定身長

本屍骨の長管骨で遺残しているのは、左上腕骨だけで、幼若骨で骨幹部のみ遺残、上、下の骨端部が消失しており、真の骨長が不明であるので、本屍の生前の身長は不詳である。

６．その他

本屍骨の上腕骨骨幹部に小動物（ネズミ）による咬傷痕が若干認められた。

３号人骨

２号人骨の右隣りの散骨状の１群の骨を３号人骨とした。

骨の遺残性は悪く、若干の骨が遺残していた。

１．骨の遺残性

本屍骨は幼若骨で、骨の遺残性は極めて悪い。

２．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：頭骨片２片（左側頭骨片、右側頭骨片）

胸郭骨

肋　骨：右；骨片（№不明）

上肢骨

橈　骨：左右不明；骨体中央部の一部

左右不明；骨体中央部の一部

３．推定性別

本屍骨は幼若な小児骨であるので、性別は不詳である。

４．推定年齢

本屍骨は幼若骨で、骨の遺残が悪く、年齢推定できる骨の遺残はないが、橈骨の大きさは小児域であるが、それ以上の年齢区分は不詳である。

本屍骨は年齢不詳の小児であるとの推定にとどめたい。

５．推定身長

遺残骨からは、本屍の生前の身長は不詳である。

６．その他

特記事項なし。

４号人骨

３号人骨の右隣りに位置し、やや集骨状で遺残骨は脊椎骨、上、下肢骨で、遺残性は悪い。

１．骨の遺残性

本屍骨は小児骨で、主に上、下肢骨が遺残していたが、遺残性は悪い。

２．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：左眼窩下縁部～頬骨の一部

脊椎骨

腰椎骨：椎体部１ヶ（No.不明）

胸郭骨

肋　骨：左；骨片（No.不明）

右；骨片（No.不明）

上肢骨

上腕骨：

肩甲骨：右；関節臼窩部と肩峰の一部

下肢骨

寛　骨：右；仙腸関節部と大座骨切痕部

大腿骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

左右不明；下端骨の一部（顆間窩）

３．推定性別

本屍骨は小児骨で、２号人骨（４～５才位)、３号人骨（年齢不詳の小児）よりも大きい小児骨であるが、本来なら、性別不詳とすべきであるが、あえて大座骨切痕の形状から、本屍骨は男性の小児が推定される。

４．推定年齢

遺残骨を見る限り、本屍骨は未熟骨で、長管骨の骨端線から、全て上下とも消失している。

２号人骨と３号人骨と比較すると、若干加令がみられ、骨も大きく、本屍骨は10才前後の小児が推定される。

５．推定身長

遺残の長管骨は完形でないので、本屍の生前の身長は不詳である。

６．その他

特記すべき事項なし。

５号人骨

玄室右奥部に散乱する１群の骨を５号人骨とした。

遺残骨は未熟骨で小児骨のため、破損骨が若干遺残していた。

１．骨の遺残性

本屍骨は一見して未熟骨で、小児骨で頭骨片と上、下肢骨の一部が遺残していた。

骨の遺残性は極めて悪い。

２．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：右頭頂骨片と連続する右側頭骨片

上肢骨

上腕骨：左；骨体中央部のみ

尺　骨：右；近位部～骨体中央部

下肢骨

寛　骨：左；仙腸関節部と腸骨の一部

右；腸骨体の一部

3．推定性別

本屍骨は未熟な小児骨で、遺残性が悪く、性別判定する部位もないので、性別は不詳である。

4．推定年齢

本屍骨は明らかに未熟な小児骨である。

本横穴から出土した小児骨（2～5号人骨）について、骨の大きさ等を比較検討すると、5号人骨の骨の大きさは、2号人骨（4～5才)、3号人骨（年齢不詳)、と比較的類似しているが、4号人骨（10才前後）より小さい。

以上から、本屍骨の年齢は推察の域を出ないが、あえて推定すると5～8才位である。

5．推定身長

遺残骨からは、本屍の生前の身長は不詳である。

6．その他

特記事項なし

考察

1．骨の遺残性

骨の遺残性は、出土する遺跡の土質と骨の成熟度に大きく左右される。

本遺跡の長廻2号穴出土人骨の遺残性は、東出雲町の横穴群[1)2)]と同様に、全般的に悪い。

本遺跡は、とくに、小児骨が多かったため、未熟骨で破損、消失骨が多かった。

しかし、例外的に2号人骨（4～5才の小児）の下顎骨が完形で検出された。

下顎骨には乳歯と永久歯が併存しており、歯牙の萌出、未萌出が確認され、年齢が推定しえた。

2．歯牙の萌出状態から年齢推定

古人骨の年齢推定する指標の1つに、歯牙の萌出状態がある。

乳歯と永久歯の萌出は、ある一定の順序で萌出するので、その萌出状態で年齢推定が可能となる。

古代人でも、現代人でも、歯牙の萌出順序は一定であり、時代差はそれほどない。

極端に、栄養状態が悪くならない限り、健常者では歯牙の萌出は半年くらいの早、遅で萌出してくる。

通例、乳歯は生後7，8ヶ月頃から中切歯が萌出、2才半までに第2臼歯が萌出、完了する。

永久歯は6才頃から第1大臼歯が萌出、12、13才位で第2大臼歯が萌出完了する。

第3大臼歯（智歯）は、17，18才頃から萌出し、25才位までで萌出完了する。

1）乳歯の萌出状態から年齢推定が可能だった事例

鳥取市六部山古墳群23号墳[3)]の小石棺内のほぼ中央部に、小児骨が集骨状に埋葬されていた。

本屍骨は骨の遺残性が比較的良好で、上、下顎の歯牙の遺残が良く、とくに下顎骨はほぼ完形で、乳歯の萌出状態が良く保存されていた。

下顎の萌出歯牙は左右の乳中切歯（A）、乳側切歯（B）と第1乳臼歯（D）で、未萌出（埋伏）歯牙は左右の乳犬歯（C）と第２乳臼歯（E）であった。

この萌出状態は、現代の小児では１才半位に相当する。古墳時代人の栄養状態は現代人と比較すると、幾分悪かったと推察されることから、歯牙の萌出も若干遅れ気味と思量され、本屍小児骨の年齢は２才前後位と推定した。

２）永久歯の萌出状態から年齢推定が可能であった事例

鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡のＳＸ－７９号墳[4]の小石棺内には、小児１体が仰臥伸展位で埋葬されていた。

頭蓋骨と下顎骨は、発掘時ほぼ完形であった。本屍小児骨の歯牙はほとんど遺残していた。

乳歯は全て完全萌出、永久歯は一部の歯牙がわずかに萌出しかかっているが、他の永久歯は全て歯槽内に埋伏（未萌出）の状態であった。

本屍小児骨の左下顎第1大臼歯（６、M_1）は萌出しかかっているが、右下顎の第１大臼歯（６、M_1）は埋伏（未萌出）の状態で、現代の小児では５才位に相当する。

古墳時代人の栄養事情を考慮すると、現代人よりも歯牙の萌出も若干遅れ気味であろうと推察されることから、本屍小児骨の年齢は５～６才位と推定した。

３）長廻２号穴出土２号人骨（小児）の年齢推定

２号人骨の下顎骨は完形、乳歯と永久歯が併存していた。

乳歯は全て萌出、左右の第１，２乳臼歯（D、E）が釘植、左右の乳中切歯（A）、乳側切歯（B）、乳犬歯（C）は死後欠で歯槽開放であった。

永久歯は左右の第１大臼歯（６、M_1）が未萌出（埋伏歯）の状態であることから、６才以下の小児である。

乳歯が完全萌出、永久歯が未萌出の状態で、第１大臼歯（６、M_1）が未だ当分萌出する気配がない所から、現代の小児では４才位に相当する。

古墳時代の栄養事情を考慮しても、本屍小児骨の年齢は４～５才位と推定される。

鳥取市六部山古墳群28号墳の小児の年齢は２才前後位、鳥取県羽合町長瀬高浜遺跡ＳＸ－７９号墳の小児の年齢は５～６才位である。島根県宍道町長廻２号穴の２号人骨（小児）の年齢は４～５才位であり、前２例の中間的年齢である。

まとめ

島根県八束郡宍道町地内の長廻２号穴には、人骨が多数散在していた。

骨の遺残性は全般的にきわめて不良であった。

例外的に、２号人骨（小児）の下顎骨が完形で検出された。乳歯と永久歯が併存しており、その萌出状態から、年齢が確実に推定できたのは幸運であった。

被葬者数は５体、内訳は成人女性１体、他の４体はすべて10才以下の小児であった。

１号人骨は女性、年齢壮年期（30代）、身長不詳である。

２号人骨は性別不詳、年令４～５才位の小児、身長不詳である。

3号人骨は性別不詳、年令不詳（5～8才？）の小児、身長不詳である。

4号人骨は性別男性（？）、年令10才前後の小児、身長不詳である。

5号人骨は性別不詳、年令5～8才位の小児、身長不詳である。

2号人骨の上腕骨に小動物（ネズミ）による咬傷痕が認められた。

文献

1．井上晃孝(1997)：島田池遺跡1、4調査区横穴墓群出土人骨について、島田池遺跡、鵜貫遺跡（本文編)、252－274、建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会。

2．井上晃孝(1998)：渋山池古墳群Ⅳ区横穴墓出土人骨、渋山池古墳群、163－187、建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会。

3．井上晃孝(1995)：六部山古墳群26、28号墳出土人骨について、六部山古墳群Ⅱ、109－117、鳥取市教育福祉振興会。

4．井上晃孝(1983)：長瀬高浜遺跡出土人骨の報告（昭和54～56年度)、長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ（本文編)、299、鳥取県教育文化財団。

付表　長廻古墳群2号穴出土人骨一覧

被葬者No.	推定性別	推定年齢	推定身長	備　　考
1号人骨	♀	壮年期（30代）	不詳	
2号人骨	不詳	小児（4～5才）	不詳	上腕骨に小動物による咬傷痕
3号人骨	不詳	小児（不詳5～8才？）	不詳	
4号人骨	♂（？）	小児（10才前後）	不詳	
5号人骨	不詳	小児（5～8才）	不詳	

写真図版

Ⅰ区ＳＩ－０１　完掘状況

Ⅰ区ＳＩ－０１　甑形土器　出土状況

Ⅰ区ＳＩ－０１　鉄器出土状況

Ⅰ区ＳＩ－０２　完掘状況

Ⅰ区ＳＩ－０３　完掘状況

Ⅰ区加工段１・２・３　完掘状況

Ⅰ区加工段１　土層

Ⅰ区加工段１　遺物出土状況

Ⅰ区加工段２・３　完掘状況

Ⅰ区加工段２・３　土層

Ⅰ区加工段４　完掘状況

Ⅰ区加工段４　土層

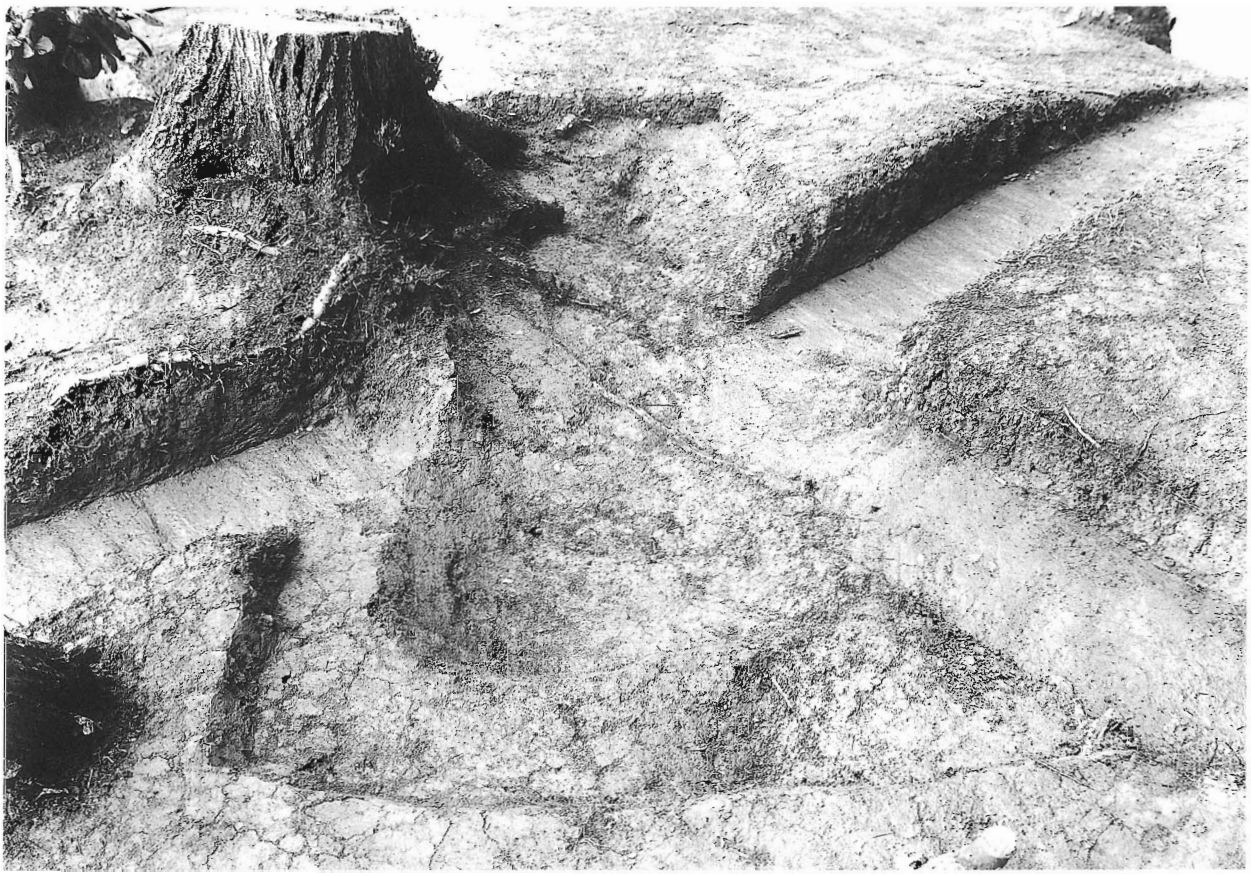
Ⅰ区加工段４　遺物出土状況

Ⅰ区加工段５　土層

Ⅰ区ＳＫ－０１　遺物出土状況

Ⅰ区１号墳　調査前

Ⅰ区１号墳



Ⅰ区１号墳　主体部

Ⅰ区１号墳　土層（墳丘北側を西から）

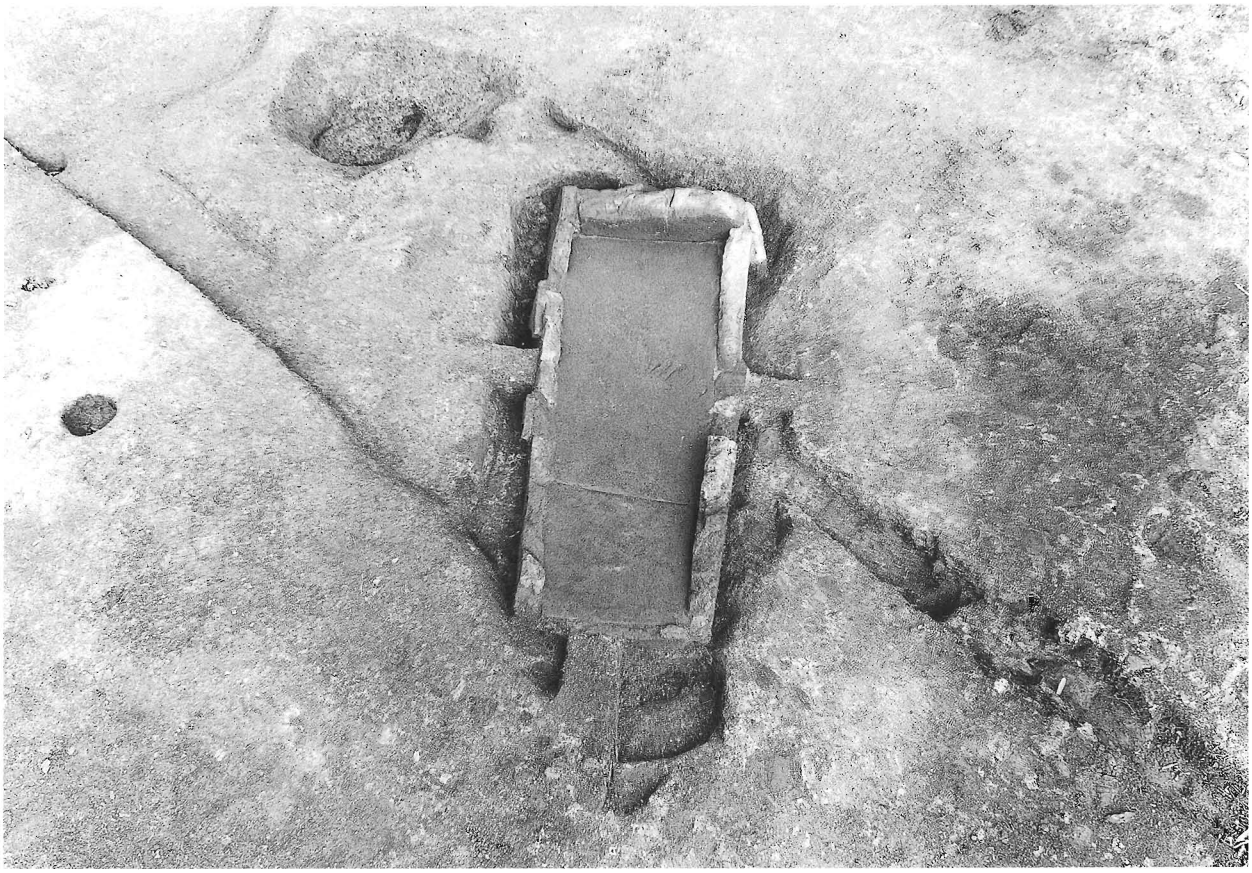
Ⅰ区１号墳　土層（墳丘南側を東から）

Ⅰ区１号墳　土層（墳丘東側を南から）

Ⅰ区１号墳　土層（墳丘西側を北から）

Ⅰ区２号墳

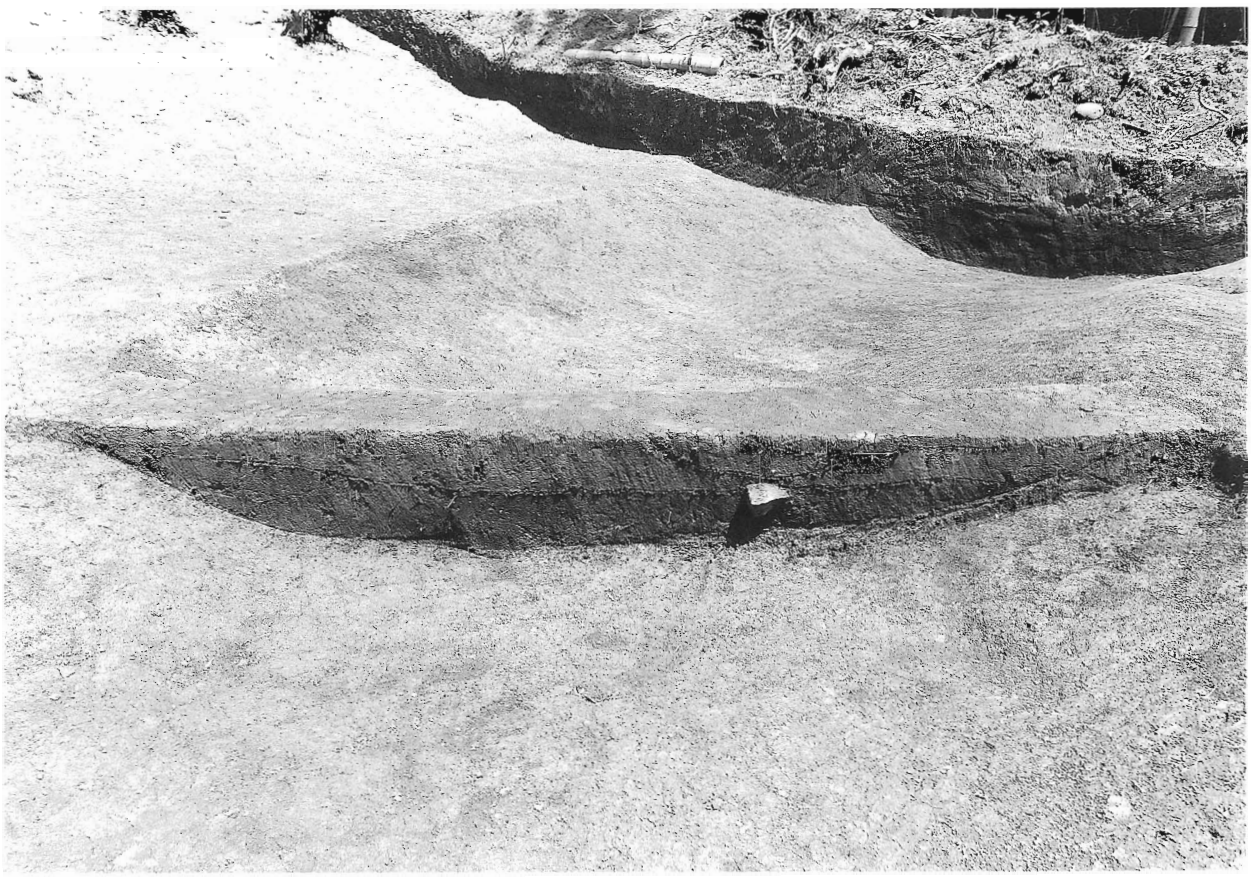
Ⅰ区３号墳　石棺及び周溝完掘状況



Ⅰ区３号墳　石棺掘方　掘削状況

Ⅰ区３号墳　石棺取上げ後状況

Ⅰ区ＳＤ－０３　土器溜まり



Ⅰ区ＳＤ－０３　土層

Ⅰ区ＳＤ－０３　完掘状況

Ⅰ区畠畝間